Ⅳ．遺構とその出土遺物に関する問題点

住居(跡)の構造と廃絶後の状況

住居(跡)の構造

住居跡は、それを構成する要素（平面形・周溝・床面・柱穴・炉など）が有機的に結合したものである。本遺跡では21軒の住居跡が検出されているが、以下、各要素の検討を通じて住居跡の構造（形態）を考えてみたい。

平面形：各住居跡について、その平面形を検討すると次のように分類することができる。その際、円形・楕円形の用語は幾何学的に厳密なものではない。長軸の長さと短軸の長さの差が10%以内のものを円形、それ以上のものを楕円形として便宜的に使用したものである。また、重複や削平のため平面形の明確でないものはそれぞれ不明として扱った。

まず、各住居跡は円形を基調とするものと方形を基調とするもの大別できる。前者には円形に近いものと楕円形に近いものとがあり、後者には隅丸長方形ものがある。

また、円形基調に分類したものの中でも、平面形の一部が直線的にみえるもの（第１・８・9b・12・16・20？・21住居跡）がある。

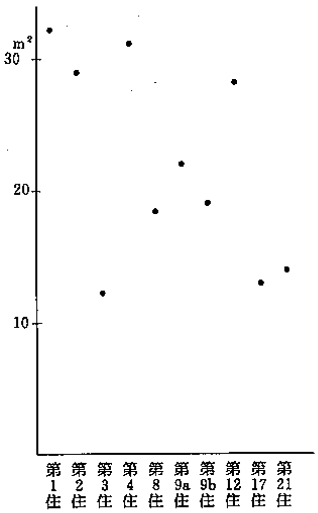
第56表　住居跡の平面形

- 平面形
  - 円形基調
    - 円　形……第１・２・４・８・9b住居跡
    - 楕円形……第9a・12・17・21住居跡
    - 不　明……第13・15・16・20住居跡
  - 方形基調
    - 隅丸長方形…第３住居跡
    - 不　　明…第7a・7b住居跡
  - 不　　明……第６・10・14・18・19住居跡

規模：平面形がほぼ復原できる第１・２・３・４・８・9a・9b・12・17・21住居跡について、その規模を検討する。住居跡の規模を検討するにあたり、基準とする線を対称軸とし、それを、長軸・短軸・軸として表わした。最も長い軸を長軸、それを直交する軸を短軸とし、長軸と短軸の長さがほぼ一致するものを軸とした。また、面積は、周溝を有するものでは周溝外側下端、無いものでは住居跡壁の下端で計測した。

はじめに、各住居跡の面積と長軸・短軸・軸の長さを表とグラフに表わすと第282・283図・第57表のようになる。

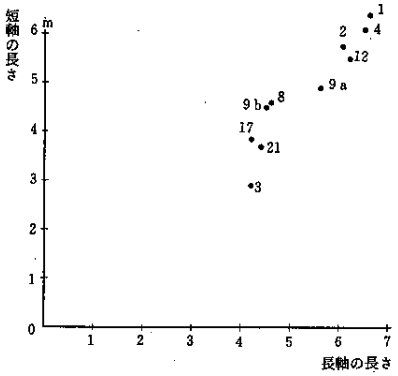
その結果、各住居跡は次の３つに分類できる。



第282図　住居跡内面積

A類：住居跡内面積が約30㎡前後のもの……第１・２・４・12住居跡
B類：住居跡内面積が約20㎡前後のもの……第８・9a・9b住居跡
C類：住居跡内面積が約13㎡前後のもの……第３・17・21住居跡

これを、長軸・短軸・軸の長さからみると、A類は長軸の長さが６mを越し、短軸の長さが６m前後のものである。B類は、長軸(軸)の長さが５m前後または６mを越えず、短軸（軸）長さが５m以下のものである。C類は、長軸の長さが４mをやや越し、短軸の長さが４m以下のものである。



第283図　住居跡の規模Ⅰ

第57表　住居跡の規模Ⅱ　( )は推定値

項目／住居跡	長軸の長さ（m）	短軸の長さ（m）	面積(㎡)
第 1 住	6. 6	6.4	32.3
第 2 住	6.06	5.75	29.0
第 3 住	4. 2(推)	2.9	12.2(推)
第 4 住	6.5 (推)	6.1	31.1(推)
第 8 住	4.6	4.6 (推)	18.4(推)
第 9a 住	5.6	4.8 (推)	22.1(推)
第 9b 住	4.5 (推)	4.5	19.0(推)
第 12 住	6.2 (推)	5.5	28.2(推)
第 17 住	4.2 (推)	3.7	13.1(推)
第 21 住	4.4 (推)	3.7	14.1(推)

方向：ここでは住居跡の方向を検討するが、便宜的に長軸の方向をもって住居跡の方向とした。そこで、円形とした住居跡は長軸・短軸が原則として存在しないので住居跡の方向は決定しない。したがって、以下の楕円形と長方形の住居跡について検討する。各住居跡の長軸方向はすべて異なっているが、台地平坦部との関係で、分類すると次の２類になる。

第１類：住居跡の長軸方向が台地平坦部に対し放射状に向くもの…第３・12・17・21住居跡
第２類：住居跡の長軸方向が台地平坦部に対し不規則な方向を示すもの…第9a住居跡

数的な関係から両者を比較すると、第1類が多い。

周溝：住居跡には周溝をもつものともたないものがある。しかも、周溝をもつもののなかには、周溝が全周するものと、炉の掘り込み部に接続し、その部分が途切れるものがある。それらを分類すると次のようになる。

第１類：有
　ａ．全周するもの……第２・４・17・21 住居跡
　ｂ．炉のところで切れるもの…第１・８・9a･9b･12･13･15・16・20 住居跡
第２類：無……第３・7a・7b住居跡
第３類：不明……第６・10・14・18・19住居跡

第１類は周溝を有するものであるが、その断面は「∪」字形である。第1b類は、平面形のところで述べたが、平面形の一部が直線的になる円形を基調とする住居跡と一致している。周溝

のないものはすべて方形を基調とする住居跡である。

なお、周溝の機能についても検討したが、それを示す痕跡は見当らなかった。

床面：周溝・炉・柱穴の部分を除く床面を検討すると、次のように分類される。

- 第１類：掘り方底面と床面が一致しているもの…第１・２・３・7a・7b・８・9b・12・13・15・16・20住居跡
- 第２類：貼床をもつもの……第9a住居跡

第9a住居跡の一部を除いて、すべて地山まで掘り込んで床面としている。第9a住居跡の床面は掘り方に粘質土を貼ったものである。

柱穴：各住居跡内には多くにピットが存在する。これらのピットの中から住居に伴う柱穴を摘出するために次のような方法をとった。

①住居廃絶後のピットを除く。

②掘り方と柱痕跡の識別できたものを摘出する。

③両者の識別ができないものでも形・大きさ・深さ・堆積土等で共通するものを摘出する。

④②③によって摘出されたピットの配置を検討し、規則性のあるものを柱穴とする。

以上のような方法で、摘出された各住居跡の柱穴について数と配置のあり方を検討すると、次のようになる。

- A類：柱穴が４個のもの……第21住居跡
- B類：柱穴が６個のもの……第３住居跡
- C類：柱穴が８個のもの
  - C－１類：住居（炉）跡の長軸について４個ずつ対称に配されるもの……第１・２・４・12 住居跡
  - C－２類：住居（炉）跡の長軸上に１対、長軸に対して３個ずつ対称に配されるもの……第８・9a・9b・13・16 住居跡
- D類：不明……第６・7a・7b・10・14・15・17・18・19・20住居跡

A類は楕円形をした住居跡の長・短軸に対称に４個配されている。B類は長方形をした住居跡の壁に沿って３個ずつ、住居跡の長軸に対して対称に配されている。C類は配置の違いにより２つに分けられる。C－１類の配置をみると炉の掘り込み部（石組部Ⅱ）内の２個の間隔がやや狭いが、その他は、ほぼ等間隔に並んでいる。C－２類の配置をみると長軸を対称にして中央の柱穴が大の間隔をもっている。また、D類は、住居跡が削平されていたり、重複などにより柱穴の配置が不明のものである。なお、各住居跡におけるその他のピットについても検討したが、形・大きさ・深さ・堆積土・配置などの規則性を認めることができず、それらの位置づけができなかった。

炉：ここでは、ある目的をもって恒常的に火の焚かれた痕跡のある施設を炉跡と呼ぶ。以下、その構造・構築方法・機能・規模・位置・方法などについて検討したい。

〔構造（形態）〕各住居跡に伴う炉には、いろいろな構造のものがある。炉には、土器からなるもの、石組みからなるもの、土器と石組などからなるものなどがある。炉と周囲を区画するものには、焼面・掘り込み・埋設土器・石組・埋設土器と石組がある。これらをもとにして分類する。

なお、区画される空間には単一のものと複数のものがある。前者を単式炉、後者を複式炉と呼ぶ。

A類は、住居跡床面が焼けているもの（地床炉）で単式炉である。A類に含めないものの中にも、住居跡床面が焼けているものは存在するが、A類としたものは同一住居跡内に炉と考えられる他の施設をもたず、各住居中央部からややはずれた所で、しかも、住居の長軸上に位置しているものである。

B類は、土器埋設部と掘り込み部の結合したもので複式炉である。埋設土器は、胴部から底部まである。

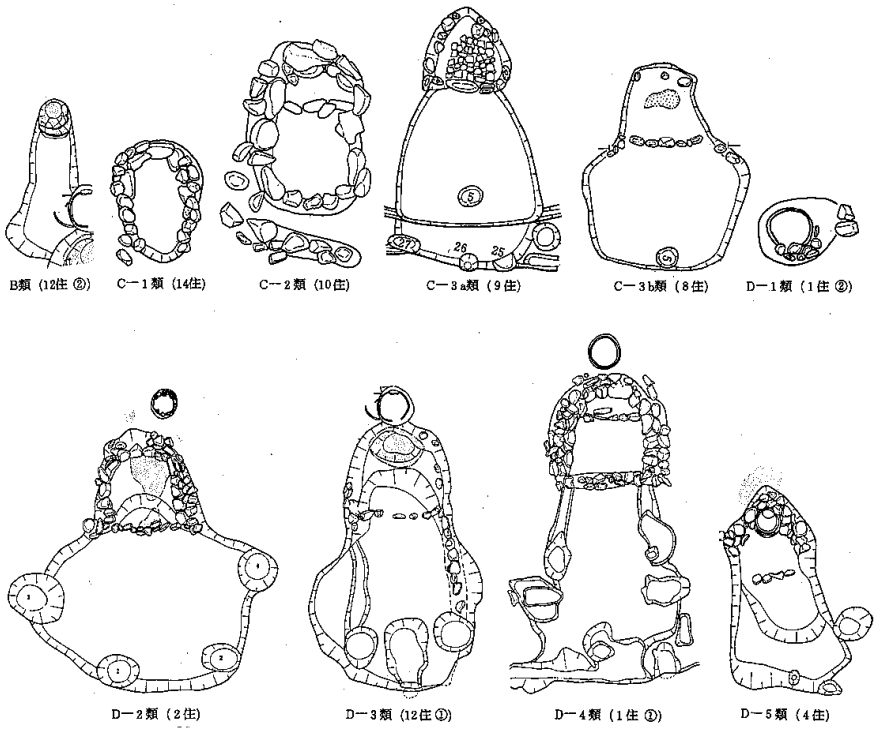
C類は、石組で区画されたものである。C－１類は、一方に開放する石組からなるものである。C－２類は、閉鎖する石組部３つが結合したものである。C－３類は、石組部と掘り込み部の結合したものである。さらに、C－３類は、石組部底面に土器が敷かれているもの（ａ類）と、土器が敷かれていないもの（ｂ類）に分かれる。C類の中で第１類は単式炉、第２・３類は複式炉である。

D類は、埋設土器と石組で区画されているものである。D－１類は、底部を欠く埋設土器の口縁部外側を石で囲ったものである。D－２類は、土器埋設部と石組部・掘り込み部が結合したものである。土器埋設部は、石組部からやや離れている。D－３類は、土器埋設部・石組部Ⅰ（閉鎖）・石組部Ⅱ（開放）の結合したものであり、土器埋設部は石組部Ⅰに接している。D－４類は、土器埋設部・石組部Ⅰ（閉鎖）・石組部Ⅱ（開放）・掘り込み部の結合したものである。土器埋設部は石組部Ⅰと離れている。D－５類は、石組部の中に土器に埋設されており、それと掘り込み部の結合したものである。以上のうち、D－１～４類は底部を欠く土器、D－５類は、胴部から底部まである土器が埋設されている。なお、D類の中で、第１類は単式炉、第２～５類は複式炉である。

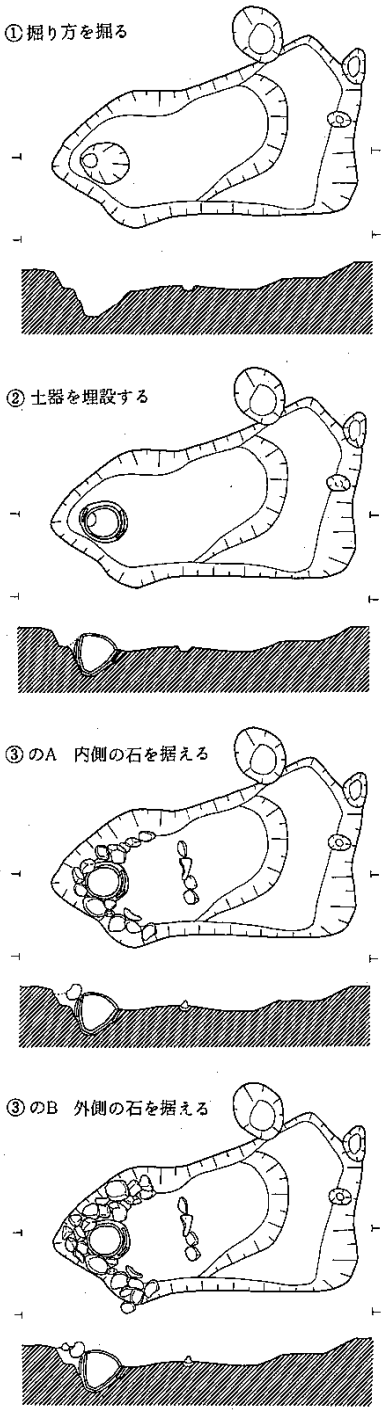
〔構築方法〕ここでは、構造（形態）からみた分類にしたがって、炉の構築方法を検討する。

A類には、炉のための掘り方などはない。B類は、はじめに土器埋設部と掘り込み部を含めた掘り方を掘り、次いで土器を埋設している。C－１・２類は石組部のために掘り方を掘り、それに石をすえている。また、C－３類は石組部を含めた掘り方を掘り、それから石組部に石

炉
- A類(地床炉)・・・第３・7b・17・21住居跡炉
- B類(土器埋設炉)－(土器埋設部＋掘り込み部)(複式炉)・・・第12住居跡２号炉
- C類(石組炉)
  - C―１類(「コ」字形石組炉)・・・第14住居跡炉
  - C―2類（石組部〔閉鎖〕＋石組炉〔閉鎖〕＋石組炉〔閉鎖〕（複式炉）・・・第10住居跡炉
  - C―3類（石組炉〔閉鎖〕＋掘り込み部）（複式炉）―a類（石組部に土器敷）・・・第9a住居跡炉
    - b類（土器敷なし）・・・第８住居跡炉第13・16住居跡炉
- D類(土器埋設石組炉)
  - D―１類(土器埋設石囲部)・・・第１住居跡２号炉
  - D―２類(土器埋設部＋石組部〔閉鎖〕＋掘り込み部)(複式炉)・・・第２住居跡炉
  - D―３類(土器埋設部＋石組部〔閉鎖〕＋石組部〔閉鎖〕)(複式炉)・・・第12住居跡１号炉
  - D―４類(土器埋設部＋石組部〔閉鎖〕＋石組部〔閉鎖〕＋掘り込み部)(複式炉)・・・第１住居跡１号炉
  - D―５類(土器埋設石組部〔閉鎖〕＋掘り込み部)(複式炉)・・・第４住居跡炉
- E類(重複や削平などのため完全な形で残っていないもの)・・・第６・7a・9b・13・15・16・18・19・20住居跡炉



第284図　炉の構造



第285図　炉の構築方法

をすえている。D－１類は、土器埋設のための掘り方を掘り、それに土器を埋設し、最後に石で囲んでいる。D－２・４類は、はじめに土器埋設部と石組部・掘り込み部の掘り方を掘り、次に土器を埋設し、石をすえている。D－３・５類は、炉全体の掘り方を掘り、次に土器を埋設し、最後に石をすえている。

以上のことから、B～D類の炉においては、①全体の掘り方を掘る。②土器を埋設する。③石をすえるという基本的な順序で構築されているが、B類では③、C類では②の過程がない。また、②と③の過程では、それぞれ掘り方に土がつめられている。

〔機能〕 ここでは、炉の使用痕跡から復原される炉の機能について検討する。炉の機能を単式炉・複式炉に分けて検討することにしたい。

本遺跡で発見された単式炉はA類・C－１類・D－１類のものである。A類は焼面すなわち燃焼面である。C－１類は奥壁・側壁の石および石組部底面が赤く焼けており、とくに奥壁に近いほど著しい。したがって、石組部が燃焼部になっている。D－１類の土器は胴部だけである。土器内には焼土や炭化物が残っているが、焼けた痕跡はない。これについては後述する。

次に複式炉である。本遺跡では２つの空間が結合したもの（B類・C－３類・D－５類）と３つの空間が結合したもの（C－２類・D－２・３・４類）が検出されている。前者について検討すると、B類の土器埋設部・C－３類の石組部・D－５類の土器埋設石組部は、土器および石が赤変し、その掘り方の埋土まで赤く焼けている。なお、B類・D－５類の土器は底部まで存在する。また、

各類の掘り込み部は火の焚かれた痕跡が認められない。このことから、Ｂ類の土器埋設部・Ｃ－３類の石組部・Ｄ－５類の土器埋設石組部が燃焼部であり、各類の掘り込み部は焚口部と考えられる。後者は、Ｃ－２類を除き土器埋設部を伴う複式炉である。Ｃ－２類は３つの石組部からなっている。そのうち、石組部Ⅰの石および底面はかなり赤変していることから火が焚かれたと考えられる。石組部Ⅱは全く火熱を受けた痕跡はない。また、石組部Ⅲには焼けた石が３個存在するが、他の石や底面には火熱を受けた痕跡が検出されないことから、ここでも火が焚かれなかったと考えられる。したがって、石組部Ⅰが燃焼部、石組部Ⅱ・Ⅲが焚口部と考えられる。なお、石組部Ⅲの焼けた石については､「廃絶後の状況」のところで後述する。

次にＤ－２・３・４類について検討する。各類の埋設土器は胴部だけである。土器の中には焼土や木炭などが残っているが、焼けた痕跡はない。また、Ｄ－２類の石組部、Ｄ－３類の石組部Ⅰ、Ｄ－４類の石組部Ⅰ・Ⅱ（特に石組部Ⅰ）の底面や石の内面が焼けて赤変している。それに対して、Ｄ－２・４類の掘り込み部、Ｄ－３類の石組部Ⅱ（開放）は全く火熱を受けた痕跡は認められなかった。このことから、各類の土器埋設部を燃焼部Ⅰ、Ｄ－２類の石組部、Ｄ－３類の石組部Ⅰ、Ｄ－４類の石組部Ⅰ・Ⅱを燃焼部Ⅱ、掘り込み部を焚口部と考えることができる。そのうち、燃焼部Ⅰ・Ⅱを比較すると、Ⅱがかなりの火熱を受けているのに対してⅠは微弱である。

その他、一部の住居跡には複数の炉があったり、Ａ類に含めなかった床面上の焼け面が存在するものがある。第12住居跡では、それが重複というかたちで検出されているので、炉の変遷をたどることができる。ところが、第１住居跡では、炉が２ケ所、焼面が２ケ所確認されている。それらについて検討を加えたが、時間的差があるのか、役割の違いなのか明らかにすることはできなかった。

【位置】 住居跡内における炉の位置は、各住居跡ともそれぞれ異なっている。そこで住居跡における炉の位置を検討すると次のようになる。

Ⅰ・住居跡の壁に接しているもの……第１住居跡１号炉、第８･9a･9b･13･15･16･20住居跡炉
Ⅱ・住居跡の壁からやや離れているもの……第２・４住居跡炉
Ⅲ・住居跡の中央からややかたよって、住居跡の長軸上にあるもの……第３･7b･17･21住居跡炉
Ⅳ. 不明……第6・7ａ・10・14・18・19住居跡炉

Ⅰは炉の掘り込み部（第12住居跡の石組部Ⅱ）に周溝が接続し、その部分で住居跡平面形は直線的になる。この場合の炉はＣ類とＤ類の複式炉である。Ⅱは、周溝が全周している住居跡にみられ、この場合の炉はＤ類の複式炉である。Ⅲは地床炉である。Ⅳは住居跡平面形を確認

できなかったために炉の位置が判明しないものである。その他、第１住居跡２号炉・第12住居跡２号炉は、明確にその住居跡に伴うといえないため、ここでは分類の対象に含めなかった。

〔規模〕 ここでは、炉の規模を検討する。炉の規模はその軸長・最大幅および面積で表わす。その際、軸長は最も長い対称軸・面積は外形で計測した。その結果、炉は次の３つに分類できる。

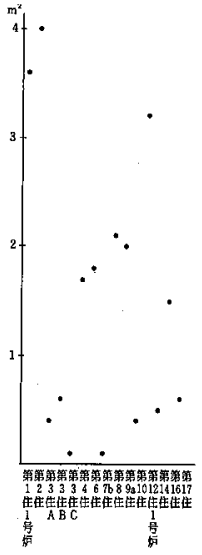
- A類　３㎡以上のもの……第１住居跡１号炉・第２住居跡炉・第12住居跡１号炉
- B類　２㎡前後のもの……第４・６・８・9a・16住居跡炉
- C類　１㎡未満のもの……第３住居跡焼面A・B・C・第7b・10・14・17住居跡炉

A類は軸長が３m前後、最大幅が1.5mを越すものである。B類は軸長が２m前後、最大幅が１mを越すものである。C類は軸長が１m前後、またはそれ以下で最大幅が１m以下のものである。

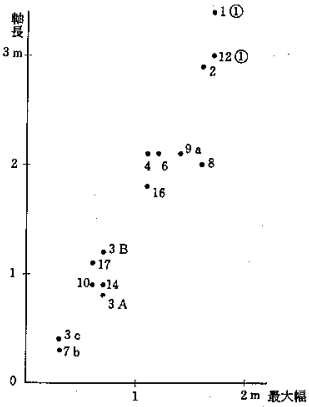
A類としたものは、土器埋設石組炉であり、３つの空間が結合した複式炉である。B類は、第４住居跡が土器埋設石組炉である以外はすべて石組炉であり、２つの空間からなる複式炉である。C類には石組炉と地床炉がある。第10住居跡が複式炉であり、他はすべて単式炉である。

以上、各類に分類したが、炉の軸長と最大幅の比を表わすと、すべて10：５から10：８の間におさまっている。

次に、炉の軸長と軸を延長した住居跡の長さとの関係を検討する。この場合、住居跡平面形が不明のものは対象から除いておきたい。



第286図　炉の面積



第287図　炉の規模

第58表　炉の規模と住居跡との関係

住居＼項目	軸長（m）	最大値（m）	住居跡の長さと炉軸長との比	面積（m²）	住居跡面積と炉面積の比
第1住1号炉	3.4	1.7	0.53	3.6	0.11
第2住	2.9	2.6	0.48	4.0	0.14
第3住 A B C	0.8 1.25 0.4	0.7 0.7 0.3	——	0.4 0.6 0.1	0.03 0.05 0.01
第4住	2.1	1.1	0.32	1.7	0.05
第6住	2.1	1.2(推)	——	1.8	——
第7b住	0.3	0.3	——	0.1	——
第8住	2.0	1.6	0.43	2.1	0.11
第9a住	2.1	1.4	0.43	2.0	0.09
第10住	0.9	0.6	——	0.4	——
第12住1号炉	3.0	1.7	0.48	3.2	0.11
第14炉	0.9	0.7	——	0.5	——
第16住	1.8	1.1	——	1.5	——
第17住	1.1	0.6	——	0.6	——

第58表に示したように、住居跡の長さと軸長の比が、①10：５前後のもの（第１住居跡１号炉・第２住居跡炉・第12住居跡１号炉）、②10：４のもの（第８・9a住居跡炉）、③10：３のもの（第４住居跡炉）の３つに分けられる。①は炉の規模によって分類されたＡ類、②・③はＢ類のものである。

最後に住居跡の面積における炉の面積の占める割合を検討してみたい。最大の割合を占めるのが14％の第２住居跡である。ほとんどのものは10％前後である。ただ、第４住居跡は５％であり、前述の住居跡の長さと炉の軸長の比からもあらわれたように、他の住居跡の規模に比べて炉の規模は小さい。

〔方向〕 ここでは、炉の方向を検討してみるが、炉の軸の方向をもって炉の方向とした。ただし、地床炉としたものは、厳密な意味での方向をもつとは考えられないので、この検討からはずした。

各炉の軸方向はそれぞれ異なっているが、次の２つに分類できる。

第１類：炉の軸方向が台地平坦部に対し放射状に向くもの……第１・２・４・６・9a・9b・12・20住居跡炉

第２類：炉の軸方向が台地平坦部に対し不規則な方向を示すもの……第８・10・13・14・15・16住居跡炉

住居跡の分類：各住居跡について平面形・規模・周溝・柱穴・炉・住居と炉の方向などの特徴をそれぞれ検討した。次に、これらの項目をもとに住居跡の分類をしたい。

第１類：円形の平面形を基調とし、周溝を伴うものである。これらは住居跡の規模・柱穴の配置・炉の構造などからさらに細分される。

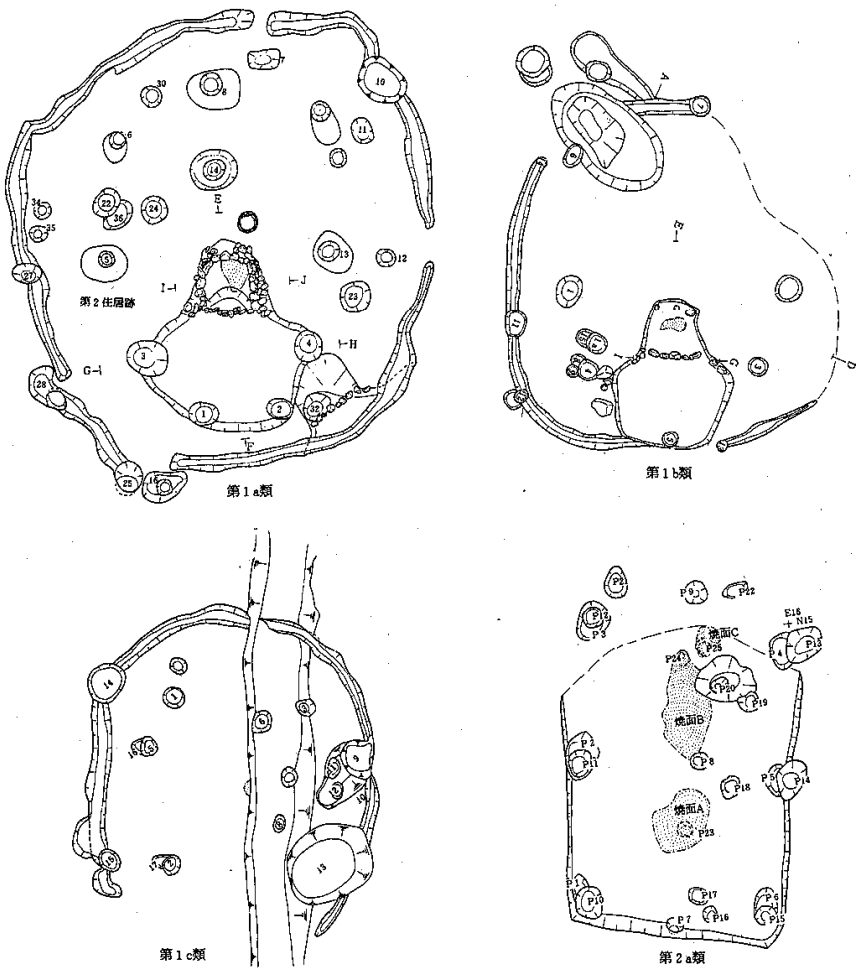
第1a類の住居跡内面積が約30㎡で、住居跡の長軸の長さが６ｍを越し、短軸の長さが６ｍ前後の住居跡である。柱穴は住居（炉）跡の長軸を対称軸として４個ずつ８個（Ｃ－１類）配され、炉はすべて土器埋設石組複式炉である。住居跡の方向は台地平坦部に対し放射状に向いている。

第1b類は住居跡内面積が約20㎡で、住居跡の長軸の長さが５ｍ前後または６ｍを越えず、短軸の長さが５ｍ以下の住居跡である。柱穴は住居（炉）跡の長軸上に１対、長軸を対称軸として３個ずつ８個（Ｃ－２類）配され、炉は石組複式炉である。住居跡の方向は台地平坦部に対し放射状に向くものと、不規則な方向を示すものがある。

第1c類は住居跡内面積が約13～14㎡で、長軸の長さが４ｍをやや越すが、短軸の長さが４ｍ以下のものである。柱穴は４個配され、炉は地床炉である。住居跡の方向は台地平坦部に対し不規則な方向を示す。

第1d類としたものは、平面形が円形を基調とし、周溝がめぐるものである。しかし、削平や

分類＼項目		平面形	周溝	規模	柱穴	炉の構造	住居跡の方向	住居跡
第1類	a	円形基調	有	A類（約30㎡）—C₁（8本）—		土器埋設石組複式炉	A	第1・2・4・12住居跡
	b			B類（約20㎡）—C₂（8本）—		石組複式炉	A・B	第8・9a住居跡
	c			C類（約13～14㎡）—	A（4本）	地床炉	B	第21住居跡
	d			以下の項目のどれかが不明				第9b・13・15・16・17・20住居跡
第2類	a	方形基調	無	D類（約12㎡）—	B（6本）	地床炉	A	第3住居跡
	b			以下の項目のどれかが不明				第7a・7b住居跡
第3類		炉は検出されたが、その他の項目が不明のもの						第6・10・14・18・19住居跡



第288図　住居跡の分類

重複のため、その他の要素が不明のものである。第13・15・20住居跡はＣ－２類の柱穴を示すと考えられるところから第1b類に、第16住居跡も石組複式炉をもち、Ｃ－２類の柱穴を示すことから第1b類にあてはまるものと推測される。また、第9b住居跡は面積が約20㎡であり、柱穴がＣ－２類の配置を示すことから第1b類にあてはまるものと思われる。

第２類：方形の平面形を基調とし、周溝を伴わないものであるが、住居跡の規模・柱穴の配置・炉の構造などが判明するものと不明なものがある。

第2a類は方形の平面形を基調とし周溝を伴わないもので、住居跡内面積が約12㎡である。長軸の長さが４ｍをやや越すが、短軸の長さが３ｍ以下の住居跡である。柱穴は住居跡長軸を対称軸として３個ずつ６個（Ｂ類）配されており、炉は地床炉である。住居跡の方向は台地平坦部に対し放射状に向いている。

第2b類は、平面形が方形を基調とし周溝のない住居跡であるが、削平や重複などにより規模・柱穴の配置などが不明のものである。

住居廃絶後の状況

廃絶後の状況Ⅰ

ここでは住居跡内の堆積層をもとに、廃絶後の状況について検討する。住居跡が埋まっていく過程（埋没の仕方）、およびその過程における遺物の含まれ方には次のようなタイプがある。なお、削平を受けているために、壁や堆積土の確認されなかった住居跡は不明なものとして扱った。

第Ⅰタイプ：床面から完形または完形に近い土器がまとまって出土し、ある程度埋まった一時的安定面に遺物が集中するもの。第１住居跡で認められる。

第Ⅱタイプ：床面および堆積土からも遺物は出土するが、ある程度埋まった一時的安定面に遺物が集中するもの。第８・12・20住居跡で認められる。

第Ⅲタイプ：床面および堆積土から遺物は出土するが、特に集中する部分がみられないもの。第２・３・７・９・13・15住居跡に認められる。

第Ⅳタイプ：不明なもの。第４・６・10・14・16・17・18・19・21住居跡に認められる。

第Ⅰタイプの第１住居跡では床面出土の完形に近い土器が３個体ある。これらは住居廃絶時あるいは、それに近い時期に廃棄されたものと考えられる。その後、遺物が集中して廃棄された時には住居跡がかなり埋まっていたと考えられる。このようなタイプは、西耕地パターン（白石：1969）として提唱されている。

第Ⅱタイプは遺物が集中して廃棄された時には、住居跡がかなり埋まってしまっていたと考えられる。このような貝層を伴わないタイプも吹上パターン（可児：1969）と呼ばれている。

第Ⅲタイプは住居跡が埋まっていく過程で、堆積土に混じって遺物が流れ込んだものと考えられる。

廃絶後の状況Ⅱ

ここで、石組炉・土器埋設石組炉に伴う石を検討すると、次の２つのタイプに分けられる。

第Ⅰタイプ：石組部の石がほぼ完全な形で残っているもの。第１住居跡１号炉、第２・10・14住居跡の炉である。

第Ⅱタイプ：石組部の石が完全な形で残っていないもの。第４・８・9a・12・13・18・19住居跡の炉である。このうち、第13住居跡の石組部は第２住居跡との重複関係により、また第18住居跡は後世の削平によって完全な形で残っていないものである。

以上、２つのタイプに分類したが、第１タイプのうちで第１住居跡１号跡・第２住居跡・第14住居跡の炉石組部の上段の石を観察すると、石組部掘り方の埋土と接している部分やその石組部分の底部（下部）が赤変し、亀裂の入っているものが存在する。また、第10住居跡の石組部Ⅲは全く火の焚かれた痕跡がないのにもかかわらず、赤変して亀裂の入っている石が３個ある。また、第Ⅱタイプの石組部には石の抜き取り痕跡が明確に検出できるものが多数ある。

このことから、第Ⅱタイプの炉を有する住居跡が廃絶された後、その住居跡の炉石組部の石を抜き取り、第Ⅰタイプの住居跡の炉に転用した可能性も考えられる。

住　居　跡　一　覧

	平面形	規模(㎡)	方向	周溝	床面	柱穴	炉の構造	炉の方向
第 1 住居跡	円形	32.3	—	有	掘り方底面	8 個	土器埋設石組複式炉	放射状
第 2 住居跡	円形	29.0	—	有	掘り方底面	8 個	土器埋設石組複式炉	放射状
第 3 住居跡	長方形	12.2(推)	放射状	無	掘り方底面	6 個	地床炉	—
第 4 住居跡	円形	31.1(推)	—	有	—	8 個	土器埋設石組複式炉	放射状
第 5 住居跡(欠)	—	—	—	—	—	—	—	—
第 6 住居跡	—	—	—	—	—	—	(複式炉)	(放射状)
第 7 a 住居跡	(方形)	—	—	無	掘り方底面	—	—	—
第 7 b 住居跡	(方形)	—	—	無	掘り方底面	—	地床炉	—
第 8 住居跡	円形	18.4(推)	—	有	掘り方底面	8 個	石組複式炉	不規則
第 9 a 住居跡	楕円形	22.1(推)	不規則	有	貼床	8 個	石組複式炉	放射状
第 9 b 住居跡	円形	19.0(推)	—	有	掘り方底面	8 個	(複式炉)	(放射状)
第 10 住居跡	—	—	—	—	—	—	石組複式炉	不規則
第 11 住居跡(欠)	—	—	—	—	—	—	—	—
第 12 住居跡	楕円形	28.2(推)	放射状	有	掘り方底面	8 個	土器埋設石組複式炉	放射状
第 13 住居跡	(円形)	—	—	有	掘り方底面	8 個	石組複式炉	不規則
第 14 住居跡	—	—	—	—	—	—	石組炉	不規則
第 15 住居跡	—	—	—	有	掘り方底面	—	(複式炉)	(不規則)
第 16 住居跡	—	—	—	有	掘り方底面	8 個	石組複式炉	不規則
第 17 住居跡	楕円形	13.1(推)	放射状	有	—	—	地床炉	—
第 18 住居跡	—	—	—	—	—	—	—	—
第 19 住居跡	—	—	—	—	—	—	—	—
第 20 住居跡	—	—	—	有	掘り方底面	—	(複式炉)	(放射状)
第 21 住居跡	楕円形	14.1(推)	放射状	有	—	4 個	地床炉	—

出 土 遺 物

遺物の分類

出土した遺物は極めて多量で、平箱にして約100箱分におよぶ。これらの遺物は何らかの形で人間の手が加えられた人為遺物である。人為遺物を素材の種類や特徴によって大づかみに分類すると、土製品と石製品に分かれる。土製品は土などを素材とし、一定の形をつくり、それを焼き上げたものであり、石製品は石を素材とし、それに打撃を加えたり、研磨・穿孔を行なうなどして一定の形に仕上げたものである。したがって、土製品と石製品は製作技法や形態等の違いによってそれぞれ幾つかに分類することができる。すなわち、土製品は縄文土器・須恵器・陶磁器等の土器類と土偶・斧状土製品・円板状土製品などに、石製品は剥片石器・磨製石器・礫石器等の石器類と有孔垂飾品等の装身具類に分類される。

これらを表にまとめ、出土量を示したのが第59表である。

第59表　上深沢遺跡出土遺物分類表

人為遺物	土製品	土器	縄文土器	前期	口縁部1点・胴部1点
				中期	実測資料30点・口縁部1,657点・有文胴部4,694点・地文胴部21,811点・底部681点
				後期	口縁部3点
				晩期	口縁部7点・胴部6点
			須恵器		口縁部4点・胴部9点
			陶磁器	陶器	実測資料19点
				磁器	実測資料6点
		土偶			10点
		斧状土製品			2点
		円板状土製品			3点
	石製品	石器	剥片石器とその素材	第1群石器	110点
				第2群石器	35点
				第3群石器	15点
				第4群石器	161点
				剥片	完形品237点・破損品527点
				石核	15点
			磨製石器	磨製石斧	11点
				石剣	3点
			礫石器	凹石	33点
				敲石	1点
				磨石	22点
				石皿	19点
				砥石	19点
				石磨臼	4点
			装身具	有孔垂飾品	7点

縄文時代前期の土器

縄文時代前期と思われる土器片が２点出土している。いずれも胎土に多量の繊維を含む。口縁部片は１点（第241図－20）。口縁部が直立した器形で口唇部が内側に削がれている。口縁部外面ではＲＬ縄文を横位に回転施文した後、長さ1.5cmほどの刻目が縦につけられている。このような特徴をもつ土器は柴田町上川名貝塚の上層土器（加藤：1951）や鳴瀬町金山貝塚（鳴瀬町教委：1977）などに類例がみられ、縄文時代前期の上川名Ⅱ式とされている。したがって、本資料は上川名Ⅱ式に位置づけることができる。

縄文時代中期の土器

縄文時代中期の土器は、出土遺物の中で最も多く、実測可能な資料30個体・口縁部破片資料1,657点・地文以外の文様表現が認められる胴部破片資料4,694点・地文のみが認められる胴部破片資料21,811点・底部資料681点である。実測可能なものを除いた破片と底部資料を合計すると28,843点で平箱80箱分である。これらの土器を検討するために1. 胎土・2. 成形技法・3. 器面調整・文様表現技法・4. 文様・5. 器形について観察し、一分類作業を行なった。

土器の観察

1. 胎土

胎土の特性を理解するために、素地土・混入物・色調について観察を行なった。その結果、色調に関しては第60表に示した種類が認められた。また素地土に含まれる混入物を観察したところ、砂粒や細礫が顕著に認められた。その中には縁辺が磨滅し、さらに表面が変質するなど

第60表　色調一覧

色名	色相	明度	彩度
茶色	2.5YR	3.5	2.5
	4.0YR	5.0	4.0
	4.0YR	5.0	4.5
	5.0YR	4.5	4.5
	5.0YR	4.5	5.5
	5.4YR	4.5	5.5
	5.5YR	4.0	2.0
	9.5YR	4.5	7.0
明るい茶	1.0YR	8.0	6.0
	2.5YR	3.5	2.5
	2.5YR	5.0	8.0
	2.5YR	5.0	9.0
	3.0YR	5.5	4.0
	3.0YR	5.5	4.5
	3.5YR	5.5	7.0
	10.0YR	6.0	2.0
暗い茶	2.5YR	3.5	2.0
	7.0YR	4.0	2.0
	9.5R	3.5	3.0
うす茶	2.5YR	7.0	3.0
	3.5YR	8.5	2.0
	5.0YR	6.5	0.5
	5.0YR	7.5	2.5
	5.0YR	7.5	6.5
黄茶	2.5Y	5.0	3.0
	2.5Y	6.5	4.0
	5.0YR	5.0	5.0
	5.0YR	5.5	5.5
暗い黄茶	1.5YR	3.0	1.0
	2.5Y	6.5	4.0
	7.0YR	4.0	2.0
	7.0YR	4.2	2.0
	7.5YR	3.0	1.0

色名	色相	明度	彩度
暗い黄茶	7.5YR	3.0	4.0
	7.5YR	4.0	2.0
	8.0YR	5.5	6.0
	10.0YR	3.5	3.0
	4.0YR	3.5	3.0
灰味黄茶	2.5YR	4.5	2.0
	3.0YR	5.5	4.0
	7.0YR	4.0	2.0
	7.5YR	2.5	0.5
	7.5YR	7.0	2.5
	7.5YR	7.5	2.5
	8.0YR	4.5	2.0
	8.0YR	4.5	2.8
	8.0YR	5.5	6.0
	8.5YR	2.5	2.0
	8.5YR	4.0	2.0
	8.5YR	4.2	2.0
	8.5YR	4.5	2.0
	8.5YR	4.5	2.5
	8.5YR	5.5	6.0
	8.5YR	7.0	2.5
うす黄茶	1.0Y	7.5	2.0
	2.5Y	7.5	5.5
灰味茶	2.0YR	5.0	3.0
	2.0YR	5.0	3.5
	8.5YR	4.5	2.1
	8.5YR	5.0	0.5
	8.5YR	5.0	5.0
暗い赤茶	10.0YR	2.0	2.0
灰味赤茶	8.5R	4.5	4.5
にぶ橙	4.0YR	7.5	7.5
	6.0YR	7.5	6.0
	6.5YR	7.5	6.0

色名	色相	明度	彩度
にぶ橙	7.5YR	7.0	7.0
	8.0YR	4.0	2.0
	8.0YR	4.5	2.0
	8.0YR	5.5	5.0
	8.0YR	5.5	6.0
	8.0YR	6.0	2.5
うす橙	2.0YR	7.5	2.0
	3.5YR	8.5	2.0
	4.0YR	8.5	4.0
	5.0YR	7.5	6.5
明るい黄味橙	2.0YR	6.5	11.5
	3.5YR	6.5	11.0
黄味橙	2.0YR	6.5	11.5
	2.5YR	6.5	12.0
	3.5YR	6.5	11.0
橙	2.5YR	6.0	11.0
	3.5YR	6.5	13.0
灰味黄橙	7.5YR	7.0	2.5
赤味橙	8.5YR	8.0	8.0
	9.0R	6.5	11.0
	9.0R	5.5	11.0
	10.0R	4.0	12.0
明るい黄橙	1.0Y	8.0	6.0
	1.0Y	8.0	8.0
暗い橙	3.5YR	5.0	9.5
黄橙	7.5YR	7.0	2.0
にぶ黄橙	6.0YR	6.0	2.5
	8.0YR	6.0	2.0
	8.0YR	6.0	2.5
にぶ赤味橙	10.0YR	4.5	4.5
茶灰	1.0YR	6.0	0.5
	2.5YR	3.5	0.5
	7.5YR	2.5	0.5

色名	色相	明度	彩度
明るい茶灰	1.0Y	6.5	2.0
	1.0Y	6.5	2.5
	10.0YR	6.0	2.0
	10.0YR	6.0	2.5
	10.0Y	6.5	2.0
青味灰	1.0PB	4.5	8.0
黄味灰	5.0YR	9.0	1.0
黄味白	1.0Y	8.5	3.0
	1.0Y	8.5	3.5
	1.0Y	8.5	6.0
	1.0YR	8.5	3.0
	2.5Y	9.0	2.0
	5.0Y	8.5	1.0
茶白	1.0YR	9.0	2.0
青味白	2.5PB	8.0	1.0
	10.0G	8.0	0.5
黄味	5.0Y	5.0	5.0
うす黄	2.5Y	8.0	4.0
赤味黄	8.5YR	8.0	8.0
	9.0YR	7.5	12.5
暗い黄	10.0YR	6.0	8.0
黄味赤	8.0R	4.0	11.0
うす黄赤	1.0Y	7.5	2.0
	2.0Y	7.5	1.0
明るいオリーブ灰	5.0Y	6.5	0.5
	6.0Y	7.5	1.0
	7.5Y	8.0	0.5
暗いオリーブ灰	5.0Y	3.5	0.5
灰味オリーブ灰	6.5Y	5.0	1.0
灰味黄緑	7.5GY	5.0	4.0
うす青	2.5PB	6.5	7.0
ピンク	1.5YR	7.0	1.5
うすピンク	1.0YR	8.0	6.0

明らかに風化を受けたと考えられるものが相当量含まれていた。

これらの観察は器面が剥落して、胎土が露出している場合容易であった。しかし、多くの場合、器面に調整が加えられ文様が施文されているので、器面において胎土の状態（素地土および混入物）を観察することは困難であった。したがって、断面観察のみに頼らざるを得ないものも多かった。この点、混入物の観察については一定の限界がある。

２．成形技法

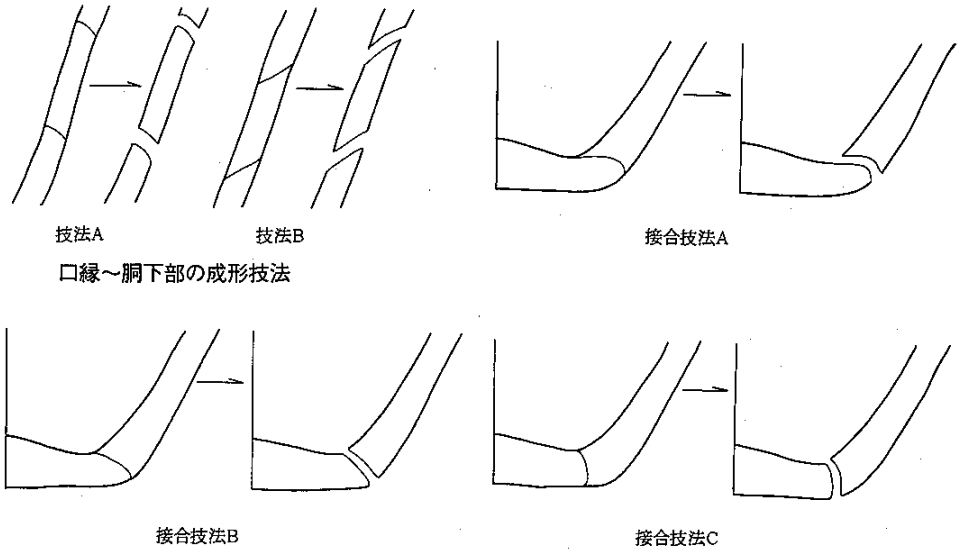
観察の方法

土器の割れ口を観察すると、成形の際の接合部分が剥れて曲面の状態を示しているもの(「はがれ目」がある。これらの土器について、胎土の状態を観察すると、中に含まれる砂粒が一定方向に走るような配列を示し、接合面を境としてその上・下で配列方向が異なるものがある。これらは素地土を粘りあげた時の方向と、成形のため積み上げた際の幅を示すと考えられる。このような観点から土器の成形技法を観察したところ、次のような結果が得られた。

なお、このような「接合面」は器内・外面に幅数cmでみられる僅かな屈曲に照応して認められる場合が多い。このことから、器面にみられる僅かな屈曲は素地土積み上げの痕跡である可能性が強い。

口縁～胴部下端の成形（積みあげ技法）

口縁～胴部はいずれも素地土の積みあげ技法によって成形されている。これが巻き上げなのか輪積み技法によるものなのかは判明しなかった。積みあげ技法には次の２種が認められる。



第289図　成形技法

Ａ：接合面が器外面方向に傾斜するもの。

Ｂ：接合面が器内面方向に傾斜するもの。

胴部と底部の接合方法

胴部と底部の接合は、円板状の底部に対する胴部下端の状態によって次の３種に分類される。

Ａ：円板状の底部にそのまま胴部を積みあげるもの。

Ｂ：円板状の底部の周縁を外方に傾斜させ、その上に胴部を積みあげるもの。

Ｃ：円板状の底部の側縁に接して胴部を積みあげるもの。

３．器面調整・文様表現技法

成形の終了した土器は器面が調整され、文様が施される。器面調整および文様表現技法には第61表のような種類がある。

器面調整技法

器面調整技法には、「ケズリ」・「ナデ」・「ミガキ」の３種類がある。「ケズリ」はその上に「ナデ」「ミガキ」が加えられることが多いので、最終調整技法として観察される場合は、極くまれである。それぞれについて、その一般的特徴・単位・痕跡・効果について説明を加えたい。

ケズリ

〔一般的特徴〕面として一定の範囲がケズリとされ、それに伴い素地上の砂粒が移動したり脱落したりする。

〔単位〕「ヘラ」およびその他の工具によって削られた幅。

〔痕跡〕砂粒の移動とその移動後の脱落痕。

〔効果〕器面の素地土を削りとる。

ナデ

〔一般的特徴〕器面がナデられ、細い「スジ」がつく。

〔単位〕皮もしくはその他の工具の押圧部分の幅による。不明なものが多い。

〔痕跡〕平行なとぎれとぎれの細い「すじ」。

〔効果〕器面をオサエて凹凸を少なくする。

ミガキ

〔一般的特徴〕器面が研磨され、それに伴い平滑な面を生じる。

〔単位〕工具（竹・骨・円礫など）が接する部分の幅による。その幅は広いものから極端にせまく単位不明のものまで多様で一定しない。

〔痕跡〕平滑な面をなし、光沢を生じる場合がある。

〔効果〕器面を研磨し、砂粒を沈め緻密にする。

以上の器面調整技法は観察し注記を作成したが、繁雑になるため実測図作成の段階で図化は行なわなかった。

文様表現技法

文様表現技法は大別すると、沈文・隆文・隆沈文・磨消縄文になる。これらの名称はすべて文様表現技法の加えられた結果（痕跡）を示している。厳密に言えば、これらの名称の末尾に「技法」の用語を加えなければならないが、繁雑になるため便宜上省略する。「沈文」は器面を凹ませ、隆文は器面を凸にすることによって文様を表現するものである。隆沈文は両者の複合したものである。磨消縄文は「線をもって器面を区劃し、区劃内に縄文をつけ、区劃外を平滑にし、縄文のある部分とない部分とを交置して装飾としたもの（小林：1959）」である。これらの文様表現技法は細分すると次のようなものがある。

沈文

〔縄文〕繊維のたばをより合わせた縄をそのままの形で押したり回転させて施文したりしたものである。種類として次のようなものがある。回転縄文(原体：R・L・RL・LR・RLR・LRL)、撚糸文（原体：R・L）。これらはすべて地文として使用されている。

第61表　器面調整・文様表現技法

器面調整・文様表現技法	器面調整技法	ケズリ			
		ナデ			
		ミガキ			
	文様表現技法	沈文	縄文（R・L・RL・LR・RLR・LRL）撚糸文（R・L）		
			刺突文（単純刺突文・交互刺突文）		
			沈線文	無調整沈線文	
				調整沈線文	
			凹文		
		隆文	無調整隆起線文		
			調整隆起線文	A_1　A_2	
				B_1　B_2	
				C	
		隆沈文	A：調隆文A＋調沈文		
			B：調隆文B＋調沈文	B_1	
				B_2	
			C：調隆文C＋調沈文		
		磨消縄文	A：磨消縄文	A_1	
				A_2	
			B：充填縄文	B_1	
				B_2	

〔刺突文〕ヘラ状もしくは棒状の工具を突き刺し、一定方向に圧力を加えて生じるものである。刺突を器面に対し垂直に加えるとその形状は工具そのままの形（円形・方形etc.）になり、斜めに加えると楕円形・長方形になる。

〔無調整沈線文〕ヘラ状もしくは棒状の工具を器面に突き刺し、一定の方向に移動させることによって描かれるものである。沈線の両側縁には削りとられた素地土の一部が盛りあがる(「まくれ現象」)。沈線内部には工具の痕跡、砂粒の移動等が観察されることがある。この場合、沈線の幅は工具の突き刺さった部分の幅であり、沈線の深さは工具に加えられた圧力、沈線の断面形は工具の先端の状態（形態と角度）によるものである。

無調整沈線文には、単独で文様を描くものの他に櫛目状沈線文・条線文・綾杉状沈線文等のように数本集まって地文をつくるものがある。櫛目状沈線文および条線文は無調整沈線文が縦に数本平行に近い状態で配列されたもので、前者は沈線が非常に密接しているもの、後者は沈線の間隔が、前者に比べひらいているものである。綾杉状沈線文は平行に近い状態で斜行した無調整沈線文が交互に組み合ったものである。

〔調整沈線文〕無調整沈線文の内部もしくは側縁にミガキ等の調整が加えられたものである。

隆文

〔無調整隆起線文〕細い紐状にした素地土を器面に貼りつけたものである。器面に貼りつけるための僅かな調整は認められるが、貼りつけの痕跡を明瞭に残している。

〔調整隆起線文〕無調整隆起線文に貼りつけた痕跡をほとんど残さない状態まで調整（ケズリ・ナデ・ミガキ）を加えたものである。断面形態により次のA_1・A_2・B_1・B_2・Cに細分される。A_1は断面が「凸」状のもの、A_2は「凸」状で幅の広いもの、B_1はA_1の両側縁が丸味を滞び「蒲鉾(かまぼこ)状」をしたもの、B_2はB_1より幅の広いもの、Cは内反しながら隆起し、頂面が丸味をもったものである。

隆沈文

隆起線文と沈線文が結合して一体となったものである。結合の仕方によって次のA・B_1・B_2・Cに細分される。隆沈文Aは調整隆起線文A_1＋調整沈線文、隆沈文B_1は調整隆起線文B_1＋調整沈線文、隆沈文B_2は無調整隆起線文B_1の片側に調整沈線文の加えられたもの、隆沈文Cは調整隆起線文C＋調整沈線文である。

磨消縄文

磨消縄文の装飾効果は既に述べた通りである。これらは同様な装飾効果をもちながら、工程上次の２種に大別される。それは縄文（地文）を施した後、線による区画を行なうものと、線による区画を行なった後、縄文（地文）を施すものである。前者を磨消縄文A（狭義の磨消縄文)、後者を磨消縄文B（充填縄文）とする。両者はさらに次のように細別される。

磨消縄文A

〔磨消縄文A_1〕ミガキ調整が不徹底で、「縄文（地文）の底面」にまで至らないもの。縄文（地文）の上半にのみミガキ調整が加えられ、下半は無調整の状態で観察されることが多い。

〔磨消縄文A_2〕ミガキ調整が徹底して行なわれ、「縄文（地文）の底面」にまで至るもの。部分的なミガキ残しのため縄文（地文）の痕跡が観察される。

磨消縄文B（充填縄文）

具体的な特徴として次のような点をあげることができる。１：縄文（地文）の施文方向が文様区画に沿って変化する。２：縄文（地文）は調整沈線文によって切られていることが多いが、部分的に区画線付近にその施文末端が認められる。３：線によって区画された無文部分に縄文（地文）の施された痕跡が一切認められない。大破片や完形品の場合のみ「特徴１～３」の観察が可能である。小破片の場合は「特徴２・３」のみ観察が可能である。

このような磨消縄文Bは工程上から次の２種に細分されるが、実際的に区別することは困難なものが多い。

〔磨消縄文B_1〕下書きによる文様区画→区画内もしくは外側に縄文（地文）施文→沈線による文様区画→沈線内部、側縁周辺のミガキ調整。

〔磨消縄文B_2〕沈線による文様区画→区画内もしくは外側に縄文（地文）施文→沈線内部・側縁周辺のミガキ調整。

４．文様

文様要素および文様単位

器面において観察される文様は文様単位・文様要素に分解される。文様要素は文様としてこれ以上分解することができないものである。文様要素の中には他の文様要素と依存しあっているため、それらが結合した状態で完結した文様になるものがある。これを文様単位とする。このように文様要素と文様単位は、理論的に別の次元のものであるが、実際的観察では両者を一括したほうが理解しやすい。したがって、ここでは単独で存在できる文様要素は文様単位の中に含めて分類したい。その結果、文様単位は合計52種認められた。この中で複数の文様要素に分解することができるものおよび、それに関連するものについて若干解説を加えたい。

横位渦巻楕円文

様位渦巻楕円文は、横位渦巻文と横位楕円文の結合したものである。これらは結合方法、渦巻文と楕円文の関係からいくつかに分類される。

〔結合方法による分類〕Aは横位渦巻文の連続として横位楕円文が形成され、両者を分解できないものである。Bは横位渦巻文と横位楕円文がそれぞれ独立した形で結合し、異なった文様要素として分解することが可能なものである。

第62表　文様単位の分類Ⅰ

文様単位	文様表現技法	模式図	文様単位	文様表現技法	模式図
溝状文	隆沈文A		縦位渦巻文Ⅵ	調整沈線文	
溝状文	隆沈文B		横位渦巻楕円文Ⅰ（抱き込み型）	隆沈文A	
溝状文	隆沈文C		横位渦巻楕円文Ⅰ（抱き込み型）	隆沈文B_1	
横位渦巻文Ⅰ	隆沈文A		横位渦巻楕円文Ⅱ（背負い型）	調整沈線文	
横位渦巻文Ⅰ	隆沈文C		横位渦巻楕円文Ⅱ（背負い型）	隆沈文C	
横位渦巻文Ⅱ	調整沈線文		横位渦巻楕円文Ⅲ（抱き込み型）	隆沈文B_1	
横位渦巻文Ⅲ	調整沈線文		横位渦巻楕円文Ⅳ（背負い型）	隆沈文C	
横位渦巻文Ⅳ	調整沈線文		横位渦巻楕円文Ⅴ（抱き込み型）	調整沈線文	
縦位渦巻文Ⅰ	調整沈線文		横位渦巻楕円文Ⅴ（抱き込み型）	隆沈文C	
縦位渦巻文Ⅱ	調整沈線文		横位渦巻楕円文Ⅵ（背負い型）	隆沈文C	
縦位渦巻文Ⅲ	調整沈線文 調整隆起線文C		横位渦巻楕円文Ⅵ（背負い型）	調整沈線文	
縦位渦巻文Ⅳ	調整隆起線文C		縦位渦巻楕円文Ⅰ	隆沈文C	
縦位渦巻文Ⅴ	調整沈線文		縦位渦巻楕円文Ⅱ	隆沈文C	

第63表　文様単位の分類II

文様単位	文様表現技法	模式図	文様単位	文様表現技法	模式図
円文 I	調整沈線文		変形楕円文 I	隆沈文 C	
円文 II	隆沈文 C		変形楕円文 II	調整沈線文	
円文 III	凹文		変形楕円文 III	調整沈線文	
縦位楕円文 I	調整沈線文		変形楕円文 III	隆沈文 C	
縦位楕円文 II	調整沈線文		変形楕円文 IV	隆沈文 B	
「∩」文 I	調整沈線文		長楕円文	凹文	
「∩」文 I	隆沈文 C		長円文	凹文	
「∩」文 II	調整沈線文		連結凹文	調整隆起線文B	
変形「∩」文 I (鍵形文)	調整沈線文		連結渦巻文	調整沈線文	
変形「∩」文 II (H字形)	調整沈線文		連結渦巻文	隆沈文 A	
横位楕円文	調整沈線文		「ヒレ」状文	調整隆起線文C	
横位楕円文	隆沈文 C		鋸歯状文	交互刺突文	
変形楕円文 I	調整沈線文		台形文	隆沈文 C_2	

〔渦巻文と楕円文の関係による分類〕１、は渦巻文が楕円文を中に抱きこむもの(抱き込み型)である。２、は渦巻文が楕円文を背負うもの（背負い型）である。

これらの組合せによって４類、さらにその変形として２類、合計６類に分類される。

Ⅰ型：横位渦巻文の連続で横位楕円文が形成され、抱き込み型のもの。文様表現技法は隆沈文ＡとＢの２種がある。

Ⅱ型：横位渦巻文の連続で横位楕円文が形成され背負い型のもの。文様表現技法は調整沈線文と隆沈文Ｃの２種がある。

Ⅲ型：横位渦巻文と横位楕円文が独立し、抱き込み型のもの。文様表現技法は隆沈文Ｂ１のものによって占められる。

Ⅳ型：横位渦巻文と横位楕円文が独立し、背負い型のもの。文様表現技法は隆沈文Ｃのものによって占められる。

Ⅴ型：Ⅲ型の変形で両端が渦巻文のもの。文様表現技法は隆沈文Ｃと調整沈線文の２種がある。

Ⅵ型：Ⅳ型の変形で両端が渦巻文のもの。文様表現技法は隆沈文Ｃと調整沈線文の２種がある。

縦位渦巻楕円文

縦位渦巻文と縦位楕円文および「∩」文の結合したものである。これらはいずれも抱き込み型を基本とし、その変形によって４種に分類される。

Ⅰ型：縦位渦巻文Ⅲが縦位楕円文もしくは「∩」文Ⅰを中に抱き込んでいるもの。この中には、縦位渦巻文Ⅲの垂下する部分が省略され、縦位楕円文もしくは「∩」文Ⅰと結合しているものや円形文と縦位楕円文もしくは「∩」文Ⅰが結合しているものが含まれる。

Ⅱ型：第１類の縦位渦巻楕円文を「∩」文Ⅰが覆っているもの。

これらの文様表現技法はいずれも隆沈文Ｃである。

文様帯

文様が施文される部分は各々の土器の中で規則性が認められる。このような文様帯をその配置されている位置・文様帯の構成方法によって分類すると第64表のようになる。

５．器形

器形の観察

器形はⅠ：口縁部形態、Ⅱ：口縁部の傾きの状態、Ⅲ：胴部の傾きの状態、Ⅳ：底部の状態Ⅴ：その他の特徴について観察を行ない、それらの組み合せによって分類したい。

Ⅰ：口縁部形態

口縁部形態はＡ：平口縁のものとＢ：大波状口縁のものに大別される。口縁部形態Ａは(1)：

第64表　文様帯の分類

	文様帯の位置（I）	文様帯の位置（II）	文様帯の構成	模式図
（I）文様帯をもつもの	(A)口縁部に文様帯をもつもの	(1)口唇部に文様帯をもつもの	(a)口縁下部～頸部が無文のもの (b)口縁下部～胴部に文様帯をもつもの	IA1a
		(2)幅の広い口縁部文様帯をもつもの	(a)頸部が無文のもの (b)口縁部直下から胴部文様帯が展開するもの (c)口縁部直下に地文があるもの	IA2a
		(3)幅の狭い口縁部文様帯をもつもの		IA2b
	(B)口唇部直下から胴下部まで連続した文様帯をもつもの			IB
	(C)口縁上半部が無文でその下部に文様帯をもつもの	(1)口縁下部から胴下部まで連続した文様帯をもつもの		IC1
		(2)口縁下部から胴上半部に文様帯をもつもの		ID
	(D)口縁部が無文で胴部に文様帯をもつもの			ID

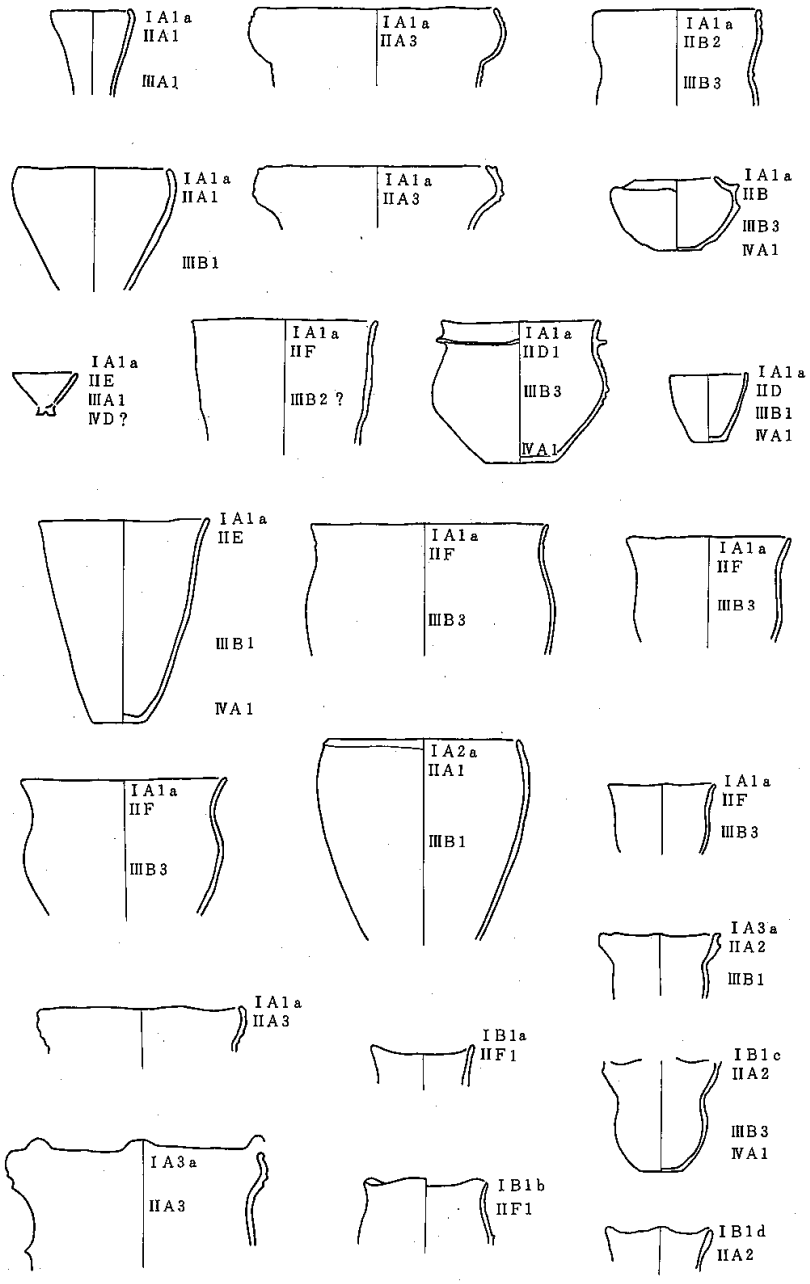
第65表　器形の分類Ⅰ

(Ⅰ) 口縁部形態	(A) 平口縁	(1) 平坦な単純口縁		(a)
		(2) 平坦な複合口縁		(a)
		(3) 波状突起をもつもの		(a)
	(B) 大波状口縁	(1) 波頂部が曲線を描くもの	(a) 2つの大波状口縁	
			(b) 3つの大波状口縁	
			(c) 4つの大波状口縁	
			(d) 5つの大波状口縁	
		(2) 波頂部が突起状のもの		

(Ⅱ) 口縁部の傾き	(A) 内彎	(1)	(Ⅲ) 胴部の傾き	(A) 外傾 (1)	
		(2)			
		(3)		(B) 内彎	(1)
	(B) 内傾 (1)				(2)
	(C) 内反 (1)				(3)
	(D) 直立 (1)				
	(E) 外傾 (1)				
	(F) 外反 (1)				

(Ⅳ) 底部形態	(A) 平底	(1) 無文	(Ⅴ) その他の特長	(A) 把手	(1) 縦位
	(B) 丸底	(2) 網代			(2) 横位
	(C) あげ底	(3) 木葉		(B) つば付き	
	(D) 脚（台）付き底			(C) 注口	

第66表　器形の分類II



平坦な単純口縁のもの、(2)：平坦な複合口縁のもの、(3)：波状突起をもつものに細分される。

口縁部形態Bは(1)波頂部が曲線を描くものと(2)波頂部が突起状のものに分かれる。口縁部形態B－(1)は波頂部の数によって、(a) 2つの大波状(b) 3つの大波状(c) 4つの大波状(d) 5つの大波状のものに細分される。

Ⅱ：口縁部の傾きの状態

口縁部の傾きの状態はA：内彎するもの、B：内傾するもの、C：内反するもの、D：直立するもの、E：外傾するもの、F：外反するものに大別される。この中で口縁部の傾きAは(1)～(3)に細分される。

Ⅲ：胴部の傾きの状態

胴部の傾きの状態はA：外傾するものB：内彎するものに大別される。胴部の傾きBはさらに(1)～(3)に細別される。

Ⅳ：底部の状態

底部の状態はA：平底のもの、B：丸底のもの、C：あげ底のもの、D：台付のものに大別される。

Ⅴ：その他の特徴

Ⅰ～Ⅳまでの特徴の他にA：把手、B：鍔、C：注口がある。「A：把手」には縦位につくものと横位につくものがある。「B：鍔」には鍔だけが単純につくものと器面に近い部分に貫通孔をもつものがある。

器形の分類

Ⅰ～Ⅴの特徴に分解された器形は相互の関係によって第66表のようなものにまとめられる。しかし、上深沢遺跡では完形品が非常に少ないため、破片資料の中に含まれているすべての器形を摘出することは困難である。そこで、ここでは口縁～胴部資料を主体として分類し、その他の破片資料はⅠ：口縁部、Ⅳ：底部、Ⅴ：その他の特徴の中で扱うことにする。

土器の分類

「土器の観察」で述べた胎土・成形技法・器面調整技法・文様表現技法・文様単位・文様帯・器形に基いて土器の総合的分類を行ないたい。そのために次のような方法をとりたい。まず文様としてⅠ：文様と地文をもつもの、Ⅱ：地文のみのものに大別する。次にⅠ：文様と地文をもつものを文様帯の位置と構成によって細分し、さらに文様単位と文様表現技法の種類によって分類する。Ⅱ：地文のみのものについては、地文を区画する方法によって分類する。

このようにして文様によって分類されたものが第67～71表である。これら文様の分類細目ごとの文様構成とそれらに伴う成形技法・器面調整技法・文様表現技法・器形について説明を加えたい。

Ⅰ：文様帯と地文をもつもの

これらはA：口縁部に文様帯をもつもの、B：口唇部直下から胴下部まで連続した文様帯をもつもの、C：口縁上半部が無文でその下部に文様帯をもつもの、D：口縁部が無文で胴部に文様帯をもつものに分れる。

ⅠA類：口縁部に文様帯をもつもの

口縁部文様帯をもつものはその状態、配置関係等からⅠA1a類・ⅠA1ｂ類・ⅠA2a類・ⅠA2b類・ⅠA2c類・ⅠA3a類に分類される。

ⅠA1a類：口唇部に文様帯をもち、口縁下部～頚部が無文のもの（口縁部資料６点）。

第１類（口縁部資料６点）

〔口縁部の文様単位〕横位渦巻文が認められ、渦が時計回り（R）と逆時計回り（L）のものとがある。文様表現技法は隆沈文Ａである。

〔口縁部の文様構成〕渦文が横方向に展開するが、文様構成単位は不明である。

〔胴部の文様単位・文様構成〕口縁～胴部に連続する資料がないため不明である。

〔器形〕小破片が多いため不明である。

ⅠA1b類：口唇部に文様帯をもち、口縁下部～胴部に文様帯をもつもの（復元資料１点、口縁部資料47点）。

ⅠA1b類は文様単位および文様表現技法によって次の２類に細分される。

第1類（口縁部資料９点）

〔口唇部の文様単位〕溝状文が認められる。両端の完結する資料がないので、先端および末端

の状態は不明である。文様表現技法は隆沈文Ｂ１である。
〔口唇部の文様構成〕溝状文が横方向に展開するが、文様構成単位は不明である。
〔口縁～胴部の文様単位〕隅の角張った変形楕円文Ｉ・Ⅳが認められる。文様表現技法は隆沈文Ｂ１・調整沈線文である。
〔口縁～胴部の文様構成〕文様の展開が不規則で、方向および文様構成単位は明らかでない。
〔地文〕地文の判明する資料は５点である。その内訳はＲＬ縄文が１点、ＬＲ縄文が２点、ＬＲＬ縄文が２点である。
〔器形〕小破片が多く器形の判明するものは少ない。その中で口縁部形態ＩＢ１・口縁部の傾きⅡＡ２を示す資料が３点ある。

第２類（復元資料１点、口縁部資料38点）
〔口唇部の文様単位〕横位渦巻文Ｉもしくは溝状文が認められる。末端が不明瞭のため両者の識別は困難である。文様表現技法は隆沈文Ｃである。
〔口唇部の文様構成〕横位渦巻文Ｉもしくは溝状文が横方向に展開する。文様構成の判明する資料は第67表－６で文様単位が文様構成単位Ａと等しく、文様はＡ＋Ａ＋Ａ＋Ａの４単位で構成される。
〔口縁～胴部の文様単位〕変形した横位渦巻楕円文Ｉ・「∩」文Ｉ・縦位楕円文Ｉ・縦位渦巻楕円文Ｉが認められる。文様表現技法は隆沈文Ｃと調整沈線文である。
〔口縁～胴部の文様構成〕文様構成の判明する資料は第67表－６である。口唇部突起下部の口縁～胴上部文様帯に縦位楕円文がみられ、その広い間隙を埋める形で横位渦巻文Ｉが配されている。文様はＡ＋Ａ＋Ａ＋Ａの４単位で構成される。胴下部文様帯は縦位渦巻楕円文Ｉと「∩」文Ｉによって文様構成単位Ａが形成され、文様はＡ＋Ａ＋Ａ＋Ａの４単位で構成される。
〔地文〕地文の判明する資料は22点ある。最も多いのはＬＲ縄文で11点、その他にはＲＬ縄文６点、ＲＬＲ縄文５点である。
〔器形〕第67表－６の器形は口縁部形態ＩＢ1Ｃ・口縁部の傾きⅡA_2・胴部の傾きⅢB_3・底部形態ⅣA_1である。その他の資料は小破片のため不明である。

ⅠA2a類：幅の広い口縁部文様帯をもち、頚部が無文のもの（復元資料３点：口縁部資料42点）。
ＩA2a類は文様単位および文様表現技法によって次の５類に細分される。

第１類（口縁部資料10点）
〔口縁部の文様単位〕横位渦巻楕円文Ｉ型（抱き込み型）が認められる。文様表現技法は隆沈文Ａである。
〔口縁部の文様構成〕横位渦巻楕円文が横方向に展開するが、文様構成単位は不明である。

〔胴部の文様単位・文様構成〕口縁部～胴部に連続する資料がないため不明である。
〔地文〕地文の判明する資料は４点あり、すべてＬＲ縄文である。
〔器形〕いずれも小破片で器形の判明する資料はない。

第2類（口縁部資料５点）

〔口縁部の文様単位〕横位渦巻楕円文Ⅰ型（抱き込み型）が認められる。文様表現技法は隆沈文Ｂ１である。
〔口縁部の文様構成〕横位渦巻楕円文が横方向に展開するが文様構成単位は不明である。
〔胴部の文様単位・文様構成単位〕口縁～胴部に連続する資料がないため不明である。
〔地文〕地文の判明する資料は３点ある。その内訳はＬ・ＬＲ・ＲＬ縄文がそれぞれ１点ずつである。
〔器形〕いずれも小破片で器形の判明する資料はない。

第3類（口縁部資料２点）

〔口縁部の文様単位〕横位渦巻楕円文Ⅱ型（背負い型）が認められる。文様表現技法は調整沈線文である。
〔口縁部の文様構成〕横位渦巻楕円文が横方向に展開するが、文様構成単位は不明である。
〔胴部の文様単位・文様構成〕口縁～胴部に連続する資料がないため不明である。
〔地文〕地文の明確な資料は１点だけで、ＬＲ縄文が施文されている。
〔器形〕いずれも小破片で器形の判明する資料はない。

第4類（復元資料１点、口縁部資料11点）

〔口縁部の文様単位〕横位渦巻楕円文Ⅲ型（抱き込み型）が認められる。文様表現技法は隆沈文Ｂ１である。
〔口縁部の文様構成〕横位渦巻楕円文が横方向に展開する。文様構成の推定できる資料は第67表－８である。横位渦巻楕円文Ⅰ＋横位楕円文Ⅰ＋横位渦巻楕円文Ⅲによって文様構成単位Ａが形成され、Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａの４単位で文様が構成される。
〔胴部の文様単位・文様構成〕口縁～胴部に連続する資料がないため不明である。
〔地文〕地文の判明する資料は５点あり、ＲＬ縄文１点、ＬＲ縄文４点である。
〔器形〕第67表－８の器形は口縁部形態ⅠA1a・口縁部の傾きⅡＡ３である。この他の破片資料では器形を明確に判定できるものがない。

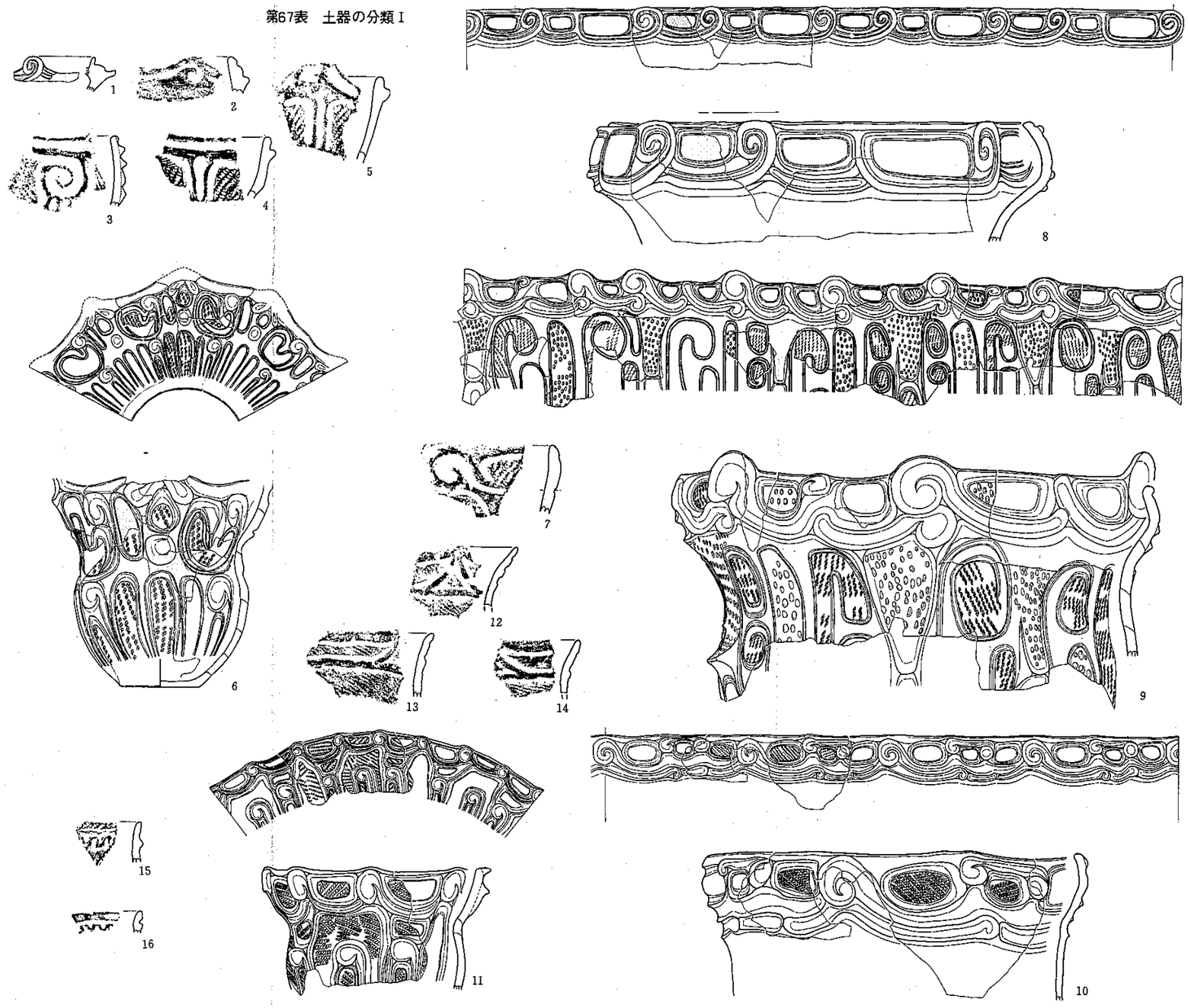
第5類（復元資料２点、破片資料14点）

〔口縁部の文様単位〕横位渦巻楕円文Ⅳ型（背負い型）が認められる。このⅣ型の中には多少変形気味のものも含まれている。すなわち、渦巻文がかなり簡略化されているものや、背負わされている楕円文の一部が変化し、横位渦巻楕円文Ⅱ型・Ⅴ型と共通した形を示すもの等であ

土器の分類Ⅰ

	文様帯	部位	文様単位	文様表現技法	分類
(IA)口縁部に文様帯をもつもの	IA1a	口唇部	横位渦巻文Ⅰ	隆沈文A	第1類 (IA1a1) 図1～2
		胴部	不明	隆沈文A	
	IA1b	口唇部	溝状文	隆沈文B_1	第1類 (IA1b1) 図3～5
		口縁～胴部	変形楕円文Ⅰ・Ⅳ	隆沈文B_1 調整沈線文	
		口唇部	横位渦巻文Ⅰ 溝状文	隆沈文C	第2類 (IA1b2) 図6
		口縁～胴部	横位渦巻楕円文Ⅰ 縦位渦巻楕円文Ⅰ 「∩」文Ⅰ・縦位楕円文Ⅰ	隆沈文C 調整沈線文	
	IA2a	口縁部	横位渦巻楕円文Ⅰ	隆沈文A	第1類 (IA2a1)
		胴部	不明	隆沈文A	
		口縁部	横位渦巻楕円文Ⅰ	隆沈文B_1	第2類 (IA2a2)
		胴部	不明	不明	
		口縁部	横位渦巻楕円文Ⅱ	調整沈線文	第3類 (IA2a3) 図7
		胴部	不明	不明	
		口縁部	横位渦巻楕円文Ⅲ	隆沈文B_1	第4類 (IA2a4) 図8
		胴部	不明	不明	
		口縁部	横位渦巻楕円文Ⅳ	隆沈文C	第5類 (IA2a5) 図9～10
		胴部	縦位渦巻文Ⅲ 鍵形文 「∩」文Ⅰ 「ヒレ」状文	調整沈線文 隆沈文C	
	IA2b	口縁部	横位渦巻楕円文Ⅳ	隆沈文C	第1類 (IA2b1) 図11
		胴部	縦位渦巻楕円文Ⅰ 縦位渦巻楕円文Ⅱ 「∩」文Ⅰ 横位楕円文	隆沈文C	
	IA2c	口縁部	台形文	隆沈文B_2	第1類 (IA2c1) 図12～14
		胴部	縄文	縄文	
	IA3a	口縁部	鋸歯状文	交互刺突文	第1類 (IA3a1) 図15～16
		胴部	不明	不明	

第67表　土器の分類Ⅰ



る。これらの文様表現法は隆沈文Ｃである。

〔口縁部の文様構成〕横位渦巻楕円文が横方向に展開する。文様構成の判明する資料は第67表～９・10である。第67表－10は文様単位＝変形した横位渦巻楕円文Ⅳ＝文様構成単位Ａで、Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａの４単位で文様が構成される。第67表－９は方向の異なる２つの横位渦巻楕円文Ⅳもしくは横位渦巻楕円文Ⅳによって文様構成単位Ａが形成され、Ａ＋Ｂ＋Á＋Á＋Á＋Ａ＋Áの７単位で構成される。

〔胴部の文様単位〕胴部の文様が判明する資料は第67表－９である。縦位渦巻文Ⅲ・鍵形文・「∩」文Ⅰ・縦位楕円文Ⅰ（以上調整沈線文）・上下に連結した「ヒレ」状文（隆沈文Ｃ）が認められる。

〔胴部の文様構成〕縦方向に展開する文様単位が「ヒレ」状文の両側に数対組みあわさり、１文様構成単位Ａを形成する。この文様構成単位Ａは各部分で変形しながらA1＋A2＋A3＋A4＋A5＋A6の６単位で文様を構成している。したがって、当資料は口縁部と胴部で文様構成が同一でなく、幾分の「ずれ」を生じている。

〔地文〕地文の判明する資料は９点である。その内訳はＲＬ縄文･ＬＲ縄文･ＲＬＲ縄文がそれぞれ３点ずつである。

〔器形〕第67表－10の器形は口縁部形態ⅠA1a･口縁部の傾きⅡＡ３である。第67表－９の器形は口縁部形態ⅠA3a、口縁部の傾きⅡＡ３である。この他の資料は破片のため不明である。

ⅠA2b類：幅の広い口縁部文様帯をもち、その直下から胴部文様帯が展開するもの（復元資料１点、口縁部資料１点）。

第1類（復元資料１点、口縁部資料１点）

文様構成・器形等の全体的特徴を知り得る資料は第67表－11のみである。

〔口縁部の文様単位〕横位渦巻楕円文Ⅳ型（背負い型）が認められる。文様表現技法は隆沈文Ｃである。

〔口縁部の文様構成〕横位渦巻楕円文が横方向に展開し、文様単位＝横位渦巻楕円文Ⅳ＝文様構成単位Ａで、文様構成はＡ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａの８単位と推定される。

〔胴部の文様単位〕横位楕円文・縦位渦巻楕円文Ⅰ・Ⅱ・「∩」文Ⅰ（いずれも隆沈文Ｃ）が認められる。

〔胴部の文様構成〕縦位渦巻楕円文が縦方向に展開する。縦位渦巻楕円文Ⅱ＋横位構円文＋縦位渦巻楕円文Ⅰ＋「∩」文Ⅰで文様構成単位Ａが形成され、文様構成はＡ＋Ａ＋½Ａと推定される。

〔地文〕地文の判明するのは第67表－11で、ＬＲ縄文が施文されている。

〔器形〕第67表－11の器形は口縁部形態ⅠA3a･口縁部の傾きⅡＡ２･胴部の傾きⅢＢ１である。

ⅠA2c類：幅の広い口縁部文様帯をもち、その下部に縄文が施文されるもの（口縁部資料５点）。

第1類（口縁部資料５点）

〔口縁部の文様単位〕台形文が認められる。文様表現技法は隆沈文Ｂ２である。

〔口縁部の文様構成〕台形文が横方向に展開するが、文様構成単位は不明である。

〔胴部の文様〕縄文が施文されている。

〔地文〕地文の判明する資料は２点で、ＬＲ縄文が施文されている。

〔器形〕小破片のため明確に器形を判定できるものはないが、口縁部はすべて外傾気味（ⅡＥ）である。

ⅠA3a類：幅の狭い口縁部文様帯をもつもの（口縁部資料３点）。

第1類（口縁部資料３点）

〔口縁部の文様単位〕鋸歯状文が認められる。文様表現技法は交互刺突文である。

〔口縁部の文様構成〕鋸歯状の交互刺突文が横方向に展開するが、正確な文様構成単位は不明である。

〔胴部の文様単位・文様構成〕口縁～胴部に連続する資料がないため不明である。

〔地文〕地文の判明する資料はない。

〔器形〕小破片のため器形の判明するものはないが、口縁部はすべて外傾気味（ⅡＥ）である。

ⅠB類：口唇部直下から胴下部まで連続した文様帯をもつもの。

第1a1類（復元資料１点、口縁部資料138点）

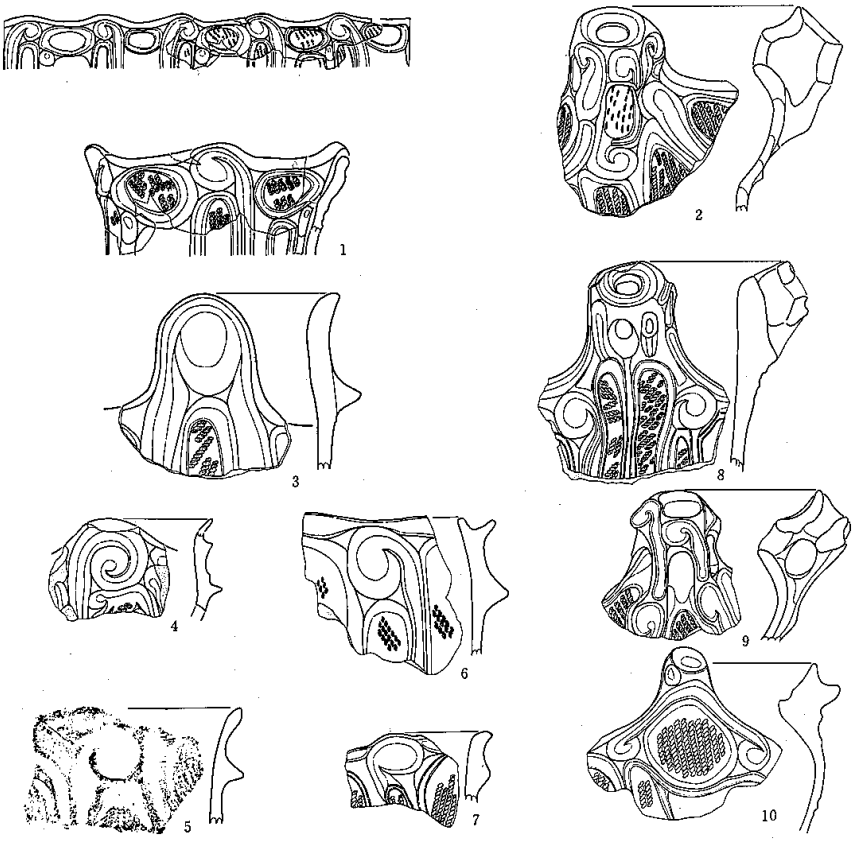
〔口縁～胴部の文様単位〕円文・横位渦巻文Ⅰ・横位楕円文・横位渦巻楕円文Ⅴ・縦位渦巻文Ⅲ・縦位渦巻楕円文Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳが認められる。これらの文様表現技法はいずれも隆沈文Ｃである。

〔口縁～胴部の文様構成〕文様構成単位やそれらの構成を明確に把握し得る資料はない。しかし、比較的大型の破片資料によって次のような傾向は理解することができる。１、原則として文様は口縁部から胴下部へ縦方向の展開を示す。２、したがって、主要な文様単位は縦位渦巻文や縦位渦巻楕円文である。３、口縁部付近には主要な文様単位の間隙を埋める横位渦巻文・横位渦巻楕円文等が配置されている。

〔地文〕口縁部資料138点の中で地文の判明する資料は50点と非常に少ない。その理由は、口縁部に、地文が施文されていない資料が比較的多く含まれていることにあると思われる。地文の内訳はＬ縄文１点、ＲＬ縄文23点、ＬＲ縄文15点、ＲＬＲ縄文８点、ＬＲＬ縄文１点、その他

第68表　土器の分類II

文様帯	部位	文様単位	文様表現技法	分類
(IB1a) 口唇部直下から胴下部まで連続した文様帯をもつもの	口縁 〜 胴 下 部	円文 横位渦巻文 横位楕円文 横位渦巻楕円文 V 縦位渦巻文 III 縦位渦巻楕円文 I 縦位渦巻楕円文 II 縦位渦巻楕円文 III 縦位渦巻楕円文 IV	隆沈文 C	IB1a1



の縄文１点、その他の地文１点である。
〔器形〕口縁部資料138点の中で、その器形的特徴が明らかなものは60点である。その内訳は口縁部形態ＩA1aで口縁部の傾きⅡAのもの12点、口縁部形態ＩA3aで口縁部の傾きⅡAのもの33点、口縁部形態ＩＢ１で口縁部の傾きⅡAのもの13点、口縁部形態ＩＢ１で口縁部の傾きⅡＦのもの１点、口縁部形態ＩＢ２のもの１点である。このようにＩB1a類の器形は口縁部が内彎し波状突起をもつ平口縁か大波状口縁のものが非常に多い。

ＩC類：口縁上半部が無文で、その下部に文様帯をもつもの。

文様帯の構成によってＩC1a類・ＩC2a類に分類される。

ＩC1a類：口縁下部から胴下部まで連続した文様帯をもつもの。ＩC1a類は胴部の文様単位および文様表現技法によって次の８類に分類される（復元資料14点、口縁部資料296点）。

第１類（復元資料１点、口縁部資料３点）
〔胴部の文様単位〕「∩」文Ｉが認められ、文様表現技法は無調整沈線文である。
〔胴部の文様構成〕文様構成の推定できる資料は第69表－１である。「∩」文Ｉが縦方向に展開する。文様単位である「∩」文Ｉが文様構成単位A形成しＡ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａの６単位で文様が構成される。
〔地文〕地文の判明したものは復元資料１点、口縁部資料１点である。両者ともＲＬ縄文が施文されている。
〔注意すべき技法・工程〕第１類の「∩」文Ｉは地文施文後、無調整沈線文によって文様表現が行なわれ、その後ミガキ等の調整が加えられていない。このため磨消縄文は認められない。この点、磨消縄文をもつ第２～８類と基本的な相違を示している。また、第１類の無調整沈線文は幅が１㎜未満で非常に細く、部分的に途切れる場合がある。このような沈線文は他に認められない。
〔器形〕第69表－１の器形は口縁部形態ＩA1a、口縁部の傾きⅡD、胴部の傾きⅢＢ１、底部形態ⅣＡ１である。その他の資料は小破片のため不明である。
〔成形技法〕第69表－１の成形技法は次の通りである。口縁～胴下部は素地土積み上げ技法Ａによって成形されている。積み上げ幅は約２㎝である。胴部下端と底部の接合方法はＢである。

第２類（復元資料１点、口縁部資料27点）
〔胴部の文様単位〕縦位渦巻文Ｉ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵの存在を基本的な特徴とする。この他、縦位楕円文Ｉ・「∩」文Ｉ等の文様単位のいずれかが伴う。これらの文様表現技法は調整沈線文である。
〔胴部の文様構成〕縦位渦巻文・縦位楕円文・「∩」文等が縦方向に展開する。文様構成の判

明する資料は、第69表－２のみである。縦位渦巻文Ⅴ・縦位楕円文Ⅰ・「∩」文Ⅰによって文様構成単位Ａが形成され、Ａ＋Ａ＋Ａの３単位で文様が構成される。

〔地文〕地文の判明する資料は復元資料１点、口縁部資料18点、合計19点である。その内訳はＬ縄文１点、ＲＬ縄文６点、ＬＲ縄文８点、ＲＬＲ縄文２点、その他の地文２点で、ＲＬ縄文およびＬＲ縄文が多い。

〔磨消縄文〕すべて磨消縄文が認められ、その中で明確な磨消縄文Ｂは５点である。

〔器形〕第69表－２の器形は口縁部形態ⅠＢ1b、口縁部の傾きⅡＦ、胴部の傾きⅢＢ１、底部形態ⅣＤである。その他、口縁部資料は小破片のため不明である。

〔成形技法〕第69表－２は技法Ａによって成形されている。積み上げ幅は約１㎝の部分が多い。

第3類（復元資料１点、口縁部資料９点）

縦位楕円文Ⅱの存在を基本的な特徴とする。この他「∩」文が伴う。これらの文様表現技法は調整沈線文である。

〔胴部の文様構成〕縦位楕円文Ⅱ・「∩」文が縦方向に展開する。文様構成の推定できる資料は第69表－10のみである。縦位楕円文Ⅱおよび「∩」文が文様構成単位Ａを形成し、Ａ＋Ａ＋Ａ＋……＋Ａの16単位で文様が構成される。

〔地文〕地文の判明する資料は復元資料１点、口縁部資料７点である。その内訳はＲＬ縄文５点、ＬＲ縄文３点、ＲＬＲ縄文１点である。

〔磨消縄文〕すべて磨消縄文が認められ、その中で明確な磨消縄文Ｂは３点である。

〔器形〕第69表－10の器形は口縁部形態ⅠＡ1a、口縁部の傾きⅡＡ３である。その他の資料は小破片のため不明である。

〔成形技法〕第69表－10は技法Ａによって成形されている。積み上げ幅は約２㎝である。

第4類（復元資料４点、口縁部資料２点）

〔胴部の文様単位〕複合しない円文・縦位楕円文Ⅰ・「∩」文Ⅰが認められる。文様表現技法は調整沈線文である。

〔胴部の文様構成〕円文・縦位楕円文・「∩」文が縦方向に展開する。文様構成の判明する資料は第69表－３・４・５・６の４例である。第69表－３は文様単位である「∩」文Ⅰが文様構成単位Ａを形成し、Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａの５単位で文様を構成している。第69表－４は「∩」文が部分的に重なっているが、円文＋「∩」文Ⅰを中心としてその両側に「∩」文Ⅰが配置されて、文様構成単位Ａを形成している。これらがＡ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａの６単位で文様を構成している。第69表－５・６の文様構成単位Ａは第69表－４と同じであるが、Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａの７単位で文様が構成されている。

〔地文〕地文の判明する資料は復元資料４点、口縁部資料９点である。その内訳は無文１点、

Ｒ縄文１点、ＲＬ縄文３点、ＬＲ縄文７点、ＲＬＲ縄文１点である。
〔磨消縄文〕すべての資料に磨消縄文が認められる。その中で明確な磨消縄文Ｂは９点である。
〔器形〕第69表－３・４・５・６はいずれも口縁部形態ⅠA1aである。この中で第69表－４が口縁部の傾きⅡＡ１、胴部の傾きⅢＡ１、第69表－３が口縁部の傾きⅡＥ、胴部の傾きⅢＡ１底部形態ⅣＤ？、第69表－５が口縁部の傾きⅡＦ、胴部の傾きⅢＢ１、底部形態ⅣＡ１、第69表－５が口縁部の傾きⅡＦ、胴部の傾きⅢＢ３と、極めて多様である。この他の資料は小破片のため不明である。
〔成形技法〕復元資料はすべて技法Ａによって成形され、その積み上げ幅は２～４㎝である。第69表－６の底部は技法Ｂによって接合されている。

第５類（復元資料３点、口縁部資料５点）

〔胴部の文様単位〕複合した円文・縦位楕円文・「∩」文（「∩」文Ⅱ）が認められる。文様表現技法は調整沈線文である。
〔胴部の文様構成〕複合した円文・縦位楕円文･「∩」文が縦方向に展開する。文様構成が推定できる資料は第69表－７・８・９である。第69表－８・９は縦位楕円文と「∩」文によって文様構成単位が形成されている。第69表－９は複合した「∩」文と、複合しない「∩」文の組み合せにより文様構成単位Ａが形成され、Ａ＋Ａの２単位で〔Ａ＝４ａ（ａ：「∩」文Ⅱ）＋á（á：「∩」文Ⅰ）〕の文様が構成されると推定される。第69表－８はａ（ａ：「∩」文Ⅱ）＋á（á：「∩」文Ⅰ）＋ａで文様構成単位Ａが形成され、Ａ＋Ａ＋Ａの３単位で文様が構成される。
第69表－７は文様単位「∩」文Ⅱが文様構成単位Ａを形成し、Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａの10単位で文様が構成される。
〔地文〕地文の判明する資料は復元資料３点、口縁部資料４点である。その内訳は、ＲＬ縄文３点、ＬＲ縄文４点である。
〔磨消縄文〕すべての資料に磨消縄文が認められ、その中で明確な磨消縄文Ｂは５点である。
〔器形〕第69表－８の器形は口縁部形態ⅠA1ａ、口縁部の傾きⅡＢ２、胴部の傾きⅢＢ３である。
第69表－７・９の器形は口縁部形態ⅠA1ａ、口縁部の傾きⅡＦ、胴部の傾きⅢＢ３である。この他の資料は小破片のため不明である。
〔成形技法〕復元資料はすべて技法Ａで成形され、積み上げ幅はいずれも３㎝程度である。

第６類（口縁部資料２点）

〔胴部の文様単位〕「∩」文Ⅱと文様表現技法隆沈文Ｃが結合したものである。
〔胴部の文様構成〕「∩」文Ⅱが縦方向に展開するが、文様構成単位の判明する資料はない。

〔その他の特徴〕地文・器形・成形技法等については、保存が良くないため不明である。

第7類（口縁部資料３点）

〔胴部の文様単位〕鍵形文の存在を基本的な特徴とするものである。この他、縦位渦巻文・縦位楕円文・「∩」文が伴う場合がある。文様表現技法は調整沈線文である。

〔胴部の文様構成〕鍵形文およびその他の文様単位が縦方向に展開するが、文様構成単位の判明する資料はない。

〔地文〕地文はＲＬ縄文２点、ＬＲ縄文１点である。

〔磨消縄文〕すべて磨消縄文が認められ、２点は明確な磨消縄文Ｂである。

〔その他の特徴〕器形・成形技法については小破片のため不明なものが多い。

第8類（口縁部資料６点）

〔胴部の文様単位〕胴上部に横位楕円文か認められることを基本的な特徴とする。胴下部に「∩」文Ｉが認められる。文様表現技法は調整沈線文である。

〔胴部の文様構成〕基本的には横位楕円文・「∩」文が縦方向に展開する。しかし感覚的には胴上部の横位楕円文が胴下部の「∩」文から分離し、横方向に展開する錯覚を起こさせるものもある。文様構成単位の判明する資料はない。

〔地文〕地文の判明する資料は３点で、すべてＬＲ縄文である。

〔磨消縄文〕すべて磨消縄文が認められる。明確な磨消縄文Ｂは１点である。

〔その他の特徴〕器形・成形技法等については小破片のため不明である。

第9類（口縁部資料１点）

〔胴部の文様単位〕「∩」文Ｉの連結した変形「∩」文Ⅱが認められることを基本的な特徴とする。文様表現技法は調整沈線文である。

〔その他の特徴〕地文はＬＲ縄文で、磨消縄文が認められる。その他、器形・成形技法等については不明である。

ⅠC2a類：口縁下部から胴上半部に文様帯をもち、口縁上半部と胴下部が無文のもの。胴上半部と下部との境は大波状の横位調整沈線文によって区画されている（口縁部資料１点）。

第1類（口縁部資料１点）

本類の資料は第69表－13の１点である。

〔口縁下部～胴部の文様単位〕円文・変形楕円文Ⅱが認められる。文様表現技法は調整沈線文である。

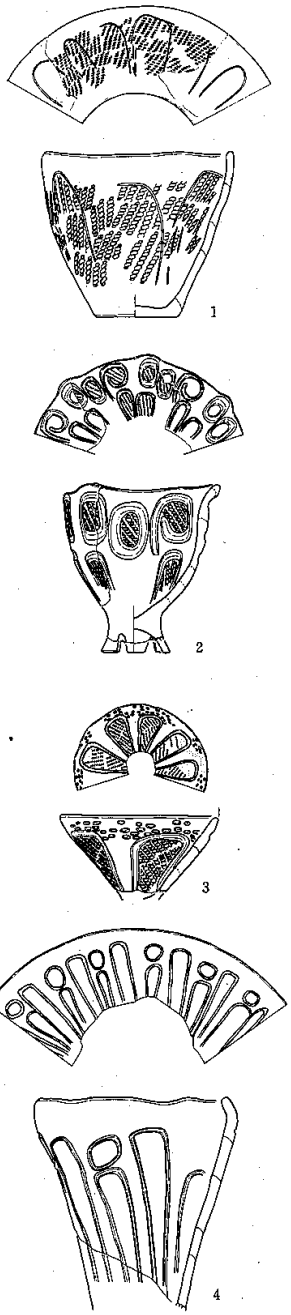
〔地文〕ＬＲ縄文が認められる。

〔磨消縄文〕磨消縄文Ｂが認められる。

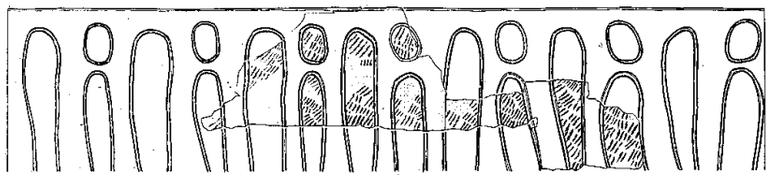
〔器形〕器形は口縁部形態ＩＡ１、口縁部の傾きⅡＡ１、胴部の傾きⅢＢ１である。

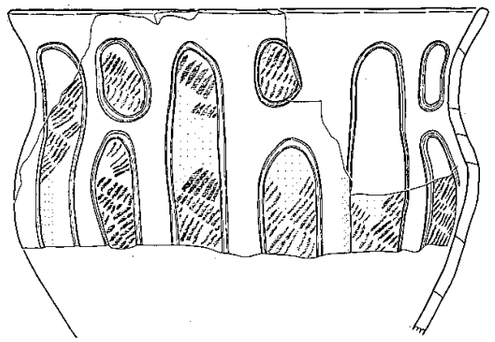
土器の分類 III

	文様帯	部位	文様単位	文様表現技法	分類
(IC) 口縁上半部が無文でその下部に文様帯をもつもの	(IC1a)	口縁下部～胴下部	「∩」文 I	無調整沈線文	IC1a1 図1
			縦位渦巻文I・II・III・V・VI 縦位楕円文 I 「∩」文	調整沈線文 調整沈線文 調整沈線文 (磨消縄文B)	IC1a2 図2
			縦位楕円文 II 「∩」文	調整沈線文 調整沈線文 (磨消縄文B)	IC1a3 図10
			縦位楕円文 I 円文 「∩」文 I	調整沈線文 調整沈線文 調整沈線文 (磨消縄文B)	IC1a4 図3・4・5・6
			円文 縦位楕円文 「∩」文 II	調整沈線文 調整沈線文 調整沈線文 (磨消縄文B)	IC1a5 図7・8・9
			「∩」文 II	隆沈文C	IC1a6 図11
			変形「∩」文 I (雛形文)	調整沈線文 (磨消縄文B)	IC1a7
			横位楕円文 「∩」文 I	調整沈線文 調整沈線文 (磨消縄文B)	IC1a8 図12
			変形「∩」文II(H字形文)	調整沈線文 (磨消縄文B)	IC1a9
	(IC2a)	口縁下部～胴上半部	円文 変形楕円文	調整沈線文 調整沈線文 (磨消縄文B)	IC2a1 図13

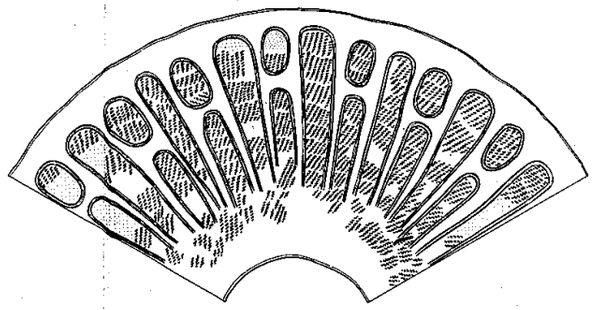


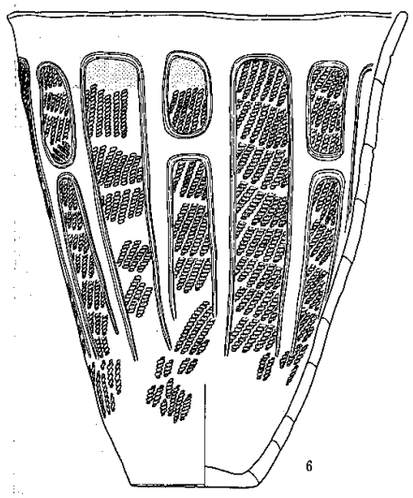
第69表　土器の分類Ⅲ



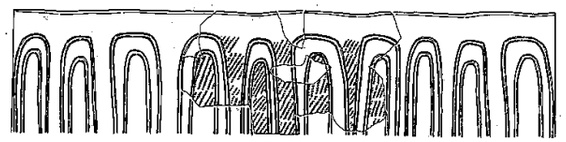


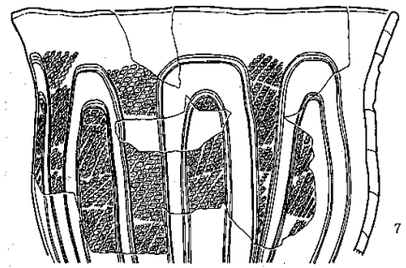
5



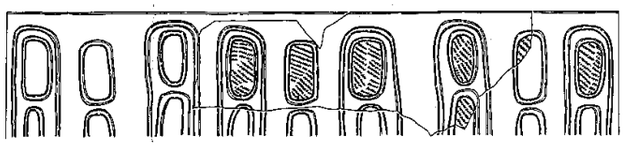


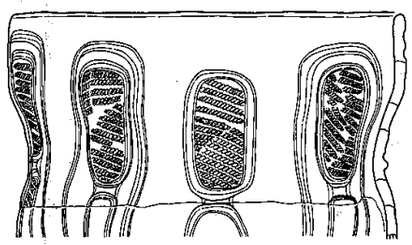
6



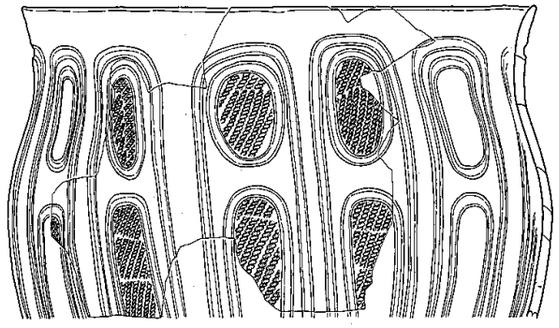


7

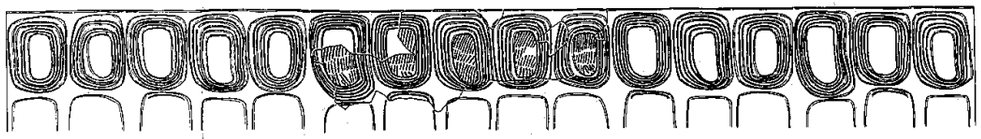


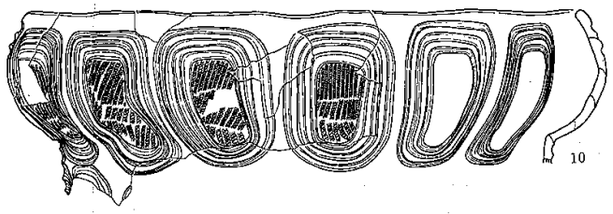


8



9

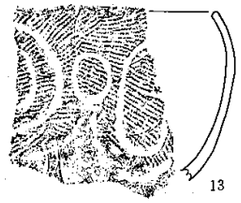




10

11

12



13

〔その他の特徴〕成形技法その他については不明である。

ＩD1a類：口縁部が無文で、胴部に文様帯をもつもの。

口縁部と胴部の境は大波状の横位線文によって区画されている。これらは胴部の文様単位によって次の５類に分類される。

第1類（口縁部資料35点）

〔胴部の文様単位〕縦位渦巻文Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵの存在を基本的な特徴とする。この他、縦位楕円文Ⅰ・「∩」文・鍵形文等の文様単位のいずれかが伴う。これらの文様表現技法は調整沈線文である。

〔胴部の文様構成〕縦位渦巻文・縦位楕円文・「∩」文・鍵形文等が縦方向に展開する。文様構成単位の判明する資料はない。

〔地文〕地文の判明する資料は18点である。その内訳はＬ縄文３点ＲＬ縄文６点、ＬＲ縄文５点、ＲＬＲ縄文４点である。

〔磨消縄文〕すべて磨消縄文が認められ、その中で明確な磨消縄文Ｂは11点である。

〔その他の特徴〕口縁部資料は小破片のため器形・成形技法等について不明である。

第2類（復元資料２点）

〔胴部の文様単位〕円文・縦位楕円文・「∩」文・鍵形文等が認められる。文様表現技法は調整沈線文である。

〔胴部の文様構成〕円文・縦位楕円文・「∩」文・鍵形文等が縦方向に展開する。文様構成の推定できるものは資料第70表－４である。円文と「∩」文によって文様構成単位Ａが形成されＡ＋Ａ＋Ａの３単位で文様が構成される。

〔地文〕地文の判明する復元資料は２点である。両者ともＬＲ縄文が施文されている。

〔磨消縄文〕すべて磨消縄文が認められる。２点の復元資料は明確な磨消縄文Ｂである。

〔器形〕第70表－３・４の器形はいずれも口縁部形態ＩＢ1b、口縁部の傾きⅡＦである。

〔成形技法〕第70表－４は技法Ａを基本とし、一部技法Ｂによって成形されている。積みあげ幅は約２㎝である。

〔注意すべき事柄〕この第２類は極めて量的に少ない。その理由は第２類として同定できる資料は完形に近いものに限られ、破片資料の多くが、ＩD1a類として分類されるからである。そのことはＩD1ａ類として分類されたものが163点の数量を占めることからも明らかである。

第3類（復元資料１点）

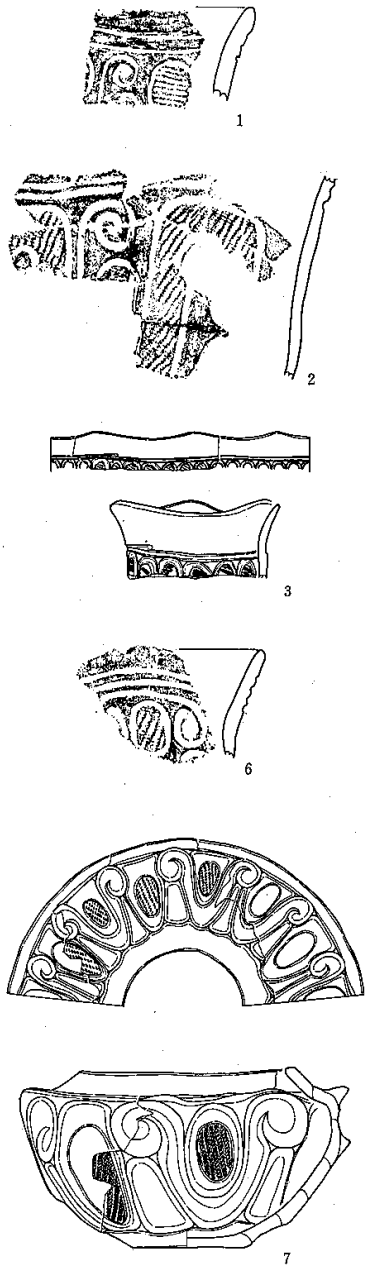
第３類として分類された資料は第70表－５の１点だけである。

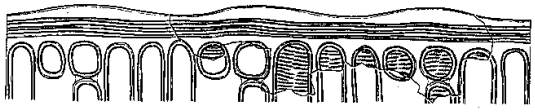
〔口縁部と胴部の区画〕口縁部と胴部は鍔状の調整隆起線文（高さ約２㎝）によって区画されている。この鍔状隆起線は４ケ所で肥厚し、高さも３㎝程度になる。肥厚部と肥厚部にはさま

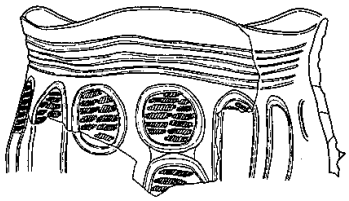
第70表　土器の分類Ⅳ

土器の分類Ⅳ

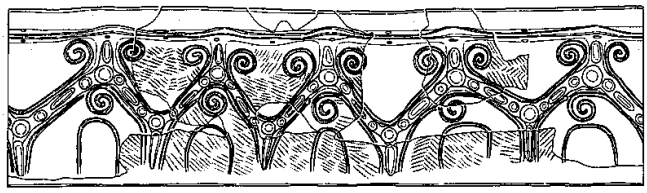
	部位	文様単位	文様表現技法	分類
(ID1a) 口縁部が無文で胴部に文様帯をもつもの	胴部	横位線文 縦位渦巻文Ⅰ 縦位渦巻文Ⅱ 縦位渦巻文Ⅲ 縦位渦巻文Ⅴ 縦位渦巻文Ⅳ 縦位楕円文Ⅰ 「∩」文　Ⅰ	調整沈線文 調整沈線文 調整沈線文 調整沈線文 調整沈線文 調整沈線文 調整沈線文 調整沈線文 (磨消縄文B)	ID1a1 (1～2)
		横位線文 縦位楕円文Ⅰ 「∩」文　Ⅰ	調整沈線文 調整沈線文 調整沈線文 (磨消縄文B)	ID1a2 (3～4)
		横位線文 横位渦巻文Ⅱ 縦位渦巻文Ⅲ 縦位渦巻文Ⅳ 縦位渦巻文Ⅴ 「∩」文　Ⅰ 連結凹文	調整隆起線文(鋸) 調整沈線文 調整沈線文 調整沈線文 調整沈線文 調整沈線文 調整隆起線文	ID1a3 (5)
		横位線文 横位渦巻楕円文Ⅴ	調整沈線文 隆沈文C	ID1a4 (6)
		横位線文 横位渦巻楕円文Ⅵ	調整沈線文 隆沈文C	ID1a5 (7～8)

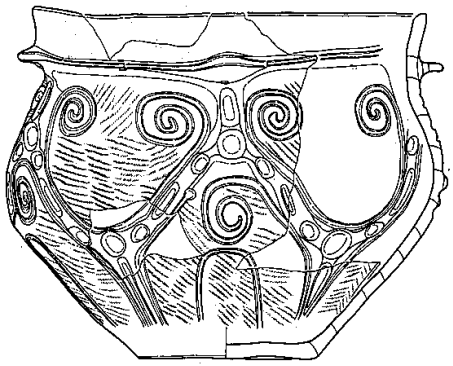




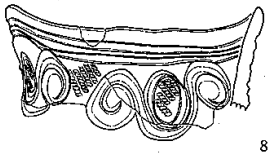


4





5



8

れた部分の鍔のつけ根には計８個の貫通孔がある。
〔胴部の文様単位〕調整隆起連結凹文・横位渦巻文Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・「∩」文Ⅰ（調整沈線文）が認められる。
〔胴部の文様構成〕斜め方向に文互に連結する左右対称な連結凹文によって文様区画が行なわれ、上部の区画には横位渦巻文Ⅱ、下部の区画には横位渦巻文Ⅲ・Ⅳ・「∩」文Ⅰが配置され、文様構成単位Ａが形成されている。文様はＡ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａの５単位で構成されている。
〔地文〕Ｌ縄文が施文されている。部分的に羽状縄文を形成している。
〔器形〕器形は口縁部形態ⅠＡ1a、口縁部の傾きⅡＤ1・胴部の傾きⅢＢ3・底部形態ⅣＡ1である。
〔成形技法〕技法Ａによって成形され、積みあげ幅は２～３㎝である。胴部と底部の接合技法はＢである。

第4類（口縁部資料４点）
〔胴位の文様単位〕横位渦巻楕円文Ⅴ（抱き込み型）が認められる。文様表現技法は調整沈線文・隆沈文Ｃである。
〔胴部の文様構成〕文様構成の判明する資料はない。
〔地文〕地文の判明する資料は２点で、ＲＬ縄文・ＬＲ縄文各１点である。
〔磨消縄文〕すべて磨消縄文が認められ、明確な磨消縄文Ｂは２点である。
〔その他の特徴〕破片資料のため器形や成形技法等を明確に示すものはない。

第5類（復元資料２点・口縁部資料２点）
〔胴部の文様単位〕横位渦巻楕円文Ⅵ（背負い型）が認められる。文様表現技法は隆沈文Ｃおよび調整沈線文である。
〔胴部の文様構成〕文様構成の判明する資料は、第70表－７・８である。両者ともに文様単位＝横位渦巻楕円文Ⅵ＝文様構成単位Ａで、第70表－８はＡ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａの５単位で文様が構成されている。第70表－７は口縁部と胴部の区画が受け部状の段をなしている点特異である。文様構成はＡ＋Ａ＋Ａ＋Ａ＋Ａ´＝３Ａ＋Ａ´で、Ａ´はＡの一部が省略されたものである。
〔器形〕第70表－８は口縁部形態ⅠＢ1a・口縁部の傾きⅡＦである。第70表－７は口縁部形態ⅠＡ1a・口縁部の傾きⅡＢ・胴部の傾きⅢＢ3・底部形態ⅣＡ1である。この他の資料は破片のため不明である。
〔成形技法〕成形技法の判明する資料は、第70表－７である。口縁から胴部は技法Ａによって成形され、その積み上げ幅は約２㎝ある。底部は技法Ｂによって接合されている。
〔地文〕地文の判明する資料は４点で、その内訳はＬ縄文１点、ＲＬ縄文１点、ＬＲ縄文１点、ＬＲＬ縄文１点である。

〔磨消縄文〕磨消縄文か否か明らかでないが、すべてに磨消縄文Ｂと同一工程の技法が認められる。

Ⅱ：地文のみのもの

これらはＡ：口唇部直下から胴下部まで地文の施文されるものＢ：口縁部が無文で胴部に地文が施文されるものにわかれる。

ⅡＡ類：口唇部直下から胴下部まで地文の施文されるもの。

第1類（復元資料１点・口縁部資料19点）

〔地文〕地文の判明する資料は15点である。その内訳はＬ縄文１点・ＲＬ縄文４点・ＬＲ縄文９点、ＲＬＲ縄文１点でＬＲ縄文が最も多い。

〔器形〕第71表－１の器形は口縁部形態ⅠA1a・口縁部の傾きⅡA1・胴部の傾きⅢA1である。その他の資料は小破片のため不明である。

〔成形技法〕第71表－１は技法Ａによって成形されており、積み上げ幅は約２㎝ある。

ⅡＢ類：口縁部が無文で胴部に地文が施文されるもの。

第1類（復元資料３点・口縁部資料215点）

〔口縁部と胴部の区画〕無文部分と地文部分の境界。

〔地文〕地文の判明する資料は174点である。その内訳はＬ縄文７点、ＲＬ縄文42点、ＬＲ縄文97点、ＲＬＲ縄文14点、その他の縄文１点、その他の地文13点でＬＲ縄文が非常に多い。

〔器形〕復元資料の器形はすべて口縁部形態ⅠA1aである。その中で、第71表－２は口縁部の傾きⅡＦ、胴部の傾きⅢＢ２？、第71表－３は口縁部の傾きⅡＦ・胴部の傾きⅢB3？、第71表－３は口縁部の傾きⅡＡ１、胴部の傾きⅢＡ１である。このように、復元資料における器形は極めて多様である。その他の資料は小破片のため不明である。

〔成形技法〕復元資料の口縁部から胴部はすべて技法Ａによって成形されている。その積み上げ幅は約２㎝である。底部の接合方法が判明する資料は第71表－４で、接合技法Ｂが認められる。

第2類（口縁部資料６点）

〔口縁部と胴部の区画〕頚部にめぐる沈線文。

〔地文〕地文はＲＬ縄文１点・ＬＲ縄文３点・不明縄文１点・その他の地文１点である。

〔その他の特徴〕器形・成形技法等については破片のため不明である。

第3類（口縁部資料９点）

〔口縁部と胴部の区画〕頚部にめぐる調整隆起線文。

〔地文〕地文の判明する資料は６点で、その内訳はＲＬ縄文３点・ＬＲ縄文１点・ＲＬＲ縄文１点・櫛目状沈線文１点である。

〔その他の特徴〕器形・成形技法等については破片のため不明である。

第4類（復元資料１点・口縁部資料13点）

〔口縁部と胴部の区画〕頚部にめぐる段。

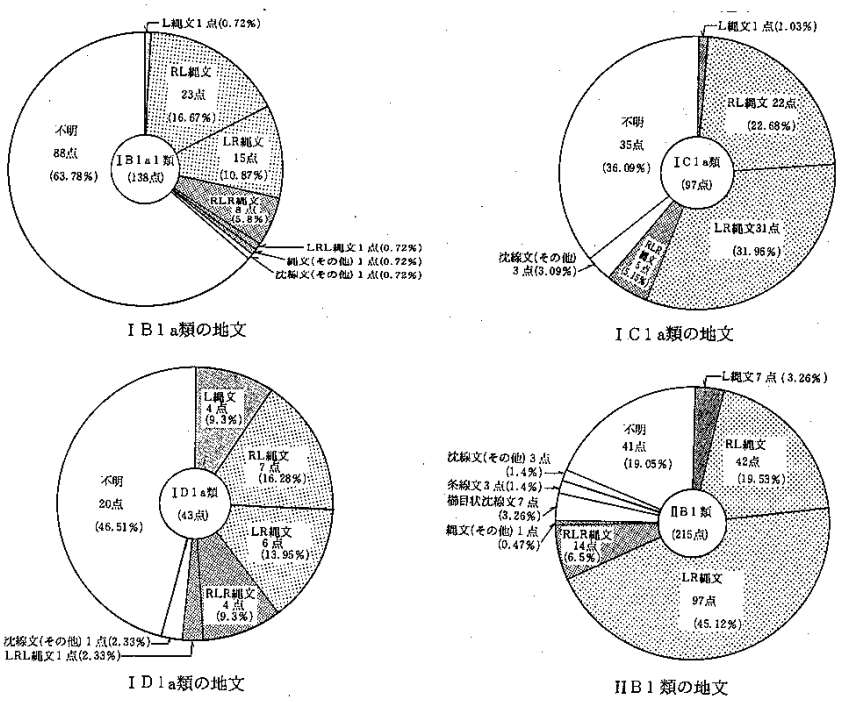
〔地文〕地文の判明する資料は10点である。その内訳は、ＲＬ縄文２点･ＬＲ縄文７点・櫛目状沈線文１点である。

〔器形〕第71表－５は口縁部形態・ＩＡ２ａ口縁部の傾きⅡＡ１・胴部の傾きⅢＢ１である。その他の資料は破片のため不明である。

〔成形技法〕第71表－５は技法Ａで成形され、その積み上げ幅は約２㎝である。

参考資料

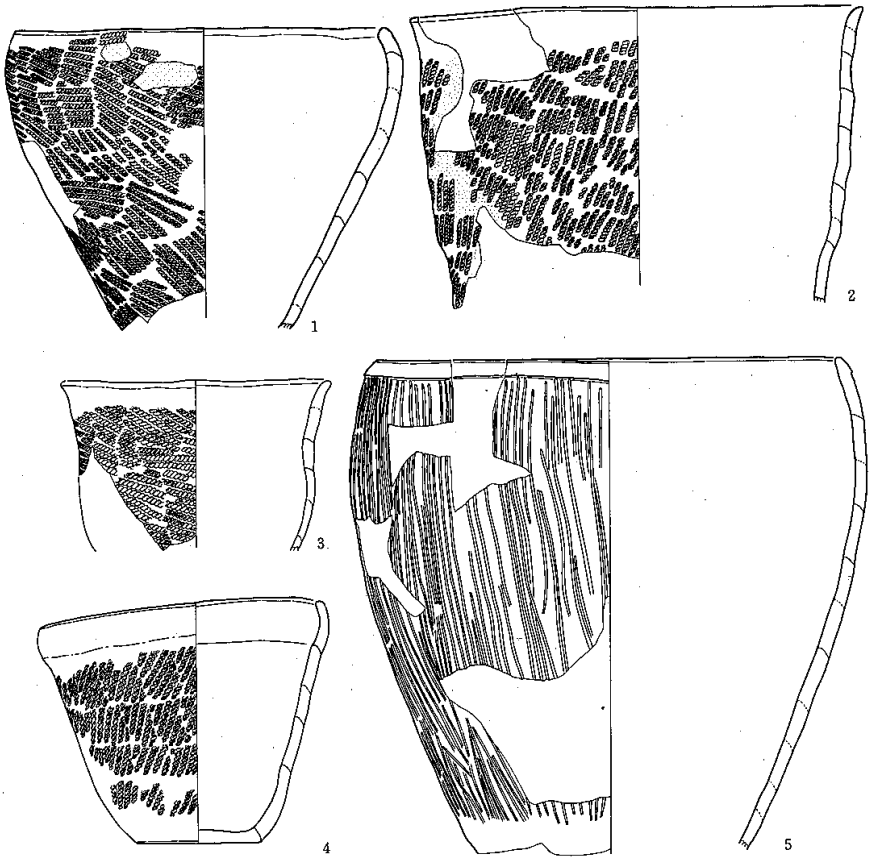
第290図に示したのは、ＩＢ1a類・ＩＣ1ａ類・ⅡD1a類・ⅡＢ１類の地文である。ＩＣ1ａ類は９類に、ＩＤ1a類は５類に細分されるが、細分された姿の地文は既に述べたので、それらをまとめて示したものである。



第290図　参考資料（ＩＢ１a・ＩＣ１a・ＩＤ１a・ⅡＢ１類の地文）

第71表　土器の分類V

		口縁部と胴部の境界	分類
(II) 地文のみのもの	(A) 口唇部直下から胴下部まで地文の施文されるもの		IIA 1
	(B) 口縁部が無文で胴部に地文が施文されるもの	(1) 頸部が地文の境界	IIB 1
		(2) 頸部に横位沈線文のめぐるもの	IIB 2
		(3) 頸部に調整隆起線文のめぐるもの	IIB 3
		(4) 頸部に段のあるもの	IIB 4
		(5) 頸部に連鎖状隆起線文のあるもの	IIB 5



土器の分類に関連する問題点

１．文様単位の土器分類上の位置 ―――特に胴部資料について

文様帯の構成とその中に含まれる文様単位については「土器の分類」の中で既に述べた。しかし、これらはすべて文様帯の分類を前提としたものであったから、文様単位のみを示す胴部資料はその中に包括することができなかった。そこで、ここでは文様単位のみを示す胴部資料の（1）形態および技術的特徴、(2）総合分類との関連について検討を加えたい。

文様単位の形態および技術的特徴

文様単位は合計52種類あり、その基本的特徴については既に述べた。ここでは、胴部に認められる文様単位の地文および特徴的な技法について説明したい。

文様の認められる胴部資料は4,694点である。この中で文様単位および文様表現技法が比較的明確なものは36種類3,576点で全体の76％である。これら3,576点の胴部資料に認められる文様単位は次の通りである。縦位楕円文Ｉor「∩」文Ｉ（調整沈線文）：948点（27％)、縦位楕円文Ⅱor「∩」文Ⅱ（調整沈線文）：182点（５％)、縦位楕円文or「∩」文（調整沈線文）：1,468点（41％）・縦位渦巻楕円文（隆沈文Ｃ）:159点（４％)、連結渦巻文（調整沈線文）62点（２％)、調整沈線文による各種文様単位：396点（11％)、隆沈文Ａによる各種文様単位：５点（0.1％)、隆沈文Ｂによる各種文様単位：37点（1.0％)、隆沈文Ｃによる各種文様単位：244点（７％)、各種隆沈文による各種文様単位：75点（２％)。

文様単位（文様表現技法）**と地文**

胴部資料にみられる文様単位（文様表現技法）と地文の関係を検討すると、次のようになる。

（1）縦位楕円文と「∩」文の地文

縦位楕円文Ｉor「∩」文Ｉ（948点）：Ｒ縄文４点（0.4％)、Ｌ縄文27点（2.9％)、ＲＬ縄文284点（30.0％)、ＬＲ縄文432点（45.5％)、ＲＬＲ縄文88点（9.3％)、ＬＲＬ縄文６点（0.6％）Ｒ撚糸文１点（0.1％)、無調整沈線文12点（1.3％)、不明94点（9.9％)。

縦位楕円文Ⅱor「∩」文Ⅱ（182点）：Ｌ縄文２点（1.1％)、ＲＬ縄文52点（28.6％)、ＬＲ縄文72点（39.5％)、ＲＬＲ縄文13点（7.1％)、ＬＲＬ縄文４点（2.2％)、不明39点（21.4％)。

このように、「縦位楕円文Ｉor『∩』文Ｉ」と「縦位楕円文Ⅱor『∩』文Ⅱ」の地文は細部において僅かなちがいは認められるが、ＬＲ縄文・ＲＬ縄文・ＲＬＲ縄文の存在とその組成比という点で共通する。そのことは「縦位楕円文Ｉor『∩』文Ｉ」・「縦位楕円文Ⅱor『∩』文Ⅱ」・「縦位楕円文or『∩』文」を一括した場合でも同様である。

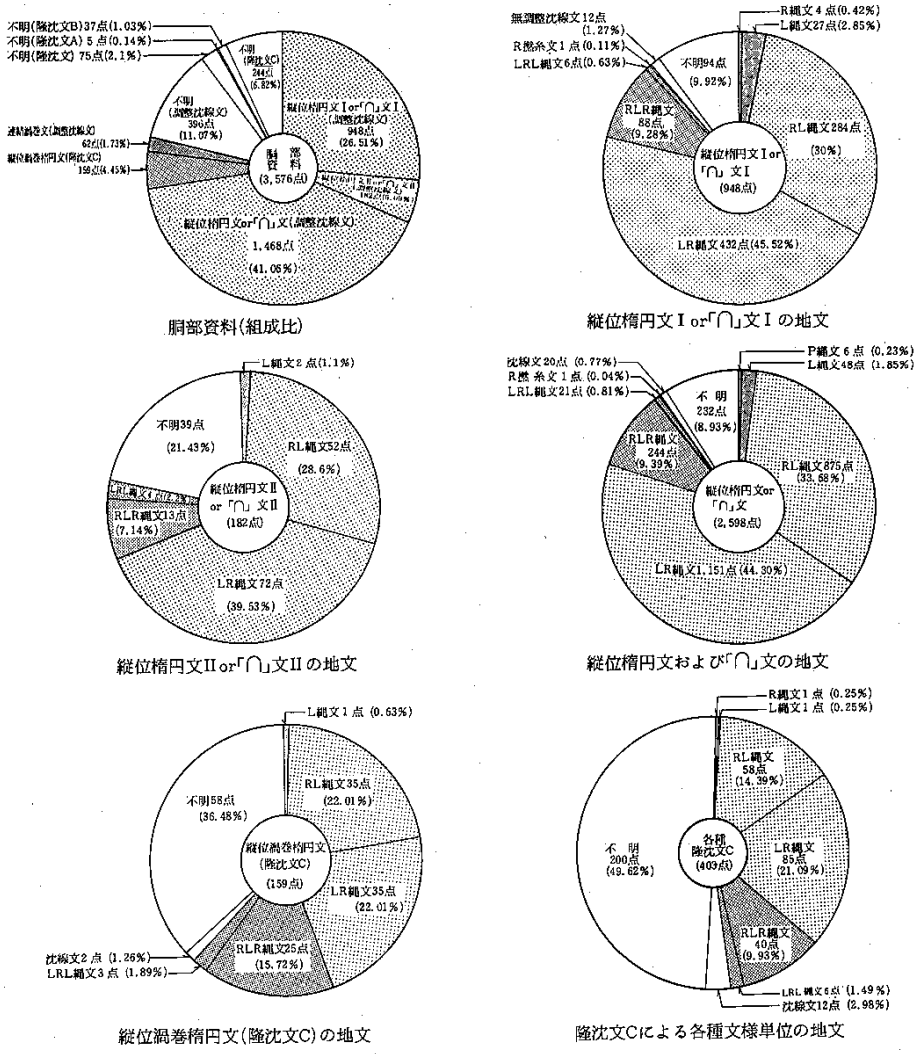
縦位楕円文および「∩」文全体（2,598点）：Ｒ縄文５点（0.2％）・Ｌ縄文48点(1.9％)ＲＬ縄文875点（32.7％)、ＬＲ縄文1,151点（44.3％)、ＲＬＲ縄文244点（9.4％)、ＬＲＬ縄文21点

(0.8%)、R撚糸文１点（0.04%)、沈線文20点（0.8%)、不明232点（8.9%)。

（2）隆沈文Cによる各種文様単位の地文

縦位渦巻楕円文（159点）：L縄文１点（0.6%)、RL縄文35点（22.0%)、LR縄文35点(22.0%)、RLR縄文25点（15.7%)、LRL縄文３点（1.9%)、沈線文２点(1.3%)、不明58点(36.5%)。

縦位渦巻楕円文および隆沈文Cによる各種文様単位（403点）：R縄文１点(0.25%)、L縄文１点（0.25%)、RL縄文58点（14.4%)、LR縄文85点（21.1%)、RLR縄文40点（9.9%)、



第291図　胴部資料組成比と各種文様単位の地文

ＬＲＬ縄文６点（1.5%）、沈線文12点（3.0%）、地文不明200点（49.6%）。

縦位渦巻楕円文（隆沈文Ｃ）とそれに各種隆沈文Ｃを加えたものでは量的なちがいは僅かに認められるが、ＲＬ縄文・ＬＲ縄文・ＲＬＲ縄文の存在とその基本的な組成比は共通する。すなわち、ＲＬ縄文・ＬＲ縄文・ＲＬＲ縄文に大きな量的差はない。

（3）隆沈文Bによる各種文様単位の地文

各種隆沈文B（37点）：ＲＬ縄文５点（16.2%）・ＬＲ縄文14点(37.8%)、ＲＬＲ縄文３点(8.1%)、地文不明14点(37.8%)。

全体の数量が少ないので、その信頼度は十分なものとは言えない。しかし、ＬＲ縄文が多いという傾向を読みとることができる。

（4）連結渦巻文の地文

連結渦巻文(62点)：ＲＬ縄文11点(17.7%)、ＬＲ縄文40点(64.5%)のＲＬＲ縄文２点(3.2%)、不明９点(14.5%)。

連結渦巻文の地文はＬＲ縄文が60%以上であり非常に多い。この点は、特筆されねばならない。その他は、ＲＬ縄文の17.7%を除くと極少量に過ぎない。

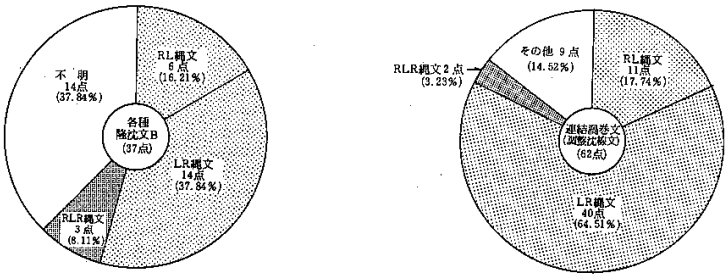
（5）文様単位（文様表現技法）と地文の関係

以上、文様単位（文様表現技法）と地文の関係をまとめると、ＲＬ縄文・ＬＲ縄文・ＲＬＲ縄文によって大部分が占められる。その量的関係は次のようになる。

１．縦位楕円文および「∩」文の地文は、ＬＲ・ＲＬ縄文が多く、ＲＬＲ縄文は比較的少ない。

２．縦位渦巻楕円文および隆沈文Ｃによる各種文様単位の地文は、ＲＬ縄文・ＬＲ縄文・ＲＬＲ縄文の構成比に大きな差がない。

３．隆沈文Ｂによる各種文様単位の地文は、ＬＲ縄文が多い傾向にある。ＲＬ縄文・ＲＬＲ縄文はあまり多くない。



隆沈文Bによる各種文様単位　　連結渦巻文(調整沈線文)の地文

第292図　各種文様単位の地文Ⅱ

４．連結渦巻文の地文はＬＲ縄文が非常に多い。ＲＬ縄文はあまり多くない。また、ＲＬＲ縄文はごく僅かである。

文様単位と磨消縄文

磨消縄文の認められる文様単位は楕円文および「∩」文と連結渦巻文である。

磨消縄文Ａが確認されたのは、連結渦巻文および隆沈文Ａによる各種文様単位で、67点の資料中48点である。これらの資料中には磨消縄文Ｂは認められない。

磨消縄文Ｂが確認されたのは、縦位楕円文および「∩」文で2,598点の資料中1,279点である。これらの資料中には磨消縄文Ａは認められない。

このように「連結渦巻文および隆沈文Ａによる各種文様単位」と「縦位楕円文および『∩』文」では、磨消縄文のあり方がまったく異なる。

２．文様単位と総合分類との関連

文様単位（文様表現技法）と土器の総合分類との関係を示したのが第72表である。この中には、文様単位が単一の総合分類におさまるもの（21種）と２種以上の総合分類にまたがるもの（14種）がある。

このように、約半数は単一の総合分類におさまる。また、２種以上の総合分類にまたがるものをさらに検討すると、Ⅰ：ＩＡ類内部で共通する文様単位、Ⅱ：ＩＡ類とＩＢ類に共通する文様単位、Ⅲ：ＩＢ類とＩＤ類に共通する文様単位、Ⅳ：ＩＣ類とＩＤ類に共通する文様単位Ⅴ：ＩＡ・ＩＣ・ＩＤ類に共通する文様単位にわかれる。

Ⅰ：ＩＡ類内部で共通する文様単位

○連結渦巻文（調整沈線文）：ＩA1a1類・ＩA2a1類

Ⅱ：ＩＡ類とＩＢ類に共通する文様単位

○縦位渦巻文Ⅲ（調整隆起線文）：ＩA2a5類・ＩB1a1類

○縦位渦巻楕円文IおよびⅡ（隆沈文C）：ＩA2b1類・ＩB1a1類

Ⅲ：ＩＢ類とＩＤ類に共通する文様単位

○横位渦巻楕円文Ⅴ（隆沈文C）：ＩB1a1類・ＩD1a4類

Ⅳ：ＩＣ類とＩＤ類に共通する文様単位

○縦位渦巻文Ⅰ～Ⅲ・Ⅳ（調整沈線文）：ＩC1a2類・ＩD1a1類

○円文Ⅲ（凹文）：ＩＣ１a2類・ＩD1a1類

○縦位楕円文Ⅰ（調整沈線文）：ＩC1a2類・ＩC1a4類・ＩC1a5類・ＩC2a1類・ＩD1a1類・ＩD1a2類

○「∩」文Ⅰ（調整沈線文）：ＩC1a２～５・７～８類・ＩD1a1・2・3類。

Ⅴ：ＩＡ類・ＩＣ類・ＩＤ類に共通する文様単位

○縦位渦巻文Ⅴ（調整沈線文）：ⅠA2a5類・ⅠC1a2類・ⅠD1a1類

○変形「∩」文Ⅰ（調整沈線文）：ⅠA2a5類・ⅠC1a7類・ⅠD1a1類

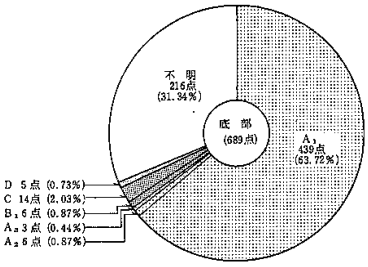
したがって、以上のあり方は異なる文様帯構成の中で、それぞれの共通した文様単位をもつものが存在することを示している。

第72表　文様単位と総合分類との関連

文様単位	文様表現技法	分類	文様単位	文様表現技法	分類
横位渦巻文Ⅱ	調整沈線文	ⅠD1a3	縦位楕円文Ⅰ	調整沈線文	ⅠC1a2・4・5 ⅠC2a1・ⅠD1a1・2
〃 Ⅲ	〃	〃	〃 Ⅱ	〃	ⅠC1a3
〃 Ⅳ	〃	〃	「∩」文Ⅰ	〃	ⅠC1a2(ⅠC1a3)(ⅠC1a7) ⅠC1a4(ⅠC1a5)(ⅠC1a8) ⅠD1a1・2・3類
縦位渦巻文Ⅰ	〃	ⅠC1a2 ⅠD1a1	〃 Ⅰ	隆沈文C	ⅠC1a6
〃 Ⅱ	〃	ⅠC1a2 ⅠD1a1	〃 Ⅱ	調整沈線文	ⅠC1a5
〃 Ⅲ	〃	ⅠC1a2 ⅠD1a1	変形「∩」文Ⅰ （鍵形文）	〃	ⅠA2a5・ⅠC1a7 （ⅠD1a1）
〃 Ⅲ	調整隆起線文C	ⅠA2a5 ⅠB1a1	横位楕円文	〃	ⅠC1a8
〃 Ⅳ	〃	ⅠB1a1	〃	隆沈文C	ⅠB1a1
〃 Ⅴ	調整沈線文	ⅠA2a5 ⅠC1a2 ⅠD1a1	変形楕円文Ⅰ	〃	ⅠA1b2
〃 Ⅵ	〃	ⅠC1a2 ⅠD1a1	〃 Ⅰ	調整沈線文	〃
横位渦巻楕円文Ⅴ	〃	ⅠD1a4	〃 Ⅰ	隆沈文B	ⅠA1b1
〃 Ⅴ	隆沈文C	ⅠB1a1 ⅠD1a4	〃 Ⅱ	調整沈線文	ⅠC2a1
〃 Ⅵ	〃	ⅠD1a5	〃 Ⅲ	〃	ⅠA1b2
縦位渦巻楕円文Ⅰ	〃	ⅠA2b1 ⅠB1a1	〃 Ⅲ	隆沈文C	〃
〃 Ⅱ	〃	ⅠA2b1 ⅠB1a1	〃 Ⅳ	〃 B	ⅠA1b1
円文Ⅰ	調整沈線文	※ 縦位楕円文に同じ	連結凹文	調整隆起線文B ＋凹文	ⅠD1a3
〃 Ⅱ	隆沈文	ⅠB1a1	連結渦巻文	調整沈線文	（ⅠA1a1） （ⅠA2a1）
〃 Ⅲ	凹文	ⅠC1a2 ⅠD1a1	「ヒレ」状文	調整隆起線文C	ⅠA2a5

3．底部形態とその成形技法について

底部資料は689点認められる。これらの資料については底部形態を検討するとA_1類（平底）439点（63.7%）、A_2類（平網代底）6点（0.9%）、A_3類（平木葉底）3点（0.4%）、B類（丸底）6点（0.9%）、C類（揚底）14点（2.0%）、D類（台付き）5点（0.7%）、不明のもの216点（31.3%）である。



第293図　底部形態

このように、底部形態の判明する資料の大部分を平底（A_1）のものが占め、その他の形態は非常に少ない。

次に、底部と胴部の接合技法を検討してみたい。底部形態と接合技法の判明する資料は、120点である。その大部分は底部形態A_1のもの（111点）によって占められる。底部形態A_1の接合技法はA：21点（18%）、B：70点（63%）、C：20点（18%）である。この結果は底部形態A_1の土器が多くの場合技法Bによって胴部と接合されたことを示している。

他の底部形態の接合技法については全体量が少ないので信頼度が低く、相互関係を指摘するのは困難である。

土器の出土状況

観察と分類の行なわれた土器群が、どのような関係にあるか出土状況によって検討してみたい。遺物が量的にも層位的にも安定した状態で出土しているのは、住居跡群と遺物包含層である。そこで、各住居跡と遺物包含層における土器の出土状況を観察し、相互に認められる共伴関係と組成比について検討を加えたい。

１．住居跡における土器の出土状況

住居跡からの土器の出土状況は、年代的限定という立場から、次のようにまとめることができる。

Ⅰ：住居跡の床面および細部から出土する土器群。

Ⅱ：住居跡の堆積土から出土する土器群。

Ⅰとした土器群は、(1)住居構築時に埋設されたり、埋まった土器、(2)住居使用時に埋設されたり、置かれた土器、(3)住居廃絶後、住居跡が埋まり始める前の段階で置かれたり、廃棄されたりした土器などである。Ⅱとした土器群は住居跡が埋まり始めてから、埋まりきるまでの間に廃棄されたり、流入した土器などである。したがって、ⅠとⅡの出土状況は土器が埋設・廃棄・流入した時期によって年代的に限定されたものである。また、Ⅰ・Ⅱの出土状況は住居跡出土土器を時間的に細分したものであるが、これらを一括して、住居構築から使用・廃絶を経て、住居跡が埋まりきるまでの時間幅を設定することも可能である。ここでは、両者の考えを併用しながら検討をすすめたい。

上深沢遺跡の住居跡群から出土した土器で、一定の時期における共伴関係とその組成比を検討できるのは第１住居跡・第８住居跡・第12住居跡・第20住居跡である。その他の住居跡は共伴関係やその組成比を検討する上で、資料の出土が十分でない。

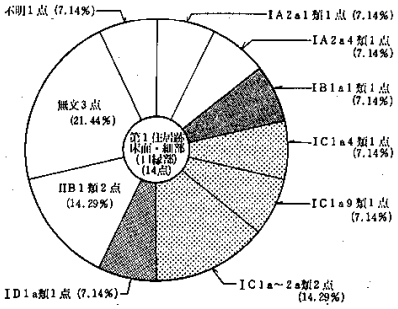
第１住居跡における土器の出土状況

第１住居跡からは復元資料６点・口縁部資料59点・文様の判明する胴部資料163点・地文のみ

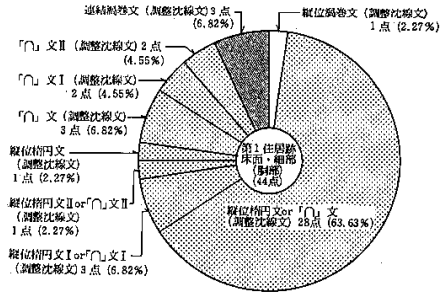
の胴部資料494点・底部資料21点が出土している。これらの中で文様の判明する資料249点について検討を加えると次のようになる。

床面および細部：復元資料が５点あり、その内訳はＩC1a3類１点・ＩC1a5類１点・縦位楕円文Ｉor「∩」文Ｉ２点・ⅡＢ１類１点である。口縁部資料は14点あり、ＩC1a類に含まれるものが比較的多い（４点：29%）。その他は無文のもの（３点）を除くとＩA2a1類（１点）・ＩA2a4類（１点）・ＩB1a1類（１点）・ⅡＢ１類（２点）・ＩD1a類（１点）・不明（１点）等が僅かに出土しているに過ぎない。胴部資料は44点あり、「縦位楕円文or『∩』文」（調整沈線文）に含まれるものが非常に多く（40点）、全体の91%を占める。この中で縦位楕円文・「∩」文のＩとⅡの量的差については、資料が不十分なため不明である。これらの他に縦位渦巻文（調整沈線文：１点）・連結渦巻文（調整沈線文：３点）等が僅かに出土している。

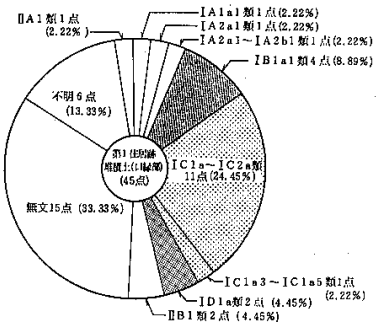
堆積土：復元資料は、ＩC1a２類が１点出土している。口縁部資料は45点あり、無文のもの（15点：33%）を除くと、ＩC類（11点：24%）が最も多い。その他はＩB1a1類（４点：９%）ＩD1a類（２点：４%）・ＩA1a1類（１点：２%）・ＩA2a1類（１点：２%）・ＩA2a1～ＩA2b1類（１点：２%）・ⅡＡ１類（１点：２%）・ⅡＢ１類（２点：４%）不明（６点：13%）等が僅かに認められる。胴部資料は119点あり、「縦位楕円文or『∩』文」（調整沈線文）に含まれ



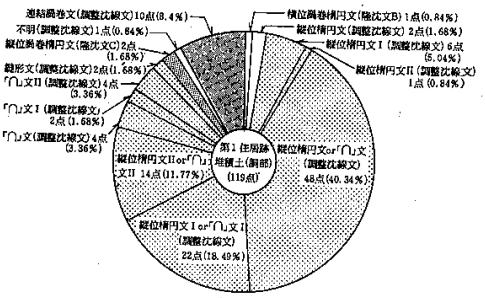
床面・細部出土の口縁部資料



床面・細部出土の胴部資料



堆積土出土の口縁部資料



堆積土出土の胴部資料

第294図　第Ｉ住居跡における土器の出土状況Ｉ

るものが非常に多く（103点）、全体の87％を占める。この中で縦位楕円文・「∩」文のＩとⅡでは、前者（22点：18％）が後者（14点：12％）よりも幾分多い。これらの他に縦位渦巻楕円文（隆沈文Ｃ：２点）・横位渦巻楕円文（隆沈文Ｂ：１点）・連結渦巻文（調整沈線文：10点）等が出土している。

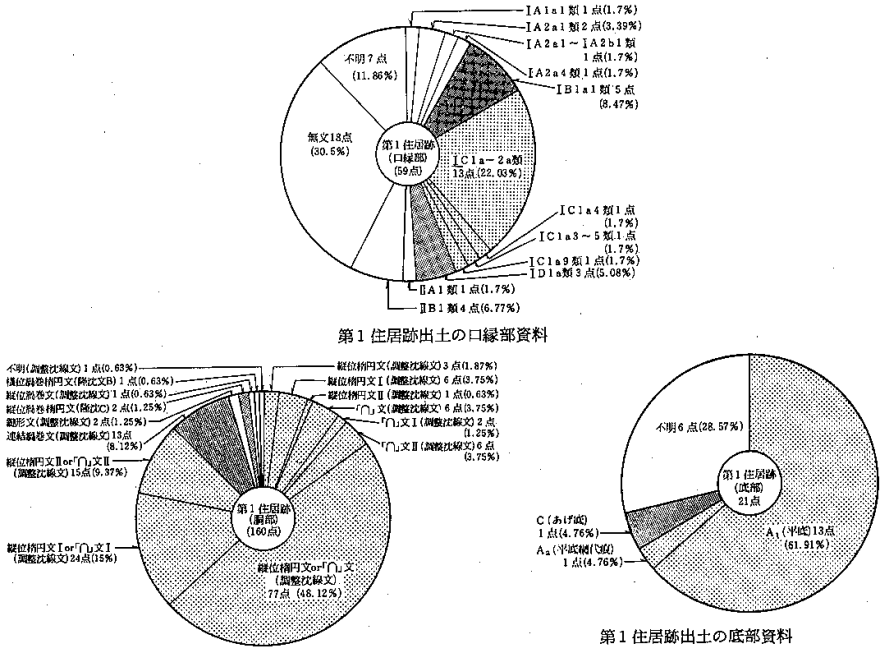
以上堆積土と・床面・細部における土器の出土状況を検討したが、両者における組成の差位は認められなかった。したがって、ここでは本住居跡出土土器を一括してまとめておきたい。

１．復元資料で分類可能なものはすべてＩＣ1a類に含まれる。口縁部を欠くものはすべて「縦位楕円文or『∩』文」Ｉ（調整沈線文）である。

２．口縁部資料は無文のものを除くとＩＣ類に含まれるものが最も多く、全体の27％を占める。この他に比較的多いのは、ＩＢ1a類（８％）・ＩＤ1a類（５％）・ⅡＢ１類（７％）である。

３．胴部資料は「縦位楕円文or『∩』文」（調整沈線文）に含まれるものが非常に多く全体の88％を占める。この中で縦位楕円文・「∩」文のＩとⅡでは前者（15％）が後者（９％）よりも幾分多い。この他に比較的多いのは連結渦巻文（調整沈線文）で８％認められる。

４．底部資料は平底で無文のものが多く、全体の62％を占める。この他、平底で網代痕をもつもの（4.8％）揚げ底のもの（4.8％）が僅かにある。



第295図　第Ｉ住居跡における土器の出土状況Ⅱ

第20住居跡における土器の出土状況

第20住居跡からは復元資料２点・口縁部資料61点・文様の判明する胴部資料80点・地文のみの胴部資料317点・底部資料30点が出土している。

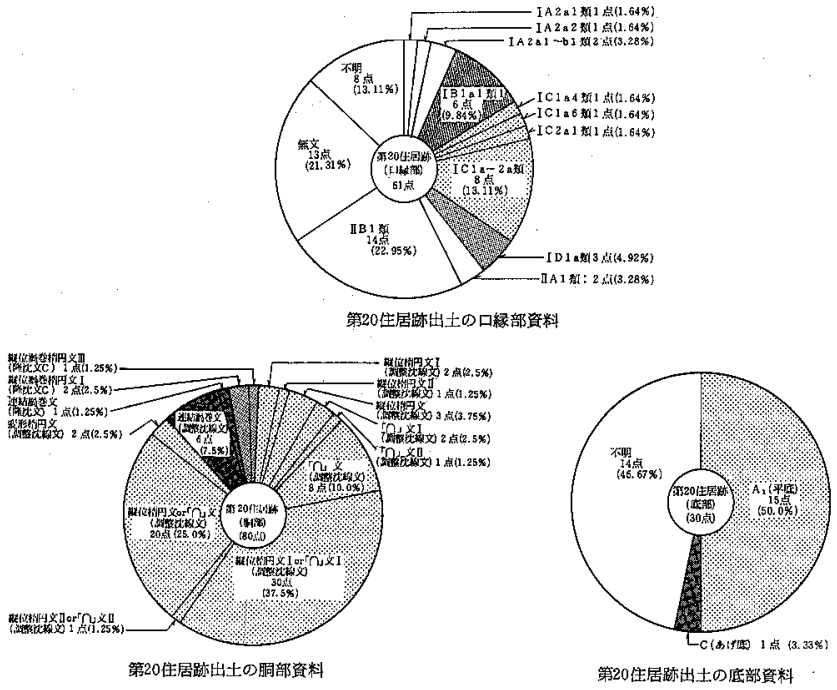
これらの中で文様の判明する資料173点について検討を加えると次のようになる。

１．復元資料はＩA2a5類（１点）、ⅡＢ１類（１点）である。

２．口縁部資料でⅡＢ１類（14点：23%）と無文のもの（13点：21%）を除くとＩＣ類が多く全体の16%（11点）である。次に比較的多いのはＩB1ａ1類（６点：10%）・ＩD1ａ類（３点：５%）である。この他は、ＩA2a1類（１点：２%）、ＩA2a2類（１点：２%）、ＩA2a1〜b1類（２点：３%）・ⅡA_1類（２点：３%）・不明（８点：13%）等が僅かに出土している。

３．胴部資料は「縦位楕円文or『∩』文」（調整沈線文）に含まれるものが非常に多く、全体の88%（70点）を占める。この中で縦位楕円文・「∩」文のＩとⅡでは前者（43%）が圧倒的に多く、後者（４%）は僅かである。

４．底部資料は平底で無文のものが非常に多く、全体の50%（15点）を占める。この他揚げ底のものが３%（１点）認められる。



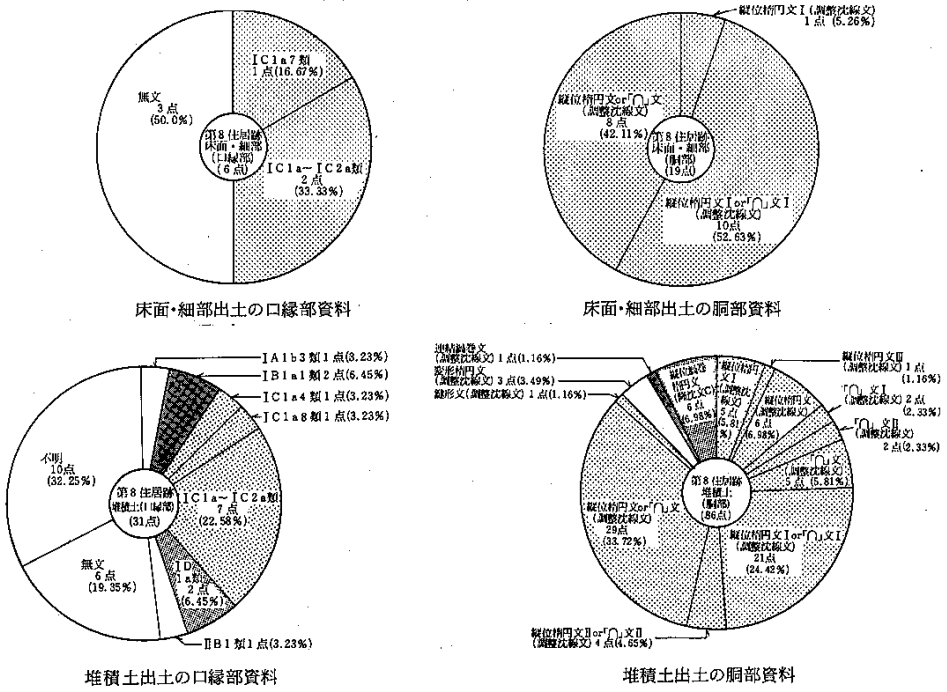
第296図　第20住居跡における土器の出土状況

第８住居跡における土器の出土状況

第８住居跡からは口縁部資料37点、文様の判明する胴部資料105点、地文のみの胴部資料990点、底部資料19点が出土している。これらの中で文様の判明する資料161点について検討を加えると次のようになる。

床面および細部：口縁部資料が６点あり、無文のもの（３点）を除きすべてＩＣ類に含まれる。胴部資料は19点あり、すべて「縦位楕円文or『∩』文」（調整沈線文）に含まれるものである。これらの中で「縦位楕円文or『∩』文」Ｉに含まれるものが10点ありⅡは認められない。底部資料は１点あるが分類不明である。

堆積土：口縁部資料が31点あり、分類不明のもの（10点）、無文のもの（６点）を除くと、ＩＣ類に含まれるものが多く29％（９点）を占める。この他は、ＩＤ1a類２点（６％）、ＩＢ1a1類２点（６％）、ＩＡ1b3類１点（３％）、ⅡＢ１類１点（３％）である。胴部資料は、86点あり「縦位楕円文or『∩』文」（調整沈線文）に含まれるものが非常に多く全体の88％（76点）を占める。この中で、縦位楕円文・「∩」文のＩとⅡ・Ⅲにおける量的関係を検討すると、Ｉが非常に多く、Ⅱ・Ⅲは極僅かである。その比率は約５：１である。これらの他、縦位渦巻楕円文（隆沈文Ｃ）が６点（７％）、変形楕円文（調整沈線文）が３点（３％）、連結渦巻文（調



第297図　第８住居跡における土器の出土状況Ｉ

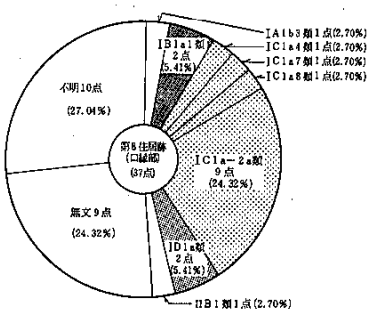
整沈線文）１点（１％）が認められる。底部資料は18点あり、不明のもの（５点）を除くと無文平底のものが非常に多く67％（12点）を占める。この他に、揚底のものが１点（６％）ある。

以上堆積土と床面細部における土器の出土状況を検討したが、両者において組成上の大きな差位は認められなかった。したがって、ここで本住居跡出土土器を一括してまとめておきたい。

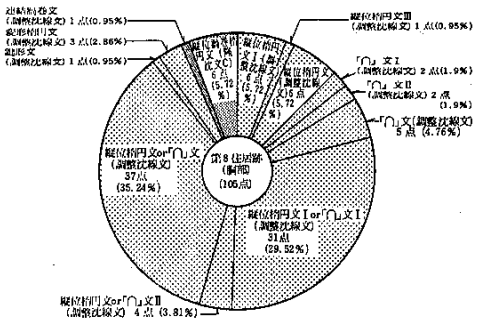
１．口縁部資料は、不明のものや無文のものを除くとＩＣ類に含まれるものが多く32％を占める。この他にＩＤ1a類５％・ＩＢ1a1類５％・ＩＡ1b3類３％がある。

２．胴部資料は、「縦位楕円文or『∩』文」（調整沈線文）に含まれるものが非常に多く、胴部資料全体の93％を占める。この中で、縦位楕円文・「∩」文のＩとⅡ・Ⅲにおける量的関係を検討すると、Ｉが非常に多く、Ⅱは極く僅かである。その比率は６：１である。この他、縦位渦巻楕円文（隆沈文Ｃ）が６％、連結渦巻文が１％である。

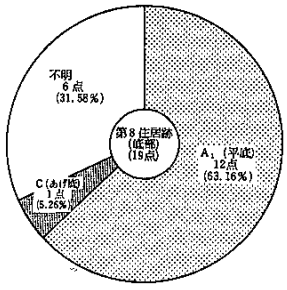
３．底部資料は不明のものを除き無文平底のものが非常に多く63％を占める。この他、揚げ底のものが５％ある。



第８住居跡出土の口縁部資料



第８住居跡出土の胴部資料



第８住居跡出土の底部資料

第298図　第８住居跡における土器の出土状況Ⅱ

第12住居跡における土器の出土状況

第12住居跡からは復元資料２点、口縁部資料80点、文様の判明する胴部資料100点地文のみの胴部資料1,573点、底部資料24点が出土している。床面および細部から出土しているものは復元資料２点、口縁部資料８点、文様の判明する胴部資料10点・底部資料２点と全体の10％程度に過ぎない。また、これらが堆積土の資料と共通し、両者に顕著な差が認められないこと等から、本住居跡出土のものを一括してまとめておきたい。

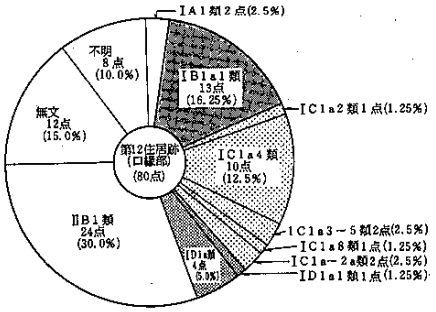
１．復元資料はＩＢ1a1類とⅡＢ１類である。

２．口縁部資料は無文のものと不明のものを除くと次の通りである。ⅡＢ１類が最も多く全体の30％（24点）を占める。その次に比較的多いのはＩＣ類16点（20％）、ＩＢ1a1類13点（16％）である。この他にはＩＤ1ａ類５点（６％）・ＩＡ類２点（３％）がある。

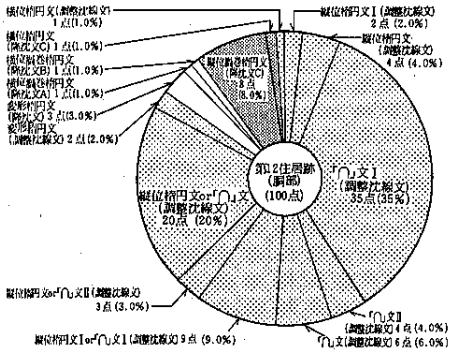
３．胴部資料は「縦位楕円文or『∩』文」に含まれるものが非常に多く、全体の86％（86点）を占める。縦位楕円文､「∩」文のＩとⅡでは、前者（46％）が後者（７％）よりも圧倒的に多い。

この他に、比較的多いのは縦位渦巻楕円文８点（８％）である。この他は、変形楕円文（隆沈文）が３点、横位渦巻楕円文（隆沈文Ａ）・横位渦巻楕円文（隆沈文Ｂ）・横位楕円文（隆沈文Ｃ）が各々１点である。

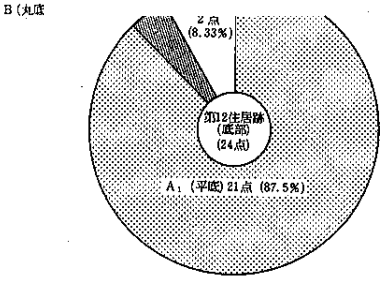
４．底部資料は無文・平底のものが非常に多く88％（21点）を占める。この他は丸底のもの１点（４％）、不明のもの２点（８％）である。



第12住居跡出土の口縁部資料



第12住居跡出土の胴部資料



第12住居跡出土の底部資料

第299図　第12住居跡における土器の出土状況

２．遺物包含層における土器の出土状況

遺物包含層からは、復元資料６点、口縁部資料413点、文様の判明する胴部資料875点、地文のみ施文された胴部資料7,903点、底部資料174点が出土している。これらの中で文様の判明する資料1,478点について検討を加えると次のようになる。

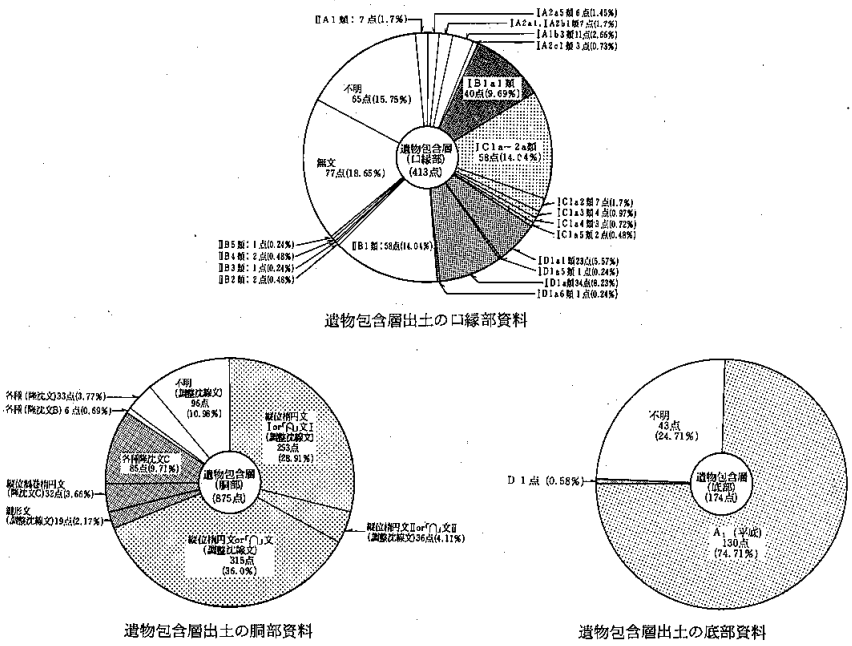
復元可能な資料は６点あり、ＩＡ2a5類２点・ＩＣ1a4類１点・ＩＤ1a3類１点・ＩＤ1a5類１点・ⅡＢ４類１点である。

口縁部資料：口縁部資料から分類不明のもの、無文のものを除くと、主体を占めるのはＩＢ（Ｉa1）類・ＩＣ類・ＩＤ類・ⅡＢ類である。

ＩＢ1ａ1類は全体の10％（40点）である。ＩＣ類は全体の18％（74点）を占め最も多い。しかし、ＩＣ類に関しては細分可能なものが非常に少ない。ＩＤ類は全体の14％（59点）であるが、細分された姿でみるとＩＤ1a1類が全体の６％（23点）で非常に多い。

ⅡＢ類は全体の15％（64点）であるが、細分された姿でみるとⅡＢ１類が全体の14％（58点）ⅡＢ類の大部分を占めてしまう。

以上の他にＩA2ａ5類６点（１％）・ＩA1b3類11点（３％）・ＩA2ｃ1類３点（１％）・ＩＡ



第300図　遺物包含層における土器の出土状況

2a1類＋ＩA2b1類７点（２％）・ⅡＡ１類７点（２％）等が僅かながら出土している。

胴部資料：胴部資料は「縦位楕円文or『∩』文」に含まれるものが非常に多く全体の69％（604点）を占める。この中で、縦位楕円文・「∩」文のＩとⅡでは前者（253点）が多く、後者（36点）との比率は、約７：１である。

また、比較的多いのは「縦位渦巻楕円文および各種文様単位」（降沈文Ｃ）で全体の10％（85点）である。

この他、「各種文様単位」（降沈文Ｂ）等があるが、全体の１％弱（６点）で極僅かに過ぎない。

底部資料：底部資料は無文・平底が大部分で、全体の75％（130点）を占める。この他、底部形態が判明するものは「台付き」１点のみである。

３．出土状況にみられる土器組成の類型

各住居跡および遺物包含層における土器の出土状況について、比較的出土量の多いものについてその組成を検討した。その結果、住居跡に関しては、堆積土と床面・細部出土のものとの間に土器の組成比という点で大きなちがいが認められないことが明らかとなった。このことは、住居構築もしくは住居使用最終時から、住居埋没最終時までの間に土器の変化を引きおこす程の時間を経過していないことを示している。すなわち、土器の変化という観点からみれば比較的短期間に住居跡が埋没してしまったと考えることができる。

このように、住居跡および遺物包含層から出土する土器の組成は「一定期間」における土器組成のあり方を示している。もちろん、この場合の土器組成のあり方は生活途上の一時点におけるあり方を示すものでないことは言うまでもない。

以上のような立場から、上深沢遺跡における「一定期間」の土器組成のあり方を整理すると次のようになる。

１．いずれの場合も、ＩＢ類・ＩＣ類・ＩＤ類・ⅡＢ１類は、他のものに較べ量的に多く、共伴関係が認められる。

２．ＩＢ類・ＩＣ類・ＩＤ類について量的組成を検討すると、２つのタイプにわかれる。

Ｉ：ＩＢ類・ＩＣ類・ＩＤ類の差があまり顕著でないもの（第20住居跡・第12住居跡・遺物包含層）。

Ⅱ：ＩＣ類が特に多く、ＩＢ類・ＩＤ類との差が顕著なもの（第１住居跡・第８住居跡）。

３．以上の場合において胴部資料は、これらを補足し裏付ける傾向を示している。

土器の年代

東北地方南部における縄文時代中期の土器は、山内清男によってその編年大綱が立てられた（山内：1937）。

大木7a式・7b式・8a式・8b式・９式・10式がそれである。しかし、この段階で具体的内容はほとんど公表されなかった。その後、研究の進展に伴い、部分的な解説と資料の公表（山内：1940、江坂：1963、伊東：1957、小岩：1961、馬目：1968等）が行なわれた。また、山内の編年を正しいものと認め、それぞれの型式内容を資料的に具体化しようとする努力もなされ、時にはそれらを細分しようとする試みも行なわれた（江坂：1956、伊東：1957、林：1965・1966、馬目：1966、西村：1969、丹羽：1971等）。このような作業と併行して、着実な資料の紹介と報告も行なわれた（加藤孝：1956、Taira And Katō ：1959、芳賀：1959、斎藤：1968、伊東他：1969、目黒・丹羽：1970、福島県教委：1975、加藤・後藤他：1975、後藤他1975等）。

以上のような努力によって、現在東北地方南部の縄文時代中期の土器群は着実な研究が積み重ねられ、その内容が次第に明らかにされつつある。しかし、資料の膨大さにかかわらず層位的な出土例に恵まれたものが少ないことから、未だ十分な型式内容の把握が行なわれていない現状にある。上深沢遺跡出土資料についても、その点は同様で確実に層位的関係が判明する資料はない。地点ごと（各住居跡・遺物包含層）の土器組成のあり方を明らかにしたに留まっている。

したがって、ここでは以上のような研究成果と上深沢遺跡の調査成果を踏まえ、各々に分類された土器群がどのような型式のものと共通し、また相違しているかを検討してみたい。

１．従来の研究成果との関係

ＩＡ類

ＩＡ類は文様帯の構成という点で共通した面を持ちあわせているが、文様単位・文様表現技法・文様構成等の点で極めて複雑な内容を含んでいる。

このために、各々について他遺跡の資料との比較を行ない、型式的位置を検討したい。

〔ＩA1a1類〕口唇部に隆沈文Aによる「横位渦巻文」をもつ例は大木囲貝塚・大松沢貝殻塚出土土器の中にまとまってみられ、大木8b式土器に位置づけられている（加藤孝：1956）。

〔ＩA1b1類〕口唇部文様帯に「溝状文もしくは横位渦巻文」（隆沈文B）、胴部文様帯に「変形楕円文Ｉ・Ⅳ」（隆沈文Bor調整沈線文）をもつのがＩA1b1類の基本的な特徴である。部分的には相違しているが、このような特徴に類似したものは、幡谷貝塚（八幡編：1959）・青島貝塚（加藤・後藤他：1975）・山前遺跡（小牛田町教委：1976）・岩手県繋遺跡（吉田：1956、江坂：1963）等から出土しており、大木8bもしくは大木９式土器に位置づけられている。

〔ⅠA1b2類〕口唇部文様帯に「溝状文もしくは横位渦巻文Ⅰ」（隆沈文C）胴部門用帯に「横位渦巻楕円文Ⅰ」「『∩』文Ⅰ」・「縦位楕円文Ⅰ」（隆沈文Cor調整沈線文）等をもつのがⅠA1b2類の基本的な特徴である。このような特徴をもった土器は断片的に知られているもののまとまった資料は公表されていない。このため、現段階で型式的位置づけを明確にすることは困難である。

〔ⅠA2a1類〕幅の広い口縁部文様帯に認められる横位渦巻文Ⅰ（隆沈文A）がⅠA2a1類の基本的な特徴である。このような特徴をもつ土器は大松沢貝殻塚から出土しており大木8b式土器に位置づけられている（加藤：1956）。この他に類例として大木囲貝塚出土資料（清野：1969）等をあげることができる。

〔ⅠA2a2類〕幅の広い口縁部文様幣に認められる横位渦巻楕円文Ⅰ（隆沈文B）がⅠA2a2類の基本的な特徴である。このような特徴をもつ土器群は最近その出土例が増加しているものの現段階での公表例は少ない。類例としては青島貝塚（加藤・後藤他：1975）出土資料をあげることができ、大木8b式に位置づけられている。

〔ⅠA2a3類〕幅の広い口縁部文様帯に認められる横位渦巻楕円文Ⅱ（調整沈線文）がⅠA2a3類の基本的な特徴である。このような特徴をもった土器群は報告例が少なく、良好な比較資料に恵まれていない。このため、型式的位置づけを現段階で明確にすることは困難である。

〔ⅠA2a4類〕幅の広い口縁部文様帯に認められる横位渦巻楕円文Ⅲ（隆沈文B）がⅠA2a4類の基本的特徴である。このような特徴をもつ土器群は山前遺跡（小牛田町教委：1976）や山形県白須賀遺跡（加藤稔：1968）等に類例を求めることができる。しかし、これらの土器群に対する理解は大木8a式（加藤稔：1968）、大木8b式もしくは大木９式（小牛田町教委：1976）等報告者によって異なり、検討を必要としている。

〔ⅠA2a5類〕：頚部無文帯を境に横位渦巻楕円文Ⅳ（隆沈文C）の認められる幅広の口縁部文様帯と、調整沈線文および隆沈文Cによる縦方向に展開する各種文様単位の認められる胴部文様帯をもつことが、ⅠA2a5類の基本的な特徴である。このような土器群に類似した資料は、梨木囲貝塚（Taira And Katō：1959、芳賀：1968）・南境貝塚（林：1965）・七夕遺跡（斎藤：1968）・大木囲貝塚（原・馬目：1958）等で出土している。これらに対する理解は、大木９式土器に位置づけられるという点ではすべての報告者において一致しているが、大木９式の中で型式的に細分すべきか否かで見解がわかれている。この細分問題は分類学的にも層位学的にもさらに検討を必要としている。

〔ⅠA2b1類〕：口縁部文様帯と胴部文様帯が接続している点を除けば、ⅠA2b1類はⅠA2a5類と共通する点が多い。現在公表されている例の中から良好な比較資料を得ることは困難あるがⅠA2a5類と密接な関係をもつものと考えられる。

〔ＩA2c1類〕：幅の広い口縁部文様帯に認められる台形文（隆沈文B_2）がＩA2c1類の特徴である。このような土器と類似するものは梨木囲貝塚（Taira And Katō ：1959）、青島貝塚（加藤・後藤他：1975）等から出土している。梨木囲貝塚の報告では、出土した他の土器群と一括して、同様なタイプのものは関東地方の編年における加曽利ＥⅡ式と呼ばれるものであるとしている。一方、青島貝塚の報告では大木8b式に位置づけられるとしている。

両者においてとられている編年表（関東と東北）が異なっているため見解の相違なのか否か即断できない。考え方としては、東北地方の編年に基づいている青島貝塚の報告に示された見解を重視すべきである。しかし、このような土器群は大木8b式土器の一括資料である大松沢貝殻塚出土土器群（加藤孝：1956）の中に類似したものをみい出すことができない。したがって、大木8b式土器の中に位置づけうるか否か検討の余地を残している。

〔ＩA3a1類〕：幅の狭い口縁部文様帯に認められる鋸歯状文（交互刺突文）がＩA3a1類の基本的な特徴である。このような鋸歯状文をもつ例は現在発見例が少なく、中島遺跡（千葉：1975）・福島県浦尻貝塚（福島大考古研原始部会：1971）・福島県荒井上原遺跡（目黒・丹羽：1970）等で断片的に出土している。類似した特徴をもつ土器群は神奈川県五領ケ台遺跡出土資料を標準とした五領ケ台式土器（山内：1937、江坂：1949）の中にみい出すことができる。

ＩB類・ＩC類・ＩD類

ＩB類・ＩC類・ＩD類は上深沢遺跡出土土器の中で最も量的に多く、さらに共伴関係も明らかなものである。したがって、ある「一定期間」において共存していたと考えられる。

ＩA類と同様に従来の研究成果を踏まえ、型式的位置を検討したい。しかし、その比較検討は共存関係が明らかことから大づかみに行なうことにする。また、これらの土器群は大木９式の細分問題と関連している。この点についてはまとめて後述したい。

〔ＩB類〕ＩB類の基本的な特徴は文様帯が口唇部直下から胴下部まで連続していること、各種文様単位（隆沈文C）が文様を縦方向に文様を展開させていることである。このような特徴をもった土器群は桂島貝塚（伊東：1957）・梨木囲貝塚（芳賀：1968）・仁斗田貝塚（楠本：1973）等で出土しており、大木９式に位置づけられている。

〔ＩC類〕ＩC類の基本的な特徴は口縁上半部が無文で、その下部に文様帯をもつこと、各種文様単位（調整沈線文）が文様を縦方向に展開させていることである。文様単位はすべて各種の縦位渦巻文・楕円文・「∩」文・変形「∩」文である。また、特徴的な技法としてＩC1ａ1類を除き磨消縄文が認められる。

このような特徴をもった土器群は大木囲貝塚（伊東：1957、和田・馬目：1968）・梨木囲貝塚（Taira And Katō ：1959）・南境貝塚（林：1965、後藤：1968）・青島貝塚（加藤・後藤：1975）等に類例が多い。これらに対する理解は大木９式に位置づけられるという点で一致して

いる。

〔ＩＤ類〕ＩＤ類の基本的な特徴は口縁部が無文で胴部に文様帯をもつこと、各種文様単位が文様を縦方向に展開させていることである。

ＩD1a1～2類は文様単位がすべて調整沈線文による各種の縦位渦巻文・縦位楕円文・「∩」文・変形「∩」文である。また、特徴的な技法として磨消縄文が認められる。このような特徴をもった土器群は梨木囲貝塚（Taira And Katō ：1959）・大木囲貝塚（原・馬目：1968）青島貝塚（加藤・後藤：1975）・沼津貝塚（阿部・佐藤・三塚：1976）等から出土し、大木９式土器に位置づけられるという点で見解の一致をみている。

ＩD1a3類は連結凹文（調整隆起線文Ｂ）によって文様区画が行なわれ、その中に横位渦巻文Ⅱ～Ⅳ・「∩」文Ｉ（調整沈線文）が配置されている。このような特徴をもった土器は現段階で類例を求めることは困難である。

ＩD1a４～５類は文様単位が横位渦巻楕円文ⅤorⅥで、文様表現技法が調整沈線文or隆沈文Ｃである。調整沈線文の場合は特徴的な技法として磨消縄文が認められる。このような特徴をもった土器群は仙台湾周辺では未だ良好な比較資料に恵まれていない。現在、類似した特徴をもつ資料は福島県原瀬上原遺跡出土土器（丹羽：1971）の中に認められ大木９式に併行する時期のものと理解されている。

Ⅱ類

Ⅱ類は地文のみが施文されているものである。そのため、土器の特徴が不明瞭で、他遺跡の例と比較し、型式的位置づけを行なうのが困難である。したがって、出土状況の観察に基づいて他の土器群との共伴関係・型式的位置づけを検討しなければならない。ただ、幸いなことに上深沢遺跡出土土器は縄文時代中期以外のものは極僅かで、その多くは大木９式に限定されてしまう。

また、その中でⅡＢ１類はＩＢ類・ＩＣ類・ＩＤ類との其伴関係が確認されているので、大木９式として差しつかえないものである。

２．出土土器の型式学的再検討

上深沢遺跡出土土器を従来の研究成果に基づいて検討を行なった結果、次のようなあり方を示すものが認められた。

⑴　特に矛盾の認められないもの。

⑵　疑問の余地を残しているもの。

⑶　基本的に共通した見解が示されているが細部において異なるもの。

⑷　異なった見解が示されているもの。

⑸　包括しきれないもの。

以上の中で（１）については特に問題はない。したがって、（２）～（５）について分類学的・層位学的吟味を行ない、型式学的再検討を試みることにしたい。

Ⅰ：従来の研究成果に照らして疑問の余地を残しているもの

ⅠA1b1類：ⅠA1b1類と共通した特徴をもつ土器群は一般に大木8b式土器と考えられていた。しかし、その表現の中に幾分あいまいさが認められる。すなわち、大木8b式土器と明言しているもの（八幡編：1959、加藤孝・後藤他：1975）、大木8b式土器としながら「大木９式と考えてもさしつかえない」とするもの（吉田：1956）、即断を避けて「大木8b式、あるいは、大木９式とする説がある」とするもの（小牛田町教委：1976）等である。これらについて、層位的根拠を検討すると、必ずしも明らかでない。この点、上深沢遺跡でも同様である。そこで、ⅠA1b1類と他の土器群の特徴を比較してみたい。

大木8b式土器として位置づけられたⅠA1a1類・ⅠA2a1類には隆沈文Ｂという文様表現技法は認められない。また、大木8b式土器のまとまった資料である大松沢貝殻塚出土資料の中にも見い出すことはできない。この点、大木９式に位置づけられたⅠA2b5類・ⅠＢ類・ⅠＣ類・ⅠD1～2類・4～5類の中にも認められない。したがって、ⅠA1b1類は大木8b式土器および大木９式土器とも異なった特徴をもつものと考えられる。他方、文様単位として口唇部文様帯にみられる溝状文は大木8b式土器と類似し、胴部文様帯にみられる変形楕円文は大木９式土器との関係を考えさせる。

以上のことはⅠA1b1類が大木8b式・大木９式と異なった特徴をもちながら、他方では一定の関係をもつものと考えることができる。このため現在の段階でⅠA1b1類が大木8b式と大木９式のどちらに位置づけるべきか論断することは差し控えなければならない。ここでは便宜的にＸグループの土器と呼んでおきたい。

ⅠA2a2類：ⅠA2a2類は上深沢遺跡からの出土数が少なく、さらに類例も少ない。このような特徴をもったものが大木8b式に位置づけられている（加藤孝・後藤他：1975）ことは既に述べた。しかし、ⅠA1b1類の所でも述べたように、ⅠA2a2類に認められる文様表現技法は大木

8b式のものとは異なっている。大木９式の場合も同様である。このため、ＩA2a2類は大木8b式土器位置づけるという積極的根拠に欠ける。したがって、ここでもＩA2a2類はXグループの土器としておきたい。

ＩA2c1類：ＩA2c1類に類似した土器が大木8b式に位置づけられていること（加藤孝・後藤他：1975）に述べた。また、これらが大木8b式土器に位置づけられた場合、大木8b式土器のまとまった資料である大松沢貝殻塚出土土器群の中にみい出すことができない点で疑問の残ることも既に述べた。また、大木8b式とする層位的根拠を検討したが、それは必ずしも明らかでない。そこで、ＩA2c1類と他の土器群の特徴を比較してみたい。

ＩA2c1類の口縁部文様帯に認められる台形文は大木8b式土器および大木９式土器の中にその類縁関係を求めるのは困難である。その点は他の土器群に対しても同じである。しかし、ＩA2c1類は数は少ないが、すべて遺物包含層中から出土していることから大木９式かそれ以前のものと考えることができる。また、文様表現技法を検討すると隆沈文B_2である。若干のちがいはあるがこれに類した技法はＩA1b1類・ＩA2a2類に見いだしうるもので、大木8b式や大木９式のものではない。したがって、ＩA2c1類も未だ検討の余地を残しているが、ＩA1b1類・ＩA2a2類と同様Xグループの土器とておきたい。

Ⅱ．従来の研究成果において基本的に共通した見解が示されているが、細部において異なるもの。

ＩA2a5類・ＩＢ類・ＩＣ類・ＩＤ１～２類・４～５類は既に検討したように大木９式に位置づけられるという点で見解の一致が認められる。しかし、大木９式は1965年以降型式的に細分されうるという見解があらわれ（林：1965）、その後幾つかの賛成論と反対論が示された。また、上深沢遺跡出土の大木９式土器でも出土状況において土器組成に関する幾つかのタイプが認められた。

そこで、ここでは大木９式土器に関する見解を整理し、上深沢遺跡の調査成果と比較検討を行なうことにしたい。

大木９式土器に対する従来の一般的理解

大木９式土器について設定者である山内清男（山内：1940）は、関東地方の加曽利E式に併行し、磨消縄文を伴っていることを述べている。

その後、伊東信雄（伊東：1957）は大木式土器について「大木８式では口頸部文様帯と体部文様帯が分れていたが、大木９式になるとまた一つになって隆起線文様が器の全面に及ぶようになり、また擦消縄文といって縄文の一部分を擦消して縄文のあるところとない所をつくる装飾法があらわれる。」と述べた。この段階で、大木９式土器は文様帯のあり方、文様の状態について一定の理解が示された。

小岩末治（小岩：1961）は山内清男氏提供とする写真（大木１～10式）を掲載し、大木９式土器について「口頸部と体部文様帯がまた一つになって、隆起線文様が器の全面に及ぶようになり、磨消縄文の装飾法があらわれるが、その輪郭は太い沈線で縄文が残される。つまり文様は渦巻文から卵形文にかわり、磨消して大きな窓状を呈し、地文の斜行縄文の間を、箆状の工具をもって磨消している。」と述べている。

以上にみられる大木９式土器に対する理解を整理すると次のようにまとめることができる。

１．口縁部と体部の文様体が一つになる。

２．特徴的な文様は隆起線文様で、器の全面に及ぶ。

３．磨消縄文手法がみられ、この場合の文様には卵形文が認められる。

伊東信雄および小岩末治によって行なわれた大木９式土器の解説は、このように極めて簡単なものであったが、同時に掲載された図版はそれを補う上で有効なものであった。

大木９式土器の細分に関する見解

林謙作は大木９式土器の器形、文様の特徴について述べた後、「宮城県梨木囲の調査によって大木９式が少なくとも二型式に細分されることがあきらかになった。……中略……前半のものでは貼付による立体的な文様表現が多く、また器形もキャリパー形に近い……中略……後半になると文様の表現技法は磨消縄文に接近する一方、器形はふたたび単純化する。」として大木９式を二型式に細分する考えを明らかにした。この時、例として示された２点の土器は梨木囲貝塚出土のものではなく、南境貝塚のものであった。その後、林謙作は大木９式土器をａ．ｂ．ｃに三分する考え（林：1966）を示した。

林謙作の見解を積極的に評価し、部分的な批判をまじえながら支持したのは原信之・馬目順一である。原信之、馬目順一（原：馬目：1968）は大木囲貝塚出土資料を整理し、擦消縄文系土器群をⅠ～Ⅱ類に分類し、第Ⅰを大木９旧式・第Ⅲ類を大木９新式に位置づけた。馬目順一（馬目：1968）はさらに、福島県台の上貝塚出土土器に対しても同様な見解に基づいた報告を行なった。

一方、丹羽茂は福島県原瀬上原遺跡の調査結果に基づいて仙台湾周辺の大木９式土器に併行する時期の土器群を整理して、それらを類型的および層位的に二分した（丹羽：1971）。

大木９式土器の細分を批判する見解

林謙作等によって示された大木９式の細分について批判的見解を示したのは後藤勝彦と斎藤良治である。

後藤勝彦（後藤：1968）は南境貝塚第三次調査概報において林謙作の見解に対し、「残念なことに大木9aと9bに細分しているが、これが妥当かどうかは現段階ではわからない。考え方によってはいくらでも細分出来るが、これが型式的に位置づけが出来るかどうかわからない」と述

べ、独立した土器型式として評価しうるか否かという点で疑問を述べている。

それに対し、斎藤良治（斎藤：1968）は七夕遺跡の報告において、「時期的な差と考えるよりも器形の相違による文様の違いであると考えるのが適当ではないだろうか」と述べ林謙作の見解を全面的に否定している。

大木９式土器の細分およびその批判に認められる問題

林謙作が大木９式を細分して以後、その可否はともかく、大木９式土器として一括されていたものがいくつかの特徴をもった土器群によって構成され、それらが決して単純なあり方を示していないことが一般に認識されるようになった。したがって、大木９式土器の細分問題は一型式内のバラエティーなのか、それとも各々独立した型式をなすものなのかという点に集約されるといってよい。

林および原・馬目における大木９式の細分は分類学的な根拠と梨木囲貝塚における層位学的根拠に基づいている。分類学的な根拠は大木8b式と大木10式との比較・検討の中になされ、それは馬目において最も精緻である。しかし、それらが独立した型式として認められるためには層位学的根拠が十分でなければならない。その点、梨木囲貝塚の資料は報文（Taira And Katō ：1959）に忠実な立場をとるかぎり、林・原・馬目が述べるような出土状況を示していない。少なくとも「上層と下層より、それぞれ分離して出土した」と積極的に主張しうるようなものではない。したがって、林および原・馬目の大木９式細分説は層位学的証明がなされたとは認めがたい。

大木９式土器に併行する時期の土器群を分類学的にも層位学的にも二分したのは丹羽茂である。この点妥当な見解と言える。しかし、丹羽茂が整理した資料は福島県原瀬上原遺跡出土のものであり、仙台湾周辺から遠く離れていること、さらに扱った資料が量的に少ないことに問題を残している。すなわち、原瀬上原遺跡のような阿武隈川中流域で認められた土器の変化が仙台湾周辺でも同様であるかは不明なのである。

このように、大木９式土器の細分論は少なくとも仙台湾周辺においては、層位学的な決め手を欠いていると言わざるを得ない。しかし、この場合でも豊富な内容をもつ大木９式土器がすべて同一時期の所産であるという証明はなされていない。

したがって、仙台湾周辺における大木９式土器は幾つかの類型に分類されるが、それが時間的なものなのか一時期における土器組成の問題なのか未だ白紙の状態にあると言わねばならない。

上深沢遺跡における大木９式土器のあり方

上深沢遺跡出土資料で大木９式土器に位置づけられるのは既に述べたようにＩA2a5類、ＩＢ1a1類・ＩＣ1a1～9類・ＩD1～2・4～5類である。これらの土器群は既に検討したようにＩA2a5類を除き住居跡および遺物包含層において比較的明瞭な共伴関係を指摘することができた。

ＩA2a5類の位置

ＩA2a5類は、他の大木９式土器（ＩＢ類・ＩＣ類・ＩD）との共伴関係が明らかでない。もちろん、このことは共伴関係が認められないということではない。僅かな量であれ、各住居跡および遺物包含層から出土しているからである。しかし、その出土量が他の大木９式土器に混入している大木8b式土器等と較べ大きく変わらないため、積極的に共伴関係を主張することができないのである。

ＩA2a5類にみられるこのような出土状況は次のような原因に基くものと考えられる。

１、このような出土状況は、全く偶然のものである。

２、一定時期（大木９式期）における生産および消費・廃棄量が少なかった。すなわち、日常生活にいられた土器の中で特殊なものであった。

３、年代的に古いものが僅かに残存して日常生活に用いられた。すなわち、おもに用いられたのはさらに古い時期であった。

４、既に廃棄されていたものが、住居跡埋没過程において二次的に廃棄もしくは流入した。

１の場合は、ＩA2a5類と他の大木９式土器との関係は不明であるが、共伴する可能性を否定できないことを示している。しかし、ＩA2a5類のこのような出土状況は幾つかの住居跡と遺物包含層において確認されているので、その原因を偶然性に求めるのは困難である。

２の場合は、ＩA2a5類が他の大木９式土器群と「一定の期間」内において一定の役割を果しながら共存していたことを示している。

これに対し、３・４の場合はおもに存在していた時期が他の大木９式の土器群よりも古い時期であったことを示している。ＩA2a5類が２の場合がそれとも３・４の場合によるものか、出土状況からは判断できない。そこで、ＩA2a5類の要素を再度検討してみたい。

器形的な特徴を観察すると、大木8b式土器（加藤孝：1955）の中に類縁関係を見い出すことができる。しかし、大木10式土器（後藤：1967、芳賀：1968、伊東編：1969）との間に類縁関係を見い出すことはできない。

文様帯が口縁部文様帯と胴部文様帯とによって構成される点は、大木8b式土器（加藤孝:1956）の中に類縁関係を見い出すことができる。しかし、大木10式土器（後藤：1967、芳賀：1968、伊東編：1969）との間に類縁関係を見い出すことはできない。

口縁部文様帯にみられる横位渦巻楕円文は大木8b式土器（加藤孝：1956）に類縁関係を見い

出すことができるが、大木10式土器（後藤：1967、芳賀：1968・伊東編：1969）との間に類縁関係を見い出すことはできない。

以上のように、ＩA2a5類は器形・文様帯の構成・文様単位等の点で大木8b式土器との間に強い類縁関係が認められる。このことは、ＩA2a5類が大木９式土器の中でも大木10式土器と接続する新しい要素を持たず、むしろ大木8b式土器に接続する古い要素を含んでいることを示している。したがって、ＩA2a5類は3or4の場合、すなわち「おもに存在していた時期が他の大木９式土器群よりも古い時期」である可能性があると考えられる。また、このような検討の中でＩA2a5類・器形・文様帯の構成・文様の上で特殊なものである可能性は少ない。

ＩB類・ＩC類・ＩD類の位置

ＩA2a5類は、層位学的・分類学的な検討によって大木９式土器の中でも大木8b式土器に近接した比較的古い要素をもつ可能性のあることが指摘された。次に、ＩB～ＩD類の年代的関係を検討したい。

ＩB～ＩD類における明確な共伴関係は、既に度々指摘した。また、その共伴関係に２つのタイプが存在することも既に述べた通りである。

〔第Ｉタイプ〕ＩB類・ＩC類・ＩD類に明確な共伴関係が認められ、ＩB類・ＩC類・ＩD類の組成比の差があまり顕著でないもの。

〔第Ⅱタイプ〕ＩB類・ＩC類・ＩD類に明確な共伴関係が認められ、特にＩC類が比較的多く、ＩB類・ＩD類との差が顕著なもの。

このような共伴関係にみられる差はどのような原因に基づくものであろうか。その原因を探るためにＩB類・ＩC類・ＩD類の要素を再度検討してみたい。

〔器形〕ＩB類・ＩC類・ＩD類の器形には、次のような特徴が観察される。ＩB類は大波状の突起を形成するがＩC類はほとんど平口縁である。ＩD類は平口縁と大波状口縁のものがあり、両者の中間的な姿を示している。また、ＩB類にみられる大波状の突起は、ＩA2a5類に近似したものが認められる。したがって、器形的な類縁関係は「ＩC類⇔ＩD類⇔ＩB類（⇔ＩA2a5類）」とまとめることができる。

〔文様単位と文様展開〕ＩB類の文様単位は、縦位渦巻楕円文が主体を占め、その間隙を埋める形で部分的に横位渦巻文・横位渦巻楕円文が認められる。このため、文様は一見横方向に展開しているような錯覚をおこさせるものもあるが、原則は縦方向である。

ＩC類の文様単位は縦位渦巻文・縦位楕円文・「∩」文とそれらの変形したものに限定され、文様は縦方向に展開する。

ＩD類の文様単位は縦位渦巻文・縦位楕円文・「∩」文とそれらの変形したものおよび横位渦巻楕円文である。文様は縦方向に展開する。

このように、ＩＢ類は渦巻楕円文によって構成されるが、ＩＣ類は渦巻楕円文をもたない。ＩＤ類は両者を含んでいる。また、渦巻楕円文はＩA2a5類にも認められる。したがって、文様単位の類縁関係は「ＩＣ類⇔ＩＤ類⇔ＩＢ類（⇔ＩA2a5類）」とまとめることができる。

〔文様表現技法〕ＩＢ類の文様表現技法は、隆沈文Ｃである。ＩＣ類の文様表現技法は、調整沈線文と磨消縄文である。ＩＤ類の文様表現技法には、調整沈線文と磨消縄文をもつものと、隆沈文Ｃのものがある。ＩＢ類に主体的にみられる隆沈文ＣはＩA2a5類にも認められる。したがって、文様表現技法の類縁関係は、「ＩＣ類⇔ＩＤ類⇔ＩＢ類（⇔ＩA2a5類）」とまとめることができる。

以上、ＩＢ類・ＩＤ類・ＩＣ類の要素を分類（系統）学的な面から器形・文様単位・文様表現技法について検討を行なった。その結果、いずれの場合においても「ＩＣ類⇔ＩＤ類⇔ＩＢ類（⇔ＩA2a5類）」の関係が認められた。ＩA2a5類については、すでに分類（系統）学的立場から大木９式土器の中でもＩＣ類・ＩＤ類・ＩＢ類に較べ大木8b式土器と類縁関係が強く、古い要素をもっていることを述べた。このような立場でＩＣ類・ＩＤ類・ＩＢ類をみるならば要素的にはＩＣ類→ＩＤ類→ＩＢ類の順に古い要素が強くなると考えることができる。したがって土器のもつ要素という点ではＩＣ類がもっとも新しく、ＩＢ類がもっとも古いことになる。

共伴関係にみられる２つのタイプは、以上のような分類（系統）学的な検討結果からすれば時間的推移を示す可能性もある。

Ⅲ．従来の研究成果において異なった見解が示されているもの

ＩA2a4類：ＩA2a4類と共通した特徴をもつ土器群については大木8a式とする見解と大木8b氏もしくは大木９式とする見解等があることは既に述べた。前者の見解は、山形県白須賀遺跡出土資料（加藤稔：1968）に、後者の見解は、宮城県山前遺跡出土資料（小牛田町教委：1976）にみられる。上深沢遺跡および白須賀遺跡・山前遺跡出土資料にみられる基本的な特徴は次の３点に要約される。

１、幅の広い口縁部文様帯をもつ

２、口縁部文様帯にみられる文様単位は横位渦巻楕円文Ⅲである。

３、文様表現技法は、隆沈文Ｂである。

これらの特徴の各々について検討すると次のようになる。

１、類似した口縁部文様帯をもつものは、大木8a式土器（加藤孝・後藤他：1975）・大木8b式土器（加藤孝：1956）・大木９式土器の一部（ＩA2a5類）等に認められる。

２、口縁部文様帯に明確な横位渦巻楕円文Ⅲをもつものは現在十分に明らかでない。しかし、横位渦巻楕円文Ⅲに近似する横位渦巻楕円文Ⅱは大木8b式土器（ＩA2a1類）と、Ｘグループの土器（ＩA2a2類）に認められる。

３、文様表現技法が隆沈文Ｂのものは、Ｘグループの土器（ＩＡ2ａ2類）に認められる。

以上の中で、１の条件を満たすものは大木8ａ式・大木8b式・大木９式土器に認められる。１と２の条件を満たすものは、大木8b式土器・Ｘグループの土器周辺に認められる。さらに、１・２の条件と３の条件を満足させるものはＸグループの土器に限られる。以上から、ＩＡ2ａ4類は、Ｘグループの土器に位置づけるのが妥当であろう。

したがって、ＩＡ2a4類と共通した特徴をもつ土器群を大木8a式土器とする見解は適当でない。この点、大木8b式もしくは大木９式とする見解は適切なものと考えられる。

Ⅳ．従来の研究成果に包括しきれないもの

このようなものにはＩＡ1b2類・ＩＡ2ａ3類・ＩＡ2b1類・ＩＤ1a3類がある。

ＩＡ1b2類：ＩＡ1b2類に認められる特徴を検討すると次のようになる。

１、口唇部文様帯にみられる「溝状文もしくは横位渦巻楕円文Ｉ」は大木9b式土器（ＩＡ1a1類）、Ｘグループの土器（ＩＡ1b1類）に認められる。

２、胴部文様帯にみられる「横位渦巻楕円文Ｉ」は大木8b式土器（ＩＡ2a1類）、Ｘグループの土器（ＩＡ2a2類）の口縁部文様帯に認められる。また、「『∩』文Ｉ」・「縦位楕円文Ｉ」は大木９式土器（ＩＡ2a5類・ＩＣ類・ＩＤ類）に広く認められる。

３、文様表現技法の隆沈文Ｃは、大木９式土器（ＩＡ2a5類・ＩＢ1a1類・ＩＤ1a4・5類）に広く認められるがその他の土器にはない。

以上の検討によって、１・２の特徴から大木8b式土器・大木９式土器・Ｘグループの土器のいずれかに位置づけることができる。また、３の特徴は、大木９式土器のみに限られる。大木8b式土器・Ｘグループの土器と共通する特徴を併せもつという点を考慮し、大木９式でも比較的古い要素をもつものと考えることができる。

ＩＡ2a3類：ＩＡ2a3類に認められる特徴は幅の広い口縁部文様帯にみられる横位渦巻楕円文Ⅱ（調整沈線文）である。このような特徴は次のように整理することができる。

１、幅広の口縁部文様構に横位渦巻楕円文がみられるものは、大木8b式土器（ＩＡ2a1類）・大木９式土器（ＩＡ2ａ5類）・Ｘグループの土器（ＩＡ2a2・4類）に認められる。

２、横位渦巻楕円文Ⅱが、補助的な文様単位として、間隙を埋める形で大木９式土器（ＩＡ2a5類）にみられるが、主たる文様単位として認められるものは他にない。

３、横位渦巻文と横位楕円文が未分化なものは大木8b式土器（ＩＡ2a1類）、Ｘグループの土器（ＩＡ2a2類）に認められる。

４、背負い型の渦巻楕円文は大木９式土器（ＩＡ2a5類）に認められる。

以上のような検討によって、ＩＡ2ａ3類は、大木8b式土器・大木９式土器・Ｘグループの土器のいずれかに位置づけることができる。しかし、その中でどのような位置づけが与えられる

べきかは２・３・４の検討を通しても明らかでない。

ⅠA2b1類：ⅠA2b1類の特徴は次のようにまとめることができる。

１、幅の広い口縁部文様帯と胴部文様帯が接続している。

２、口縁部文様帯の文様単位は横位渦巻楕円文Ⅳである。

３、胴部文様帯の文様単位は各種縦位渦巻楕円文である。

４、文様表現技法は、隆沈文Ｃである。

このような特徴の中で、２はⅠA2ａ5類、３はⅠB1ａ1類、４はⅠA2ａ5類、ⅠB1ａ1類と共通する。したがって、ⅠA2ｂ1類は、ⅠA2ａ5類とⅠB1ａ1類両者の特徴をかねそなえていることになる。また、１の特徴である文様帯の構成をみると、口縁部文様帯をもつという点でⅠA2ａ5類に近似している。

以上の検討によってⅠA2ｂ1類はⅠA2ａ5類と近似するがⅠB1ａ1類と共通した要素をもつものとすることができる。したがって、ⅠA2ｂ1類は大木９式土器の中でも比較的古い要素をもつⅠA2ａ5類に近い時期のものと推定される。

ⅠD1ａ3類：ⅠD1ａ3類の特徴は次のようにまとめることができる。

１、文様は胴部文様帯に認められる。

２、胴部文様帯は、調整隆起連結凹文によって文様区画が行なわれている。

３、文様区画内には、横位渦巻文Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・「∩」文Ⅰ（調整沈線文）が配置されている。

次に、これらの特徴について検討してみたい。２、の調整隆起線文に類似した文様表現技法はＸグループの土器（ⅠA1ｂ1類・ⅠA2ａ2類・ⅠA2ａ4類）の中に認められる。３、の「∩」文は、大木９式土器（ⅠA2ａ5類・ⅠC類・ⅠD1ａ1類・ⅠD1ａ2類）に広く認められる。横位渦巻文Ⅱ・Ⅲ・Ⅳは完全に横方向へ展開する文様単位ではなく、縦方向との中間的な展開を示すものである。

このように、ⅠD1ａ3類は、文様単位が大木９式土器と共通し、文様区画がＸグループの土器と類似している。したがってⅠD1ａ3類は大木９式土器かＸグループの土器か不明である。

３．縄文時代中期の土器型式と上深沢遺跡出土土器

上深沢遺跡出土土器と縄文時代中期の土器型式との関係については「従来の研究成果との関係」・「出土土器の型式学的再検討」で述べた。ここではその検討結果を土器型式ごとにまとめておきたい。なお、土器型式については山内清男以後、杉原荘介（杉原：1943）・岡本勇（岡本：1959）・大井晴男（大井：1970）等の所論が展開されている。ここでは山内清男による土器型式の定義「地方差・年代差を示す年代学的の単位」に従っておきたい。

五領ケ台式土器類似のもの

ＩA3ａ1類

大木8b式土器

ＩA1ａ1類・ＩA2ａ1類

大木９式土器

ＩA1ｂ2類

ＩA2ｂ1類・ＩA2ａ5類

ＩB1ａ1類・ＩD1ａ1～2類・ＩD1ａ4～5類・ＩC1ａ1～8類・ⅡＢ１類

大木９式土器に含まれる可能性の強いもの

ⅡＡ１類・ⅡＢ２類・ⅡＢ３類・ⅡＢ４類

Ｘグループの土器（大木8b式・大木９式と異なりながら両者と共通した要素を併せもつもの）

ＩA1ｂ1類・ＩA2ａ2類・ＩA2ａ4類・ＩA2ｃ1類

大木９式かＸグループの土器に含まれるもの

ＩD1ａ3類

大木8b式土器・Ｘグループの土器・大木９式土器のいずれかに含まれるもの。

ＩA2ａ3類

以上の中で問題となる点、解説を必要とする点について二三述べておきたい。

１、「五領ケ台式土器類似のもの」としたＩA3ａ1類は五領ケ台式土器そのものなのか、大木7a式土器の一種なのか、現段階ではわからない。

２、Ｘグループの土器としたものは分類学的に、大木8b式土器・大木９式土器と異なりながら両者との間に類縁関係が認められたものである。層位学的に大木8b式土器と大木９式土器の間を埋めるものという証明はなされていない。したがって、編年学的な意味での「土器型式（年代学的の単位）」として位置づけられるか否か、さらに今後の検討を必要としている。

３、大木９式土器として位置づけられた土器群は分類（系統）学的な検討・出土状況による共伴関係の検討によって次の３群にわけることができる。

第１群：ＩA1ｂ2類・ＩA2ｂ1類・ＩA2ａ5類

第２群：ＩB1ａ1類・ＩD類（ＩD1ａ3類を除く）・ＩＣ類の組合せで、ＩＢ類・ＩＣ類・ＩD類の比率の差が顕著でないもの。

第３群：ＩB1ａ1類・ＩD類（ＩD1ａ3類を除く）・ＩＣ類の組合せでＩＣ類の比率が顕著なもの。

これら３群は分類（系統）学的に時間的推移を示す可能性が指摘された。また、出土状況による共伴関係も消極的ながらそれらを裏付けている。しかし、出土状況による共伴関係が厳密な意味で、層位学的証拠になりうるかという問題がある。また、例え上深沢遺跡においてそれらが妥当であるとしても、「地方差・年代差を示す年代学的の単位」である土器型式として評価を得るためには、地域的まとまりをもつ幾つかの遺跡において、同様な検証がなされる必要がある。

したがって、ここでは大木９式土器が、編年学的な立場から幾つかの土器型式に細分されるか否かについて、結論づけることを差し控えておきたい。

縄文時代後期の土器

連鎖状隆起線文をもつ土器群であり、口縁部破片が３点出土している（第220図－21～23）。口縁部は、ゆるやかな波状のもの（21・22）と平坦なもの（23）とがみられる。いずれも口縁部上端に無文構を残し、その直下に一本の連鎖状隆起線文がめぐっている。連鎖状隆起線文は、隆起線文の頂上部に一定の間隔で刺突を加えたものである。小破片のため全体の器形や胴部の文様構成などは不明である。これらの出土層位は第１層・第３層・不明層などであり、層によって年代を限定することはできない。連鎖状隆起線文をもつ土器群は陸前高田市門前貝塚から比較的まとまった資料が発見され、「門前式」と呼ばれており（吉田：1957）仙台湾周辺でも宮戸島袖窪貝塚、河北町南境貝塚、松島町西ノ浜貝塚、南方町青島貝塚などから出土し、林謙作により「袖窪式」の設定も提唱されている（林：1965）。本資料はこれらの土器と連鎖状隆起線文をもつ点で共通した特徴をもっている。したがって、本資料は縄文時代後期初頭に位置づけられることが妥当であろう。

縄文時代晩期の土器

口縁部破片７点（第220図－14～20）、胴部破片４点（第241図－21～24）の計11点が出土している。

形態的特徴

〔器形〕すべて小破片のため全体の器形がわかるものはない。口縁部破片では口縁端が急角度に外反し、小波状の口縁をもつもの（14～18）と口縁部が直立し、平口縁で口縁外面に小突起をもつもの（19・20は同一個体）の二者がみられる。いずれも口縁部内面には１本の沈線がめぐっている。

〔文様〕地文だけのものと、文様をもつものとがみられる。小波状の口縁部のものは頚部に１本の沈線がめぐり、それ以下は地文として縄文が施文されている。縄文にはＲＬのものとＬＲのものがみられ、後者が多い。沈線と地文の施文手順は、地文→沈線の関係が観察される。口縁部外面に小突起をもつものは頚部に数本の沈線をめぐらし、沈線間に１本おきに刺突を施している。

出土状況と年代

これらの資料の出土層位は、第１～３層、層位不明などであり、出土層位にも出土地点にもまとまりはみられない。したがって、出土状況からは年代は決定できない。これらの口縁部と類似する資料は、巻堀遺跡（一迫町教委：1977）から出土しており、縄文時代晩期後半に位置づけられている。

須　　恵　　器

口縁部の破片４点、胴部の破片９点が出土している。坏・蓋・鉢・壺・甕があるがいずれも破片資料のため全体の器形は不明である。

須恵器の特徴

坏（第220図－１）：口縁部破片が１点出土している。口縁部は外傾している。内外面にシャープなロクロ調整痕が観察される。

蓋（第220図－２）：口縁部破片が１点出土している。天井部から口縁部にかけてなだらかに傾斜し、口縁部端がわずかに下方に折り曲げられている。外面にはシャープなロクロ調整痕が観察される。

鉢（第220図－４）：口縁部破片が１点出土している。胴部上半が外傾し、口縁部上端で僅かに外傾する。内外面にロクロ調整痕が認められる。

壺（第220図－13）：胴部上半と思われる破片が１点ある。外面では平行叩き目の上にロクロによる調整痕が認められる。内面にはシャープなロクロ調整痕がみられる。

甕（第220図－３・５～12）：口縁部破片が１点、胴部破片が８点ある。口縁部破片(3)では頚部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、口縁部上端の外面がわずかに内反する器形をなしている。外面にはロクロ調整痕が明瞭に認められる。胴部破片の器面調整技法には、外面が平行叩き目で内面がナデ調整のもの（７～10）、外面が平行叩き目で内面に格子状あて目がみられるもの（５・６）、外面が平行叩き目で内面に青海波状あて目がみられるもの(11)、内外面ともにロクロ調整痕がみられるもの（12）などがある。

出土状況と年代

いずれも表土出土、もしくは表面採集されたものであり、とくにまとまりは認められない。また、すべて破片資料のため、器形の全体的特徴が不明で、年代を限定できるものはない。細部の器形、調整技法の特徴からここでは一応奈良～平安時代に位置づけておきたい。

陶　　磁　　器

陶磁器の中で、実測図および拓本などを作成できた資料は25点である。これらには、陶器として甕・擂鉢・壺・鉢・埦・香炉・磁器として皿・埦がある。その特徴を述べ、さらに可能なものについては生産地や年代の検討を行ないたい。

陶器

甕：口縁部片・体部片・底部片がある（第219図－５～９）。

口縁部片（第219図－５）は小片のため、正確ではないが、口径50㎝前後と推定される。内側に稜が一段あり、受け口状をなす。口縁帯の幅は上端が欠損しているが、２㎝ほどと思われる。内外面ともヨコナデ調整が施されている。胎土は若干砂粒を含むが比較的均質である。焼成はやや軟質である。

体部片（第219図－６～８）はいずれも小片である。外面に自然釉のみられるものがある。肩部に「田」？に似た押印のあるものが１点ある（第219図－６）。調整は外面はナデである。内面には積上痕跡が明瞭に認められるものが多く、その上に雑なナデを加えているものもある。頚部に近い部分では内外ともヨコナデ調整がみられる。胎土は、砂粒を多く混じえ、焼成は堅緻である。

底部片（第219図－９）は体下半から底部にかけての破片で底径は約15㎝である。内外ともナデ調整である。いずれも酸化炎焼成であり色調は赤味を帯びている。

これらは器形・調整その他の特徴からみて最近県内でも発見され出した中世陶器に近似している（藤沼：1976・1977）。したがって、その所属時期は中世に属すると考えられる。生産地は明らかでない。

擂鉢：口縁部・体部片がある（第219図－１～４）。

口縁部片によると、体部は外傾し、それが口縁部でやや直立気味になる器形で、口縁部上面は平坦である。口縁部が内側に肥厚したもの（２・３）と、折り返したもの（１）との二者があり、後者では口縁部に釉が施されている。両者とも、内面に筋目のあるものがあり擂鉢と考えられるが、生産地・所属時期は不明である。

壺：口縁～体部片がある（第219図－10）。

体部はほぼ球形で口縁部がいくぶん上方に立つ。外面はていねいに磨かれているのに対し、内面は、口縁部を除きていねいな調整は認められない。胎土は均質で色調は黒灰色で、全体としてはむしろ瓦器質といえる。香炉の類であろう。生産地・年代は不明。

鉢：口縁部片がある（第219図－１～３）。

１は、内面に段がみられ、あるいは皿形に近いものかもしれない。内面および外面上部に茶

灰色紬が施されている。

２は、口縁部が外方に折れまがり端部は丸い。内面に一段の稜がある。かなり外傾する器形であり、浅鉢形と思われる。ロクロ調整ののち内外面とも灰色の釉が施されている。内面には文様の一部が認められるが、全容は不明である。１・２ともに所属時期は中世末か近世以降のものであろう。生産地は不明。

３は、口縁部が外方に折れまがり、器高が低く皿形に近い。ロクロ調整ののち内外に白灰色の釉が施されている。志野焼・天正の頃（楢崎彰一氏の教示による）。

皿：ほぼ完形のもの・体部片・体・底部片がある。（第218図－４～10、写真図版40－１）。

４は、口縁部が外傾する器形で高台が付いている。ロクロ成形であり、体下部には、回転ケズリの痕跡が明瞭に認められる。内外ともうすいピンク色の釉が施されている。美濃産・桃山時代に属する（楢崎彰一氏の教示による）。

５～10は、接合資料はないが胴一器形のものである。口縁部はやや外反し、端部内側に段がある。また体部中央にも段がみられる。ロクロ成形であり、削り出し高台を有する。内外に釉が施されるが、外面下部には及んでいない。生産地は不明であるが特徴的な器形・調整をもつものであり、年代とあわせて今後なお検討を加えたい。

埦：ほぼ完形のもの、底部片がある（第218図－11・12、写真図版40－２）。

11は体部がゆるやかにふくらんだ飯茶埦形のものでロクロ成形である。内外に淡黄色の釉が施されており貫入現象が認められる。

12は底部片のみで器形は明らかでない。両面及び、底部外面を除いて縁味白色の釉が施されている。いずれも生産地・所属時期は不明。

磁器

染付磁器片がある。器形は皿、または埦である。文様・釉・呉須等の違いにより、次の三者にわけられる。

１、全体的に呉須はいくぶん濃く、釉は若干青味がかっているもの。口縁部片・底部片がある（写真図版41－17･20）。口縁部片は外反するものであり、底部片はいずれも高台がある。破片のため、文様は明らかでないが写真図版41－17では外面唐草文、内面底部に梵字に近似した文様が配されている。また、写真図版41－20では底面に「□明成□年造」の文字書きがある。胎土は白く、精良である。中国製もしくは、初期伊万里製品と考えられる（楢崎彰一氏の教示による）。

２、１に対して呉須が淡くむしろ灰色に近いもの。口縁部･体･底部片がある（第218図－13～15）。古伊万里期のものに近似しているが、さらに時期が下るかもしれない。（写真図版41－19）

３、やや濃い目のコバルト色の文様がみられるもの。底部片がある（第218図－16）。皿形磁器の小片である。文様は印判によって描かれている。江戸時代末以降のものであろう。

土偶・斧状土製品・円板状土製品

土偶

本遺跡から出土した土偶は、10点である。これらについて観察と分類を行ないたい。

土偶の観察

出土した土偶について、残存部位・形態・文様・製作技法・製作工程を観察した。これらの観察結果を項目ごとに整理して述べていきたい（第73表）。

１．残存部

出土した土偶の中には、完全に原形をとどめているものはない。したがって各土偶を残存部によって分類すると、次のようになる。

A類……頭部・右腕部・胴下端部を除く他の部位が残存しているもの…１・２・９
B類……左右いずれかの胴上半部と胸部が現存しているもの…３・４・７・９
C類……腕部だけが残存しているもの…５
D類……脚部だけが残存しているもの…10
E類……胴半部だけが残存しているもの…６

A類のものはすべて原形の約80％以上が残存しており、欠損部位は全く共通している。また、B類のものは残存部が原形の約10～20％ほどで、出土数は最も多い。これらを左右の比でみると１：３になり、右が多い。C～E類のものの残存部はせいぜい原形の５％前後で出土数も１点ずつである。なお頭部が残存しているのは全くない。

２．形態

各土偶の平面形および断面形・乳房・正中線・貫通孔について観察を行なった。

〔平面形および断面形〕すべての資料に欠損部があるため、全体の平面形を完全に確認できるものはない。しかし比較的残存部が多く、ほぼ全形が復原できる資料では、すべて正中線に対して腕を左右に水平にのばした「†」字形をなしている。他の資料は残存部が少なく、平面形は不明である。断面形では乳房部以外の横断面の形が隅丸長方形をなすものと、ほぼ円形をなすものとがみられた。前者のものでは、胴中央部から胴下部にかけて胴部の幅がせばまり、厚さを増していることから横断面は楕円形に近くなっている。以上により、各土偶は平面形と断面形により、次のように分類される。

A類…平面形が「†」字形で、横断面がほぼ隅丸長方形のもの…１・２・８
B類…平面形が不明で、横断面がほぼ隅丸長方形のもの…３～７・８
C類…平面形が不明で、横断面がほぼ円形のもの…10

A類・B類のものは乳房以外は扁平な板状をなしているが、C類のものは全体として肉厚で立体的な表現がなされている。

〔乳房〕各土偶について乳房の有無を観察し分類すると、次のようになる。

A類…乳房が表現されているもの…１～４・６・７
B類…乳房が表現されていないもの…８
C類…乳房が表現されているかどうか不明なもの…５・９・10

A類のうち３・４・６は胴部のわずかな高まりや乳房の剥落痕跡によって乳房が表現されていたことが確認されたものである。またB類に分類された８では胴部の大部分が残存するにもかかわらず、乳房の表現は全く見られず、はじめから乳房が表現されなかったものである。

A類の７では乳房のつけ根の部分に接合痕跡を残しており、粘土の貼付により乳房を表現していたことが観察された。また、６では乳房の剥落痕跡から粘土の貼付によって乳房が表現されていたことが推定される。他の資料では、調整や文様が施されているため乳房の表現方法は観察できなかった。

〔正中線〕正中線は、胴部の対象軸線上に表現された線である。正中線の有無を検討できる土偶は、５点（１・２・３・６・８）ある。これらの土偶には、すべて何らかの形で正中線の表現がみられる。その表現方法はさまざまで、刺突をもつ隆起線により両乳房から胴下部にかけて「Y」字状に表現されているもの(２)、刺突をもつ平行沈線により直線的に表現されているもの(６・８)、連続した渦巻により直線的に表現されているもの（１・３）がみられる。

〔貫通孔〕貫通孔のみられる資料が１点（９）あった。肩部から胴側部にかけて長径６㎜、短径４㎜ほどの楕円形の小孔が２本貫通している。孔の周辺を観察したが紐ずれなどの痕跡は認められなかった。

３．文様

出土土偶には、残存部に文様をもつものともたないものの２種がある。前者が圧倒的に多く、後者は１点だけである。文様をもつものについては、地文・文様表現技法・文様単位の観察を行なった。

〔地文〕地文をもつものともたないものとがあり、後者が多い。地文をもつものは１点（１）だけで全面にＬＲ縄文が縦方向に施文されている。施文は浅く、他の文様によって切られている。

〔文様表現技法〕各土偶にみられる文様は、すべて無調整沈線文によって表現されている。無調整沈線文はその形状により、幅0.6～1.0㎜ほどで断面形「U」字状のもの（無調整沈線A）と幅0.2㎜ほどで断面形が「V」字状のもの（無調整沈線B）の２種に分けられる。工具としては、前者が箆状工具、後者が鋭い縁辺をもつ工具（剥片など）が考えられる。

〔文様単位〕文様単位として把握できるものには、平行沈線文・渦巻文・三角状文・「⊥」状文がある。それぞれの文様表現技法および施文部位を観察すると、次のようになる。

〈平行沈線文〉複数の沈線を平行に施すことによって文様を構成しているもので、沈線は各々が一本ずつ引かれており、正確に平行状態を示すものは少ない。主に無調整沈線Aによって表現されているが、同一の土偶で無調整沈線Aによるものと無調整沈線Bによるものの両者がみられることもある（2）。平行沈線文は土偶の各部にみられ、部位によって施文方向に一定の規則性が認められる。

〈渦巻文〉「の」字状の渦巻であり、無調整沈線Aによって表現されている。胴部上半の正面、背面に縦に３列並列して施文される場合（１・３・４）、胸部中央に縦に並列して施文される場合（６）、背面の胴部上端に単独で施文される場合（２）がある。

〈三角状文〉斜行する沈線によって三角形状の区画をつくり出しているもので、無調整沈線Aによって表現されている。縦に３列に並ぶ渦巻文を連結する部分に限ってみられる文様（１・３・４）で、渦巻文との強い関連性がうかがえる。

〈「⊥」状文〉沈線によって「⊥」状の文様を構成するもので、無調整沈線Aによって表現されている。施文部位は、背面の胴下部中央に限られている（１・２）。両側に弧状の平行沈線文が施される場合が多い。

各土偶を残存部における文様の有無および文様単位で分類すると、次のようになる。

Ⅰ類．文様をもつもの

- A……平行沈線文・渦巻文・三角状文・「⊥」状文をもつもの…１
- B……平行沈線文・渦巻文・「⊥」状文をもつもの…２
- C……平行沈線文・渦巻文・三角状文をもつもの…３・４
- D……平行沈線文・渦巻文をもつもの…５
- E……平行沈線文・のみのもの…５・８・９・10

Ⅱ類．文様をもたないもの…７

Ⅰ類のうちＩＣ類のものは、残存部の文様の類似からＩＡ類に含まれる可能性がある。同様に、ＩＤ類およびＩＥ類のうちの５・９・10は、ＩＡ類・ＩＢ類いずれかに含まれる可能性がある。

４．製作技法

〔素地土〕素地土には、シルトと粘土がみられた。大部分のものはシルトであり、粘土のものは１点だけである（２）。いずれも小量の砂粒（雲母・石英・長石など）を含んでいる。

〔成形〕成形痕跡を明瞭にとどめている資料はないが、胴側縁が素地土の重ね目とみられる部分で剥落したものがある（９）。

〔調整〕調整には、ナデによるものとミガキによるものの２種がみられる。ナデやミガキは全

体に軽く施したものが多いが、中には強いナデが加えられ、その部分が凹んでいるものがみられた（7）。

〔色調〕表面の色調には、にぶ黄橙・にぶ橙・灰味黄茶・明るい茶・黄味白などがみられ、にぶ橙や明るい茶のものがやや多い。断面の素地土の色調は、表面の色調と一致する場合が多いが、中には表面よりもやや黒色味を帯びた暗い色のものもみられる。

５．製作工程

各土偶の製作工程を観察し、それらを総合すると、おおむね次のような手順が考えられた。

⑴ 素地土による体部の成形

↓

⑵ 乳房の表現（貼付）

↓

⑶ 表面の調整（ナデ・ミガキ）

↓

⑷ 地文の施文（ＬＲ縄文縦回転）

↓

⑸ 文様施文（この場合、渦巻文→平行沈線文の関係が認められた。）

↓

⑹ 焼成

土偶の分類

以上、各土偶について観察を行なった。その結果、出土土偶について観察項目ごとの特徴を明らかにすることができた。これらの特徴のうち、断面形態・乳房の有無・文様のあり方をもとに各土偶を分類すると、第73表のようになる。

この分類に基づいて、類別ごとの土偶の形態および文様の全体的な特徴を整理する。

ⅠＡ1類

この類に入る土偶は、５点（１・２・３・４・６）ある。これらのうち１・２が、この類の典型的な例である。

平面が「†」字形の扁平な板状土偶で、胴中央部から胴下部にかけて幅がせばまり、厚さを増している。いずれも乳房の表現がみられ、正中線は、縦に並ぶ渦巻文や平行沈線で表現されるもの（１・２・３）と、刺突を伴う隆起線によって両乳房から胴下部にかけて「Y」字状に表現されるもの（２）とがある。

文様は、正面・背面ともに、胴上部では横方向および胴側縁にそった平行沈線文、胴中央部では横方向にはしる多条の平行沈線文が施文されている。胴中央部に施文された平行沈線文に

は、縦に並ぶ渦巻文や三角状文によって連結されているものもある（１・３・４）。胴下部では、正面に縦および胴側縁にそった平行沈線文、背面には正中線上に「⊥」状文、その両側に弧状の平行沈線文が施文されている（１・２）。

これらの平行沈線文・渦巻文・三角状文は無調整沈線Ａによる場合が多いが、胴中央部に施された平行沈線文のなかには、無調整沈線Ｂによるものが併用されている場合もある（２）。地文は、ＬＲ縄文をもつもの（１）と地文をもたないもの（２・３・４・６）とがあり、後者が多い。

ＩＡ２類

この類の土偶は、１点（７）である。

平面形不明の扁平な板状土偶で、貼付による乳房の表現がみられる。残存部では文様は認められず、強いナデによる調整痕を残している。

ＩＢ類

この類の土偶は、１点（８）である。

平面が「†」字形の扁平な板状土偶で、胴中央部から胴下部にかけて幅がせばまり、厚さを増している。ＩＡ類に比べて、腕は短い。乳房の表現はみられない。正中線は、刺突をもつ縦の平行沈線によって表現されている。

文様として、胴上部・胴下部には、正面・背面ともに胴側縁にそった２～３条の平行沈線文、胴中央部の正面には、横方向の平行沈線文が施文されている。平行沈線文は、すべて無調整沈線Ａによるものである。地文はもたない。

ＩＣ類

この類の土偶は、２点（５・９）ある。

平面形不明の扁平な板状土偶である。残存部分が少ないため、乳房や正中線などは不明である。腕のつけ根の部分に、２個の貫通孔がみられるものもある（９）。残存部に、無調整沈線Ａによる多条の平行沈線文が施文されている。地文はもたない。

残存部の形態的・文様的特徴は、ＩＡ１類に近似している。

II類

この類の土偶は、１点（10）である。

平面形は不明であるが、肉厚で立体的な表現をもつ土偶の脚部である。

脚部に、側縁にそった無調整沈線による平行沈線文が施文されている。地文はもたない。

脚部以外の形態的・文様的特徴は、不明である。

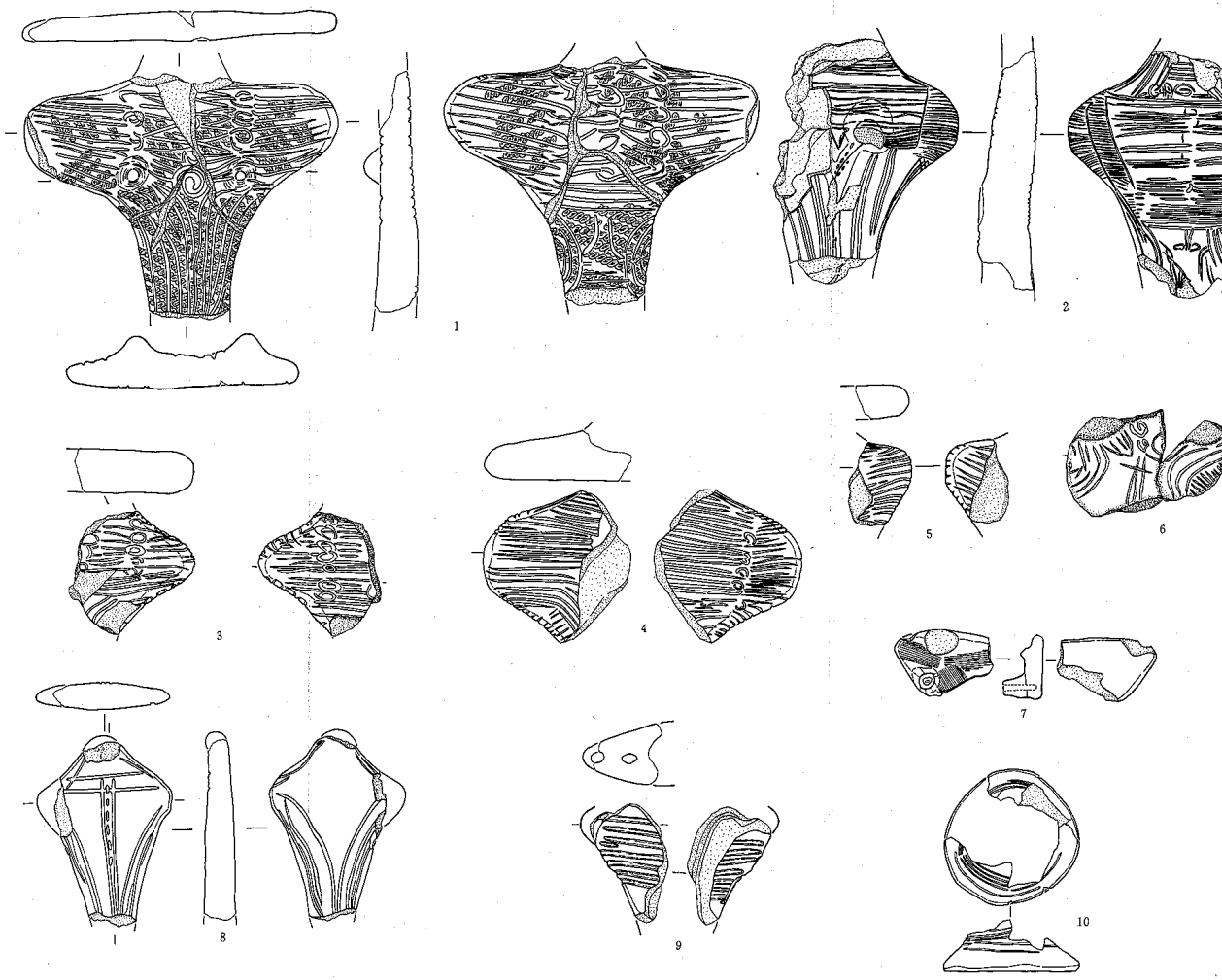
土偶の分類相互の関係

まず土偶の形態について検討してみたい。

Ｉ類は、横断面が扁平な板状土偶である。これらの中で、残存部の多いものはすべて「†」

第73表　土偶の分類

形態的特徴		文様的特徴	該当資料
I 扁平で板状のもの	A 乳房をもつもの	1. 文様あり 平行沈線文 渦巻文 「⊥」状文	1・2・3 4・6
		2. 文様なし	7
	B 乳房をもたないもの	文様あり (平行沈線文)	8
	C 乳房の有無不明のもの	文様あり (平行沈線文)	9・5
II 肉厚で立体的なもの	乳房の有無不明のもの	文様あり (平行沈線文)	10



字形の平面形をもっており、残存部の形態的類似から平面形不明のものも、ほぼ同じ平面形になるものと考えられる。これらの土偶は、さらに乳房の有無により細分された。この点については、乳房が表現されているＩＡ類と乳房表現のみられないＩＢ類の２つのバラエティが認められた。量的には、前者が多い。乳房不明のＩＣ類がＩＡ類・ＩＢ類のいずれかに入るかは両者の形態的な差がほとんどないため不明である。正中線は、ＩＡ類・ＩＢ類ともに残存部が多い場合は何らかの表現がなされており、共通性がみられる。

以上から、Ｉ類の土偶は乳房の表現を除いては、形態的にまとまりをもち、極めて近似した特徴をもつものと考えることができる。

Ⅱ類は、台脚状をした脚部である。一例だけであるが、肉厚で立体的な表現がなされている点でＩ類の土偶とは形態的に大きな違いがみられる。

次に、文様について検討してみたい。

Ｉ類には、文様をもつものと、もたないものとが含まれている。この場合、ＩＡ２類としたものは残存部の少ない資料であり、全体的特徴と言い得るかどうかには多少の疑問がある。文様をもつものはいずれも平行沈線文を主体としており、部位ごとの施文方向もほぼ一致している。

これらの平行沈線文についてさらに検討すると、ＩＣ類の平行沈線文は、多条の沈線で表現されている点でＩＡ１類により近似していると言える。文様単位の組合せをみると、ＩＡ類が平行沈線文・渦巻文・三角状文・「⊥」状文などが施文部位に一定の規則性をもって施文されているのに対して、ＩＢ類では平行沈線文のみによって簡潔に施文されている点で若干の違いがみられる。

Ⅱ類では、脚周縁にそって平行沈線文がみられる。多条の無調整沈線によって表現されている点、および無調整沈線の形状（幅・深さなど）において。Ｉ類のものと近似していることから、Ｉ類との強い共通性をもつものとみることができよう。

以上をまとめると、本遺跡の土偶は形態的には大きく扁平で、板状のものと肉厚で立体的なものとに大別され、文様的には、両者は共通した特徴をそなえていることが指摘できよう。

斧状土製品

棒状の土製品で横断面の形が楕円形をなし、基部に貫通孔が穿たれ、斧状の先端部をもつものを斧状土製品とした。本遺跡では完形に近いものと、一部が欠損しているものの２点が出土している（第301図－１・２）。

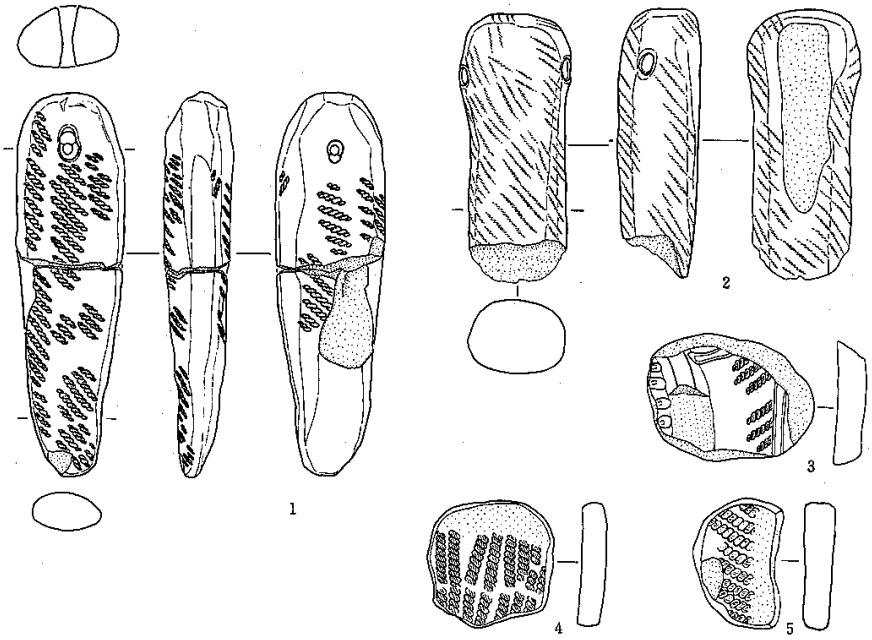
形態

〔平面形と断面形〕１は平面形から剣形をしており、基部から胴部にかけて細くなり、先端部は丸味をもっている。２は先端部が欠損しているため全体形は不明であるが、胴部の両側はほぼ平行で基部がやや広くなっている。断面形は１が扁平な楕円形、２が円に近い楕円形である。

〔貫通孔〕１・２ともに基部に焼成前に穿たれた貫通孔がみられる。貫通孔は、１では断面の短軸方向に穿孔されているのに対して、２では断面の長軸方向に穿孔されている。いずれも孔は両側から棒状工具により穿たれている。孔の周辺には粘土の盛り上がりがみられ、１ではその周辺に軽いナデ調整が加えられている。紐ずれなどの痕跡は観察できなかった。

製作技法

〔素地土〕両者ともに石英や長石を含む Sandy silt である。



第301図　斧状土製品・円板状土製品

〔器面調整〕両者ともにナデ調整が観察される。
〔地文〕両者ともに器面調整後、縄文が施文されている。１はＬＲ縄文が表裏両面に、縦方向に回転施文されている。縄文施文後、軽いナデ調整が加えられている。２ではＬｒ縄文が表裏両面および側面に施文されており、施文方向は大部分が縦回転であるが一部に斜方向の部分もみられる。
以上２点の斧状土製品について観察した。両者を比較すると、貫通孔の穿孔方向に形態的な違いがみられるだけで、他の点においては基本的な違いは認められない。

円板状土製品

土器片を加工して円形に仕上げてあるものを、円板状土製品とした。本遺跡では３点出土している。（第301図－３～５）
平面形では不整円形のものと楕円形のものがあり、いずれも円形を基調としている。３点とも土器の胴部破片を素材としており、４・５ではその周縁を敲打調整によって丸く加工しており、５ではさらにその後研磨を加え滑らかに仕上げている。３は周縁の磨滅が著しく調整痕跡は、明らかでない。素材となった土器片を観察すると３・４・５はいずれもＬＲ縄文の地文をもっており、３は他に隆起線文Ｃや刺突文による文様が施文されている。胎土・焼成・色調などは他の土器片に比べ特に変わった点は認められなかった。また用途を示す痕跡も認められなかった。

剥片石器とその素材

ここでは、剥片剥離技術によって製作された石器を剥片石器として扱うことにしたい。したがって、剥片剥離技術によって生産された剥片と、その工程において生じた石核が、剥片石器の素材となる。

上深沢遺跡から出土した剥片石器とその素材は、合計1,100点である。これらについて、形態・技術的特徴・石材・使用痕跡・出土状況等を観察し、検討を加えたい。

剥片石器

１．剥片石器の大別

剥片石器は合計321点出土している。これらは形態・技術的特徴によって、次の４群に大別することができる。

第１群：尖頭部と基部からなるもの。

第２群：つまみ部と身幅の広い刃部からなるもの。

第３群：つまみ部と尖頭状の錐部からなるもの。

第４群：不定形なもの。

第１群の剥片石器は、素材の周縁全体と背・腹両面に調整剥離が加えられているものによって、大部分が占められる。尖頭部は一般に鋭いが、基部の形態は極めて多様である。

第２群の剥片石器は、深い抉りが入れられることによって、つまみ部がつくり出されているものである。抉りの最も深い部分はつまみ部が刃部よりも細くなっている。また、刃部はつまみ部よりも、幅が広く大きい。

第３群の剥片石器は、第２群と同様抉りが入れられることによって、つまみ部がつくり出されている。しかし、このつまみ部は錐部よりも幅が広く大きい。また、抉りの最も深い部分は、錐部と同じか僅かに太くなっている。

第４群の剥片石器は、極めて多様で、形態的特徴をとらえにくい。技術的特徴は素材の周縁に対する調整剥離であるが、一部にその後截断しているものも認められる。

２．剥片石器第１群

形態および技術的特徴

（1）石器の観察

剥片石器第１群は110点出土している。これらの石器群を検討するために、基部形態・尖頭部側縁形態・長さと幅の比率・重量について観察と計測を行なった。

基部形態

剥片石器第１群の基部形態には次のようなものが認められる。

Ａ、凹基：基部の中央にえぐりを入れて凹状にしているもの。

Ｂ、平基：基部をほぼ平坦にしているもの。

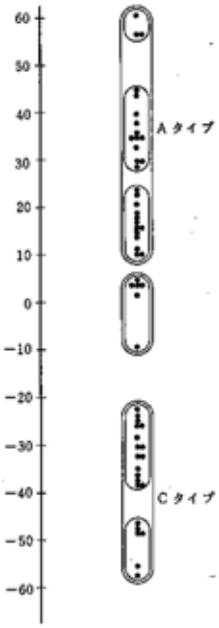
Ｃ、丸基：基部を丸くふくらませているもの。

Ｄ、凸基：基部側縁にえぐりを入れて、凸状の茎をつくり出しているもの。

　　１、基部側縁のえぐりが深いもの。

　　２、基部側縁のえぐりが浅いもの。

Ｅ、棒状基：基部全体を棒状にしているもの。



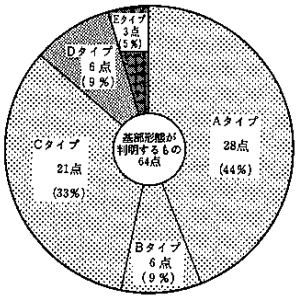
第302図　剥片石器
第１群えぐり度（α）

また、Ａ～Ｃタイプの基部についてその「えぐり度（α）」を計測したところ、次のような結果が得られた。

１、基部形態Ａ（凹基）のものは「えぐり度（α）」の値が10～61の範囲におさまる。また、この中で、「えぐり度（α）」は10～24・28～45・57～61の部分にやや集中する傾向がみられる。

２、基部形態Ｂ（平基）のものは「えぐり度（α）」の値が－９～５の範囲におさまる。

３、基部形態Ｃ（丸基）のものは「えぐり度（α）」の値が－24～－57の範囲におさまる。



第303図　剥片石器第１群基部
形態別数量グラフ

この中で、「えぐり度（α）」は－24～－38・－46～－57の部分にやや集中する傾向がみられる。

剥片石器第１群で以上のような基部形態が判明するものは、110点の資料中64点である。残り64点は破損が著しく、基部形態は不明である。

基部形態が判明する資料の各タイプにおける量的関係を示すと第303図のようになる。Ａタイプ（凹基）とＣタイプ（丸基）のものが非常に多く、前者は44%、後者は33%を占める。その他のものは少ない。また、これらを、無茎のＡ～Ｃタイプ・有茎のＤタイプ・棒状のＥタイプという観点から検討すると、16：２：１となり無茎のＡ～Ｃタイプのものが極めて多いことを示している。

尖頭部側縁形態

剥片石器第１群の尖頭部側縁形態には次のようなものが認められる。

Ⅰ、尖頭部側縁が強くふくらんでいるもの（特に、基部に近い部分が顕著なもの）。

Ⅱ、尖頭部側縁がほぼ平坦か基部に近い部分が僅かにふくらんでいるもの。

Ⅲ、尖頭部側縁が凹んでいるもの。

また、尖頭部側縁についてその「ふくらみ度（β）」を計測したところ、次のような結果が得られた。なお、βの値は完形品の場合左・右の平均値を使用したが、同一資料の両側縁では近似した値を示すものが多いことも判明した。したがって、完形品以外のものでも、一方の側縁が残っている場合は、信頼できる値を示すものとして扱った。

１、尖頭部側縁形態Ⅰタイプのものは「ふくらみ度（β）」の値が18～27の範囲におさまる。

２、尖頭部側縁形態Ⅱタイプのものは「ふくらみ度（β）」の値が３～16の範囲におさまる。

３、尖頭部側縁形態Ⅲタイプのものは「ふくらみ度（β）」の値が-6～-8の範囲におさめる。

剥片石器第１群で、以上のような尖頭部側縁形態が判明するものは、110点の資料中72点である。残り38点は破損のため、不明である。これらの量的関係を検討すると、Ⅱタイプが非常に多く、Ⅰタイプは少量である。Ⅲタイプは極く僅かである。

長さと幅の比率

剥片石器第１群は三角形を基本とした形態を示すものが多い。全体の形態的特徴の傾向を知る手がかりとして、「長さ」と「幅」を計測し、「長幅指数（γ）」を求めた。その結果、次のような傾向が認められた。

１、長幅指数（γ）の値は99～301の範囲におさまる。

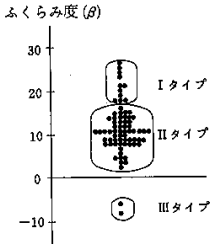
２、長幅指数（γ）の値は113～147の範囲にやや集中している。

重量

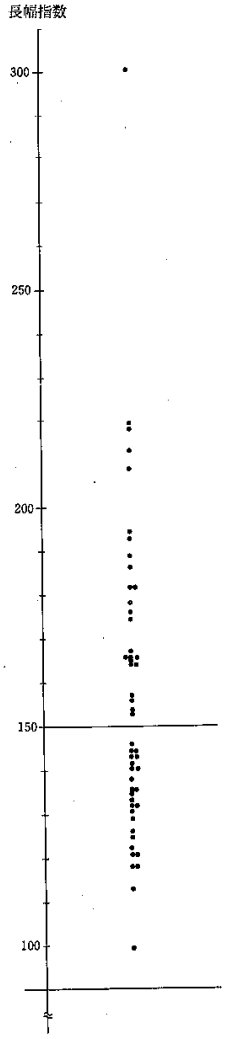
剥片石器第１群の中で、完形品に限定してその重量を計測した。その結果、次のような傾向が認められた。

１、重量は0.2～8.7gの範囲におさまる。

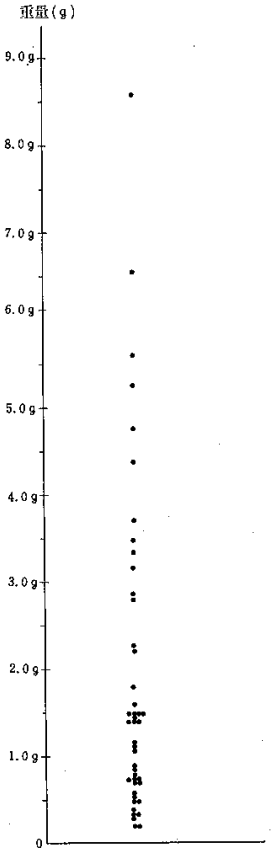
２、重量は0.2～1.5gの範囲にやや集中している。



第304図　剝片石器第Ⅰ群
ふくらみ度（β）
頻度分布



第305図　剝片石器第Ⅰ群
長幅指数頻度分布



第306図　剝片石器第Ⅰ群
重量頻度分布

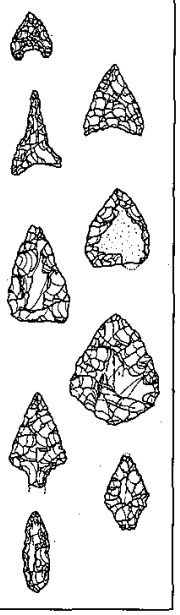
（2）石器の分類

剥片石器第１群を前項で述べた「基部形態」、「尖頭部側縁形態」の観察結果に基づいて、総合的な分類を行ないたい。

まず、本群の石器を基部形態によってA類（凹基）・B類（平基）・C類（丸基）・D類（凸基）・E類（棒状基）の５類に大別する。D類のものは基部側縁の状態によってD_1類（えぐりの深いもの）・D_2類（えぐりの浅いもの）に細分される。これらをさらに、尖頭部の側縁形態によって分類すると第74表ようになる。

第74表　剥片石器第１群の分類

	基部形態		尖頭部側縁形態	分類
剥片石器第一群（尖頭部と基部からなるもの）	A タイプ（基部が凹状のもの）		I タイプ（側縁が強くふくらむもの）	A I 類
			II タイプ（側縁が平坦か、ややふくらむもの）	A II 類
			III タイプ（側縁が凹むもの）	A III 類
	B タイプ（基部が平坦なもの）		I タイプ（側縁が強くふくらむもの）	B I 類
			II タイプ（側縁が平坦か、ややふくらむもの）	B II 類
	C タイプ（基部が丸いもの）		II タイプ（側縁が平坦か、ややふくらむもの）	C II 類
	D タイプ（基部が凸状のもの）	D_1タイプ（えぐりが深いもの）	II タイプ（側縁が平坦か、ややふくらむもの）	D_1 II 類
		D_2タイプ（えぐりが浅いもの）	II タイプ（側縁が平坦か、ややふくらむもの）	D_2 II 類
	E タイプ（基部が棒状のもの）		II タイプ（側縁が平坦か、ややふくらむもの）	E II 類



（3）石器の形態および技術的特徴の相互関係

基部形態と尖頭部側縁形態

基部形態と尖頭部側縁形態の関係を検討するために第75表の相関表を作成した。その結果、全体に共通する相互の関係は認められなかった。しかし、詳細に両者の関係を検討すると、部分的にではあるが、次のような特徴が判明した。

①尖頭部側縁形態Ｉタイプは基部形態Ａ・Ｂタイプのものに認められる。

②尖頭部側縁形態Ⅱタイプは基部形態Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅタイプのものに認められる。

③尖頭部側縁形態Ⅲタイプは基部形態Aタイプのものだけに認められる。

石材とその選択性

剥片石器第１群の石材としては、硬質頁岩（52点）、珪化凝灰岩（24点）、めのう（17点）、黒曜石（９点）、石英安山岩（１点）が認められる（第307図）。

これらの石器群の中で、分類可能な資料と石材の関係を検討すると、次のようになる（第76表）。

①頁岩はA～E類のすべてに認められる。

②珪化凝灰岩はA・B類にも僅かに認められるがC類に多い。

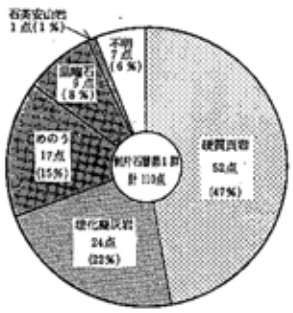
③めのうはA・B・C・D類に僅かに認められる。

④黒曜石はB・C・D類に僅かに認められる。

⑤石英安山岩はB類に僅かに認められる。

このように、石材として約$\frac{1}{2}$を占める頁岩は、形態的な対応も広い。

以上の観察結果は、分類可能な資料があまり多くない（44点）ことから、その信頼度は十分なものとはいえない。一つの傾向として理解するにとどめたい。



第307図　剥片石器第Ⅰ群石材別数量グラフ

第75表　基部形態と尖頭部側縁形態

基部形態＼尖頭部側縁形態	Ⅰタイプ	Ⅱタイプ	Ⅲタイプ	計
Aタイプ	3	12	1	16点
Bタイプ	2	3	0	5点
Cタイプ	0	20	0	20点
Dタイプ	0	6	0	6点
Eタイプ	0	1	0	1点
計	5点	42点	1点	48点

第76表　剥片石器第Ⅰ群類別石材

分類＼石材	硬質頁岩	珪化凝灰岩	めのう	黒曜石	石英安山岩	計
A Ⅰ類	5	1	0	0	0	6点
A Ⅱ類	4	1	3	0	0	8点
A Ⅲ類	0	0	1	0	0	1点
B Ⅰ類	0	0	1	0	0	1点
B Ⅱ類	1	1	0	1	1	4点
C Ⅱ類	9	5	1	2	0	17点
D_1 Ⅱ類	2	0	1	1	0	4点
D_2 Ⅱ類	2	0	0	0	0	2点
E Ⅱ類	1	0	0	0	0	1点
計	24点	8点	7点	4点	1点	44点

石器の機能

（1）形態および使用・破損状況の観察

剥片石器第１群の機能を検討するために形態的特徴・使用痕跡等について観察を行なった。それらをまとめると次のようになる。

①鋭い尖頭部と基部をつくり出しており、大部分のものが三角形を形態上の基調としている。

②尖頭部先端角は27.5°から67.5°のものまでが認められ、中でも33°から52°の間に集中する傾向にあり、先頭部先端が尖頭状になっている。

③基部は、凹状・平状・丸状・凸状・棒状など多様な形態が認められる。

④調整の方法を観察すると、入念な両面加工がなされている。厚さは1.9㎜から12.00㎜のものまでが認められ、1.8㎜から4.0㎜の間に集中する傾向にあり、一般に薄手である（第308図）。

⑤長さは10.0㎜から41.5㎜のものまでが認められ、15～30㎜の間にやや集中する傾向がある。重量は0.2gから8.7gのものまで認められるものがある。

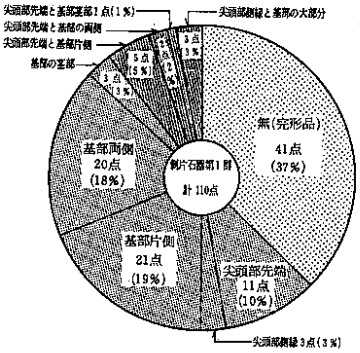
⑥基部付近にアスファルト上の付着物が認められるものがある。

⑦刃こぼれ、あるいは磨耗等の痕跡は認められない。

⑧破損状況を観察すると総数110点の中で完形品は僅か41点で、その他の69点はいずれかの部分が破損している。その破損部位を観察すると、次のようなものが認められる。

ａ：尖頭部先端が破損しているもの
ｂ：尖頭部側縁が破損しているもの
ｃ：基部の片側が破損しているもの
ｄ：基部の両側が破損しているもの
ｅ：基部の茎が破損しているもの
ｆ：尖頭部先端と基部の片側が破損しているもの
ｇ：尖頭部先端と基部の両側が破損しているもの
ｈ：尖頭部先端と基部の茎が破損しているもの
ｉ：尖頭部側縁と基部の大部分が破損しているもの

これらの中で量的に多いのは、基部の片側もしくは両側が破損しているものである。次に多いのは、尖頭部先端が砂損しているもので、その他のものはあまり多くない。



第308図　剥片石器第１群破損部別数量グラフ

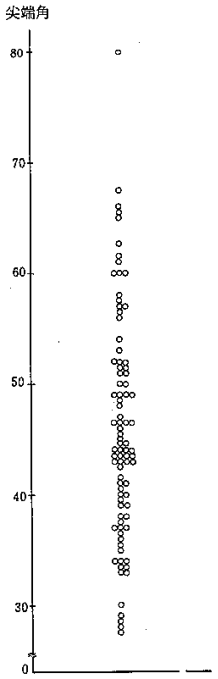
（2）石器の機能

以上、①～⑧の特徴をもとに本群の石器の機能を考えてみることにする。尖頭部先端が尖頭状で薄手であることから、物を刺突する機能が考えられる。そのことは尖頭部先端の破損していることからも裏付けられる。

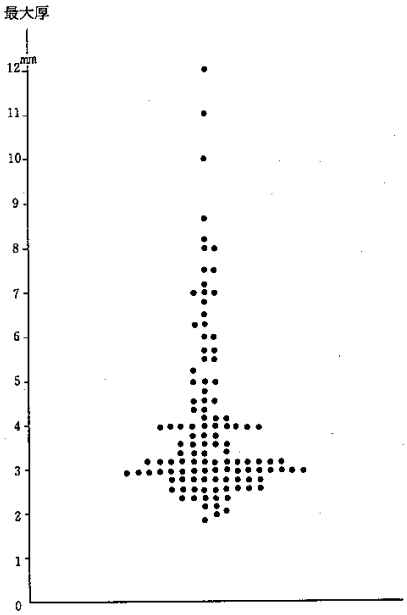
さらに基部を検討してみると、凹状・平状・丸状・凸状・棒状の形態のものが認められるがこれは石器を棒状の柄に固定するためと考えられる。基部付近にアスファルト状の付着物のあることが、これを裏付けている。このように、本群の石器は、棒状のものに固定された刺突の機能を有する石器と考えられる。

また、長さ・重量を検討してみると、小型で軽いものが多いことから、一定の力によって容易に遠くまで飛んで、刺突の機能を果たし得るものと考えられる。

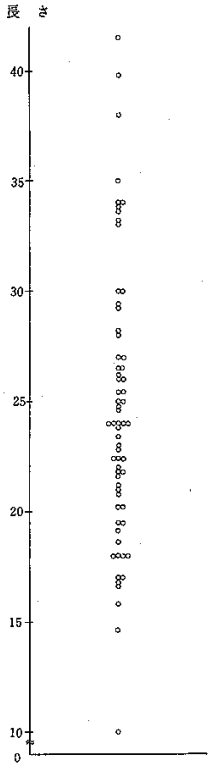
以上の検討の結果から、本群の石器の機能は、矢柄の先端に装着された鉄の可能性が強いものと推定される。



第309図　剝片石器第Ⅰ群
尖頭部尖端角の頻度分布



第310図　剝片石器第Ⅰ群最大厚頻度分布



第311図　剝片石器
第Ⅰ群長さ頻度分布

３．剥片石器第２群

形態および技術的特徴

（1）石器の観察

剥片石器第２群は35点出土している。これらの石器群を検討するために、刃部とつまみ部の関係・刃部を構成する縁辺の数・刃部先端の状態・調整の方法・重量について観察と計測を行なった。

刃部とつまみ部の関係

刃部とつまみ部の関係を、主要刃部（刃部の中で最も長い縁辺）とつまみ部軸線のあり方によって検討すると次のようなものが認められる。

Ａ：主要刃部に対してつまみ部軸線がほぼ平行なもの。
Ｂ：主要刃部に対してつまみ部軸線が斜方向で幾分平行に近いもの。
Ｃ：主要刃部に対してつまみ部軸線が斜方向で幾分直角に近いもの。
Ｄ：主要刃部に対してつまみ部軸線がほぼ直角なもの。

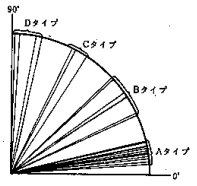
また、Ａ～Ｄタイプのものについて、「つまみ角（α）」（主要刃部の両端を結ぶ線とつまみ部軸線のなす角度）を計測したところ、次のような結果が得られた。

１、刃部とつまみ部の関係Ａタイプのものは、「つまみ角（α）」の値が４°～14°の範囲におさまる。

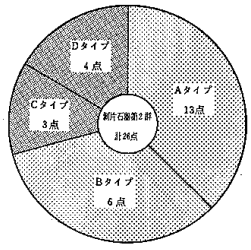
２、刃部とつまみ部の関係Ｂタイプのものは、「つまみ角（α）」の値が23°～44°の範囲におさまる。

３、刃部とつまみ部の関係Ｃタイプのものは、「つまみ角（α）」の値が58°～65°の範囲におさまる。

４、刃部とつまみ部の関係Ｄタイプのものは、「つまみ角（α）」の値が80°～89°の範囲におさまる。



第312図　剥片石器第２群つまみ角（α）頻度分布図



第313図　剥片石器第２群つまみ角(α)類別数量グラフ

次に、刃部とつまみ部の関係A～Dタイプのものの量的関係を検討すると、Aタイプのものが13点で量も多く、その次に多いのはBタイプで６点である。Cタイプは３点、Dタイプは４点で比較的少ない。

刃部を構成する縁辺の数

刃部は肩（左・右）、側辺（左・右）先端からなる。刃部を構成する縁辺の数を検討すると次のようなものが認められる。なお、ここで左・右の肩は対象から除いた。

Ⅰ：刃部が２つの縁辺から構成されるもの（左・右の側辺）。

Ⅱ：刃部が３つの縁辺から構成されるもの（左・右の側辺と先端）。

これらの量的関係を検討するとⅡタイプのものが19点で非常に多く、Ⅰタイプのものは５点で少ない。

刃部先端の状態

刃部の先端の状態を検討すると次のようなものが認められる。

a：刃部先端が尖頭状のもの。
b：刃部先端が平坦で幅の狭いもの。
c：刃部先端が平坦で幅の広いもの。

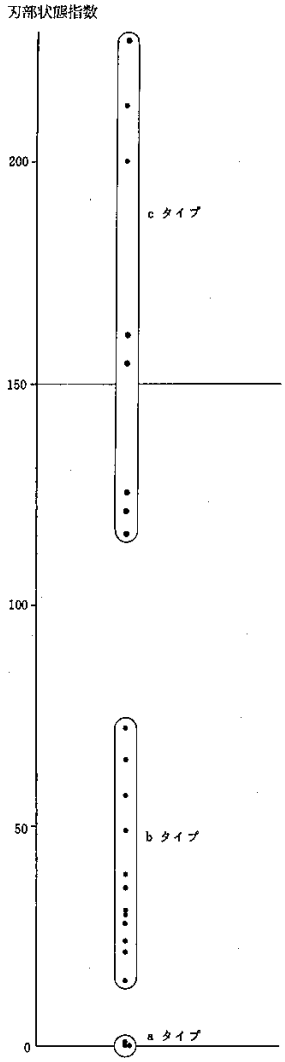
また、刃部先端の状態a・b・cのものについて、刃部側辺の両端を結ぶ線と先端の両端を結ぶ線の長さを計測し「刃部状態指数（β）」を求めたところ、次のような結果が得られた。

１、刃部先端の状態aタイプのものは「刃部状態指数（β）」の値が０である。

２、刃部先端の状態bタイプのものは「刃部状態指数（β）」の値が15～80である。

３、刃部先端の状態cタイプのものは「刃部状態指数（β）」の値が115～215である。

次に、刃部先端の状態a・b・cタイプのものの量的関係を検討すると、bタイプのものが17点で、非常に多く、aタイプのものは３点、cタイプのものは２点で少ない。



第314図　剝片石器第２群
刃部状態指数頻度分布

調整の方法

刃部の調整のあり方を検討すると、両面無調整のもの、片面調整のもの、両面調整のものがある。また、刃部の側辺や先端にお

けるこれらの調整のあり方を整理すると次のようなものが認められる。

１：側辺の一辺が両面無調整で、他の辺が片面調整のもの。

ａ：先端が両面無調整のもの。

ｂ：先端が片面調整のもの。

２：両側辺が片面調整のもの。

ａ：先端が両面無調整のもの。

ｂ：先端が片面調整のもの。

３：側辺の一辺が片面調整で、他の辺が両面調整のもの。

ａ：先端が片面調整のもの。

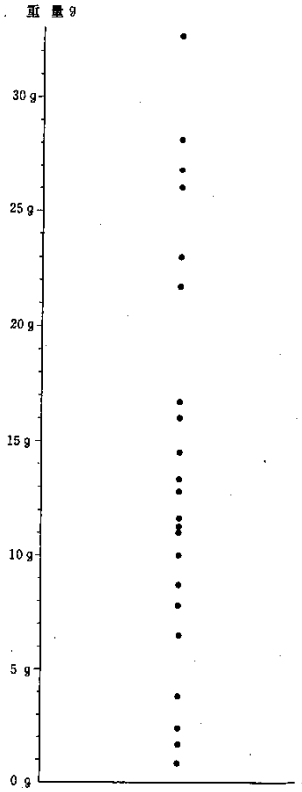
４：両側辺が両面調整のもの。

ａ：先端が両面調整のもの。

次に、調整の方法１～２・３・４タイプのものの量的関係を検討すると、１タイプが９点（ａ：３：ｂ：５・不明：１）、２タイプが13点（ａ：３・ｂ：８・不明：２）で多く、３タイプは４点（ａ：１・不明：３）、4aタイプは３点で少ない。

重量

剥片石器第２群の中で完形品に限定して、その重量を計測した。その結果、0.9～32.6gの範囲におさまり、特に集中する傾向は認められなかった。



第315図　剝片石器第２群
重量分布

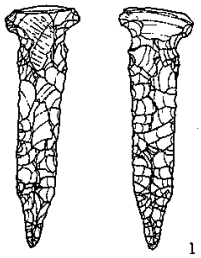
（2）石器の分類

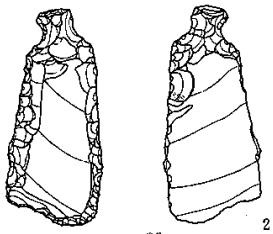
剥片石器第２群を前項で述べた「刃部とつまみ部の関係」、「刃部を構成する縁辺の数」、「刃部先端の状態」、「調整の方法」の観察結果に基づいて、総合的な分類を行ないたい。

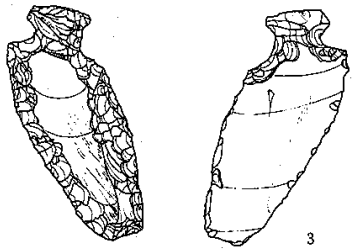
まず、本群の石器を「刃部とつまみ部の関係」によってA類（主要分類に対してつまみ部軸線がほぼ平行なもの）、B類（主要刃部に対しつまみ部軸線が斜方向で幾分平行に近いもの）、C類（主要刃部に対してつまみ部軸線が斜方向で幾分直角に近いもの）、D類（主要刃部に対してつまみ部軸線がほぼ直角なもの）の４類に大別する。これらをさらに、「刃部を構成する縁辺の数」、「刃部先端の状態」を基準として細分すると第77表のようになる。

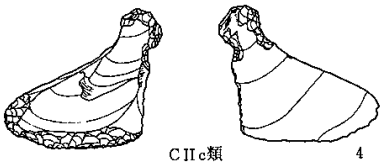
第77表　剝片石器第２群の分類

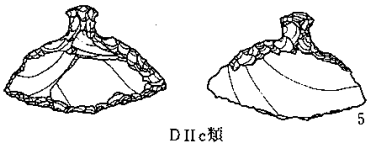
	刃部とつまみ部の関係	刃部を構成する縁辺の数	刃部先端の状態	調整の方法	分類
剝片石器第二群（つまみ部と身幅の広い刃部からなるもの）	A タイプ（主要刃部に対してつまみ部軸線がほぼ平行のもの）	I タイプ（二つの縁辺から構成されるもの）	a タイプ（尖頭状のもの）	2bタイプ 4aタイプ	AIa類
		II タイプ（三つの縁辺から構成されるもの）	b タイプ（平坦で幅の狭いもの）	1aタイプ 1bタイプ 2aタイプ 2bタイプ 3aタイプ	AIIb類
	B タイプ（主要刃部に対してつまみ部軸線が斜方向で幾分平行に近いもの）	II タイプ（三つの縁辺から構成されるもの）	b タイプ（平坦で幅の狭いもの）	1aタイプ 2aタイプ 2bタイプ	BIIb類
	C タイプ（主要刃部に対してつまみ部軸線が斜方向で幾分直角に近いもの）	II タイプ（三つの縁辺から構成されるもの）	c タイプ（平坦で幅の広いもの）	1bタイプ 2bタイプ 4aタイプ	CIIc類
	D タイプ（主要刃部に対してつまみ部軸線がほぼ直角なもの）	II タイプ（三つの縁辺から構成されるもの）	c タイプ（平坦で幅の広いもの）	1bタイプ 2bタイプ	DIIc類


1
AIa類


2
AIIb類


3
BIIb類

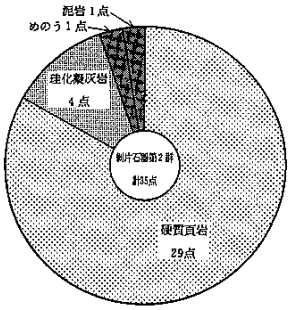

4
CIIc類


5
DIIc類

石材とその選択性

剥片石器第２群の石材は、硬質頁岩が29点、珪化凝灰岩が４点、泥岩が１点、めのうが１点である。これらの中で、硬質頁岩が大部分を占め、その他の石材は非常に少ない。このことから、石材の選択に大きな限定があったものと考えられる。

また、頁岩以外の石材が一定の形態を示すものだけに限定して選択されたか否かについては、全体の資料が少ないため不明である。



第316図　剥片石器第２群
石材別数量グラフ

石器の機能

（1）使用痕跡の観察

剥片石器第２群の使用痕跡には付着物・磨耗・線状痕・擦痕などがある。

付着物にはアスフファルト状のもので、つまみ部の最も抉りの深い部分（基部）にみられる。このような痕跡は顕著なものではないが、部分的に斑状に付着した状態で観察され、38点の資料中６点に認められる。

磨耗・線状痕・擦痕は刃部にみられる。刃部における使用痕跡のあり方を整理すると次のようになる。

Ａ、刃部に使用痕跡が観察されないもの。

Ｂ、無調整の刃部側縁に、磨耗が観察されるもの。

Ｃ、刃部の調整剥離面側に磨耗痕が観察され、無調整西側に使用痕跡が観察されないもの。磨耗の及ぶ範囲によって、次の２種がみられる。

C_1：刃部側縁にだけ認められるもの。

C_2：刃部側縁と調整剥離面の稜線上にみられるもの。

Ｄ、刃部の調整剥離面側と無調整西側に、磨耗が観察されるもの。調整剥離面側の磨耗は、側縁と調整剥離面の稜線上に認められる。

Ｅ、刃部の両調整剥離面側に磨耗が認められるもの。この磨耗は側縁と調整剥離面の稜線上に認められる。

Ｆ、刃部の調整剥離面側に磨耗・無調整西側に擦痕が観察されるもの。磨耗は側縁と調整剥離面の稜線上に認められる。擦痕の方向には次の２種がある。

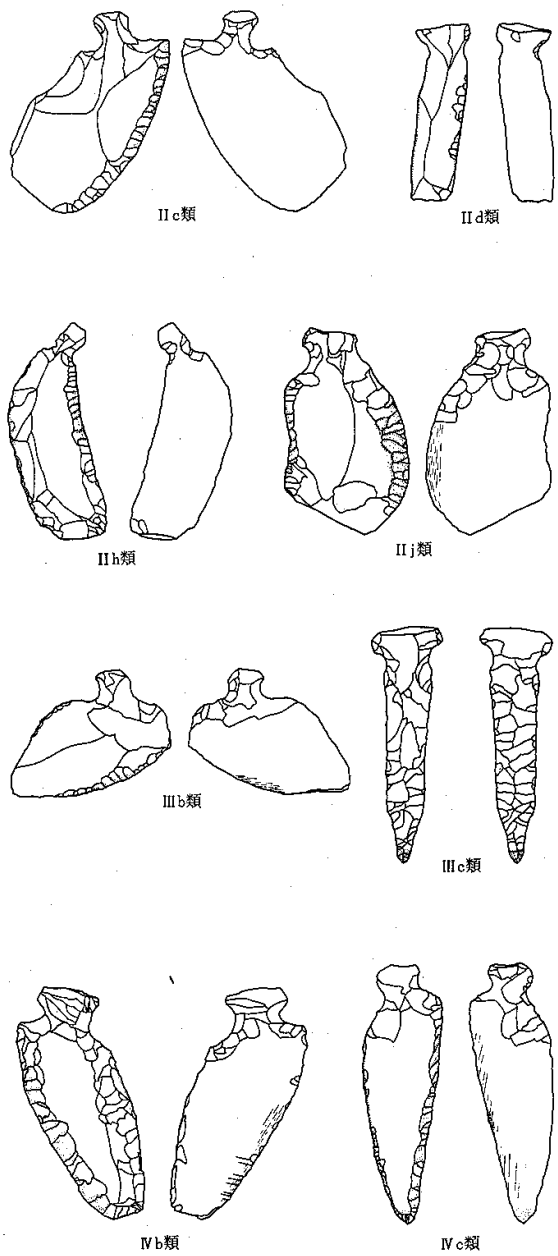
F_1：擦痕が刃部側縁に対して平行なもの。

F_2：擦痕が刃部側縁に対して斜方向なもの。

Ｇ、刃部の調整剥離面側に磨耗、無調整面側に擦痕・線状痕が観察されるもの。磨耗は側縁と調整剥離面の稜線上に認められる。擦痕・線状痕の方向によって次の２種がみられる。

第78表　使用痕跡の位置とそのあり方

種類＼項目		刃部における使用痕跡のあり方 肩	右側辺	左側辺	先端	数量
I		A	A	A	A	12
II	a	A	A	C_1	A	1
	b	A	A	C_2	A	2
	c	A	C_2	A	A	5
	d	A	C_1	B	A	1
	e	A	C_1	C_1	A	1
	f	A	C_1	C_2	A	1
	g	A	C_2	C_1	A	1
	h	A	C_2	C_2	A	3
	i	A	F_1	A	A	1
	j	A	F_1	C_2	A	1
III	a	A	A	A	C_1	1
	b	A	A	A	F_2	1
	c	A	A	A	E	3
IV	a	A	C_1	C_2	C_2	1
	b	A	C_2	G_2	C_2	1
	c	A	G_1	C_2	D	1



G_1：刃部側縁に対して斜方向の擦痕と直角方向の線状痕があるもの。

G_2：刃部側縁に対して平行な擦痕と斜方向の線状痕があるもの。

次に、使用痕跡の位置を検討した結果、次のようなものが認められた。

Ⅰ、刃部に使用痕跡が観察されないもの。

Ⅱ、刃部側辺に使用痕跡が観察されるもの。

Ⅲ、刃部先端に使用痕跡が観察されるもの。

Ⅳ、刃部側辺と先端に使用痕跡が観察されるもの。

使用痕跡の位置とそのあり方について整理したのが第78表である。これらを検討すると、次のような傾向を読みとることができる。

１、刃部の肩（左・右）には使用痕跡が観察されない。

２、無調整の刃部に使用痕跡が観察されるのは、６点の資料中１点のみで非常に少ない。またその使用痕跡も極めて微弱な磨耗である。

３、刃部先端に使用痕跡が観察されるもので、その両面全体に強い磨耗がみられるのは、先端が尖頭状（刃部先端の状態ａタイプ）のものに限られる。その他のものは、無調整面側に使用痕跡が観察される場合、擦痕や線状痕である。

（2）石器の機能

剥片石器第２群は、つまみ部と身幅の広い刃部からなるものである。これらは、従来その形態的特徴から天狗や狐の飯匙（七）・石匙・石小刀などと呼ばれていた。その機能については「剥皮具」（山崎：1891）・「皮剥具の類乎」(佐藤伝蔵：1896）・「切断を意味する小石器」で「料理用其他の小刀」（中谷：1925・1944)・「動物の皮を剥いだり肉を切ったりする小刀」（小林：1951）などと考えられていた。その論拠は、おもに形態的特徴の類似したものを民族事例に求めたものである。

この中で、中谷は次のような注目すべき見解を述べている。すなわち、形態的特徴から簡単に機能を類推したり、安易に民族事例と比較していたことを批判し、まず、分類を行ない、形態的特徴を整理すべきだとした。その結果、刃とつまみの角度によって「竪型」と「横型」に分類した。また、つまみの部分に「膠着料が付着している」ことに注意し、それらは「木製其他の柄を附して使用した事を示すもの」とした。そして、柄がつけられた場合、「竪型」と「横型」を問わず刃部だけが露出し、その状態は民族事例として知られているエスキモーのWoman's knifeと類似し、「料理用其他の小刀として用いられたと考えられる」という結論を導き出した。

上深沢遺跡の剥片石器第２群について、中谷・山崎・佐藤・小林の見解のいずれが正しいか簡単に結論づけることはできない。ここでは、形態的特徴と具体的な使用痕跡の観察結果に基

づいて検討を加えてみたい。

基部の使用痕跡とその成因：基部にアスファルト付着状物のみられるものが存在することは既に述べた。この付着物がどのような状況のもとで生じたものか、上深沢遺跡出土資料で検証することはできなかった。

このような付着物については、柄を固定する膠着料とする中谷の見解（中谷：1944）があり、機能を推定する上で重要な論拠の一つとなっている。一方、山王囲遺跡からは基部に紐が巻きつけられたものが発見されている（楠本：1973）。しかし、このような例が一般的なものなのかは、現段階では明らかでない。したがって、アスファルト状付着物が着柄のためのものか、それとも紐をつけるためのものなのか、即断することは差し控え、今後の類例の増加を待つことにしたい。

刃部の使用痕跡とその成因：刃部の形態的特徴、使用痕跡の種類とその位置については、既に述べた。ここでは、使用痕跡の成因を中心として、形態的特徴との間にみられる相互の関係について、検討を加えることにしたい。

Ⅰ：刃部に使用痕跡が観察されないもの。

これらは製作された後、全く使用されなかったか、使用痕跡が残らない程度の軽い使用がなされたものと推定される。したがって、具体的にどのような使用がなされたか不明なものである。また、このような資料は分類された類型や形態的特徴において、大きな偏りはない。

Ⅱ：刃部側辺に使用痕跡が観察されるもの。

これらはA類およびB類の中で、刃部先端が平坦で幅の狭い（ｂタイプ）ＡⅡ類・ＢⅡ類に認められる。

使用痕跡のあり方とその位置について、検討を加えてみたい。まず、刃部における調整剥離の有無がどのような意味をもつのか考えてみたい。使用痕跡は、調整剥離が加えられている刃部の場合、比較的良好に観察されるが、調整剥離が加えられていない刃部の場合は、観察されることが非常に少ない。このことは、刃部に加えられた調整剥離が、刃潰し加工などではなく、刃部を形成するためになされたものであることを示している。

使用痕跡の種類には磨耗と擦痕がある。磨耗は刃部の側縁と調整剥離面の稜線上にみられ、擦痕は無調整面側に観察される。磨耗はすべての資料にみられるが、擦痕が認められるのは２点である。磨耗の存在は、一定の硬さをもった対象物に対する、恒常的な使用を示している。擦痕のみられる資料を観察すると、その方向は刃部側縁に対して平行である。磨耗と擦痕の存在は、対象物が一定の硬さをもっていたことと同時に、部分的にであれ擦痕を生じさせる程の硬度をもつものであったことを示している。さらに、擦痕の方向が刃部側縁に対して平行であることは、石器が対象物の上で、刃部側縁に対して平行な運動をしたことを示している。

以上のように、使用痕跡の位置・種類などを考慮すると、主要刃部は調整剥離によって形成されているものが多いこと、その使用対象物は弱い力で容易に切断されるような柔らかいものではなく刃部側縁が磨り減ったり、擦痕を生じさせたりする一定の硬さを持ったものであることが推察される。

Ⅲ：刃部先端に使用痕跡が観察されるもの。

これらは各類において、刃部先端が尖頭状のもの（ａタイプ）と幅が広く平坦なもの（ｃタイプ）に認められる。

刃部先端が尖頭状のものの場合、使用痕跡は「切っ先」状の先端部分に限られ、その部分が全面にわたって強く磨耗している。先端部分に限定される強い磨耗は、対象物にあまり深くさしこまない状態で全般的に強い抵抗を受ける運動の存在を示している。

刃部先端が広く平坦なものの場合、使用痕跡の磨耗が及ぶ範囲は比較的広い。また、この中には無調整面側に刃部側縁に対して斜方向の擦痕が観察されるものがある。磨耗や擦痕の成因については、他の場合と同様なものと思われる。刃部側縁に対して斜方向の擦痕の存在は、対象物に対して刃部を幾分傾けた状態で、石器が使用されたことを示している。

Ⅳ：刃部側辺と先端に使用痕跡が観察されるもの。

これらはA類およびB類の刃部先端が尖頭状のもの（ａタイプ）と平坦で幅の狭いもの（ｂタイプ）に認められる。

刃部先端が尖頭状のものの場合、「切っ先」状の先端部分が全面にわたって強く磨耗していると同時に、側辺の調整剥離面側に磨耗、無調整面側に擦痕と線状痕が観察される。磨耗・擦痕の成因については、他の場合と同様なものと思われる。線状痕については、擦痕に較べ幅が幾分広く、側縁がにぶく丸みを持つことから、対象物が擦痕を生じさせる程硬いものでないことを示している。また、擦痕は刃部側縁に対して斜方向であるが、線状痕は直角方向である。このことは、対象物および対象物に対する使用形態が幾通りか存在したことを推測させる。

刃部先端が平坦で幅の狭いものの場合、使用痕跡の磨耗が及ぶ範囲は広い。また、この中には、刃部側辺の無調整面側に擦痕や線状痕の観察されるものがある。磨耗・擦痕・線状痕の成因については、他の場合と同様と思われる。擦痕の方向は刃部側縁に対して平行であるが、線状痕は直角である。この点、対象物および対象物に対する使用形態が、幾通りか存在したことを推測させるが、先端部分の使用痕跡が顕著でないことから、おもに使用されたのは刃部側辺であろうと思われる。

使用実験結果の検討：この種の石器については、武藤鐵城・楠本政助による使用実験がある（武藤：1933、楠本：1973）。

武藤の実験結果によれば、乾燥した竹や杉柾の切断には、調整剥離の加えられた刃部が適し

ているという。すなわち、無調整の刃部は、一定の深さまで達すると、それ以上は不可能で、ちょっとした不注意で刃こぼれが生じる。これに対して、調整剥離の加えられている刃部は、「鋸の様に何処までも深く進めることが出来而も殆んど刃こぼれのしない點に於て遥かに有効である」と報告している。

楠本の実験結果によれば、調整剥離が加えられているものは動物解体作業において比較的肉が硬いものでは有効であるが、その他の場合はあまり適していないという。すなわち、「器体の薄目のほうが切れ味がよく、反対に厚いものは息が切れるが脂肪分の付着が早くて鋭利さが失われ仕事がはかどらない」としている。むしろ、「骨角器の製作に威力を発揮する工具として機能が高い」と報告している。

以上の実験結果は、次のようなことを示していると考えられる。

１、刃部に調整剥離が加えられている場合、硬い肉をもつ動物の解体作業、竹、木、骨角器の加工において効力を発揮する。

２、一般的な動物の解体作業では、調整剥離が加えられていないか、調整剥離が加えられていても刃部が薄いものが適している。

まとめ

剥片石器第２群の機能についてまとめると次のようになる。

１、基部にみられるアスファルト状付着物は、着柄のためのものか、紐を巻きつけるためのものか、現段階では明らかでない。

２、刃部はおもに調整剥離が加えられることによって形成されている。

３、刃部において実際使用されたと思われるのは側辺と先端部分である。

４、使用方法としては、側辺を刃部とするもの、先端（尖頭状、平垣状）を刃部とするもの、側辺と先端を刃部とするものなどがある。

５、刃部と対象物の接する角度には、直角なもの・斜方向のもの・平行なものなどがある。

６、使用痕跡から、その対象物を推定すると、弱い力で容易に切断されるような柔らかいものではなく、一定の硬さを持ったものであると考えられる。それは、実際の実験結果から得られた成果とも一致するが、具体的に動物の皮・肉・骨・角・植物繊維・竹・木などのいずれなのか簡単に結論づけることはできない。今後さらに検討する必要がある。

４．剥片石器第３群

形態および技術的特徴

（1）石器の観察

剥片石器第３群は15点出土している。これらの石器群を検討するために、つまみ部の調整方法・つまみ部と錐部の状態・錐部の断面形態(横)・重量について観察と計測を行なった。

つまみ部の調整方法

つまみ部の周縁には調整剥離が加えられ、一定の形に仕上げられている。つまみ部に対し、調整剥離の加えられた範囲を観察すると、次の２つのタイプが認められる。

Ａ：つまみ部の周縁全体に調整剥離を加えているもの。
Ｂ：つまみ部の一部に限定して調整剥離を加えているもの。

これらの中で、Ａタイプにはつまみ部上端を抉り込んで凹状にしているものがある。また、Ｂタイプには打面を残しているものもある。量的にはＢタイプが多く11点である。Ａタイプは４点である。

つまみ部と錐部の状態（抉りの状態）

つまみ部から錐部へ移行する部分を観察すると、次の２つのタイプが認められる。

Ⅰ：つまみ部から錐部へ急角度で移行するもの。
Ⅱ：つまみ部から錐部へ比較的緩かな角度で移行するもの。

つまみ部から錐部へ移行する部分には抉りが入れられている。この抉りの状態によって、つまみ部と錐部の基本的な形がつくり出される。Ⅰタイプは抉りの深いもの、Ⅱタイプは抉りの浅いものである。量的には、Ⅰタイプが９点、Ⅱタイプが４点で、Ⅰタイプのものが比較的多い傾向を示している。

錐部の断面形態（横）

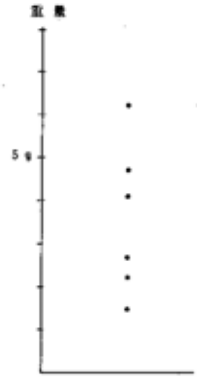
錐部を横に切った断面形態を観察すると、次の２つのタイプが認められる。

ａ：錐部断面形態が菱形のもの。
ｂ：錐部断面形態が三角形のもの。

ａタイプとｂタイプの量的関係を検討すると、前者が12点で圧倒的に多い。後者は僅か１点である。

重量

完形品（６点）に限定してその重量を計測した。その結果、1.5～6.2ｇの範囲におさまる。



第317図　剥片石器第３群
重量頻度分布

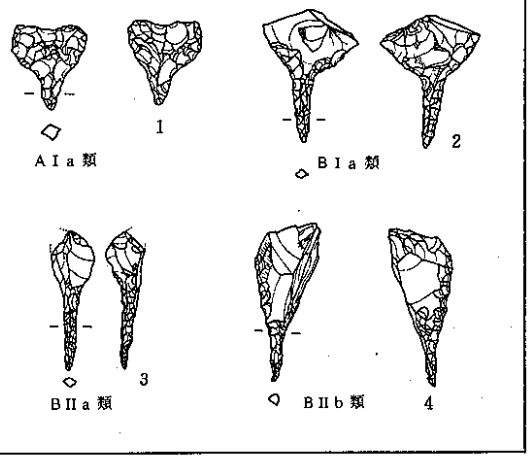
（2）石器の分類

剥片石器第３群を、前項で述べた「つまみ部の調整方法」・「抉りの状態」・「錐部の断面形態」の観察結果に基づいて総合的な分類を行ないたい。

まず、本群の石器をつまみ部の調整方法からＡ類（つまみ部の周縁全体に調整剥離を加えているもの）、Ｂ類（つまみ部の一部に限定して調整剥離を加えているもの）に大別する。これらを「抉りの状態」・「錐部の断面形態」を基準として細分すると第79表のようになる。

第79表　剝片石器第３群の分類

分類基準／分類	つまみの調整方法	抉りの状態	錐部の断面形態	分類
剝片石器第3群（つまみ部と尖頭状の錐部からなるもの）	Ａタイプ（全面を調整したもの）	Ｉタイプ（深いもの）	ａタイプ（四角形のもの）	ＡＩａ類
	Ｂタイプ（一部を調整したもの）	Ｉタイプ（深いもの）	ａタイプ（四角形のもの）	ＢＩａ類
		ＩＩタイプ（浅いもの）	ａタイプ（四角形のもの）	ＢＩＩａ類
			ｂタイプ（三角形のもの）	ＢＩＩｂ類



（3）形態および技術的特徴の相互関係

つまみ部の調整方法と抉りの状態

①つまみ部の調整方法Ａタイプのものには抉りの状態Ｉタイプのものだけが認められ、ＩＩタイプのものはない。

②つまみ部の調整方法Ｂタイプのものには抉りの状態がＩ・ＩＩタイプのものが認められる。

第80表　つまみ部調整方法と抉りの状態

抉りの状態／つまみ部調整方法	Ｉ	ＩＩ	計
Ａ	2	0	2点
Ｂ	7	4	11点
計	9点	4点	13点

つまみ部の調整方法と錐部の断面形態

①つまみ部の調整方法Ａタイプのものには錐部断面形態ａタイプのものだけが認められ、ｂタイプのものはない。

②つまみ部の調整方法Ｂタイプのものには錐部断面状態ａ・ｂタイプのものが認められるが、大部分はａタイプのものである。

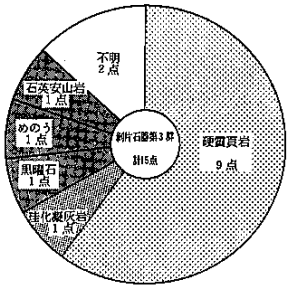
第81表　つまみ部調整方法と錐部断面形態

錐部断面形態／つまみ部調整方法	ａ	ｂ	計
Ａ	2	0	2点
Ｂ	10	1	11点
計	12点	1点	13点

石材とその選択性

剥片石器第３群で石材の判明したものは13点である。硬質頁岩（９点)、めのう（１点)、黒曜石（１点)、珪化凝灰岩（１点)、石英安山岩（１点）が認められる。これらの中で、硬質頁岩が多くその他の石材は少ない。

硬質頁岩がおもな選択の対象であったと考えられるが、資料数が少ないため形態等との関係については不明である。



第318図　剥片石器第３群石材別数量グラフ

第82表　剥片石器第３群類別石材表

石材／分類	硬質頁岩	めのう	黒曜石	珪化凝灰岩	石英安山岩	不　明	計
ＡＩａ類	2	0	0	0	0	0	2点
ＢＩａ類	4	0	0	0	1	2	7点
ＢＩＩａ類	2	1	0	0	0	0	3点
ＢＩＩｂ類	1	0	0	0	0	0	1点
不　明	0	0	1	1	0	0	2点
計	9点	1点	1点	1点	1点	2点	15点

石器の機能

（1）使用痕跡の観察

剥片石器第３群で錐部全体が残っているものについて、使用痕跡の有無とそのあり方を観察した。その結果、使用痕跡として磨耗が観察されるものが認められた。この磨耗は錐部の小さな剥離面の稜線上に認められ、その部分が鈍く磨り減っている。磨耗に伴う線状痕や擦痕は観察できなかった。また、つまみ部からは顕著な使用痕跡を見い出すことができなかった。

錐部に認められる磨耗の有無、位置等について詳しく観察すると、次のようなタイプが認められる。

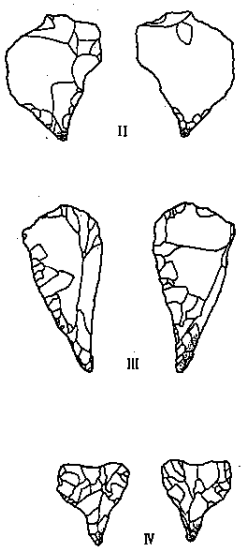
Ⅰ．磨耗が観察されないもの（３点)。

Ⅱ．磨耗が錐部先端にのみ観察されるもの（２点)。

Ⅲ．磨耗が錐部先端から右片側面に観察されるもの（２点)。

Ⅳ．磨耗が錐部先端から右両側面に観察されるもの（１点)。

これらの中で、Ⅰの場合は磨耗が無いのか、微弱なものが風化によって失なわれてしまったのか明らかでない。Ⅲ・Ⅳの場合、片側面に認められる磨耗は顕著であるが、先端では著しくない。



第319図　剥片石器第３群
使用痕跡の位置

（2）石器の機能

剥片石器第３群はいずれもつまみ部と錐部からなっている。剥片石器第３群の機能を形態的特徴、使用痕跡の観察結果に基づいて検討してみたい。つまみ部には周縁全体に調整剥離を加えているものと、一部に限定して調整剥離を加えているものがある。これに対し、錐部はいずれの場合も調整剥離が加えられ、入念に仕上げられている。また、使用痕跡を観察した場合も、錐部には磨耗等がみられるが、つまみ部では不明瞭である。したがって、このような点から、錐部が剥片石器第３群にとって、もっとも重要な意味をもつものと考えられる。

次に、錐部の検討を行ないたい。錐部はいずれも尖頭状をしており、その横断面は三角形と菱形である。このことから、一種の刺突具もしくは穿孔具としての機能が推定される。

さらに、素材が頁岩等の比較的硬度の高いものであるにもかかわらず、先端、側面、側縁が磨耗している。このことは軟らかい対象物に対する刺突というよりは、一定の硬さをもったものに対する穿孔具の役割を果した可能性が強いことを示している。

また、錐部がつまみ部に較べ極端に細いことから、硬い対象物もしくは弾力のあるものの上で強い力を加えた場合、簡単に折れてしまうので刺突具の可能性は少ない。

以上のことから、剥片石器第３群は穿孔具と考えるのが妥当であろう。

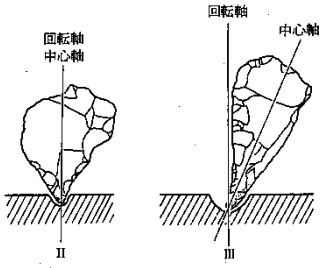
剥片石器第３群が穿孔具であるならば、どのような回転運動を伴うものであろうか。この点を使用痕跡の観察結果に基づいて検討してみたい。現在観察することができる便用痕跡は、磨耗のみに限定され、線状痕・擦痕は認められない。このため、錐としての回転方向、角度を線状痕や擦痕から推定することはできない。したがって、ここでは磨耗部分の位置・磨耗の状態によって判断することにしたい。

使用痕跡の観察において、磨耗の有無・位置等の点から４つのタイプが存在することは既に述べた。それらの各々について成因を検討したい。

Ｉは磨耗が観察できなかったものである。このことは製作された後使用されていないか、それとも磨耗が残らない軽い使用がなされたものと思われる。

Ⅱは先端部にのみ磨耗が観察されることから、深い穿孔ではなく浅い凹みをつくる程度のものであったと推定される。また、その磨耗が一様で偏りがないことから連続複方向（交互）の回転の可能性がある。

Ⅲは先端からその上方の側面に磨耗が顕著である。このことは回転軸と錐部の中心軸が一定せず偏った角度で回転運動が行われたことを示している。その結果、孔を拡大しながら除々に深くする働きをしたものと思われる。そのためか、磨耗は先端よりも側面の部分においてより著しい。



第320図　剥片石器第３群使用想定図

また、磨耗が右片側面にだけ認められることは、右側（時計廻り）に$^{1}/_{2}$〜$^{3}/_{4}$回転させては、手をかえすことを繰りかえし行なう非連続単方向回転であったことを示している。

Ⅳの磨耗の状態はⅢの場合と極めて類似している。そのちがいはⅢの場合、錐部の右片側面だけをおもに使用しているのに対し、Ⅳは反対側の面も使用している。

以上の検討によって剥片石器第３群の機能は次のようにまとめることができる。

１．これらの石器群は回転運動を伴う穿孔具である。

２．種類として連続複方向（交互）回転によって凹み程度の小さな孔をあけるもの、非連続単方向回転によって孔を拡大しながら徐々に穿孔するもの等がある。

５．剥片石器第４群

形態および技術的特徴

（1）石器の観察

剥片石器第４群は161点出土している。これらの中で､56点は破損しているため十分な観察を行なうことができない。したがって完形品である105点について検討を加えることにする。観察および計測項目は、素材に対して加えられた調整剥離の範囲・打面・背面・腹面各部における調整剥離の状態である。

調整剥離の範囲

剥片の縁辺に加えられた調整剥離の範囲を観察すると次の２つのタイプが認められる。

Ａ：剥片の縁辺に調整剥離の加えられない部分を残しているもの。
Ｂ：剥片の縁辺全体に調整剥離を加えたもの。

量的な関係を検討すると、Ａタイプが86％、Ｂタイプが14％で、前者が非常に多い。

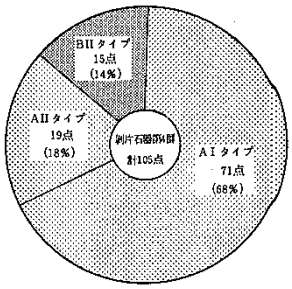
打面の状態

打面に加えられる調整剥離によって、打面は部分的もしくは全面的に除去される。打面の保存状況を観察すると次の２つのタイプが認められる。

Ⅰ：打面が部分的に残っているもの。
Ⅱ：打面が除去されているもの。

量的な関係を検討すると、Ⅰタイプが68％、Ⅱタイプが32％で前者が比較的多い。

なお、Ⅰタイプの中には自然打面のものと平坦もしくは調整打面のものが認められる。



第321図　剥片石器第４群
打面の状態類別グラフ

背面の状態

背面に加えられた調整剥離の状態を観察すると次の５つのタイプが認められる。

ａ：背面に調整剥離を加えていないもの。
ｂ：背面の一部に調整剥離を加えているもの。
ｃ：背面の一辺に調整剥離を加えているもの。
ｄ：背面の二辺以上に調整剥離を加えているもの。
ｅ：背面の周縁全体に調整剥離を加えているもの。

これらの量的な関係を検討するとｃタイプ・ｄタイプが多く、それぞれ36％・31％を占める。ｂタイプは16％、ｅタイプは15％である。ａタイプは極く僅かで２％に過ぎない。

腹面の状態

腹面に加えられた調整剥離の状態を観察すると次の５つのタイプが認められる。

１：腹面に調整剥離を加えていないもの。
２：腹面の一部に調整剥離を加えているもの。
３：腹面の一辺に調整剥離を加えているもの。
４：腹面の二辺以上に調整剥離を加えているもの。
５：腹面の周縁金体に調整剥離を加えているもの。

これらの量的な関係を検討すると１タイプが非常に多く46％を占める。その他は２タイプ23％、５タイプ12％、４タイプ10％、３タイプ９％である。

素材（剥片）の形態

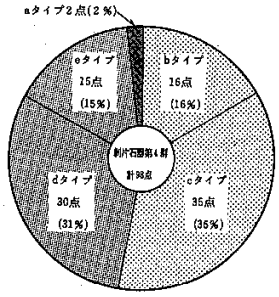
剥片石器第４群の中で、打面が残っているものについて最大長と最大幅を計測し、両者の関係を検討した。その結果、次の２つのタイプが認められた。

ｉ）縦長のもの（最大長＞最大幅）
ⅱ）横長のもの（最大長＜最大幅）

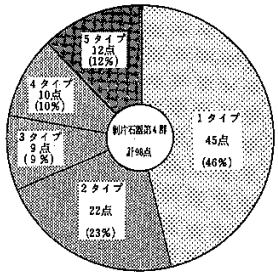
これらの量的な関係を検討すると（ｉ）タイプが68％、（ⅱ）タイプが22％で前者が非常に多い。この他、不明なものが10％ある。

その他の技術的特徴

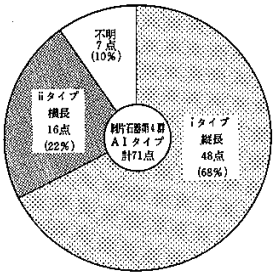
剥片石器第４群の中には周縁の調整剥離が行なわれた後、截断されているものが４点ある。截断面はネガティヴなバルヴをもつものが多く、さらに周縁の調整剥離面を切っていること等



第322図　剥片石器第４群背面の状態類別数量グラフ



第323図　剥片石器第４群腹面の状態類別数量グラフ



第324図　剥片石器第４群形態別数量グラフ

から最終的な打撃によって生じたものと考えられる。

重量

剥片石器第４群の重量を計測した結果、0.7～36.8gの範囲におさまる。また、この中で、重量は10g未満のものが大部分である。

（2）石器の分類

剥片石器第４群を前項で述べた「調整剥離の範囲」・「打面・背面・腹面各部における調整剥離の状態」・「その他の技術的特徴」の観察結果に基づいて総合的な分類を行ないたい。

本群の石器を製作の技術的特徴という観点から検討すると、素材の周縁に調整剥離を加えて仕上げているものと、その後截断しているものが認められる。また、前者を調整剥離の加えられる範囲という観点から検討すると、一部に無調整の部分を残しているものと全面調整がなされているものが認められる。このような観察結果に基づいて、本群の石器を次の３類に大別する。

- A類：素材の縁辺に調整剥離の加えられない部分を残しているもの（一部無調整）。
- B類：素材の縁辺全体に調整剥離を加えているもの（全面調整）。
- C類：素材の縁辺に調整剥離を加えた後、截断しているもの（截裁面の認められるもの）。

以上の石器群をさらに、打面・背面・腹面各部における調整剥離の状態を基準として分類すると第83表のようになる。

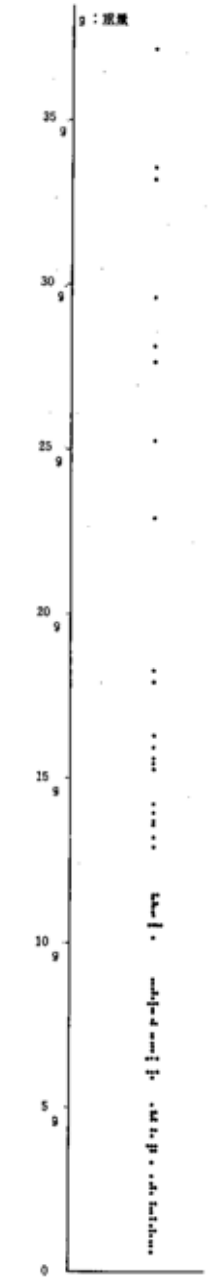
（3）形態および技術的特徴の相互関係

剥片石器第４群は素材の周縁に調整剥離を加えるという特徴をもっている。このような調整剥離は剥片の打面・背面・腹面等の各部に加えられている。各部に加えられた調整剥離の相互関係を検討した結果、部分的にではあるが、次のような特徴が認められた。

調整剥離の範囲と打面の状態

①調整剥離の範囲がAタイプのものには打面の残存状態Ⅰ・Ⅱタイプのものが認められる。

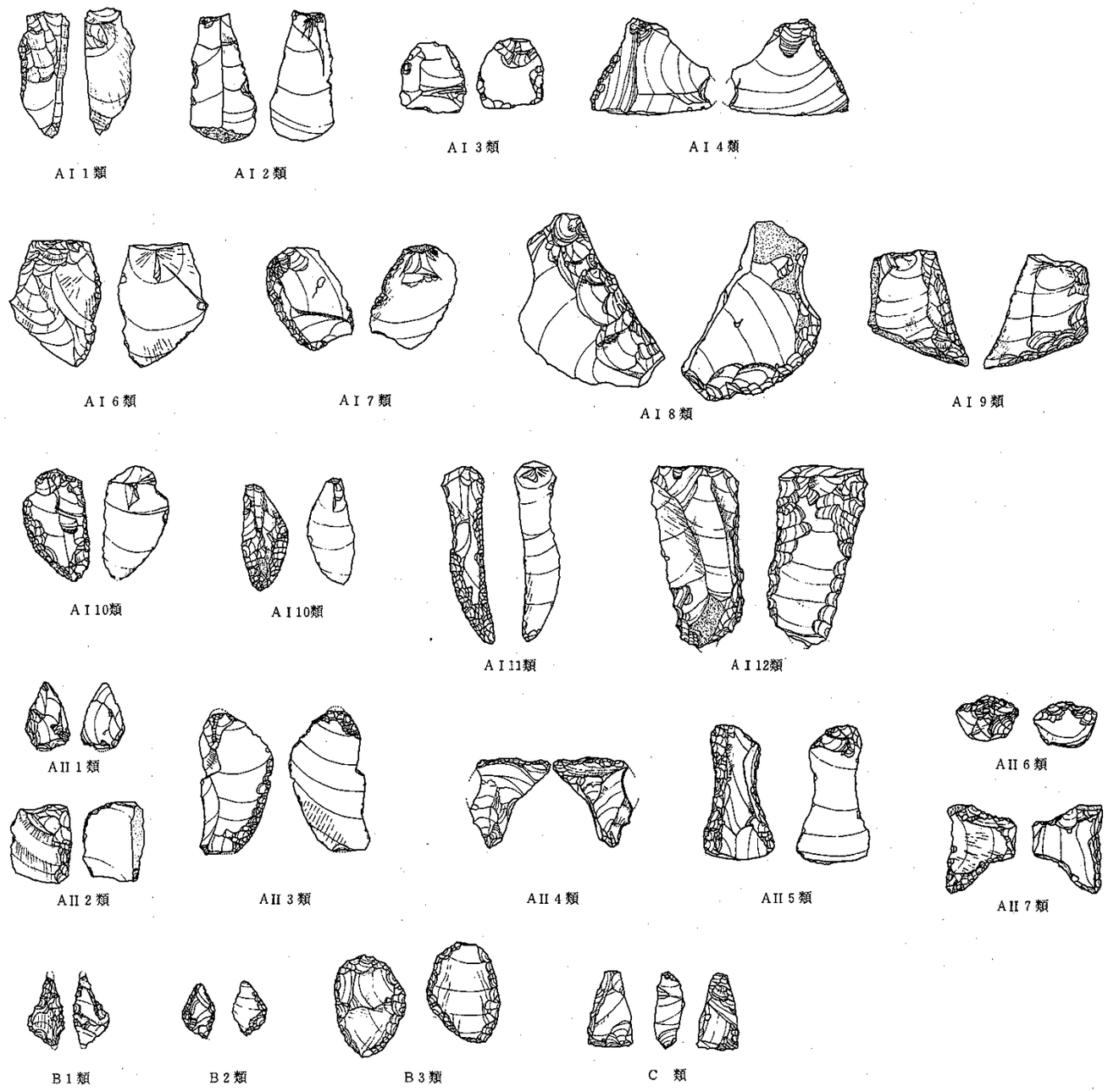
②調整剥離の範囲がBタイプのものには打面の残存状態Ⅱタイプのものだけが認められる。



第325図　剥片石器第４群
重量頻度分布

第83表　剝片石器第４群の分類

	調整の範囲	打面の状態	背面の状態	腹面の状態	素材の形態	分類
剝片石器第４群（不定形なもの）	Aタイプ（一部無調整のもの）	Iタイプ（打面が残っているもの）	a タイプ（調整のないもの）	3 タイプ（一辺を調整したもの）	(i)縦長のもの	AI 1類
			b タイプ（一部を調整したもの）	1 タイプ（調整のないもの）	(i)縦長のもの	AI 2類
					(ii)横長のもの	
				2 タイプ（一部を調整したもの）	(i)縦長のもの	AI 3類
					(ii)横長のもの	
				3 タイプ（一辺を調整したもの）	(ii)横長のもの	AI 4類
				4 タイプ（二辺以上を調整したもの）	(i)縦長のもの	AI 5類
			c タイプ（一辺を調整したもの）	1 タイプ（調整のないもの）	(i)縦長のもの	AI 6類
					(ii)横長のもの	
				2 タイプ（一部を調整したもの）	(i)縦長のもの	AI 7類
					(ii)横長のもの	
				3 タイプ（一辺を調整したもの）	(i)縦長のもの	AI 8類
					(ii)横長のもの	
				4 タイプ（二辺以上を調整したもの）	(i)縦長のもの	AI 9類
					(ii)横長のもの	
			d タイプ（二辺以上を調整したもの）	1 タイプ（調整のないもの）	(i)縦長のもの	AI 10類
					(ii)横長のもの	
				2 タイプ（一部を調整したもの）	(i)縦長のもの	AI 11類
				4 タイプ（二辺以上を調整したもの）	(i)縦長のもの	AI 12類
		IIタイプ（打面が除去されているもの）	b タイプ（一部を調整したもの）	1 タイプ（調整のないもの）	不明	AII 1類
			c タイプ（一辺を調整したもの）	1 タイプ（調整のないもの）	不明	AII 2類
				2 タイプ（一部を調整したもの）	不明	AII 3類
				3 タイプ（一辺を調整したもの）	不明	AII 4類
			d タイプ（二辺以上を調整したもの）	2 タイプ（一部を調整したもの）	不明	AII 5類
				3 タイプ（一辺を調整したもの）	不明	AII 6類
				4 タイプ（二辺以上を調整したもの）	不明	AII 7類
	Bタイプ（全面調整のもの）	IIタイプ（打面が除去されているもの）	e タイプ（全体を調整したもの）	2 タイプ（一部を調整したもの）	不明	B 1 類
				4 タイプ（二辺以上を調整したもの）	不明	B 2 類
				5 タイプ（全体を調整したもの）	不明	B 3 類
	C タイプ　（周縁の調整剝離後，截断されているもの）					C 類



調整剥離の範囲と背面の状態

①調整剥離の範囲がAタイプのものには背面の状態ａ・ｂ・ｃ・ｄタイプのものが認められる。

②調整剥離の範囲がＢタイプのものには背面の状態ｅタイプのものだけが認められる。

調整剥離の範囲と腹面の状態

①調整剥離の範囲Ａタイプのものには腹面の状態１・２・３・４タイプのものが認められる。

②調整剥離の範囲Ｂタイプのものには腹面の状態２・４・５タイプのものが認められる。

打面の状態と背面の状態

①打面の残存状態Ｉタイプのものには背面の状態ａ・ｂ・ｃ・ｄタイプのものが認められる。

②打面の残存状態Ⅱタイプのものには背面の状態ｂ・ｃ・ｄタイプのものが認められる。

打面の状態と腹面の状態

①打面の残存状態Ｉタイプのものには腹面の状態１・２・３・４タイプのものが認められる。

②打面の残存状態Ⅱタイプのものには腹面の状態１・２・３・５タイプのものが認められる。

背面の状態と腹面の状態

①打面の残存状態Ｉタイプのものには腹面の状態１・２・３・４タイプのものが認められる。

②打面の残存状態Ⅱタイプのものには腹面の状態１・２・３・５タイプのものが認められる。

背面の状態と腹面の状態

①背面の状態ａタイプには腹面の状態３タイプが認められる。

②背面の状態ｂタイプには腹面の状態１・２・３・４タイプが認められる。

③背面の状態ｃタイプには腹面の状態１・２・３・４タイプが認められる。

④背面の状態ｄタイプには腹面の状態１・２・３・４タイプが認められる。

⑤背面に状態ｅタイプには腹面の状態２・３・５タイプが認められる。

調整剥離の範囲と打面の状態

	I	II	計
A	71	19	90
B	0	15	15
計	71	34	105

第84表　各部分における調整剥離の相互関係

	A	B	計
a	16	0	16
b	35	0	35
c	30	0	30
d	2	0	2
e	0	15	15
計	83	15	98

調整剥離の範囲と背面の状態

	Aタイプ	Bタイプ	計
1タイプ	45	0	45
2タイプ	21	1	22
3タイプ	9	0	9
4タイプ	8	2	10
5タイプ	0	12	12
計	83	15	98

調整剥離の範囲と腹面の状態

	I	II	計
b	12	4	16
c	29	6	35
d	21	9	30
a	2	0	2
e	0	15	15
計	64	34	98

打面の状態と背面の状態

	Iタイプ	IIタイプ	計
1タイプ	39	6	45
2タイプ	18	4	22
3タイプ	7	2	9
4タイプ	4	6	10
5タイプ	0	12	12
計	68	30	98

打面の状態と腹面の状態

	bタイプ	cタイプ	dタイプ	aタイプ	eタイプ	計
1タイプ	11	19	15	0	0	45
2タイプ	3	10	8	0	1	22
3タイプ	1	4	2	2	0	9
4タイプ	1	2	5	0	2	10
5タイプ	0	0	0	0	12	12
計	16	35	30	2	15	98

背面の状態と腹面の状態

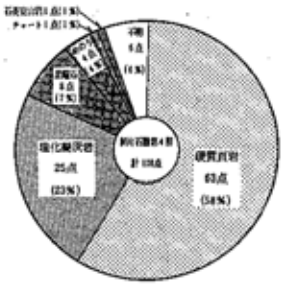
石材とその選択性

剥片石器第４群の石材として硬質頁岩(63点)、珪化凝灰岩（25点)、黒曜石(８点)、めのう(４点)、石英安山岩(１点)、チャート（１点）が認められる。

これらの中で、硬質頁岩は60％以上を占め、珪化凝灰岩も加えると90％に近い値を示す。分類可能な資料との関係を検討すると次のようになる。

①頁岩および珪化凝灰岩は量も多く、ＡＩ～Ｃ類の大部分に認められる。

②黒曜石、めのう、石英安山岩は量も少なく、選択対象として一定の傾向を示さない。



第326図　剥片石器第４群
石材別数量グラフ

第85表　剥片石器第４群分類別石材

分類＼石材	硬質頁岩	珪化凝灰岩	黒曜石	めのう	チャート	石英安山岩	不明	計
ＡＩ１類	2	1	2	0	0	0	0	5
ＡＩ２類	3	0	0	0	0	0	0	3
ＡＩ３類	1	0	0	0	0	0	0	1
ＡＩ４類	0	1	0	0	0	0	0	1
ＡＩ５類	14	2	0	0	1	0	0	17
ＡＩ６類	5	1	0	0	0	0	1	7
ＡＩ７類	2	1	0	0	0	0	0	3
ＡＩ８類	1	1	0	0	0	0	0	2
ＡＩ９類	12	1	0	0	0	0	2	15
ＡＩ10類	4	0	0	0	0	0	1	5
ＡＩ11類	0	1	0	0	0	0	0	1
ＡＩ12類	4	1	0	1	0	0	1	7
ＡII１類	1	1	1	1	0	0	0	4
ＡII２類	0	2	0	0	0	0	0	2
ＡII３類	2	0	1	0	0	0	0	3
ＡII４類	0	0	1	0	0	0	0	1
ＡII５類	1	1	1	0	0	0	0	3
ＡII６類	1	1	0	0	0	0	0	2
ＡII７類	0	2	0	2	0	0	0	4
Ｂ１類	0	1	0	0	0	0	0	1
Ｂ２類	1	1	0	0	0	0	0	2
Ｂ３類	4	5	2	0	0	0	0	11
Ｂ４類	1	0	0	0	0	0	0	1
計	59	24	8	4	1	0	5	101

このように剥片石器第４群は多様な石材をその選択対象としているが、主体をなすものは硬質頁岩と珪化凝灰岩に限定されている。その他の石材は極めて副次的なものにすぎないと考えられる。

石器の機能

剥片石器第４群は素材（剥片・石核）の周縁に調整剥離が加えられているものである。しかし、これらを形態的特徴から類型化するのは困難であり、現段階では不定形な石器群として一括せざるを得ない。また、一見規則性があるように感じられるものもみうけられるが、それらを尖頭器・刃器・掻器・削器などと限定することもできない。さらに、素材に加えられた調整剥離自体が刃部を形成するものなのか、それとも刃潰し加工なのかということについても検討を必要としている。今回は、形態分類や使用痕跡の観察が十分でなかったので、機能の問題については今後の課題としたい。

この中で、特殊な技法をもつものとして、C類がある。C類は周縁の調整剥離後、截断されているものである。この種の石器は截断面ある石器（柳田：1974）、ピエス・エスキーユ（岡村：1976）などと呼ばれ、製作技法・機能・年代など種々の点で論議の対象となっている。機能について、柳田は彫器、岡村は楔としての可能性を説いている。前者の場合は截裁面の側縁、後者の場合は調整剥離の加えられた側縁を使用部分としている。そのどちらが正しいか早急に結論づけることはできないが、その他の機能の可能性を含めて、今後さらに検討する必要があろう。

剥片石器の素材（剥片および石核）

上深沢遺跡からは、剥片石器の素材となる剥片が811点、石核(残核)が15点出土している。これらの形態的特徴・技術的特徴・石材等について検討を加えたい。

１．剥片

（1）剥片の観察

剥片は811点出土しているが、この中で完形のものは179点である。何らかの形で破損しているものや剥片か否か不明なものが多く、全体の78%を占める。ここでは、完形品に限定して、形態・打面・打点・打角・背角・末端等の観察と計測を行なった。なお、剥片と砕片は形態上区別することができないので、一括して扱うことにする。また、石材に関しては、完形品以外の破損品についても観察を行なった。

形態

全体の形態的特徴を知る手がかりとして、「長さ」と「幅」を計測し、「長幅指数」を求めた。長幅指数を検討すると、100以上の値を示す縦長のものと100以下の値を示す横長のものが認められた。量的には、縦長のものが多く全体の約61%を占める。横長のものは約39%である。また、「長幅指数」の頻度分布を検討すると、50～150の間に集中している。このことは、縦長・横長というよりは、むしろ縦・横の長さが近似している剥片が、多いことを示している。

打面

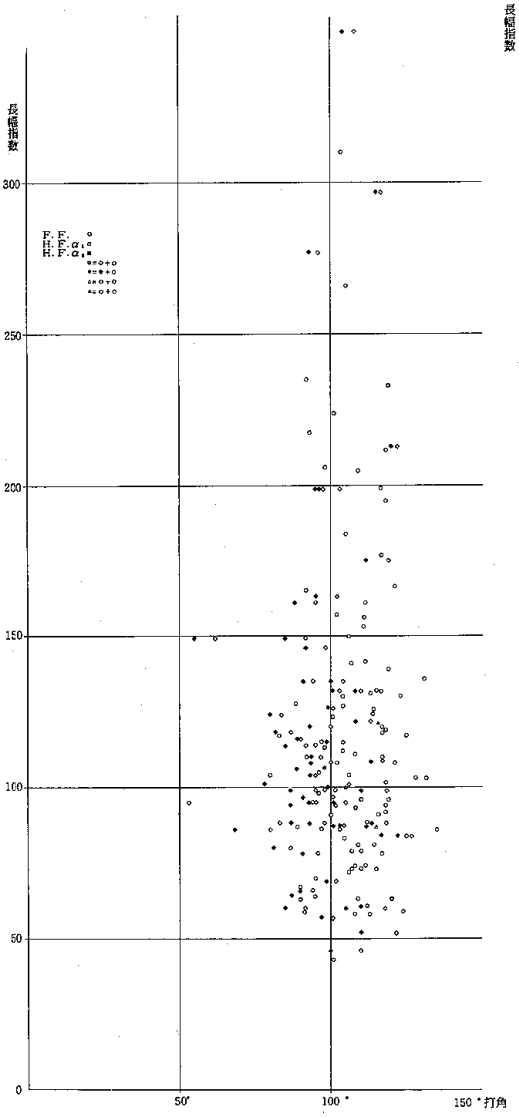
打面の形状を鰯察すると、自然打面・平坦打面・調整打面が認められた。量的には、平坦打面が約55%で全体の半分以上を占める。この他は調整打面約30%・自然打面約10%である。平坦打面と調整打面は、合計すると80%以上を占める。このことは、多くの場合礫の表皮を取除く作業の終了後、剥片生産がなされていることを示している。

打点

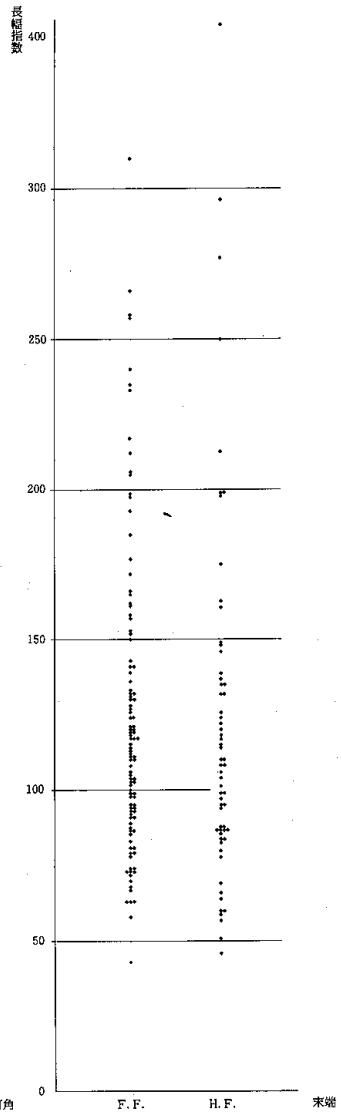
打面における打点の位置には、次のようなものがある。右端（Re）・右側（R）・中央付近（M）・左側（L）・左端（Le）等であるこの中でもっとも多いのは中央付近（M）で、全体の45%を占める。次に多いのは、左側（L：21%）と右側（R：21%）で、同じである。右端（Re：８%）と左端（Ｌｅ：４%）は非常に少ない。

打角

打角は53°～135°のものまであり、その中で比較的集中している部分は80°～120°である。末端の形状によって幾分の違いが認められ、羽毛状のものが蝶番状のものよりも、やや大きい傾向にある。



第327図　打角と長幅指数



第328図　末端と長幅指数

背面

剥片の背面を観察すると、A：自然面・B：自然面＋剥離面・C：剥離面のものが認められた。量的にはCがもっとも多く、全体の74％を占める。Bは25％、Aは１％である。このことは、自然面をもつ剥片の剥離が終了してから、さらに打ち剥がされた剥片が、非常に多いことを示している。

次に、B・Cについて、背面を形成する小剥離面に加えられた打撃方向を検討した。その結果、次のようなものが認められた。

１．腹面の剥離に対し、同一方向のもの。

２．腹面の剥離に対し、同一方向と正反対のもの

３．腹面の剥離に対し、同一方向と任意方向のもの

４．腹面の剥離に対し、任意方向のもの

Bの背面をもつ剥片は、剥片剥離工程の中で極めて初期のものである。しかし、それにもかかわらず、腹面と同一方の小剥離面をもつものはあまり多くない。量的に多いのは、腹面の剥離方向に対し、多かれ少なかれ任意方向の小剥離面をもつものである。このことは、上深沢遺跡の剥片が剥片剥離の初期の段階から、不規則に近い状態で様々の方向から打ち剥がされたことを示している。もちろん、腹面と同一方向が、まったく正反対方向の小剥離面をもつものも認められる。しかし、このような規則性を示すものは、Bの背面をもつ剥片の$^{1}/_{3}$程に過ぎない。

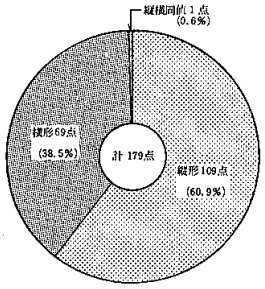
Cの背面をもつ剥片は、剥片剥離工程の中で比較的進んだ段階のものである。剥片剥離工程の初期の段階でみられた傾向は、さらに拡大する。すなわち、Cの背面をもつ剥片の中で、腹面の剥離方向に対し規則性を示すC_1・C_2の占める割合は、$^{1}/_{5}$程に減少してしまう。この他は、いずれも腹面の剥離方向に対して任意方向の小剥離面を少なからずもつものである。

末端

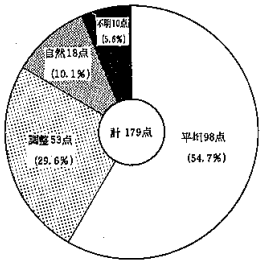
剥片の末端を観察すると、F．F．：羽毛状のもの･H．F．：蝶番状のもの等が認められる。量的には羽毛状のものが全体の58％蝶番状のものが37％で、前者が多い。

石材

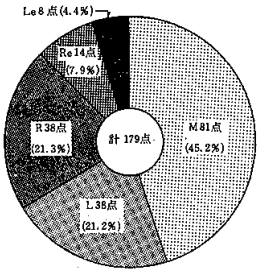
剥片の石材としては硬質頁岩（42.5％）・珪化凝灰岩（32.7％）・めのう（10.1％）・黒曜石（6.0％）・石英安山岩（4.5％）・チャート（0.7％）・凝灰岩（0.5％）・シルト岩（0.4％）・珪化木（0.3％）・水晶（0.1％）・結晶片岩（0.1％）が認められる。石材の種類は極めて多様であるが、硬質頁岩と珪化凝灰岩によって大部分が占められ、その他は量的に少ない。



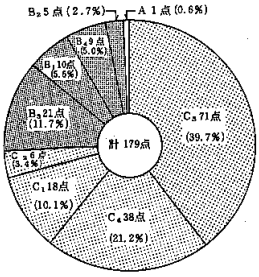
剝片の形態



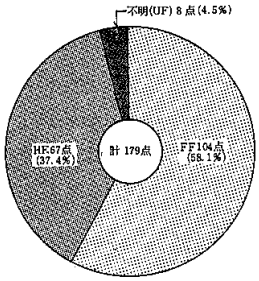
打面の形状



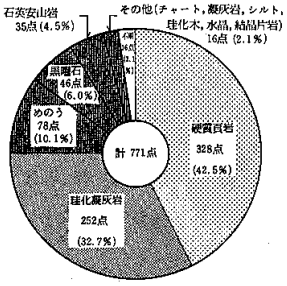
打点の位置



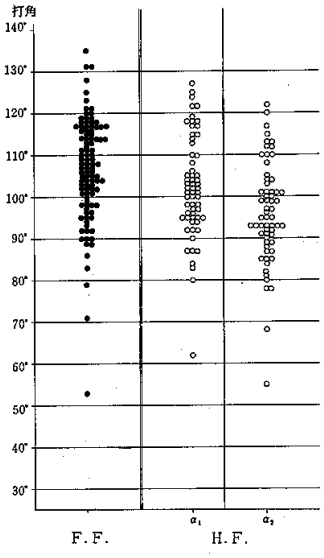
背面の形状



末端の形状



剝片の石材



剝片の打角

第329図　剝片の特徴および石材

（2）剥片の分類

剥片を前項で観察した「背面」の形状に基づいて、分類を行ないたい。まず、剥片を背面の形態によって、A類（背面＝自然面）・B類(背面＝自然面＋剥離面)・C類(背面＝剥離面)の３類に大別する。これらを、背面を形成する剥離面に加えられた打撃方向に基づいて、さらに細分したのが第86表である。

２．石核（残核）

（1）石核の観察

石核は15点出土している。これらはすべて、剥片剥離のなされた残核である。各々について打面の形状・打面転移の状態・打角について観察と計測を行なった。

打面

石核に認められる打面には、単一なものと複数のものがある。その合計は20面である。打面の各々についてその形状を観察すると、自然打面・平坦打面・調整打面が認められる。量的には、平坦打面が10面で、この他は、調整打面が５面、自然打面が５面である。平坦打面と調整打面を合計すると15面で、全体の$^{3}/_{4}$を占める。

打面転移の状態

石核には、単一の打面をもつものと複数の打面をもつものが認められることは、既に述べた。複数の打面をもつものは、剥片剥離工程において打面を転移していると考えられる。それに対し、単一の打面をもつものは一定方向だけからの加撃による剥片剥離がなされた場合と、旧打面が打面転移の過程で失われてしまっている場合とがある。これらのちがいは、石核に残された剥片剥離面の重なり合いとその方向を観察することによって、識別することができる。このようにして、打面転移の状態を検討した結果、次のようなものが認められた。

１．打面を転移していないもの。

２．打面を約180°転移しているもの。

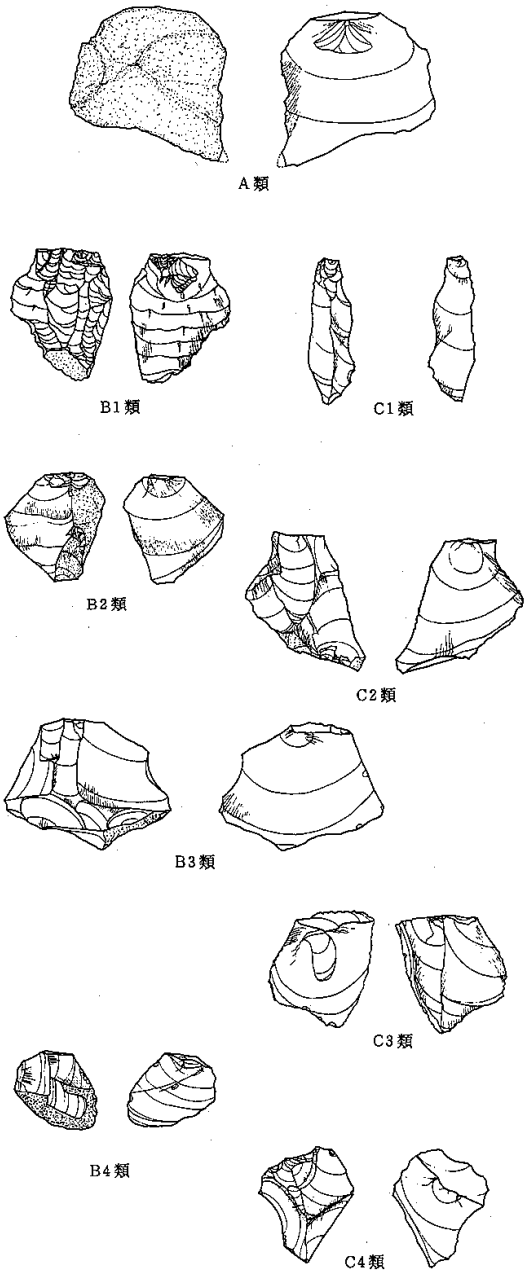
３．打面を約90°の単位で上下・左右に転移しているもの。

４．石核の縁辺に沿って打面を転移しているもの。

量的な側面からこれらを検討すると、何らかの形で打面を転移しているものが非常に多く、13点で90％以上を占める。打面を転移していないものは、僅か２例（７％）に過ぎない。また、打面転移の方法としては90°に近い単位で転移しているものが多く、全体の半分以上に及ぶ。打面を約180°転移しているもの、石核の縁辺に沿って転移しているものはそれぞれ３点である。

第86表　剥片の分類

背面		分類
形状	小剥離面の加撃方向	
A：自然面		A
B：自然面＋剥離面	1．腹面の剥離に対し，同一方向	B_1
	2．腹面の剥離に対し，同一方向と正反対方向	B_2
	3．腹面の剥離に対し，同一方向と任意方向	B_3
	4．腹面の剥離に対し，任意方向	B_4
C：剥離面	1．腹面の剥離に対し，同一方向	C_1
	2．腹面の剥離に対し，同一方向と正反対方向	C_2
	3．腹面の剥離に対し，同一方向と任意方向	C_3
	4．腹面の剥離に対し，任意方向	C_4



打角

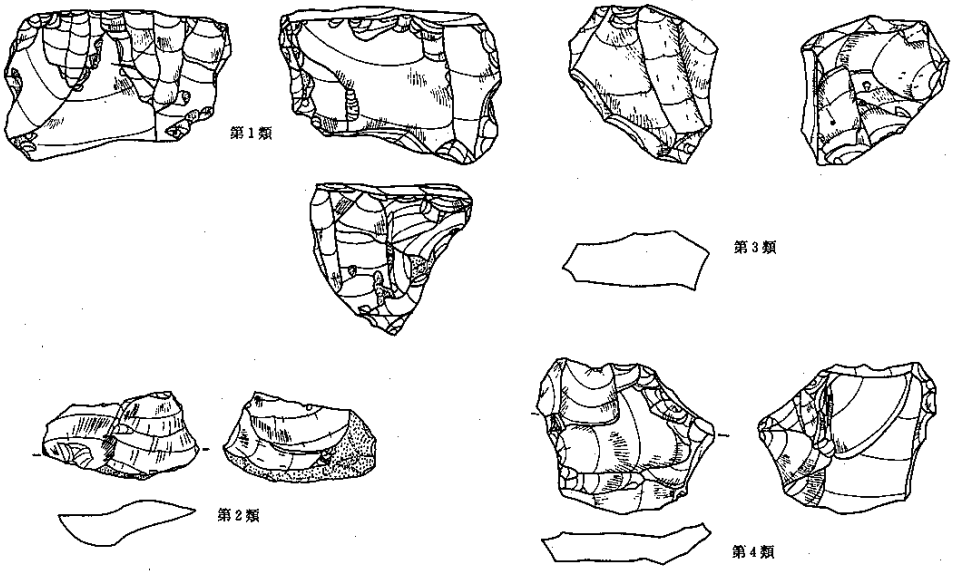
石核に残されている剥片剥離面で、打角の計測は困難なものが多い。

（2）石核の分類

石核を前項で観察した「打面転移の状態」に基づいて分類すると第87表のようになる。

第87表　石核（残核）の分類

石核（残核）
- 第１類：打面を転移せず、剥片を剥離しているもの
- 第２類：打面を約180°の単位で転移し、剥片を剥離しているもの
- 第３類：打面を約90°の単位で上下・左右に転移し、剥片を剥離しているもの
- 第４類：石核の縁辺に沿って打面を転移し、剥片を剥離しているもの



まとめ

１．剥片は縦と横の長さが近似した形態（長幅指数50～150）のものが多い。

２．剥片の打面には自然打面・平坦打面・調整打面があり、平坦打面のものが多い。また、打点の位置には左端・右側・中央付近・左側・右端があり、中央付近のものが多い。

３．剥片の打面には53°～135°のものまであり、80°～120°に比較的集中している。

４．剥片の背面にはＡ：自然面・Ｂ：自然面＋剥離面・Ｃ：剥離面のものがあり、Ｃ：剥離面のものが多い。ＢとＣにおいて、背面を形成する小剥離面にみられる打撃方向には、腹面の剥離に対し同一方向のもの、同一方向と正反対方向のもの、同一方向と任意方向のもの、任意方向のものがあり、この中で腹面の剥離に対して任意方向の小剥離面を何らかの形でもつものが多い。

５．剥片の末端には羽毛状のものと蝶番状のものがあり、羽毛状のものが多い。

６．石核の打面には自然打面・平坦打面・調整打面があり、平坦打面のものが多い。

７．石核の打面転移の状態をみると、転移していないもの、約180°転移しているもの、約90°の単位で上下・左右に転移しているもの、石核の縁辺に沿って転移しているものがあり、約90°の単位で上下・左右に転移しているものが多い。

磨　製　石　器

最終的に研磨をして、一定の形に整えている石器を磨製石器として扱うことにする。出土数は14点である。これらについて形態的特徴から次の２種類に大別した。

１．磨製石斧

形態が斧状のもので、頭部・胴部・刃部からなる磨製石器。

２．磨製石剣

形態が剣形状の磨製石器。

磨製石斧

磨製石斧は11点出土している。完形品は６点、破損品は５点である。

（1）石器の観察

石斧については平面形・断面形・大きさ・製作痕跡・使用痕跡等について観察と計測を行なった。

平面形

平面形は胴部・頭部・刃部形態について観察した。

〔胴部〕胴部の形態には次の種類がある。

Ⅰ：胴部側縁がほぼ平行なもの。

Ⅱ：胴部上半より胴部下半の幅が大きいもの。

Ⅰタイプは１点、Ⅱタイプは５点である。

〔頭部〕頭部の形態にはそのふくらみの形態から次の種類がある。

Ⅰ：丸味をもち、胴部側縁との境が不明瞭なもの。

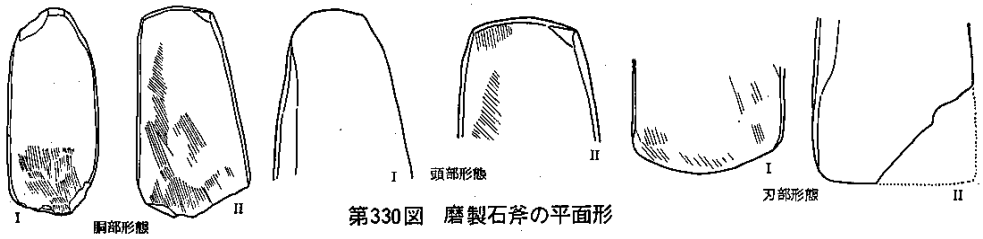
Ⅱ：平坦で胴部側縁との境に明瞭な稜をもつもの。

Ⅰタイプは３点、Ⅱタイプは２点である。

〔刃部〕刃部の形態には刃縁の状態から次の種類がある。

Ⅰ：刃縁が全体的に丸味をもつもの。

Ⅱ：刃縁中央が直線的で両端に丸味のあるもの。



第330図　磨製石斧の平面形

Ⅰタイプは６点、Ⅱタイプは１点である。

縦断面形

縦断面形は胴部・刃部形態について観察した。

〔胴部〕胴部の形態には次の種類がある。

Ⅰ：胴部がほぼ平行なもの。

Ⅱ：胴部が僅かにふくらむもの。

Ⅰタイプは２点、Ⅱタイプは５点である。

〔刃部〕刃部の状態には次の種類がある。

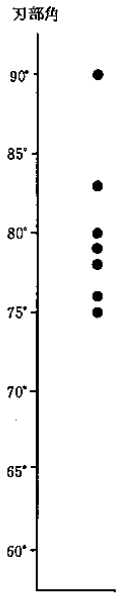
Ⅰ：中心線が刃縁を通るもの。

Ⅱ：中心線が刃縁を通らないもの。

Ⅰタイプは２点、Ⅱタイプは４点である。

〔刃部角〕刃部角の測定結果を示すと第331図のようになる。

刃部角は75°～90°の範囲におさまり、75°～79°のものが５点、83°のものが１点、90°のものが１点である。このように75°～79°に集中する傾向がみられる。



第331図　石斧の刃部角

横断面形

胴部横断面形を観察すると次の種類がある。

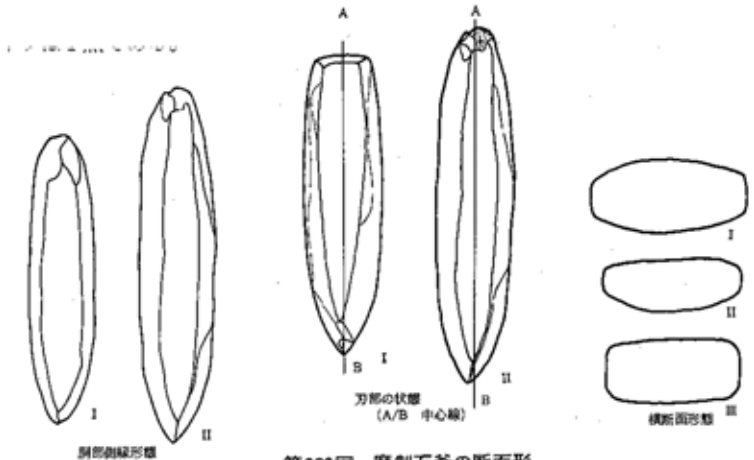
Ⅰ：ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの。

Ⅱ：ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの。

Ⅲ：ほぼ平行な長方形で隅が丸いもの。

Ⅰタイプが５点、Ⅱタイプは３点、

Ⅲタイプは１点である。



第332図　磨製石斧の断面形

大きさ

大きさを長さから検討すると、10.7～8.0cmの範囲におさまり、10.7cmのものが２点、8.8～9.1cmのものが３点、8.0cmのものが１点である。

重量

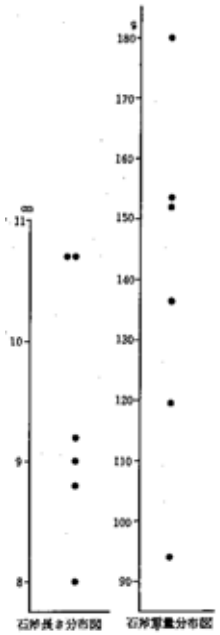
ほぼ完形の石斧の重量を第333図に示した。その結果、重量分布は94～180gの範囲である。ほぼ同じ重量（153g前後）を示すものが２点あるが、その他は重量分布にまとまりはみられない。

石材

石材の判明する石斧は８点である。使用されている石材は緑色凝灰岩３点・凝灰岩２点・珪化凝灰岩１点・石英安山岩１点・砂岩１点である。

製作痕跡

すべての石斧は全体的に研磨されており、第42図-8・第115図-5・第88表-1・３～７の胴部には中心軸に対して斜め方向の擦痕と研磨面が観察される。擦痕と研磨面はその幅が一致しており、製作時の研磨擦痕と考えられる。横断面の形態において「隅が角張るもの」は両側面を斜め方向に研磨で仕上げ、隅を研磨していないものである。「隅が丸いもの」は両側縁を斜め方向に研磨し、さらに縦方向の研磨で隅を落として仕上げているものである。

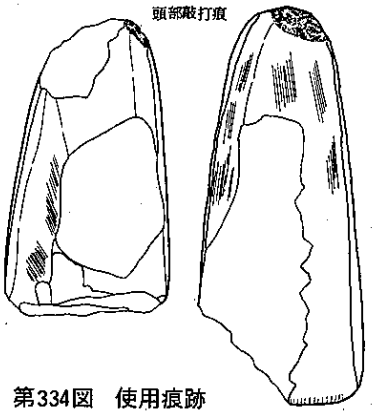


第333図　磨製石斧の大きさと重量

第42図-8の側面には「擦切り技法」による階段状の痕跡が観察される。

使用痕跡

使用痕跡には、刃部線状痕・刃部破損が観察された。第213図-2・第88表-5は刃部先端に斜め方向に線状痕が観察された。痕跡の位置は、刃部の中央よりも刃部の両端で明瞭であった。また、刃部の片面が特に明瞭であった。第115図-5は刃部先端に縦方向に線状痕が観察された。第213図-2・第88表１・２・３・４・６では刃縁の片側に破損が観察された。



第334図　使用痕跡
（頭部敲打痕・刃部破損）

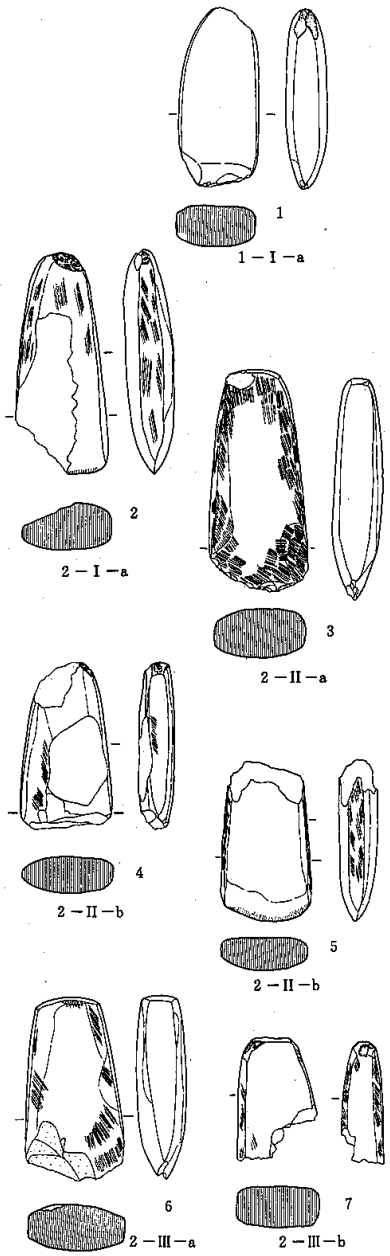
（2）石器の分類

石斧について、平面形・縦断面形・横断面形の特徴によって類型化すると第88表のようになる。

分類別の量的な関係は、第１群Ⅰａ類が１点、第２群Ⅰａ類が１点、第２群Ⅱａ類が２点、第２群Ⅱｂ類が３

第88表　磨製石斧の分類

平面形			断面			分類
刃部側縁	頭部	刃部	横断面	縦断面		
				胴部	刃部	
第1群 平行状 (Iタイプ)	I類 頭部に丸味 (Iタイプ)	刃部全体に丸味 (Iタイプ)	ふくらみをもつ長方形で隅が角張る (Iタイプ)	a 平行状 (Iタイプ)	中心線が刃縁を通るもの (Iタイプ)	1－I－a
第2群 下半の幅が大きい (IIタイプ)	I類 頭部に丸味 (Iタイプ)	刃部両端に丸味 (IIタイプ)	ふくらみをもつ長方形で隅が角張る (Iタイプ)	a 僅かにふくらむもの (IIタイプ)	中心線が刃縁を通らないもの (IIタイプ)	2－I－a
	II類 頭部に丸味 (Iタイプ)	刃部全体に丸味 (Iタイプ)	形で隅が角張る ふくらみをもつ長方 (Iタイプ)	a 僅かにふくらむもの (IIタイプ)	通らないもの 中心線が刃縁を (IIタイプ)	2－II－a
			隅が丸い ふくらみをもつ長方形で (IIタイプ)	b 僅かにふくらむもの (IIタイプ)	(欠)	2－II－b
				(欠)	いもの 縁を通らな 中心線が刃 (IIタイプ)	
	III類 頭部が平坦 (IIタイプ)	刃部全体に丸味 (Iタイプ)	で隅が角張る ふくらみをもつ長方形 (Iタイプ)	a 僅かにふくらむもの (IIタイプ)	るもの 中心線が刃縁を通 (IIタイプ)	2－III－a
			が丸い ほぼ平行な長方形で隅 (IIIタイプ)	b 平行状 (Iタイプ)	(欠)	2－III－b



点、第２群Ⅲａ類が１点、第２群Ⅲｂ類が１点となっている。

なお、分類の中に含めることはできなかったが第42図-8は明瞭に擦切り技法の痕跡を残し、他のものにくらべ非常に小形なものである。

（3）石器の機能

観察と分類の結果、本遺跡で出土した石斧は、細かな相違はあるが、横断面形がふくらみをもつ長方形で両刃であるという点で、これまで定角式石斧と呼ばれていたもの（岡本：1965）と形態的に一致する。また、第88表-１～４・５・第213図-2は刃縁全体に丸味があり、同時に刃縁片側破損が観察された。これは、刃縁と側縁とでできる角の部分をより使用し、対象に対して垂直でなく斜めに打ちこんだため角が斜めに減ったり、破損したものでＡＸＥ（斧）として使用されたものと考えられる。

第88表-5の刃部に斜め方向の線状痕、第115図-5の刃部に縦方向の線状痕が観察された。

第88表-5に観察された斜め方向の線状痕は対象に対して直角な円運動による痕跡である。このような線状痕はＡＸＥとして使用した場合の使用痕と考えられている（Ｓ．Ａ．ＳＥＭＥＮＯＶ：1957）。

第115図-5の縦方向の平行な線状痕は対象に対して平行な円運動による痕跡である。このような線状痕はＡＤＺＥ（手斧）として使用した場合の使用痕跡と考えられている（Ｓ．Ａ．ＳＥＭＥＮＯ-Ｖ：1957）。

このことから、第88表-1～6・第213図-2はＡＸＥ、第115-5図はＡＤＺＥとして使用したと考えられる。

次に磨製石斧の分類ごとの石材を示すと第89表のようになる。ある程度使用石材の限定（凝灰岩系）が想定される。

第89表　磨製石斧分類別石材表

磨製石斧の分類 ＼ 石材	1-Ⅰ-a	2-Ⅰ-a	2-Ⅱ-a	2-Ⅱ-b	2-Ⅲ-a	2-Ⅲ-b	不　明
緑色凝灰岩	6			12		10	
凝　灰　岩				14			5
珪化凝灰岩			9				
石英安山岩			1				
砂　　岩					7		

石剣

剣身部～切先の破片が１点、剣身部の破片が２点出土している。

（1）石器の観察

石剣の平面形・断面形・製作痕跡・石材について観察と計測を行なった。

平面形

平面形はすべて不明であるが第335図-1は「尖端のややせまい丸味のあるもの」である。

断面形（横）

断面形（横）には次のような種類がある。

１．レンズ状になるもの

２．偏平で刃部がやや丸味のあるもの

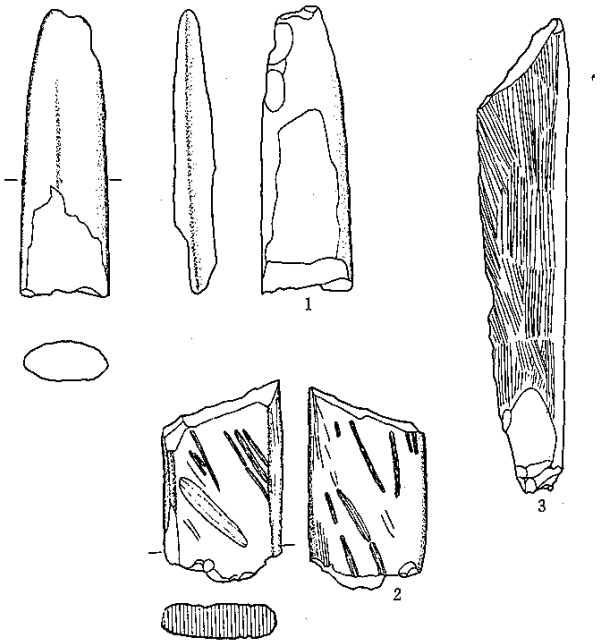
各タイプともそれぞれ１点である。

製作痕跡

３点とも両面に研磨の際の縦方向・斜め方向の研磨擦痕が観察される。

石材

石材の判明するものは２点あり、いずれもスレートである。



第335図　石剣

礫　　石　　器

素材の形をあまり変えないで使用している石器を、礫石器として扱うことにする。出土数は97点である。形態的特徴から次の６種類に大別した。

１．凹石

自然礫の一部に数個の小さい凹がある石器。

２．磨石

自然礫の一部に磨面がある石器。

３．石皿

自然礫の形を皿状に整えた石器。

４．砥石

研磨溝・研磨面がある石器。

５．石磨臼（下臼）

形態が円板状で、使用面に放射状の溝と磨面がある石器。

凹石

凹石は合計33点出土しており、完形品23点、破損品10点である。

（1）石器の観察

凹石の平面形・断面形・凹部・大きさ・重量・製作痕跡・使用痕跡・石核について観察と計測を行なった。

平面形

平面形は、完形品を観察すると次の種類がある。

Ⅰ．楕円形

Ⅱ．楕円形を基本とし、平面形の一部がほぼ直線的になるもの。

Ⅰタイプが19点、Ⅱタイプが４点である。

断面形

断面形は完形品を観察するとすべて楕円形を基本としている。

凹部の形態

凹の形態を平面形・断面形について観察すると、次のようなものが認められる。

Ⅰ．平面形が円形のもの

ａ：断面形がV字状のもの

ｂ：断面形がU字状のもの

c ：断面形が皿状のもの

Ⅱ．平面形が楕円形のもの

a ：断面形がV字状のもの

b ：断面形がU字状のもの

c ：断面形が皿状のもの

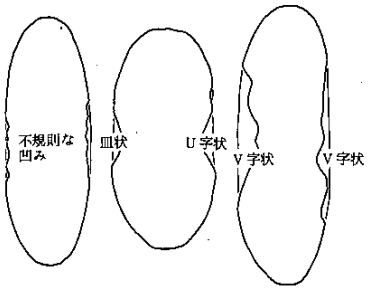
Ⅲ．平面形が小孔の集合による楕円形のもの

a ：断面形が皿状のもの

b ：断面形が不規則な凹み状のもの

Ⅳ．平面形が小孔の集合による不定形のもの

a ：断面形が不規則な凹み状のもの



第336図　凹の形態（断面）

凹部の位置

凹部の位置を観察すると次のようなものが認められる。

Ⅰ．上面にあるもの

Ⅱ．上・下両面にあるもの

Ⅲ．上・下両面と側面にあるもの

凹の数

凹部の認められる各々の面において確認される凹の数には次のようなものがある。

(1)：１個のもの

(2)：２個のもの

(3)：４個のもの

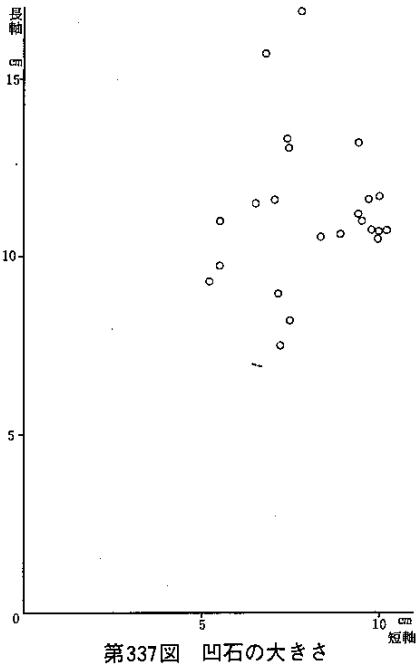
(4)：５個のもの

大きさ

完形品の凹石の長軸・短軸の長さを第337図に示しその分布から大きさの限界と集中を見ると次のようになる。

大きさは最大長軸16.9cm、最大短軸10.7cm、最小長軸7.5cm、最小短軸5.2cm範囲におさまる。最大のものは16.9cm×7.8cmで、最小のものは7.5cm、7.2cmである。

この中で長軸10.5～12.0cm、短軸8.0～10.0cmの範囲のものが比較的多い。また、長・短軸の比

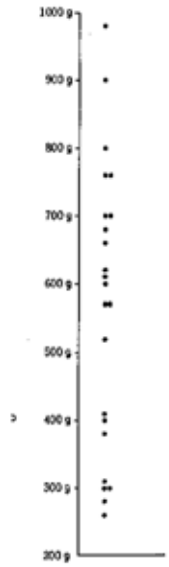


第337図　凹石の大きさ

を検討すると、すべて1.04〜2.3：１である。

重量

完形品の重量分布から重量の限界と集中を見ると第338図のようになる。重量は最大1,000g、最小250gの範囲におさまる。



第338図　凹石の重量分布

製作痕跡

凹部には敲打痕が観察された。この敲打痕には凹部を最初に作った製作痕とその後の使用痕跡が考えられが両者の判別はできなかった。

使用痕跡

〔使用痕跡の種類〕凹石には凹部にある使用痕跡とその他の部分にみられる磨面・敲打痕等の使用痕跡がある。これらの状態を観察すると次のようになる。

凹部の内側にはすべて敲打痕が認められ、その状態を観察すると次のような２種類がある。

①　敲打痕と凹の上端に対してほぼ平行な擦痕が観察されるもの

②　敲打痕だけ観察されるもの

磨面は凹石の周縁・側縁部全体・側縁部の一部・凹部の周囲にあり、他と区別すると平坦な面をしている。磨面には縦方向や横方向の擦痕が観察されるものがある。

敲打痕は周縁の上・下端のみに観察される。

〔使用痕跡の位置〕凹石における凹・磨面・敲打痕などの使用痕跡のあり方は第90表のようになる。

第90表　凹石における使用痕跡のあり方

	凹の使用痕跡	磨面	敲打痕
Ⅰタイプ	A．凹に敲打痕のあるもの		
	B．凹に敲打痕と擦痕（凹の上端に対してほぼ平行）のあるもの		
Ⅱタイプ	A．凹に敲打痕のあるもの	①擦痕を伴う磨面をもつもの	
		②磨面をもつもの	
Ⅲタイプ	A．凹に敲打痕のあるもの	①擦痕を伴う磨面をもつもの	敲打痕のあるもの
		②磨面をもつもの	敲打痕のあるもの

石材

凹石で石材の判明するものは27点あり、石英安山岩が25点、凝灰岩が１点、砂岩が１点である。

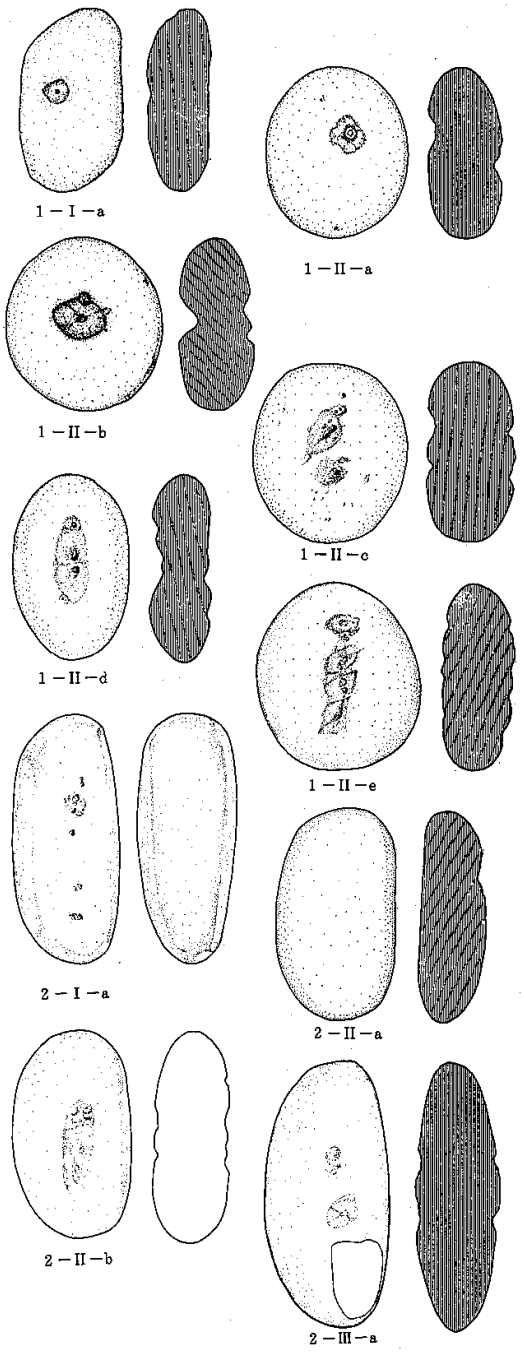
（2）石器の分類

平面形・凹の位置・凹の数の各項目で観察された特徴によって類型化すると第91表のように分類できる。

これらの量的関係をみると次のようになる。第１群Ⅰa類が７点、第Ⅰ群Ⅱa類が６点、第１群Ⅱb類・第Ⅰ群Ⅱc類が各々２点、第１群Ⅱd類・第１群Ⅱe類・第２群Ⅰa類・第２群Ⅱa類・

第91表　凹石の分類

平面形	凹の位置	凹の数	分類
1群 楕円形 (Iタイプ)	I類 上面	a (1－0)	1－I－a
	II類 上・下両面	a (1－1)	1－II－a
		b (2－1)	1－II－b
		c (2－2)	1－II－c
		d (4－2)	1－II－d
		e (5－4)	1－II－e
2群 楕円形で一部が直線的 (IIタイプ)	I類 上面	a (1－0)	2－I－a
	II類 上・下両面	a (1－1)	2－II－a
		b (2－2)	2－II－b
	III類 上・下両面 片側面	a (2－2－1)	2－III－a



第２群Ⅱb類・第２群Ⅲa類が各々１点である。

（3）石器の機能

使用痕跡の種類とそのあり方については既に述べた。その中で使用痕跡のあり方には３つのタイプがあることを指摘した。ここでは各々の成因について述べたい。

Ｉタイプのものは、凹部を使用した敲打作業（ＩＡタイプ）や敲打や回転を伴う作業（ＩＢタイプ）が行なわれたものと推定される。

Ⅱタイプのものは、凹部を使用した敲打作業が行なわれ、さらに磨面を使用した「磨る」作業も行なわれたものと推定される。そして「磨る」作業には縦方向や横方向への動きを示すもの（ⅡＡ①タイプ）と、動きの方向が不明なもの（ⅡＡ②タイプ）がある。

Ⅲタイプのものは、Ⅱタイプと同じ作業が行なわれた他に、凹部以外の部分で敲打作業がなわれたものと推定される。

このように凹石に磨面・敲打痕が観察されることは、凹部以外の部分で「敲く」・「磨る」作業が､「凹部」での作業と同時もしくは磨石・敲石からの凹石への転用、凹石から磨石・敲石への転用という形でなされたことが考えられる。

磨石

磨石は24点出土している。完形品は19点、破損品は５点である。

（1）石器の観察

磨石については、形態（平面形・断面形）・大きさ・重量・石材・磨面の観察と計測を行なった。

平面形

平面形は完形品を観察するとすべて楕円形を基本としている。

断面形

断面形は完形品を観察するとすべて楕円形を基本としている。

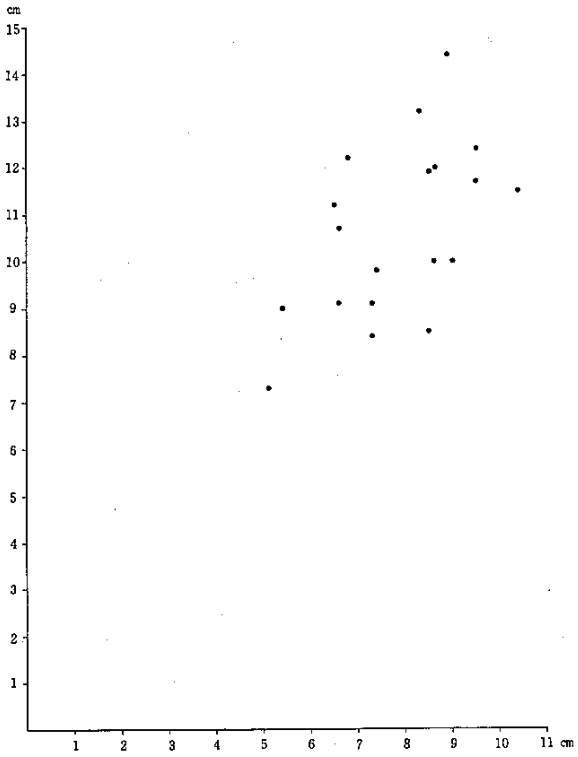
大きさ

完形品の長軸と短軸の長さをグラフに示し、その分布から大きさの限界と集中についてみると次のようになる。

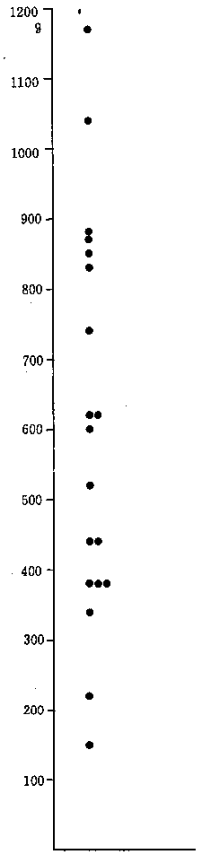
大きさは最大長軸14.5㎝、最大短軸10.5㎝、最小長軸7.0㎝、最小長軸5.2㎝の範囲におさまる（第341図)。また、長・短軸の比を検討するとすべて１～1.79：１である。

重量

完形品重量分布から重量の限界と集中を見ると第340図のようになる。重量は最大1170g、最小150gの範囲におさまる。



第339図　磨石の大きさ（長軸・短軸）



第340図　磨石の重量分布

使用痕跡

〔使用痕跡の状態〕使用痕跡としては磨面がある。磨面は磨石の上・下両面・両側面に観察され、他と区別される平坦な面をしている。この磨面は一般に滑らかであるが、僅かに磨り減った状態のものと、側縁と磨面の稜線がほぼ一致するほど磨り減った状態のものがある。

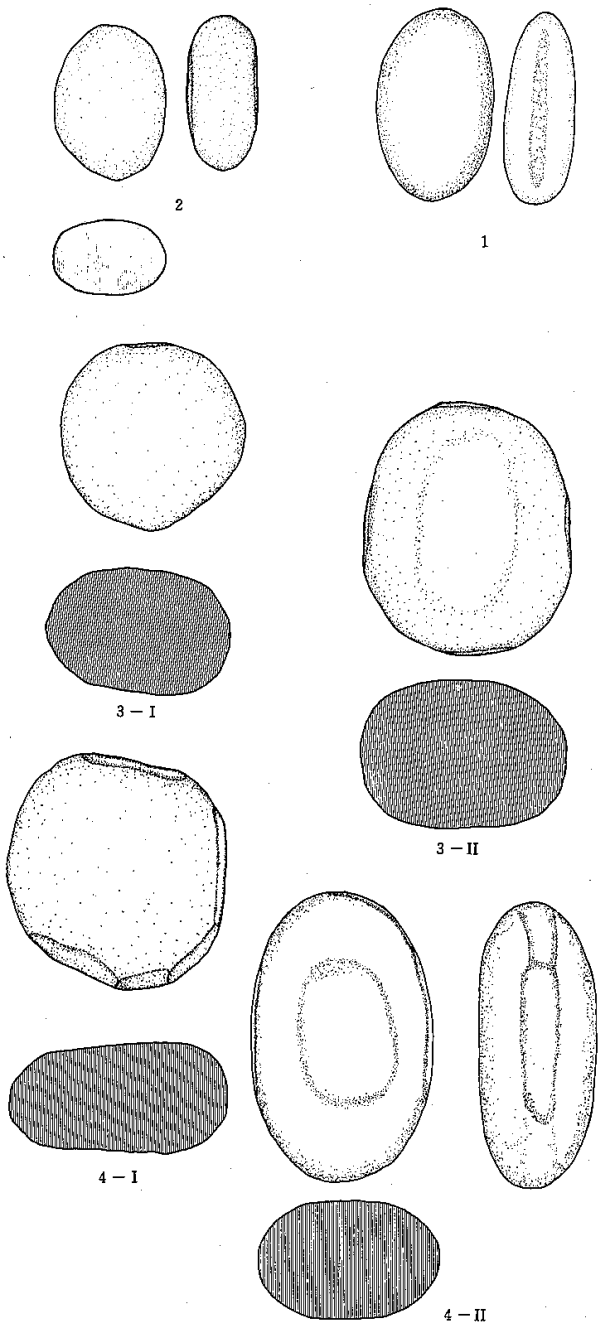
なお、この他の使用痕跡として磨石の両端や側縁に敲打痕の認められるものもある。

〔磨面の位置〕磨石にみられる磨面の位置には次のようなものがある。

a：上面にあるもの
b：上・下両面にあるもの
c：片面と片側面にあるもの
d：片面と両側面にあるもの
e：上・下両面と片側面にあるもの

第92表　磨石の分類

磨面の位置		分類
片面にあるもの　1群　(aタイプ)		1
上・下両面にあるもの　2群　(bタイプ)		2
片面と側面にあるもの　3群	I類　片面と片側面　(cタイプ)	3－I
	II類　片面と両側面　(dタイプ)	3－II
上・下両面と側面にあるもの　4群	I類　上・下両面と片側面　(eタイプ)	4－I
	II類　上・下両面と両側面　(fタイプ)	4－II



ｆ：上・下両面と両側面にあるもの

これらの量的関係をみるとａタイプが４点、ｂタイプが10点、ｃ・ｄ・ｅタイプが各々１点、ｆタイプが３点である。ｂタイプが最も多く、次にａタイプ、ｆタイプとなる。

石材

磨石で石材の判明するものは25点あり、石英安山岩が15点、砂岩が７点、安山岩が２点、頁岩が１点である。

（2）石器の分類

磨面の位置によって類型化すると第92表のように分類できる。

分類別の量的な関係は、第１群が４点、第２群が９点、第３群が２点、第４群が４点となっている。

（3）石器の機能

磨石には上・下両面、両側面に磨面が観察された。これは使用されてできた使用痕跡であると考えられる。

このような使用痕跡ができるのは、他の道具の上で「磨る」作業を行なったためと思われる。

また、磨面の他に敲打痕が観察されるものは「敲く」機能も果していたと考えられる。以上の点から磨石は「磨る」機能を主として、「敲く」機能も一部果していたものと推定される。

石皿

石皿は18点出土している。これらの中で完形なものは1点、一部欠損しているが全体の形態推定できるものは１点である。その他の16点は破片のため形態不明である。

（1）石器の観察

形態の不明な石皿が多いため破片の上面と下面の特徴を中心に観察と計測を行なった。

上面の観察

石皿の上面については平面形、縁の形態を観察する。

〔平面形〕大部分のものが破片で、平面形の不明なものが多い。その中で、第93表－５は完形で長方形をしている。また、第93表－１は一部破損しているが、楕円形のものと推定される。

〔縁の有無とその形態〕周縁部の縁の有無と形態を観察すると次の種類がある。

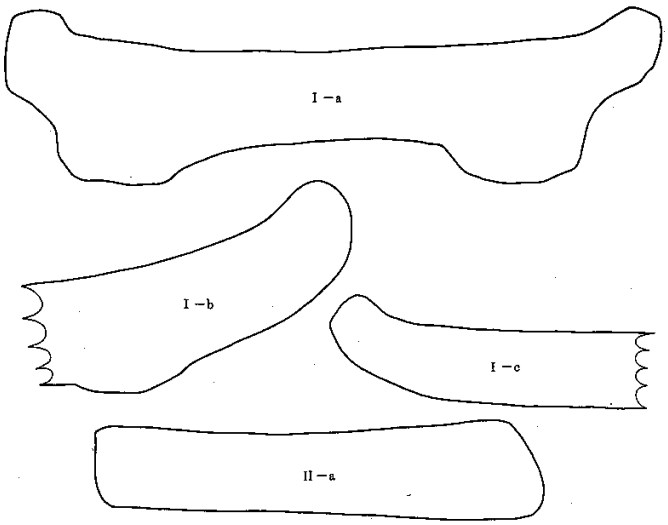
Ⅰ：有縁のもの

ａ：断面形が四角のもの

ｂ：断面形が丸いもの

ｃ：断面形が三角のもの

Ⅱ：無縁のもの



第341図　石皿の縁（断面形態）

各タイプの数量はⅠaタイプが１点、Ⅰbタイプが７点、Ⅰcタイプが１点、Ⅱタイプが６点である。

下面の観察

石皿の下面について脚の有無の判明するものを観察すると次の種類がある。

Ⅰ：有脚のもの

　a：方形の脚をもつもの

　b：楕円形の脚をもつもの

Ⅱ：無脚のもの

Ⅰaタイプが１点、Ⅰbタイプが１点、Ⅱタイプが１点である。

大きさ

第93表－５（長さ29.6cm、幅10.2cm）以外は破損しており全体の計測はできない。

石材

石皿の石材は石英安山岩５点、凝灰岩３点、凝灰質砂岩５点、真珠岩２点、安山岩２点、石英安山岩質凝灰岩１点である。

製作痕跡

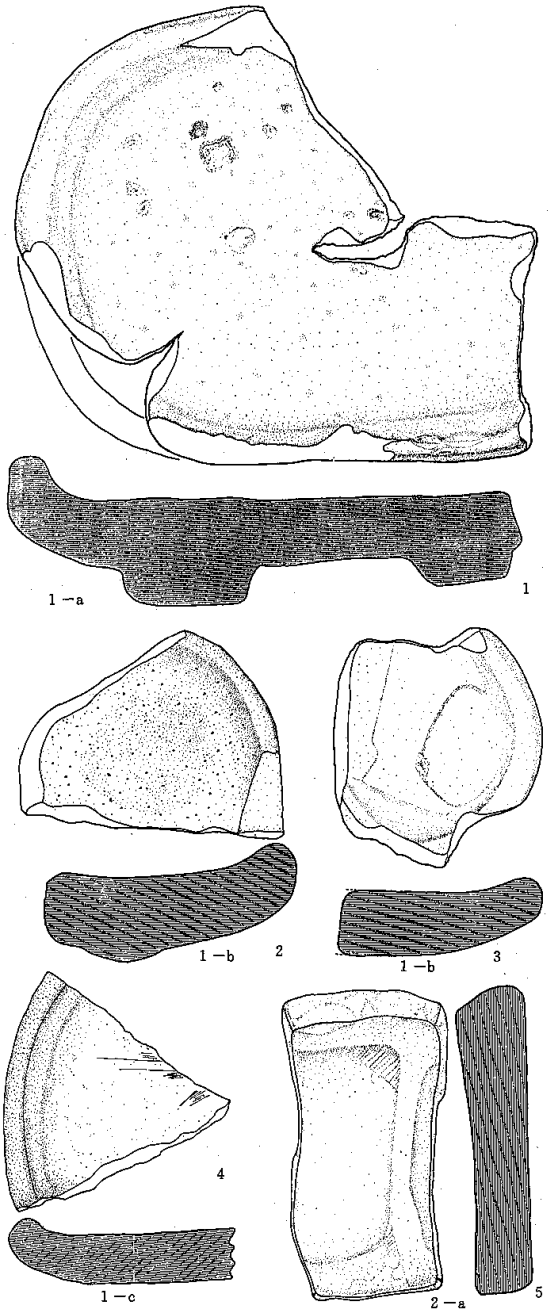
石皿の下面と側面を観察すると、敲打痕の認められるものが14点ある。この敲打痕は各々の大きさが一定しており、最終的な仕上げ段階のものと考えられる。

使用痕跡

使用痕跡には上面･下面に滑らかな磨耗痕をもつくぼんだ面が観察された。磨耗痕には、擦

第93表　石皿の分類

	上面	下面	分類
第1群 有縁のもの	a 平縁のもの	脚有	1a
		脚不明	
	b 丸縁のもの	脚有	1b
		脚不明	
	c 三角縁のもの	脚不明	1c
第2群 無縁のもの		脚無し	2－a



痕や、小さな凹みを伴うものがある。この小さな凹みについては使用痕跡が、それとも製作痕跡なのか明確でない。磨耗痕をもつくぼんだ面が上面にあるものは16点、上面と下面にあるものは２点である。

（2）石器の分類

各項目に従って観察された特徴によって石皿を分類すると、第93表のように分類できる。

分類別の量的な関係は､第Ⅰa類が４点､第Ⅰb類が７点､第Ⅰc類が１点､第２類が4点である。

（3）石器の機能

上面、下面には磨耗痕をもつくぼんだ面が観察されることは既に述べた。このような使用痕跡ができるのは、この面で他の道具を用いて「磨る」作業が行なわれたためと思われる。また、磨耗痕をもつくぼんだ面に小さな凹みを伴うものは、この上で「敲く」作業も併せて行なわれた可能性もある。

また、石皿に使用されている石材を分類別に示すと第94表のようになる。石材は安山岩系・凝灰岩系・砂岩の３種類に限定される。

第94表　石皿分類別石材

石材＼分類	1―a	1―b	1―c	1	2―a	不明	計
石英安山岩	2	1		1		1	5
安山岩		1		1			2
凝灰岩			1		1	1	3
石英安山岩質凝灰岩	1						1
凝灰岩質砂岩		4				1	5
真珠岩	1	1					2
計	4	7	1	2	1	3	18

砥石

砥石は19点出土している。

（1）石器の観察

砥石の観察にあたって、素材・形態（平面形・断面形）・使用痕跡について検討する。

素材

砥石として使用している素材には、次の３種類がある。

Ⅰ：自然礫を素材とし、その一部を使用しているもの。

Ⅱ：素材の面を広く使用し、それが両側縁まで及ぶもの。

Ⅲ：他の石器を転用しているもの。

各タイプの量的関係は、Ⅰタイプが10点、Ⅱタイプが５点、Ⅲタイプが３点となっている。

断面の形態

砥石について、断面形の検討を行なった。その結果、次の２種類が認められた。

１：方形のもの

２：不定形のもの

使用痕跡

使用痕跡は擦痕を伴う研磨面と、研磨溝などがある。これらは単独の場合と組み合っている場合がある。研磨面・研磨溝の状態を検討すると次の種類が認められる。

Ⅰ：研磨面だけのもの

ａ：研磨面が平坦なもの

ｂ：研磨面がくぼんでいるもの

Ⅱ：研磨溝だけのもの

ａ：研磨溝の幅がせまいもの

ｂ：研磨溝の幅が広いもの

Ⅲ：同一面に研磨面と研磨溝があるもの

ａ：研磨面が平坦で研磨溝がせまいもの

ｂ：研磨面がくぼんで研磨溝がせまいもの

ｃ：研磨面がくぼんで研磨溝が広いもの

これらの量的関係をみると、Ⅰaタイプ５点、Ⅰbタイプ５点、Ⅱaタイプ１点、Ⅱbタイプ２点、Ⅲaタイプ４点、Ⅲbタイプ１点、Ⅲcタイプ１点となっており、Ⅰタイプが最も多い。

使用面の数

砥石として使用されている面の位置と数を観察すると次の種類がある。

Ⅰ：１面使用

ａ：上面のもの

Ⅱ：２面使用

ａ：上・下両面のもの

ｂ：上面・側面のもの

Ⅲ：３面使用

ａ：上・下両面、側面のもの

Ⅳ：４面使用

ａ：上・下両面、両側面のもの

石材

砥石として使用されている石材は石英安山岩９点･安山岩１点･凝灰岩４点･硬質頁岩１点シルト岩（泥岩）２点である。

（2）石器の分類

砥石について素材･断面形・研磨面・研磨溝の位置と数について、特徴を類型化すると第95表のように分けられる。

分類別の量的な関係は第１群Ⅰa類が３点、第１群Ⅰb類が２点、第１群Ⅱa類が１点、第１群Ⅲa類が４点、第２群Ⅰa類が３点、第２群Ⅰb類が２点、第Ⅱ群Ⅱa類が１点、第３群Ⅰa類が１点、第３群Ⅱa類が２点となっている。第１群Ⅲa類が４点で、他の各タイプとも１～２点である。

（3）石器の機能

砥石の使用痕跡には、研磨面と研磨溝が観察された。

１群の砥石の使用面にみられる研磨面は、平面形よりややせまい範囲で中央がややくぼんでおり、擦痕が観察される。これは面を利用して比較的幅の広い工具を「研ぐ」作業や、磨製石器等の製作工程における「磨く」作業などを行なったものと考えられる。

また、磨溝には、溝幅のせまいもの（0.2cm～７cm）と広いもの（2.5cm～3.0cm）がある。これは、先端の細いものや、先端の丸いものを「研ぐ」作業を行なったものと考えられる。この１群の砥石は１～３面が使用面として使用されている。同一面に研磨面と研磨溝が伴うものがあり、これは面方の作業を行なったものであろう。

第２群の砥石は、面全体が利用され研磨擦痕が観察される。面全体を利用しており、磨面の中央がくぼむものと平坦なものがみられる。これは幅の広い工具を「研ぐ」作業を行なったものであろう。

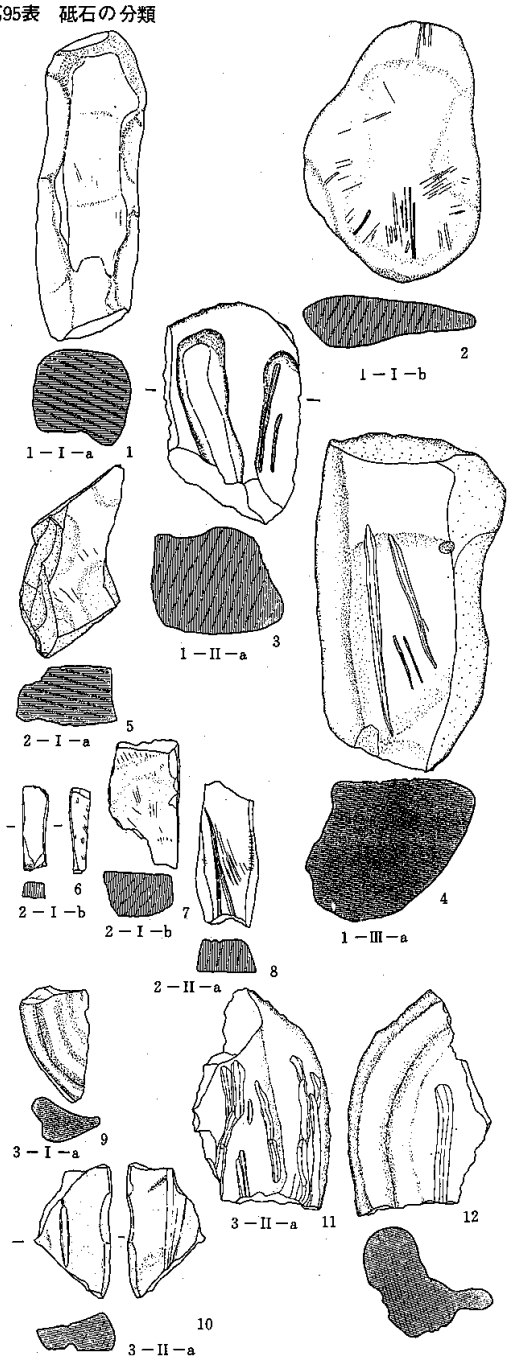
第３群の砥石は、石皿の側縁・下面を利用した比較的広い研磨溝をもつもので、先端の広いものを「研ぐ」作業に使用したものと思われる。

次に砥石として使用されている石材を分類別にみると１群と３群の石材は、面の粗い安山岩系と凝灰岩のものが多い。これは荒砥石として使用された可能性がある。

２群の石材は、石英安山岩と泥岩がある。石英安山岩は荒砥石として、泥岩は面が密であることから仕上げ砥石として使用された可能性がある。

第95表　砥石の分類

素材	使用面			分類
	磨面と溝の組み合せ	磨面と溝の状態	使用面の数	
1群 自然礫を素材としその一部を使用 (Iタイプ)	I類 磨面のみ (Iタイプ)	a 磨面が平坦 (aタイプ)	片面	1－I－a
			二面	
		b 磨面がくぼむもの (bタイプ)	二面	1－I－b
	II類 溝のみ (IIタイプ)	a 幅の広いもの (bタイプ)	二面	1－II－a
	III類 磨面と溝同一面に (IIIタイプ)	a 溝幅のせまい磨面が平坦で (aタイプ)		1－III－a
2群 素材の面を広く使用し両側縁まで及ぶもの (IIタイプ)	I類 磨面のみ (Iタイプ)	a 磨面が平坦 (aタイプ)	一面	2－I－a
			三面	
		b 磨面がくぼむ (bタイプ)	二面	2－I－b
			三面	
			四面	
	II類 磨面と溝をもつ (I・IIタイプ)	a 溝がせまい磨面がくぼみ (bタイプ)	四面	2－II－a
3群 他の石器を転用 (IIIタイプ)	I類 縁の外側に溝 (IIタイプ)	a 溝幅の広いもの (bタイプ)		3－I－a
	II類 上・下面に溝 (IIタイプ)	a 溝幅の広いもの (bタイプ)		3－II－a



石磨臼

下臼側縁部破片が４点出土している。

（1）石器の観察

石磨臼の平面形・使用面・製作痕・大きさ・石材について観察と計測を行なった。

平面形

平面形は破片側縁部の状況から、すべて円形をしていると推定される。

使用面

放射状の溝と磨面のある面が使用面である。溝の断面形は「U」字状のものである。溝は数条あるが破片のため単位は不明である。溝と溝の間の面は比較的磨滅している。

製作痕跡

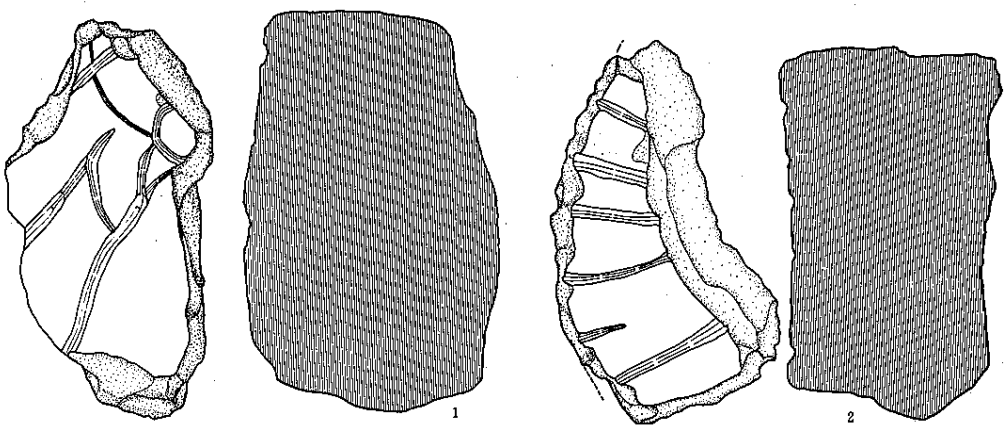
底面・側面を観察すると凹凸が見られ、礫の周辺を打ち欠き略円形にした後、敲打によって整形しているような痕跡が認められる。使用面の溝を見るとその底面に凹凸が見られ、尖端部の細い道具で敲打し溝を切っている痕跡が認められる。

大きさ

大きさは破片のため明確でないが、図上復元で直径20～30cmと推定される。厚さは現存部分で９～11cmである。溝幅は3.5～5.5cm、溝の深さは1.5～2.0mmである。周縁部における溝と溝との間隔は４cm・３cm・2.0～2.5cmなど多様である。

石材

石材は石英安山岩（３点）、安山岩（１点）の２種類である。



第342図　石磨臼

石製装身具

形態は多様である。貫通孔があり研磨痕跡が観察される石製品を装身具としと扱うことにする。出土教は７点（完形品５・破損品１・未製品１）である。

（1）石製装身具の観察

装身具は形態・穿孔・製作痕跡について観察と計測を行なった。

形態

形態は次の種類がある。

１、扁平で「⬭」状のもの

２、扁平で楕円形のもの

３、厚手で楕円形のもの

４、截頭円錐形のもの

貫通孔

穿孔された孔の数で次の種類がある。

１、単孔のもの

２、双孔のもの

製作痕跡（第96表）

１・３・５・６等は孔の内面に平行な擦痕が観察されることから、錐のようなものを回転させて穿孔する方法をとったものと推定される。また、１・２・３・５等にみられる貫通孔の断面形は両側に「Ｖ字状」に開くものが観察されることから、両側から穿孔されたものである。１は片側の貫通孔の右上に径１㎜の円形の凹みが見られる。これは穿孔を途中で中止したためのものと思われる。また、１の周縁部には横方向の擦痕と研磨面が観察され、その幅が一致しており製作時の研磨擦痕と考えられる。４は穿孔のための敲打痕が孔の内側に観察される。５は楕円形の礫の側面に幅2.5㎜の沈線がめぐり、整形の際の細かい擦痕が見られる。１は外面を截頭円錐状に整形した時の擦痕が縦方向に観察される。穿孔の方法は両側穿孔か否か不明である。

使用痕跡

１の貫通孔の上縁に擦れた痕跡が観察される。

石材

石材は珪化凝灰岩３点、凝灰質頁岩２点、硬質頁岩１点である。

（2）石製装身具の分類

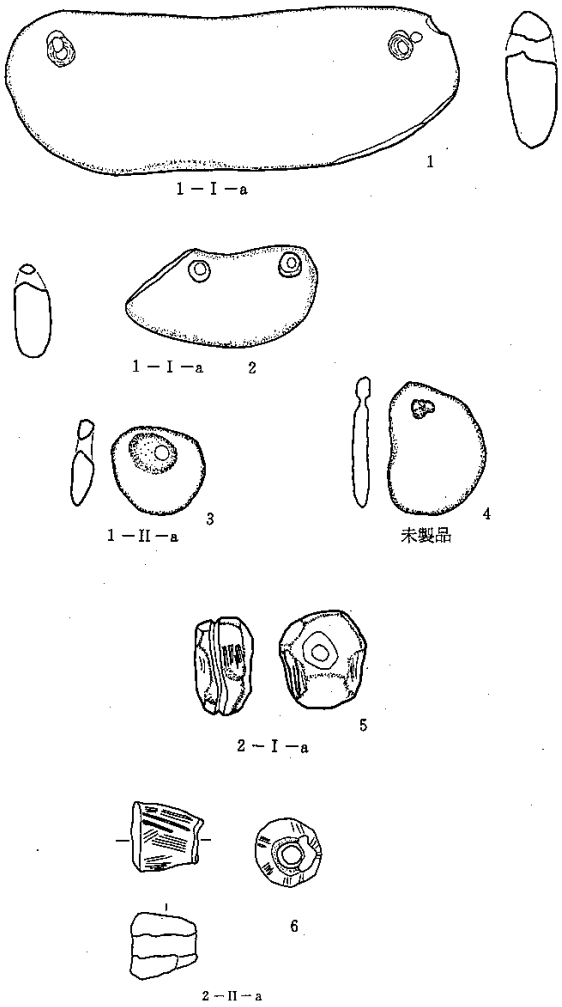
形態・貫通孔で類型化すると第95表のように分類できる。

（3）石製装身具の機能

１の貫通孔の上縁に観察される擦れた痕跡は「ひも」でさげた結果できた使用痕跡（紐擦れ）と考えられる。このことから、１は垂飾品と考えられる。他に出土しているものに「紐擦れ」の痕跡は明確でないが、有孔の石製品であることから、１と同様に垂飾品と思われる。

第96表　石製装身具の分類

形態	平面形	貫通孔	分類
1群 偏平	I類 「D」状	a 双孔 (2タイプ)	1－I－a
	II類 楕円形	a 単孔 (1タイプ)	1－II－a
2群 偏平でない	I類 厚手で楕円形	a 単孔 (1タイプ)	2－I－a
	II類 舷頭円錐形	a 単孔 (1タイプ)	2－II－a



堆積層および遺物群の年代

堆積層の年代

上深沢遺跡の基本的な堆積層は、既に述べたように、第Ⅰ層：暗褐色シルト層（表土）・第Ⅱ層：黒褐色シルト層・第Ⅲ層：暗褐色シルト層・第Ⅳ層：黒褐色シルト層である。これらの堆積層は、第Ⅰ層が遺跡全面に、第Ⅱ～Ⅳ層が緩斜面を中心に分布している。層の状態は、第Ⅰ層が草木の根が入り込む表土で、全般的に攪乱を受けている。第Ⅱ～Ⅲ層は部分的に攪乱を受けているが比較的安定している。第Ⅳ層は攪乱が少なく安定している。遺物の出土状況を観察すると第Ⅰ・Ⅱ層では規則性がみられない。第Ⅲ層は無遺物層であるが、攪乱を受けている部分などから不規則な状態で遺物が出土している。第Ⅳ層では、D―49区を中心とする地域に、層理面に沿った状態で多量の遺物が出土する良好な遺物包含層が、形成されていた。その他の地区でも、遺物包含層地区ほど多くはないが、遺物が出土している。

出土遺物をみると、第Ⅰ層からは、縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世、さらには現代のものが出土している。第Ⅱ層からは、縄文時代・中世・近世以降だが時期不明の遺物が出土している。第Ⅲ層は無遺物層である。第Ⅳ層から出土した遺物はすべて縄文時代中期のもので、出土土器の大部分を占めるのは大木９式土器である。わずかに大木８ｂ式土器や時期不明のものも含んでいるが、それらはいずれもまとまりを示さない。

以上の事柄から、各々の堆積層の形成年代を検討すると、年代を比較的限定して考えることができるのは、第Ⅰ層と第Ⅳ層である。第Ⅰ層は表土で、現代の遺物を含むことから、現代に至るまでの間に攪乱を受けるなどして形成されたものである。第Ⅳ層は層自体が安定していること、さらに出土土器の大部分が大木９式土器でそれより新しい遺物を含まないこと、そしてその上層が無遺物層の第Ⅲ層であることなどから、縄文時代中期の大木９式期に形成されたものと考えられる。大木９式土器の他にそれよりも古い大木８ｂ式土器などが少量含まれているが、それらは出土状況に一定のまとまりを示さず、二次的なまぎれこみの可能性が強い。

年代を限定することが困難なのは、第Ⅱ層と第Ⅲ層である。第Ⅲ層は第Ⅳ層の形成された縄文時代中期の大木９式期よりも新しい時代に堆積したことは明らかであるが、その具体的年代は不明である。第Ⅱ層は第Ⅲ層と同様縄文時代中期の大木９式期以降の堆積層と考えられる。出土遺物には大木９式土器をはじめとし、縄文時代のものが非常に多いが、中世・近世以降で時期不明のものも少量含まれている。その成因として、中世および近世以降になって、縄文時代の遺物を含む層が再堆積した場合と、第Ⅱ層形成時に第Ⅳ層までおよぶ攪乱がかなり行なわれた場合等が想定されるが、それを決定づける証拠はない。

住居跡群の年代

上深沢遺跡からは21軒の住居跡群が発見されている。これらの住居跡群の年代を推定するために、「住居跡の確認面と基本層位との関係」・「他の住居跡との重複関係」・「住居跡とその出土土器との関係」について検討を加えてみたい。

住居跡の確認面と基本層位との関係

住居跡の確認面と基本層位との関係を検討すると、次のようになる。

Ａ：第Ⅳ層上面において確認されたもの：第１・20住居跡
Ｂ：第Ⅳｂ層上面において確認されたもの：第12住居跡
Ｃ：第Ⅳｂ層中において確認されたもの：第14住居跡
Ｄ：地山面において確認されたもの：第２・３・４・６・７ａ・７ｂ・８・９ａ・９ｂ・10・13・15・16・17・18・19・21住居跡

他の住居跡との重複関係

他の住居跡との間に重複関係が認められ、その新旧関係が判明したものは、第２・４・７ａ・７ｂ・９ａ・９ｂ・13・15・20住居跡で、それらの新旧関係は次の通りである。

Ａ：第４住居跡→第20住居跡
Ｂ：第７ａ住居跡→第７ｂ住居跡
Ｃ：第９ｂ住居跡→第９ａ住居跡
Ｄ：第15住居跡→第13住居跡→第２住居跡

住居跡とその出土土器との関係

住居跡から出土した土器で、分類可能な資料は第100～103表に示した通りである。その内容を検討すると、出土土器の大部分を占めるのは、縄文時代中期の大木９式土器である。土器の出土量が多い住居跡では、大木8b式土器等も出土しているが、その中で占める比率は小さく、多くの場合これらは「まぎれこみ」の資料ではないかと考えられる。また、住居跡から出土する土器の量が少ない場合でも、その中で最も多いのは大木９式土器である。このように、住居跡群の年代を考える上で、大木９式土器の果たす役割は極めて大きい。そこで、住居跡群から出土する大木９式土器のあり方を整理してみると次のようになる。

Ａ：住居跡から比較的まとまって出土しているもの：第１・２・３・４・８・12・13・19・20住居跡
Ｂ：住居跡から出土しているが、量の少ないもの：第７ａ・７ｂ・９ａ・９ｂ・14・15・16・17・21住居跡
Ｃ：住居跡から、出土していないもの：第６・10・18住居跡

なお、この中で「比較的まとまって出土」としたのは、復元資料の場合２点以上、破片資料の場合10点以上を一つの目安とした。

住居跡群の年代

以上、述べたことをもとにして、住居跡群の年代について考えてみたい。まず、出土土器との関係から住居跡群の年代を考えると、Ａ・Ｂ・Ｃはそれぞれ次のように理解することができる。

Ａ：大木９式期と推定されるもの
Ｂ：大木９式期と推定されるが、他の時期の可能性もあるもの
Ｃ：時期が不明のもの

これらを、（１）基本層位との関係、（２）他の住居跡との重複関係によって整理すると次のようになる。

Ａ：大木９式期と推定されるもの
　A_1：第１住居跡・第３住居跡・第８住居跡・第12住居跡・第19住居跡
　A_2：第４住居跡⟶第20住居跡
　　（第15住居跡）⟶第13住居跡⟶第２住居跡
Ｂ：大木９式期と推定されるが、他の時期の可能性もあるもの
　B_1：第16・17・21住居跡
　B_2：第7a住居跡⟶第7b住居跡
　　第9b住居跡⟶第9a住居跡
　　第15住居跡⟶（第13住居跡）
　B_3：第14住居跡
Ｃ：時期不明のもの
　C_1：第10住居跡
　C_2：第18・６住居跡

これらの中で、A_1・B_1としたものは他の住居跡との間に重複関係がないか、あっても新旧関係が不明のものである。A_2・B_2としたものは重複している住居跡で新旧関係が明らかなものである。B_3は第Ⅳb層中、C_1は第Ⅳ層下の地山面で炉だけが確認されたものである。住居跡の掘り込み面は明らかでないが、第Ⅳ層が大木９式期に形成されたものであることから、あまり時期的に隔たるものではないと考えられる。C_2については、層位や遺物の点で時期を判断するのが困難であるが、炉の残存部の形態がＡ・Ｂのものと類以していることから、ほぼ時期のものと考えられる。

遺物群の年代

出土遺物の中で、土器類についてはその年代を既に検討した。ここでは、土器類を除いた土製品・石製品の年代について検討を加えたい。これらの遺物群を堆積層や遺構からの出土状況に従って整理すると次のようになる。

Ａ：第Ｘ層（出土層位不明）のもの
Ｂ：第０層（表面採取）のもの
Ｃ：第Ｉ層（表土）出土のもの
Ｄ：第Ⅱ層出土のもの
Ｅ：第Ⅲ層出土のもの
Ｆ：第Ⅳ層出土のもの
Ｇ：遺物包含層出土のもの
Ｈ：住居跡出土のもの

遺構や出土層位に従ってＡ～Ｈまで整理された遺物群の年代は、堆積層や遺構の形成された年代によって決定される。このような観点から堆積層や遺構の形成年代をもとにして遺物群の年代を考えると次のようになる。

Ⅰ、大木９式期：第Ⅳ層、遺物包含層、第１・３・８・12・19・４・20・13・２住居跡出土のもの

Ⅱ、大木９式期と推定されるが他の時期の可能性もある：第16・17・21・7a・7b・9a・9b・15・14住居跡出土のもの

Ⅲ、縄文時代～中世・近世以降：第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層出土のもの

Ⅳ、縄文時代～現代：第Ｘ層（出土層位不明）・第０層（表面採取）・第Ⅰ層･第10住居跡出土のもの

各々の時期における遺物群のあり方は第97～106表に示した通りである。しかし、ここで若干の補足をしておかねばならない。すなわち「Ⅰ、大木９式期」としたものは、遺構や堆積層の形成年代に基くものであるから、量的には少ないであろうがそれ以前の古い時期のものが二次的に流入している可能性もある。それは「Ⅱ、大木９式期と推定されるが他の時期の可能性もある」としたものでも同様である。

また、「Ⅲ、縄文時代～中世・近世以降」、「Ⅳ、縄文時代～現代」としたものは、出土する遺物の中に縄文時代以降のものを含んでいたためで、出土する土器の全体的なあり方から考えると、石磨臼や砥石の一部を除いて、その大部分は大木９式期に属すると考えて差してかえないものである。

第97表　第Ⅰ～3層出土の土器

陶器・磁器・須恵器・縄文後晩期の土器

陶器	鉢	3	摺鉢	4	壺	1	縄文後晩期土器	晩期大洞C2式		2
	皿	7	甕	5	椀	2		晩期大洞C2orA式		3
磁器	椀	3	皿	1	不明	1		晩期不明		2
須恵器	坏	1	鉢	1	壺	1		後期初頭式		3
	蓋	1	甕	9						

縄文中期の土器

部位	分類		数量	分類		数量	分類		数量
復元資料	IA1b2		1	IC1a4		2	IIA1		1
口縁部資料	IA1a3		2	IC1a2		7	IDの合計		78
	IA1a4		1	IC1a3		4	IIA1		6
	IA2a1		3	IC1a4		3	IIAの合計		6
	IA2a3		3	IC1a2～IC1a4		1	IIB1		56
	IA2a5		2	IC1a5		3	IIB2		4
	IA3a1		1	IC1a3～IC1a5		5	IIB3		4
	IA1a1～IA1b1		1	IC1a7		3	IIB4		3
	IA2a1～IA2b1		4	IC1a		2	IIB5		2
	IA1b2		3	IC1a －IC2a		55	IIBの合計		69
	IA1b3		10	ICの合計		85	IC1a2orID1a1		1
	IA2c1		5	ID1a1		12	ID ・IIB2		2
	IA2a5・IA2b1		1	ID1a2		1	その他の合計		3
	IAの合計		36	ID1a1～ID1a2		2	無文		103
	IB1a1		41	ID1a4		1	不明		86
	IBの合計		41	ID1a6		2			
	IC1a1		2	ID1a		60	合計		507
胴部資料	縦位楕円文I	調整沈線文	9	変形楕円文I	隆沈文C	2	縦位渦巻楕円文	隆沈文A	1
	縦位楕円文II	調整沈線文	2	変形楕円文I		1	縦位渦巻楕円文	隆沈文B	1
	縦位楕円文	調整沈線文	6	変形楕円文	調整沈線文	2	縦位渦巻楕円文	隆沈文C	37
	縦位楕円文	隆沈文C	2	変形楕円文	隆沈文B	3	縦位渦巻楕円文	隆沈文	2
	「∩」文I	調整沈線文	17	変形楕円文	隆沈文C	1	縦位渦巻楕円文		12
	「∩」文II	調整沈線文	6	変形楕円文or「∩」文I		1	縦位渦巻楕円文IIor「∩」文II	調整沈線文	1
	「∩」文	調整沈線文	18	連結渦巻文	隆沈文B	3	縦位渦巻楕円文or「∩」文	調整沈線文	1
	「∩」文I		2	連結渦巻文	隆沈文	2	横位渦巻楕円文	調整沈線文	1
	「∩」文II		2	連結渦巻文		3	横位渦巻楕円文	隆沈文C	5
	「∩」文		1	連結渦巻文	調整沈線文	17	横位渦巻楕円文		1
	縦位楕円文Ior「∩」文I	調整沈線文	266	変形渦巻文	調整沈線文	1	縦位渦巻文	調整沈線文	1
	縦位楕円文IIor「∩」文II	調整沈線文	54	渦巻文	調整沈線文	1	縦位渦巻文	隆沈文C	1
	縦位楕円文 or「∩」文	調整沈線文	432	渦巻文	隆沈文B	1	縦位渦巻文IV	調整沈線文	1
	縦位楕円文Ior「∩」文I		5	縦位楕円文IIor「∩」文II		1	縦位渦巻文VII		1
	縦位楕円文IIor「∩」文II	隆沈文	1	縦位楕円文Ior「∩」文I and渦巻文	調整沈線文	1	縦位渦巻文IV・円凹文		1
	縦位楕円文 or「∩」文		20	縦位楕円文Ior「∩」文I or渦巻文	調整沈線文	1	縦位楕円文or「∩」文 or 縦位渦巻文IV	調整沈線文	1
	鍵形文	調整沈線文	4	縦位渦巻楕円文I	隆沈文C	4	縦位楕円文or「∩」文 or 円凹文	調整沈線文	1
	鍵形文		1	縦位渦巻楕円文I		2	縦位渦巻文Ior「∩」文I	調整隆起線文	1
	縦位楕円文 or 鍵形文	調整沈線文	1	縦位渦巻楕円文III	調整隆起線文	1	横位渦巻文	隆沈文C	1
	「∩」文 or 鍵形文		1	縦位渦巻楕円文III		1	変形渦巻楕円文	隆沈文C	2
	変形楕円文I	調整沈線文	1	縦位渦巻楕円文III・IV	隆沈文C	1	長円文	隆沈文B	1
	変形楕円文I	隆沈文B	1	縦位渦巻楕円文	調整沈線文	5	円文・「∩」文II	調整沈線文 調整隆起線文	1
	円凹文	隆沈文	1	不明	隆沈文B	7	不明		296
	不明	調整沈線文	148	不明	隆沈文C	88	不明円凹文	調整沈線文	1
	不明	無調整沈線文	1	不明	隆沈文	17			
	不明	隆沈文A	1	不明	調整隆起線文	1	合計		1543
底部資料	A_3 (平底)		117	B (丸底)		1	不明		75
	A_1 (平網代底)		1	C_1 あげ底 (付高台)		1			
	A_2 (平網代底)		2	C (あげ底)		5			
	A_3		2	D		3	合計		207

第98表　第4層出土の土器

部位	分類		数量	分類		数量	分類		数量
復元資料	IA2a4		1	IC1a5		1	「∩」文or調整沈線文		2
	IC1a4		1	ID1a2		1			
口縁部資料	IA1a1		3	IBの合計		24	IIA1		4
	IA1a4		1	IC1a2		9	IIAの合計		4
	IA1a5		1	IC1a3		1	IIB1		45
	IA2a1		2	IC1a4		1	IIB2		1
	IA2a2		2	IC1a3～IC1a5		7	IIB3		2
	IA2a4		5	IC1a8		2	IIB4		8
	IA2a5		1	IC1a～IC2a		33	IIBの合計		56
	IA1a1～IA1b1		3	ICの合計		53	IC1a2orID1a1		1
	IA2a1～IA2b1		1	ID1a1		6	ID1a ・IIB2		3
	IA1b2		6	ID1a2		1	ID ・IIB2		1
	IA2b3		14	ID1a～ID1a2		1	その他の合計		5
	IA2a5・IA2b1		1	ID1a4		1	無文		75
	IAの合計		40	ID1a		38	不明		78
	IB1a1		24	IDの合計		47	合計		382
胴部資料	縦位楕円文I	調整沈線文	4	変形楕円文III	隆沈文C	1	縦位渦巻楕円文or「∩」文		1
	縦位楕円文	調整沈線文	6	変形楕円文	隆沈文B	2	縦位渦巻文III	調整沈線文	1
	縦位楕円文	隆沈文C	5	変形楕円文	隆沈文C	3	縦位渦巻文V	調整沈線文	2
	縦位楕円文Ior「∩」文I	隆沈文C	1	変形楕円文	隆沈文	1	縦位渦巻文	調整沈線文	2
	縦位楕円文Ior「∩」文I	調整沈線文	150	変形楕円文		8	縦位渦巻文IIIor「∩」文I	調整沈線文	1
	縦位楕円文IIor「∩」文II	調整沈線文	27	変形楕円文or「∩」文I		1	縦位渦巻文 or「∩」文	調整沈線文	1
	縦位楕円文 or「∩」文	調整沈線文	361	連結渦巻文	調整沈線文	15	横位渦巻楕円文IV	隆沈文C	1
	縦位楕円文 or「∩」文 or縦位渦巻文V	調整沈線文	1	連結渦巻文	無調整沈線文	1	横位渦巻文IV		1
	縦位楕円文Ior「∩」文I		5	連結渦巻文		1	不明	調整沈線文	91
	縦位楕円文 or「∩」文		9	変形渦巻文	調整沈線文	1	不明	隆沈文A	1
	「∩」文	調整沈線文	13	渦巻文	調整沈線文	1	不明	隆沈文B	6
	「∩」文I	調整沈線文	18	縦位渦巻楕円文I	隆沈文C	3	不明	隆沈文C	42
	「∩」文II	調整沈線文	9	縦位渦巻楕円文III	隆沈文C	1	不明	隆沈文	13
	鍵形文	調整沈線文	4	縦位渦巻楕円文	調整沈線文	3	不明		280
	鍵形文 or「∩」文II	調整沈線文	1	縦位渦巻楕円文	隆沈文C	36	不明円凹文	隆沈文C	3
	変形楕円文I	調整沈線文	2	縦位渦巻楕円文	隆沈文	4	不明円凹文		1
	変形楕円文III	調整沈線文	1	縦位渦巻楕円文		9			
	変形楕円文I	隆沈文C	3	縦位渦巻楕円文Ior「∩」文I	調整沈線文	1	合計		1159
底部資料	A_1 (平底)		86	C (あげ底)		4			
	A_1		1	D		2			
	A_1 (平網代底)		2	不明		37	合計		132

第99表　遺物包含層出土の土器

部位	分類		数量	分類		数量	分類		数量
復元資料	IA2a5		2	ID1a3		1	IIB4		1
	IC1a4		1	ID1a5		1			
口縁部資料	IA1b3		11	IC1a3・IC1a5		2	IIB2		2
	IA2a5		6	IC1a ～IC2a		56	IIB3		1
	IA2a1～IA2b1		7	ICの合計		74	IIB4		2
	IA2c1		3	ID1a1		23	IIB5		1
	IAの合計		27	ID1a5		1	IIBの合計		64
	IB1a1		40	ID1a6		1	IC1a4orID1a4		2
	IBの合計		40	ID1a		34	ID1a ・IIB2		2
	IC1a2		7	IDの合計		59	その他の合計		4
	IC1a3		4	IIA1		7	無文		77
	IC1a4		3	IIAの合計		7	不明		61
	IC1a5		2	IIB1		58	合計		413
胴部資料	縦位楕円文II	調整沈線文	1	変形楕円文	調整沈線文	1	縦位楕円文V 縦位渦巻文V	調整沈線文	1
	縦位楕円文	調整沈線文	2	連結渦巻文	調整沈線文	3	縦位楕円文 縦位渦巻文III	調整沈線文	3
	縦位楕円文	隆沈文B	1	連結渦巻文	隆沈文C	1			
	縦位楕円文	隆沈文C	1	縦位渦巻楕円文I	隆沈文C	8	縦位楕円文 縦位渦巻楕円文III	調整沈線文	2
	縦位楕円文	隆沈文	1				縦位楕円文∩文I or 縦位渦巻文IIB	調整沈線文	1
	縦位楕円文 円凹文	調整沈線文	1	縦位渦巻楕円文III	調整沈線文	3	縦位楕円文∩文I 縦位渦巻文	調整沈線文	1
	「∩」文I	調整沈線文	23	縦位渦巻楕円文	調整沈線文	1			
	「∩」文II	調整沈線文	9	縦位渦巻楕円文	調整沈線文	4	鍵形文 縦位渦巻楕円文	調整沈線文	1
	「∩」文	調整沈線文	14	縦位渦巻楕円文	隆沈文B	1	縦位渦巻楕円文 縦位渦巻文	調整沈線文	1
				縦位渦巻楕円文	隆沈文C	24			
	変形「∩」文	調整沈線文	2	縦位渦巻楕円文	隆沈文	1	不明	調整沈線文	77
	鍵形文	調整沈線文	19	縦位渦巻文III	調整沈線文	1	不明	隆沈文B	3
	縦位楕円文I or「∩」文I	調整沈線文	226				不明	隆沈文C	80
	縦位楕円文II or「∩」文II	調整沈線文	26	縦位渦巻文V	調整沈線文	2	不明	隆沈文	30
	縦位楕円文 or「∩」文	調整沈線文	289	横位渦巻楕円文VI	調整沈線文	1			
	縦位楕円文I or「∩」文I 円凹文	調整沈線文	1	横位渦巻楕円文	隆沈文C	1			
	縦位楕円文II or「∩」文II 円凹文		1	横位渦巻文	隆沈文B	1	不明円凹文	隆沈文C	1
	縦位楕円文 or「∩」文 円凹文	調整沈線文	1	横位渦巻文	隆沈文C	1	円凹文	隆沈文	1
	変形楕円文III	調整沈線文	1	縦位楕円文I 縦位渦巻文II	調整沈線文	1	合計		875
底部資料				A_1 (平底)		130	D		1
				不明		43	合計		174

第100表　住居跡出土の土器 Ⅰ

住居跡名	出土土器				
	層位	部位	分類		数量
第1住居跡	堆積土	復元資料	IC1a	IC1a2	1
		口縁部資料	IA	IA1a1	1
				IA2a1	1
				IA2a1～1A2b1	1
			IB1a	IB1a1	4
			IC1a	IC1a3or5	1
				IC1a～IC2a	11
			ID1a	ID1a	2
			IIA	IIA1	1
			IIB	IIB1	2
			無文		15
			不明		6
		胴部資料	縦位楕円文I	(調整沈線文)	6
			縦位楕円文II	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文	(調整沈線文)	2
			「∩」文1	(調整沈線文)	2
			「∩」文II	(調整沈線文)	4
			「∩」文	(調整沈線文)	3
			縦位楕円文Ior「∩」文I	(調整沈線文)	22
			縦位楕円文IIor「∩」文II	(調整沈線文)	14
			縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	48
			鍵形文	(調整沈線文)	2
			鍵形文変形楕円文	(調整沈線文)	1
			連結渦巻文	(調整沈線文)	10
			縦位渦巻楕円文I	(隆沈文C)	1
			縦位渦巻楕円文	(隆沈文C)	1
			横位渦巻楕円文I	(隆沈文B)	1
			横位渦巻楕円文		1
			不明		88
		底部資料	A (平底)	A_1	8
				A_2 (網代底)	1
			C (あげ底)		1
			不明		4
	床面・細部	復元資料	IC1a	IC1a3	1
				IC1a5	1
			縦位楕円文Ior「∩」文I	(調整沈線文)	2
			IIB	IIB1	1
			縦位楕円文I	(調整沈線文)	1
		口縁部資料	IA	IA2a1	1
				IA2a4	1
			IB1a	IB1a1	1
			IC1a	IC1a4	1
				IC1a9	1
				IC1a～IC2a	2
			ID1a	ID1a	1
			IIB	IIB1	2

住居跡名	出土土器				
	層位	部位	分類		数量
			無文		3
			不明		1
		胴部資料	縦位楕円文	(調整沈線文)	1
			「∩」文II	(調整沈線文)	2
			「∩」文	(調整沈線文)	3
			縦位楕円文Ior「∩」文I	(調整沈線文)	2
			縦位楕円文IIor「∩」文II	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	29
			連結渦巻文	(調整沈線文)	3
			縦位渦巻文VI	(調整沈線文)	1
			不明		38
		底部資料	A (平底)	A_1	5
			不明		2
第4住居跡	堆積土	胴部資料	縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	4
	床面・細部	復元資料	IC1a	IC1a5	1
		口縁部資料	IC1a	IC1a6	1
		胴部資料	縦位楕円文I	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	5
			不明		1
第6住居跡	堆積土	胴部資料	縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	1
	床面細部	胴部資料	縦位楕円文	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	2
第19住居跡	床面・細部	口縁部資料	IA	IA2a5	2
				IA2a1～IA2b1	1
		胴部資料	縦位楕円文I	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文Ior「∩」文I	(調整沈線文)	3
			不明		4
		口縁部資料	IA	IA2a1～IA2b1	1
			IC1a	IC1a～IC2a	1
			IIB	IIB1	2
			無文		1
		胴部資料	縦位楕円文Ior「∩」文I	(調整沈線文)	2
			縦位渦巻楕円文	(隆沈文C)	3
			横位渦巻楕円文		1
			不明		19
		底部資料	不明		1
		復元資料	IA	IA2a5	1
			IIB	IIB1	1
		口縁部資料	IA	IA2a2	1
				IA2a1～IA2b1	2
			IB1a	IB1a1	6
			IC1a	IC1a4	1
				IC1a6	1
				IC2a1	1
				IC1a～IC2a	8
			ID1a	ID1a	3

第101表　住居跡出土の土器　II

住居跡名	出土土器				
	層位	部位	分類		数量
第20住居跡	堆積土		IIA	IIA1	2
			IIB	IIB1	11
			無文		11
			不明		8
		胴部資料	縦位楕円文I	(調整沈線文)	2
			縦位楕円文	(調整沈線文)	2
			「∩」文I	(調整沈線文)	2
			「∩」文II	(調整沈線文)	1
			「∩」文	(調整沈線文)	7
			縦位楕円文I or「∩」文I	(調整沈線文)	28
			縦位楕円文II or「∩」文II	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	18
			変形楕円文	(調整沈線文)	2
			連結渦巻文	(調整沈線文)	6
				(隆沈文)	1
			縦位渦巻楕円文I	(隆沈文C)	2
			縦位渦巻楕円文IV	(隆沈文C)	1
			横位渦巻楕円文		1
			縦位渦巻文		1
			円文		1
			不明		67
		底部資料	A (平底)	A_1	15
			C (あげ底)		1
			不明		14
	床面・細部	口縁部資料	IA	IA2a1	1
			IIB	IIB1	3
			無文		2
		胴部資料	縦位楕円文II	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文	(調整沈線文)	1
			「∩」文	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文I or「∩」文I	(調整沈線文)	2
			縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	2
			不明		1
住居跡 第21	床面・細部	口縁部資料	無文		1
		胴部資料	縦位渦巻楕円文「∩」文	(隆沈文C)	1
第7住居跡	堆積土	胴部資料	縦位楕円文I or「∩」文I	(調整沈線文)	1
			縦位渦巻楕円文	(隆沈文C)	1
		底部資料	A (平底)	A_1	1
	床面・細部	口縁部資料	ID1a	ID1a1	1
			不明		2
		胴部資料	縦位楕円文II	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文I or「∩」文I	(調整沈線文)	2
			縦位楕円文II or「∩」文II	(調整沈線文)	1
			不明		3
		底部資料	A (平底)	A_1	1
			不明		1

住居跡名	出土土器				
	層位	部位	分類		数量
第8住居跡	堆積土	口縁部資料	IA	IA1b3	1
			IB1a	IB1a1	2
			IC1a	IC1a4	1
				IC1a8	1
				IC1a～IC2a	7
			ID1a	ID1a	2
			IIB	IIB1	1
			無文		6
			不明		10
		胴部資料	縦位楕円文I	(調整沈線文)	5
			縦位楕円文III	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文	(調整沈線文)	6
			「∩」文I	(調整沈線文)	2
			「∩」文II	(調整沈線文)	2
			「∩」文	(調整沈線文)	5
			縦位楕円文I or「∩」文I	(調整沈線文)	21
			縦位楕円文II or「∩」文II	(調整沈線文)	4
			縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	29
			鍵形文	(調整沈線文)	1
			変形楕円文	(調整沈線文)	3
			連結渦巻文	(調整沈線文)	1
			縦位渦巻楕円文	(隆沈文C)	6
			不明		25
		底部資料	A (平底)	A_1	12
			C (あげ底)		1
			不明		5
	床面・細部	口縁部資料	IC1a	IC1a7	1
				IC1a～IC2a	2
			無文		3
		胴部資料	縦位楕円文I	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文I or「∩」文I	(調整沈線文)	10
			縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	8
			不明		1
		底部資料	不明		1
第9住居跡	堆積土	口縁部資料	IC1a	IC1a2	1
		底部資料	A (平底)	A_1	1
	床面・細部	胴部資料	縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	1
			連結渦巻文	(調整沈線文)	1
			不明		1
第17住居跡	堆積土	胴部資料	縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	1
			縦位渦巻楕円文	(隆沈文C)	1
	床面・細部	口縁部資料	IA	IA2a5	1
		胴部資料	縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	1
			不明		1
住居跡 第16	床面・細部	口縁部資料	IC1a	IC1a4	1
		胴部資料	不明		1

第102表　住居跡出土の土器　Ⅲ

住居跡名	出土土器				
	層位	部位	分類		数量
第2住居跡	堆積土	口縁部資料	ⅠA	ⅠA1a1	1
				ⅠA2a1	1
			ⅠC1a	ⅠC1a1	2
			ⅠD1a	ⅠD1a1	1
			ⅡB	ⅡB1	1
			無文		1
			不明		1
		胴部資料	「∩」文Ⅰ	(調整沈線文)	2
			縦位楕円文Ⅰor「∩」文Ⅰ	(調整沈線文)	3
			縦位楕円文or「∩」文	(調整沈線文)	4
			連結渦巻文	(調整沈線文)	1
			変形楕円文	(隆沈文)	1
			縦位渦巻楕円文	(隆沈文C)	2
			不明		4
		底部資料	A(平底)	A1	1
	床面・細部	復元資料	ⅠC1a	ⅠC1a1	1
		口縁部資料		ⅠC1a7	1
			ⅠC1a	ⅠC1a～ⅠC2a	4
			ⅠD1a	ⅠD1a	1
			ⅡB	ⅡB1	3
			不明		1
		胴部資料	「∩」文Ⅱ	(調整沈線文)	1
			「∩」文	(調整沈線文)	2
			縦位楕円文Ⅰor「∩」文Ⅰ	(調整沈線文)	2
			縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	21
			変形楕円文	(調整沈線文)	1
			縦位渦巻楕円文	(隆沈文C)	2
			横位渦巻楕円文		1
			不明		12
		底部資料	A(平底)	A1	6
			不明		2
		口縁部資料	ⅠA		2
			ⅠB1a	ⅠB1a1	12
			ⅠC1a	ⅠC1a2	1
				ⅠC1a4	9
				ⅠC1a3～5	2
				ⅠC1a8	1
				ⅠC1a～ⅠC2a	2
			ⅠD1a	ⅠD1a1	1
				ⅠD1a	4
			ⅡB	ⅡB1	20
			無文		11
			不明		7
			縦位楕円文Ⅰ	(調整沈線文)	2
			縦位楕円文	(調整沈線文)	3
			「∩」文Ⅰ	(調整沈線文)	33

住居跡名	出土土器				
	層位	部位	分類		数量
第12住居跡	堆積土	胴部資料	「∩」文Ⅱ	(調整沈線文)	4
			「∩」文	(調整沈線文)	5
			縦位楕円文Ⅰor「∩」文Ⅰ	(調整沈線文)	8
			縦位楕円文Ⅱor「∩」文Ⅱ	(調整沈線文)	3
			縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	20
			変形楕円文Ⅰ	(調整沈線文)	1
			変形楕円文	(調整沈線文)	1
				(隆沈文)	3
			縦位渦巻楕円文Ⅰ	(隆沈文C)	2
			縦位渦巻楕円文	(隆沈文C)	5
			縦位渦巻文		2
			横位楕円文	(調整沈線文)	1
			横位楕円文	(隆沈文C)	1
			横位渦巻楕円文Ⅰ	(隆沈文A)	1
			横位渦巻楕円文Ⅰ	(隆沈文B)	1
			横位渦巻楕円文		1
			縦位渦巻文Ⅲ　横位渦巻文		1
			不明		9
		底部資料	A(平底)	A1	20
			不明		2
	床面・細部	復元資料	ⅠB1a	ⅠB1a1	1
			ⅡB	ⅡB1	1
		口縁部資料	ⅠB1a	ⅠB1a1	1
			ⅠC1a	ⅠC1a4	1
			ⅡB	ⅡB1	4
			無文		1
			不明		1
		胴部資料	縦位楕円文	(調整沈線文)	1
			「∩」文Ⅰ	(調整沈線文)	2
			「∩」文	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文Ⅰor「∩」文Ⅰ	(調整沈線文)	1
			縦位渦巻楕円文Ⅰ	(隆沈文C)	1
			変形渦巻文		1
			不明		3
		底部資料	A(平底)	A1	1
			B(丸底)		1
第13住居跡	堆積土	口縁部資料	ⅠC1a	ⅠC1a～ⅠC2a	2
			ⅠD1a	ⅠD1a	2
			不明		1
		胴部資料	縦位楕円文Ⅰor「∩」文Ⅰ	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文Ⅱor「∩」文Ⅱ	(調整沈線文)	1
			縦位渦巻楕円文「∩」文	(隆沈文C)	1
			横位渦巻文		1
			不明		3
		口縁部資料	ⅠD1a	ⅠD1a1	1
				ⅠD1a	1
			ⅡA	ⅡA1	1

第103表　住居跡出土の土器　Ⅳ

住居跡名	出土土器					
	層位	部位	分類		数量
第13住居跡	床面・細部		ⅡA	ⅡA1	1
			ⅡB	ⅡB1	3
			無文		2
		胴部資料	縦位楕円文	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文Ⅱor「∩」文Ⅱ	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	3
			変形楕円文Ⅳ	(調整沈線文)	1
			不明		2
第15住居跡	堆積土	口縁部資料	無文		2
		胴部資料	「∩」文Ⅰ	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	2
			不明		3

住居跡名	出土土器					
	層位	部位	分類		数量
第3住居跡	堆積土	復元資料	ⅠD1a	ⅠD1a2	1
		口縁部資料	ⅠC1a	ⅠC1a～ⅠC2a	2
			ⅠD1a	ⅠD1a	1
		胴部資料	縦位楕円文Ⅱ	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文Ⅰor「∩」文Ⅰ	(調整沈線文)	2
			縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	1
			縦位渦巻楕円文	(隆沈文C)	2
			不明		1
	床面・細部	復元資料	ⅠD1a	ⅠD1a5	1
		口縁部資料	ⅠC1a	ⅠC1a2	1
				ⅠC1a～ⅠC2a	2
			無文		1
		胴部資料	縦位楕円文Ⅰor「∩」文Ⅰ	(調整沈線文)	2
			縦位楕円文Ⅱor「∩」文Ⅱ	(調整沈線文)	1
			縦位楕円文 or「∩」文	(調整沈線文)	2
			その他の渦巻文		1
			不明		3
		底部資料	A (平底)	A1	4
			不明		2

第104表　土偶・斧状土製品・円板状土製品

		土偶	斧状土製品	円板状土製品
第1住居跡	堆積土	ⅠA1 (1)，ⅠC (1)		(2)
	床面・細部	ⅠA (1)	(1)	(1)
第9住居跡	床面・細部	ⅠB (1)		
遺物包含層		ⅠA1 (1)	(1)	
第4層		ⅠA1 (2)，Ⅱ (1)		
第1～3層		ⅠA1 (2)		

第105表　石製品Ⅰ

遺構	層位	剝片石器第1群	剝片石器第2群	剝片石器第3群	剝片石器第4群	剝片	石核
	Ⅰ～Ⅲ層	A Ⅰ 2 A Ⅱ 2 B Ⅰ 2 C Ⅱ 4 D_1Ⅱ 3 E Ⅱ 1 不明 10	AⅡb 2 BⅡb 1 CⅡc 1 DⅡc 2 不明 5	不明 1	A $Ⅰ_1$ 3 A$Ⅱ_3$ 2 A $Ⅰ_2$ 3 A$Ⅱ_5$ 1 A $Ⅰ_4$ 1 A$Ⅱ_6$ 2 A $Ⅰ_6$ 5 A$Ⅱ_7$ 3 A $Ⅰ_7$ 3 B 1 1 A $Ⅰ_9$ 1 B 2 1 A $Ⅰ_{10}$ 4 B 3 4 A $Ⅰ_{11}$ 2 C 3 A $Ⅱ_1$ 2 A$Ⅱ_4$ 1 A $Ⅱ_2$ 1 不明 17	332	4
	Ⅳ層	A Ⅰ 2 A Ⅱ 3 C Ⅱ 8 D_2Ⅱ 1 E Ⅱ 1 不明 17	AⅠa 1 AⅡb 3 BⅡb 1 CⅡc 1 DⅡc 1 不明 5	A Ⅰa 1 B Ⅰa 4	A $Ⅰ_1$ 3 A$Ⅱ_1$ 2 A $Ⅰ_2$ 4 A$Ⅱ_2$ 1 A $Ⅰ_3$ 2 A$Ⅱ_3$ 4 A $Ⅰ_6$ 5 A$Ⅱ_4$ 1 A $Ⅰ_7$ 3 A$Ⅱ_5$ 3 A $Ⅰ_8$ 1 A$Ⅱ_6$ 1 A $Ⅰ_{10}$ 5 B$Ⅱ_7$ 1 A $Ⅰ_{11}$ 2 B 3 4 A $Ⅰ_{12}$ 1 不明 18	218	6
	包含層	A Ⅰ 2 B Ⅱ 3 C Ⅱ 2 D_1Ⅱ 1 不明 5	BⅡb 1 不明 1	B Ⅰa 1	A $Ⅰ_1$ 1 A$Ⅱ_2$ 1 A $Ⅰ_2$ 1 A$Ⅱ_3$ 1 A $Ⅰ_6$ 4 A$Ⅱ_4$ 1 A $Ⅰ_7$ 1 B 3 1 A $Ⅰ_{10}$ 2 C 1 A $Ⅰ_{11}$ 1 不明 1 A$Ⅱ_1$ 1	99	1
第1住居跡	堆積土	C Ⅱ 1 不明 8	BⅡb 1 DⅡc 1	B Ⅱa 1 B Ⅱb 1	A $Ⅰ_1$ 1 A $Ⅰ_{10}$ 1 A $Ⅰ_2$ 1 B 3 2 A $Ⅰ_3$ 1 不明 6	50	
	床面細部	A Ⅱ 1 不明 1 C Ⅱ 3 E Ⅱ 1		B Ⅰa 1	A $Ⅰ_3$ 1 C 1 A $Ⅰ_6$ 1 不明 6 A $Ⅰ_{10}$ 1	43	2
第6住居跡	床面細部				B Ⅰ 1	(堆積土) 1	
第19住居跡	床面細部				不明 1	(堆積土) 1	
第20住居跡	堆積土	不明 2	CⅡc 1		A$Ⅱ_2$ 1 A$Ⅱ_7$ 2	19	1
	床面細部	不明 1		不明 1			
第4住居跡	堆積土		AⅡb 1		A $Ⅰ_2$ 1	5	
	床面細部	不明 3		B Ⅰa 1	A$Ⅱ_2$ 1	4	
第21住居跡	堆積土	不明 1					
	床面細部					3	
第7住居跡	堆積土	A Ⅱ 1				1	
第8住居跡	堆積土	不明 1	AⅡb 1 BⅡb 1		A $Ⅰ_6$ 1 不明 1 A $Ⅰ_{10}$ 1	15	1
	床面細部		不明 1		A $Ⅰ_6$ 1 A$Ⅱ_6$ 1		
第9住居跡	堆積土	不明 1			A$Ⅱ_7$ 1	5	
	床面細部	A Ⅱ 1			不明 1	5	
第17住居跡	床面細部	A Ⅰ 1				1	
第16住居跡	床面細部					1	
第2住居跡	堆積土	A Ⅱ 1 C Ⅱ 1	AⅠa 1 不明 1 AⅡb 1		A $Ⅰ_3$ 1 A $Ⅰ_{12}$ 1 A $Ⅰ_9$ 1 不明 3	12	
	床面細部	不明 1			A $Ⅰ_{10}$ 2 不明 2	5	
第13住居跡	堆積土	A Ⅲ 1			A $Ⅰ_3$ 1 不明 3	8	
	床面細部				A $Ⅰ_{10}$ 1		
第15住居跡	堆積土					9	
第12住居跡	堆積土	A Ⅱ 1 不明 1	不明 1	B Ⅱa 2 不明 1	A $Ⅰ_{10}$ 2 B 3 1 A$Ⅱ_7$ 1 不明 2 B 1 1	26	
	床面細部	A Ⅰ 1 B Ⅱ 1			A $Ⅰ_1$ 1	15	
第3住居跡	堆積土	C Ⅱ 1 不明 1			A $Ⅰ_8$ 1 不明 1 A$Ⅱ_2$ 1	23	1
	床面細部	D_2Ⅱ 1				9	
第14住居跡	堆積土					2	
	床面細部					1	

第106表　石製品Ⅱ

遺構	層位	石皿	凹石	磨石	砥石	磨製石斧	石剣	装身具	石臼
	Ⅰ～Ⅲ層	1b 3 2a 1 不明 1	1Ⅰa 4 1Ⅱa 3 1Ⅱb 1 2Ⅰa 1 2Ⅱa 1 2Ⅱb 1 2Ⅲa 1 不明 5	1 2 2 7 3Ⅰ 1 4Ⅰ 1 4Ⅱ 3 不明 8	1Ⅰa 3 1Ⅲa 2 2Ⅰa 3 2Ⅰb 2 2Ⅱa 1 3Ⅰa 1	2Ⅱb 2 2Ⅲb 1	不明 2	1Ⅰa 1 1Ⅱa 1	不明 4
	Ⅳ層	1b 2 1c 1	1Ⅰa 1 1Ⅱa 2 1Ⅱb 1 1Ⅱc 1 1Ⅱd 1 不明 2	1 1 2 2 3Ⅱ 1	1Ⅰb 1	2Ⅱa 1 2Ⅲa 1	不明 1	2Ⅰa 1	
	包含層	1a 2 1b 1 2a 1	1Ⅰa 1 不明 1	1 1 不明 1	1Ⅱa 1 1Ⅲa 1			2Ⅱa 1 不明 1	
第1住居跡	堆積土	1a 1 1b 1	1Ⅱa 1		3Ⅱa 1	2Ⅱa 1			
	床面細部		不明 1		3Ⅱa 1	不明 1			
第6住居跡	床面細部								
第19住居跡	床面細部								
第20住居跡	堆積土							不明 1	
	床面細部								
第4住居跡	堆積土								
	床面細部	2a 1							
第21住居跡	堆積土								
	床面細部								
第7住居跡	堆積土		1Ⅰa 1			2Ⅰa 1			
第8住居跡	堆積土	2a 1 不明 1	1Ⅱc 1	1 1					
	床面細部								
第9住居跡	堆積土								
	床面細部								
第17住居跡	堆積土		1Ⅱe 1						
第16住居跡	床面細部								
第2住居跡	堆積土								
	床面細部								
第13住居跡	堆積土								
	床面細部								
第15住居跡	堆積土				1Ⅰb 1				
第12住居跡	堆積土				1Ⅱa 1	2Ⅱb 1 不明 1			
	床面細部					1Ⅰa 1			
第3住居跡	堆積部								
	床面細部	1a 1						1Ⅰa 1	
第14住居跡	堆積土								
	床面細部								

V. 遺　跡　の　構　成

上深沢遺跡の構成

上深沢遺跡は宮城県黒川郡大衡村駒場字上深沢に位置している。地形的には鶴田川によって形成された段丘上（中位面）に立地し、その北側前面には東西に長い沖積低地がひろがっている。遺跡の背後と周囲には、鶴田川流域の沖積低地と段丘群をとり囲むように大松沢丘陵が控えている。

上深沢遺跡からは、今回の調査によって多量の遺物と遺構が発見された。遺物の量は平箱にして約100箱におよんでいる。

ここでは、発見された遺物や遺構に基づいて、上深沢遺跡を歴史的に検討してみたい。

地形環境の形成

上深沢遺跡が立地する段丘は、上深沢付近で北側から幾筋かの谷が入り込み、舌状の台地となっている。この舌状台地の形成過程は、地形調査と発掘調査に基づく層位観察によって次のように考えられた。

１、上深沢遺跡周辺の大松沢丘陵は第三紀凝灰質頁岩からなるが、第四紀になるとその上に礫層と灰白色凝灰岩の二次堆積層が形成され、さらに褐色火山灰層が堆積する。

２、その後、海水準の低下がおこり、それに伴い段丘化が行なわれ、さらに侵食作用が進行するにつれて小支谷を伴う舌状の台地が形成された。

このように過程を経て、上深沢遺跡の地形環境が形成され、縄文時代になると人類の活動が開始されたものと推定される。

縄文時代前期

上深沢遺跡で最も古い時期の遺物としては、上川名Ⅱ式に位置づけられた２点の土器がある。このことから、縄文時代前期前葉に上深沢遺跡において、人類の活動が何らかの形で開始されたものと推定される。しかし、これらの資料は小破片で非常に僅かであること、また明確な遺構や一次的な遺物包含層が検出されなかったことから、この時期における人類の活動の内容を十分明らかにすることはできなかった。

縄文時代中期

縄文時代中期に属する遺物は極めて多く、上深沢遺跡出土遺物の大部分を占める。土製品としては土器・土偶・斧状土製品・円板状土製品がある。石製品としては第１群～４群に分類された剥片石器とその素材（剥片・石核）・磨製石斧・磨製石剣・凹石・磨石・石皿・砥石・石

製装身具がある。遺構としては竪穴住居跡がある。一部に時期の明確でないものも含まれるが、その大部分は縄文時代中期に属するものである。また、この時期に形成されたと考えられる遺物包含層も発見されている。このような点から、上深沢遺跡では縄文時代中期に集落が形成されていたと考えることができる。

ところが、これらの遺物や遺構をさらに検討すると、縄文時代中期全体におよぶものはない。遺構の多くは大木9式期に属し、他の土器型式期に属することが明確なものはないのである。この点、上深沢遺跡の縄文時代中期の集落は、極めて時期的に限られたものであったと言うことができる。

明確な遺構や遺物包含層の確認されない時期の遺物としては、五領ケ台式土器類似のもの、大木8b式土器等がある。五領ケ台式土器類似のものとした土器は口縁部破片にすぎないこと、また量的に非常に少ないことなどから、大木7a式土器に含まれるか否か、明らかにし得なかった。大木8b式土器は縄文時代中期中葉に位置づけられるが、それまでの時期のものとくらべると、幾分量的に多い。明確な遺構や遺物包含層が確認されなかったという点では、五領ケ台式土器類似のものと同じである。しかし、量的な点からするならば、大木8b式土器を伴う遺構や遺物包含層が調査範囲外に存在する可能性や、大木９式期以降の階段において破壊されてしまった可能性を否定できない。そして、大木９式期の竪穴住居跡や遺物包含層中に、大木8b式土器がかなり混入していることから、少なくとも大木９式期の段階では、まだ地表面にこれらの土器がかなり散乱していたのではないかと考えられる。

竪穴住居跡群と遺物包含層の特性

竪穴住居跡は21軒検出されている。これらの竪穴住居跡群の位置を検討すると、台地平坦部から緩斜面に移行する部分に立地しているもの（20軒）と、緩斜面の中の小さな平坦面に立地しているもの（１軒）がある。台地平坦部から緩斜面に移行する部分に立地しているものが、極めて多いが、その中で特に集中しているのは、台地の北側と西側の部分である。この部分では、数軒の竪穴住居跡が近接し、重なり合った状態で発見されたものが多い。全体的な配置としては、舌状台地の平坦部を取り囲むような形で立地している。

遺物包含層は舌状台地北西部の小さな谷状の凹地にある。ちょうど、舌状台地の北側と西側に分布する竪穴住居跡群にはさまれた谷状の部分に形成されていることになる。

竪穴住居跡群の大部分と遺物包含層は、大木９式期のものと推定された。しかし、いくつかの竪穴住居跡の間に重複関係が認められること、また竪穴住居群と遺物含層との間にも同様な関係が認められることから、これらが同時に存在していたとすることはできない。大木９式期の中で、何度か住居の廃絶・建替え・新築などが行なわれたものと推定される。

竪穴住居跡の特性

調査が行なわれた竪穴住居跡は、平面形・周溝・床面・柱穴などの点から詳細な検討が加えられ、平面形によって２類に大別された。すなわち、平面形が円形を基調とするものと、方形を基調とするものである。数の上では、円形基調のものが非常に多く、方形基調のものは少ない。

平面形が円形を基調とする竪穴住居跡は規模・柱穴の配置・炉の構造などによって、さらに細分される。その中で特筆すべき点として次のことがらをあげることができる。

１、すべてのものに周溝が伴う。

２、炉には土器埋設石組複式炉・石組複式炉・地床炉跡あり、極めて多様である。

３、柱穴の配置には炉が土器埋設石組複式炉や石組複式炉の場合、それらの長軸を対象軸とする規則性がみられる。

この点、平面形が方形を基調とする竪穴住居跡では、周溝を伴うものがない。また、炉の構造は不明なものを除くと簡単な地床炉である。

このように、上深沢遺跡では平面形が円形を基調とする竪穴住居跡と方形を基調とする竪穴住居跡では、周溝・炉・柱穴配置などの点で大きな違いが認められる。この他、今回の調査では炉の構築方法や機能を知る上で一定の成果が得られた。すなわち、地床炉を除き土器埋設部や石組部をもつ炉にはすべて掘り方が認められたのである。このことから、上深沢遺跡の竪穴住居跡の炉は、最初炉の掘り方が掘られ、その後土を詰めながら土器の埋設作業や石積みの作業が行なわれていることが明確となった。また、機能に関しては使用痕跡の検討によって、複数の空間をもつ複式炉の各部分が焚き口部や燃焼部としての役割りを果たしていたことが確認された。

遺物群の特性

大木９式期に属すると推定された遺物には、土製品と石製品がある。土製品としては、土器・土偶・斧状土製品・円板状土製品がある。石製品としては剥片石器（第１～４群）とその素材（剥片・石核）、磨製石器（磨製石斧・磨製石剣）、礫石器（凹石・磨石・石皿・砥石）、石製装身具がある。一時期における遺物組成のあり方が明らかになった意味で極めて意義深い。

土器

大木９式土器については、研究史の上で今までよく論議の対象とされてきた。今回の上深沢遺跡の調査で、今まで大木９式土器と言われていたものが、決して単純なものではなく、極めて豊富な内容をもつものであることが確認された。すなわち、上深沢遺跡出土土器で大木９式土器とされたものにはＩＡＩｂ２類･ＩＡ２ｂ１類･ＩＡ２ａ５類･ＩＢ類･ＩＣ類･ＩＤ類がある。その中で、ＩＢ類・ＩＣ類・ＩＤ類としたものに共伴関係が認められたことは特筆されな

ければならない。

また、大木９式とされたこれらの土器群は、分類（系統）学的な検討や出土状況における共伴関係のあり方の検討によって第１～３群に整理され、時間的推移を示す可能性が指摘された。しかし、出土状況による共伴関係のあり方が厳密な意味での層位学的証拠となり得るか等の点で、土器型式としての評価を得るものか否か今後に課題を残した。

土偶・斧状土製品・円板状土製品

〔土偶〕土偶は扁平で板状のものと立体的なものとに大別され、文様的に両者が共通した特徴をもっていることが指摘された。前者は出土土偶の大部分を占め、平面が「†」字形のものである。乳房が表現されているものと、それの見られないものがある。乳房の表現されているものには、無調整沈線文・渦巻文・三角状文などが見られ、形態・文様ともに極めて特徴的なものである。後者に属するものは脚部が１点あるだけなので、全体的な形態は明確でない。

〔斧状土製品〕斧状土製品は２点あり、１点はほぼ完形に近い。両者とも基部に貫通孔がある。貫通孔の位置は異なるが、器面に縄文が施文されるなど共通した点が多い。

〔円板状土製品〕円板状土製品は３点ある。土器片に敲打調整を加え円形にしているものと、その後研磨を加えて仕上げているものがある。

剥片石器とその素材

剥片石器には第１～４群があり、これらは従来石鏃・石匙・石錐・不定形石器等と呼ばれていたものである。

〔剥片石器第１群〕剥片石器第１群については基部形態によって、凹基・平基・丸基・凸基・棒状基の５類に大別し、尖頭部の形態によってさらに細分した。これらは形態的特徴・重量・使用痕跡（破損）等から鏃の機能を果したものではないかと推定された。大木９式期における石鏃に、種々のタイプの存在することが明らかとなった。

〔剥片石器第２群〕剥片石器第２群については刃部とつまみ部の関係によって、４類に大別し、刃部の特徴によってさらに細分した。刃部には刃部先端が尖頭状のもの、平坦で幅の広いもの平垣で幅の狭いものがあり、これらが機能と密接な関係をもっていることが次第に明らかになってきた。すなわち、使用痕跡の観察によって、次のようなことが指摘された。

１、刃部先端が尖頭状のものは、先端部分に強い磨耗が観察されることから、対象物にあまり深くさしこまない状態で「切っ先」のように使用された。

２、刃部先端が平坦で幅の広いものは、平坦な先端部分に広く使用痕跡が観察され、この部分が主に使用された。

３、刃部先端が平坦で幅の狭いものは、両側辺に使用痕跡が顕著に観察され、この部分が主に使用された。

このような関係はすべての資料において認められたわけではないが、大筋として正しいものと思われる。また、中には先端と側辺に使用痕跡の観察されるものが存在したことから、多様な使い方がなされたものと推定される。そして、重要な点として、使用痕跡は調整剥離の加えられた縁辺に比較的多く観察されるが、無調整の縁辺ではごくまれなことをあげることができる。このことは刃部に加えられた調整剥離が、刃潰し加工ではなく、刃縁を作出するためのものであることを示している。

〔剥片石器第３群〕剥片石器第３群についてはつまみ部の調整方法によって２類に大別し、つまみ部と錐部の間に見られる抉りの状態や錐部の形態（断面）によって、さらに細分した。また、これらは形態的特徴・使用痕跡によって、回転運動を伴う穿孔具であることが推定された。さらに、使用痕跡としての磨耗の位置等から、回転運動のあり方にいくつかの種類のあることが指摘された。すなわち、浅い凹み程度の孔をつくる連続複方向（交互）回転のもの、錐部の中心軸と回転軸が一致せず孔を拡大しながら徐々に深くする非連続単方向回転のものなどである。しかし、使用痕跡の確認された資料が少なかったことから、機能と形態的特徴の相互関係については明確にすることができなかった。

〔剥片石器第４群〕剥片石器第４群については、素材に対して加えられた調整剥離のあり方を中心に検討を加え、数種類に分類した。しかし、これらについては使用痕跡の観察が不十分であったため、調整剥離が刃部を形成するものなのか、それとも刃潰し加工なのかという点で明快な結論を得ることはできなかった。したがって、機能の点については白紙に近い状態にある。今後の大きな課題である。

〔剥片・石核〕剥片や石核については種々の点から検討を加えた。その結果、剥片には縦の長さと横の長さが近似したものが多いこと、またそれらの背面には何らかの形で腹面の剥離に対し任意方向の小剥離面をもつものが多いことなどが明らかとなった。石核の場合は、何らかの形で打面を転移しているものが大部分で、約90°の単位で転移しているものが最も多かった。これらのことは剥片と石核に一定の照応関係が認められることを示している。そして縄文時代中期大木９式期の上深沢遺跡では、集落内において剥片剥離作業が行なわれたものと推定される。

磨製石器

磨製石器としては磨製石斧と磨製石剣が認められた。

〔磨製石斧〕磨製石斧はいずれも、従来定角式と呼ばれていたものである。形態的特徴（平面形・断面形）によって６類に分類されたが、その中には刃縁磨滅・破損・線状痕など使用痕跡の観察されるものがあった。その結果、刃縁の角が斜めにすり減ったり破損したりしているものや斜め方向の線状痕が観察されるＡＸＥ（斧）の存在と、縦方向の平行な線状痕が観察されるＡＤＺＥ（手斧）の存在が指摘された。しかし、形態的に分類されたものと、使用痕跡によ

って機能が推定されたものにみられる対応関係については明らかにすることができず、今後の課題となった。

〔磨製石剣〕磨製石剣はいずれも破損が著しく、詳細は十分明らかでない。第Ⅳ層から出土したものが１点あるが、その他のものは厳密に大木９式期に伴うか否か、結論を出すことはできなかった。

礫石器

礫石器には凹石・磨石・石皿・砥石がある。

〔凹石・磨石〕凹石と磨石については、両者を厳密に区別することは困難である。すなわち、両者とも素材としての自然礫の形を強く残しており、凹や磨面の有無によって区別されるに過ぎないからである。また、凹石や磨石の中には敲打痕をもつものも存在するのである。

凹石については、凹の数によって分類したが、それらの機能上の意味は十分明らかでない。ただ、凹部には敲打痕だけが観察されるものと、凹の上端に対して平行な擦痕が観察されるものがあり、前者では敲打を伴う作業、後者では回転運動を伴う作業がなされたものと推定される。凹部以外にみられる磨面と敲打痕の特徴は、磨石の場合と共通している。

磨石については、磨面の位置によって分類した。磨石は磨面をもつことを基本的な特徴としていることから、磨る機能を果したものと推定される。また、これらの中には敲打痕をもつものもあり、敲く機能も果していたと推定される。

以上のような点から、凹石と磨石については、異なる石器間における転用なのか、一群の石器におけるタイプの相違なのかの検討は、今後の課題である。

〔石皿〕石皿は大部分が破片で、全体の形を推定できるものは２点にすぎない。形を推定できるものには、長方形のものと楕円形のものがあったが、今回は縁の有無とその形態によって分類を行なった。その結果、有縁のものと無縁のものに大別され、有縁のものは縁の形態によって四角縁・丸縁・三角縁のものに細分された。上面には磨耗痕をもつくぼんだ面が観察され、この面で磨る作業が行なわれたものと推定された。下面には脚のあるものも認められたが、破片資料が多いため全体の傾向は明らかにできなかった。

〔砥石〕砥石は素材との関係によって３群に分類されたが、大木９式期のものと推定されるのは、第１群（自然礫を素材として、その一部を使用しているもの）と第３群（他の石器を転用しているもの）である。第１群の砥石には擦痕を伴う研磨面や磨溝が観察された。研磨面は磨製石器の研磨作業、磨溝は先端幅の狭いものの研磨作業に用いられたのではないかと推定された。第３群の砥石は石皿から転用されたもので、比較的広い研磨溝が観察され、先端幅の比較的広いものの研磨作業に使用されたのではないかと推定された。

石製装身具

石製装身具は形態上４類に分類された。いずれも貫通孔をもち、孔の側面に上端とほぼ平行な擦痕の存在が観察されるものがあり、錐によって穿孔されたものと推定された。また、この貫通孔には紐ずれの見られるものがあったことから、垂飾品ではないかと推定された。

集落跡としての特性

以上述べたように、上深沢遺跡から発見された遺物や竪穴住居跡等の遺構は、その大部分が縄文時代中期大木９式期のものと考えられる。したがって、今回の調査によって、大木９式期における集落跡の姿がかなり明らかになったものと言える。すなわち、地形環境という点で上深沢遺跡は背後に丘陵を控えた舌状台地に立地している。そして、住居は台地平坦部の周縁に営なまれ、住居にはさまれた小さな谷状の凹地には遺物包含層が形成されている。また、台地平坦部には明確な遺構がみられず、広場のようなものであったと推定される。しかし、竪穴住居跡群に顕著な重複関係が認められることから、一時点における集落（同時存在）のあり方とすることはできない。今回は、大木９式期を細分した形で各々の段階における住居群の配置の状態、遺物廃棄の場や広場との関係について明らかにすることができなかった。今後の課題となろう。

次に、他の集落跡の場合と比較してみたい。現在、宮城県内で縄文時代中期の住居跡が発見され、集落跡と考えられる遺跡には次のようなものがある。

遺跡名	位置	立地	時期	文献・その他
1、小古遺跡	栗原郡一迫町小古	段丘	大木10式期	藤沼邦彦の教示による
2、木戸遺跡	栗原郡築館町萩沢木戸	段丘	大木10式期	宮城県教委：1977
3、鰻沢遺跡	〃	段丘	大木10式期	〃　：1975
4、山前遺跡	遠田郡小牛田町北浦字山前	丘陵～段丘	大木8ｂ～9式期	小牛田町教委：1976
5、長根貝塚	遠田郡涌谷町小里字長根	段丘(半島状小丘陵)	大木10式期	伊東信雄他：1969
6、勝負沢遺跡	黒川郡大和町鶴巣北目大崎字勝負沢	段丘　(舌状台地)	大木8b～９式期	宮城県教委：1972
7、中沢遺跡	柴田郡川崎町川内中沢	段丘	大木10式期	後藤他：1922
8、大木囲貝塚	宮城郡七ケ浜町要害字大木囲		中期後葉	
9、二屋敷遺跡	刈田郡蔵王町宮字二屋敷	段丘	大木10式期	宮城県教委：1970・1971
10、荒井遺跡	白石市福岡深谷字荒井	段丘	大木10式期	佐藤庄吉・片倉信光：1958
11、菅生田遺跡	白石市福岡蔵本字菅生田	段丘	大木10式期	宮城県教委：1968、1922、1973
12、田袋遺跡	角田市角田田袋	段丘　(舌状台地)	中期	角田市教委・宮城県教委：1972調査
13、荒町遺跡	角田市藤尾字荒町125	段丘	大木９式期	志間泰治：1958

これらの遺跡の大部分は段丘上に立地しており、上深沢遺跡の場合と共通している。また、この中で、集落跡としての調査がなされたものとしては、二屋敷遺跡や管生田遺跡等がある。二屋敷遺跡や菅生田遺跡は縄文時代中期大木10式期の集落跡であるが、竪穴住居跡群・小竪穴

遺構、埋設土器遺構、遺物包含層の調査が行なわれている。その結果として、集落における広場、居住区域、墓域、生活用具廃棄の場の使いわけの存在が推定されている。上深沢遺跡では埋葬施設と推定される遺構の確認が十分ではなかったが、居住の場、生活用具廃棄の場、広場が存在し、台地上においてそれぞれ使いわけがなされていたという点で、基本的に共通した姿を示している。

上深沢遺跡は、このように他の縄文時代中期の集落跡と、立地の集落構成のあり方という点で共通している。その中で、営なまれた時期と集落跡を構成する住居跡の構造という点では独自なものをもっている。すなわち、二屋敷遺跡や菅生田遺跡のような集落跡をはじめとして、住居跡が発見されている遺跡は、一部を除くとその多くは大木10式期のものである。この点、大木９式期の集落跡の姿が明らかになったという意味で極めて意味深い。また、住居跡の構造という点では、平面形が方形を基調とするものが存在すること、竪穴住居跡の炉が極めて多様であるということなど他にあまり例が見られない。ただ、これらが上深沢遺跡の特性なのか、それとも大木９式期におけるこの地域全体の特性なのかは、今後検討する必要がある。

遺物の点では十分に比較できる資料はない。しかし、上深沢遺跡では大木９式期に属する遺物が豊富に発見されており、生産や消費活動が盛んであったことを示している。すなわち、狩猟活動に関するものとして剥片石器第１群をあげることができる。そして、獲物の解体や加工の道具として剥片石器第２群や剥片石器第４群の一部をあげることができる。また、採集された植物質食料の加工には石皿や凹石・磨石等が大きな力を果したものと考えられる。このような食料の調理や貯蔵には土器が必要不可欠のものとして存在したと思われる。工具としては磨製石斧・砥石・剥片石器第３群と剥片石器第４群の一部をあげることができる。この他、精神生活に関するものとして土偶の存在を見落すことはできない。このような点からするならば、漁撈に関する遺物が明確でない他は、生活に関するものは大部分そろっていることになる。

しかし、以上のような点を踏まえるならば、何故に次の時期の大木10式期に属する遺構や遺物が発見されないのであろうか。少なくとも、大木９式期の集落は大木10式期に継承されていないのである。このような、一見急激に見える変化はどのような原因に基づくものであろうか。この点については未解決部分が多い。今後、各地の資料の積み重ねを待って解決されなければならない問題であろう。

縄文時代後・晩期

上深沢遺跡の縄文時代中期の集落は、中期末の大木10式期にはほぼ途絶えてしまったと推定された。その後の上深沢遺跡における人類の活動は、門前式土器類似の後期初頭の土器、晩期中葉の大洞C_1・C_2式土器によって示される。しかし、これらの土器はいずれも破片で、量的に

も非常に少ない。また、これらに伴う明確な遺構や遺物包含層も確認されていない。このことは、縄文時代中期大木９式期のように集落を営むような大規模な人類の活動が存在したとは考えられず、極めて小規模な活動があったにすぎないことを示している。

古代

古代の遺物としては須恵器が発見された。奈良・平安時代に属するものと推定された。しかし、これらはいずれも小破片で、量的にも少ない。また、竪穴住居跡等の遺構も確認されなかった。このため、古代においてどのような人類の活動があったのか明確にできない。

中世・近世以降

上深沢遺跡では中世・近世以降の遺物として、陶磁器類が出土している。また、石臼等もこの時期のものと推定される。ピット群の一部は、この時期の建物跡の可能性もあるが、今回はそれを証明することはできなかった。

ま　と　め

１、上深沢遺跡は吉田川の支流鶴田川によって形成された段丘上（中位面）に立地している。この段丘は第三紀凝灰質頁岩を基盤とし、その上に第四紀以降の礫層、灰白色凝灰岩の二次堆積層、褐色系火山灰層が堆積している。

２、縄文時代前期前葉の土器片がわずかに出土しており、この時期に上深沢遺跡において人類の活動が何らかの形で開始されたと推定される。

３、縄文時代中期大木９式期の竪穴住居跡21軒と遺物包含層、および多数の遺物（土器・土偶・斧状土製品・円板状土製品・剥片石器とその素材、磨製石器・礫石器・石製装身具）が発見された。

４、縄文時代中期大木９式期の竪穴住居跡には、平面形が円形を基調とするものと方形を基調とするものとが認められた。両者には周溝・炉・柱穴配置などの点で大きな違いが認められた。

５、縄文時代中期大木９式の土器群については、分類学的検討や共伴関係のあり方の検討によって第１～３群に整理することができた。これらは時間的推移を示す可能性がある。

６、縄文時代中期大木９式期の剥片石器（第１～４群）、とその素材（剥片・石核）、磨製石器（磨製石斧・磨製石剣）、礫石器（凹石・磨石・石皿・砥石）、石製装身具が発見され、一時期における遺物組成のあり方が明らかになった。

７、縄文時代中期大木９式期の竪穴住居跡の分布、遺物包含層の存在等から、上深沢遺跡の立地している舌状台地は、集落における住居の場・生活用具廃棄の場・広場という使いわけがなされていたことが推定された。

８、縄文時代後・晩期、古代、中世・近世以降の遺物が出土している。しかし、これらの遺物は量的に少なく、また明確な遺構も確認されなかったため、これらの時期にどのような活動があったかは明確にできなかった。

引用・参考文献（五十音、アルファベット順）

ア　安孫子昭二他（1974）：『貫井南』Ｐ.53～59　東京都建設局、東京都下水道局

安孫子･可児他（1971）：「平尾No.9遺跡」『平尾遺跡調査報告』Ⅰ　Ｐ.１～228東京都住宅供給公社、南多摩郡平尾遺跡調査会

伊東　信雄　　（1957）：「古代史」『宮城県史』第１巻　Ｐ.３～171　宮城県

伊東　信雄他　（1969）：「埋蔵文化財緊急発掘調査概報－長根貝塚－」Ｐ.１～86『宮城県文化財調査報告書』第19集　宮城県教育委員会

伊藤　玄三他（1969）：「福島市飯坂町月崎遺跡調査報告」『福島市文化財調査報告書』第７集　Ｐ.５～７　福島市教育委員会

一迫町教委　（1977）：「巻堀遺跡」Ｐ.１～32　一迫町教育委員会

上野　佳也　（1961）：「有柄石ヒ試論」『考古学研究』第８巻第２号　Ｐ.24～30　考古学研究会

梅沢太久夫　（1974）：「縄文時代中期における集落と墓地」『紀要』Ⅰ　Ｐ.11～21　埼玉県立博物館

梅宮　　茂　（1960）：「飯野日山住居跡調査報告」『福島県文化財調査報告書』第８集　Ｐ.17～20　福島県教育委員会

梅宮　　茂　（1974）：「複式炉文化論」『福島考古』第15号　Ｐ.２～13　福島県考古学会

江坂　輝弥　（1949）：「相模五領ヶ臺貝塚調査報告」『考古学集刊』　Ｐ.１～10　東京考古学会

江坂　輝弥　（1956）：「各地域の縄文式土器」『日本考古学座』第３巻　Ｐ.１～124　河出書房

岡村　道雄　（1976）：「ピエス・エスキーユについて」『東北考古学の諸問題』Ｐ.77～96　東北考古学会

岡本　　勇　（1959）：「土器型式の現象と本質」『考古学手帳』６　Ｐ.１～２

岡村　　勇　（1965）：「労働用具」『日本の考古学』Ⅱ　Ｐ.286～302　河出書房

大井　晴男　（1970）：「型式学的方法への試論」『考古学雑誌』第55巻第３号　Ｐ.１～22　日本考古学会

大郷町古墳発掘調査団（1972）：「大小寺古墳」『宮城県黒川郡大郷町古墳発掘調査報告』　Ｐ.３～10　大郷町教育委員会

大郷町文化財保護委員会（1972）：『諏訪古墳発掘調査報告書』　Ｐ.１～22　大郷町教育委員会

大島　直行他（1975）：『森越』　Ｐ.97～110　知内歴史研究会

カ　鹿島台町史編纂委（1971）：『町史わが鹿島台』　Ｐ.１～558　鹿島台町

加藤　　孝　（1952）：「阿武隈・北上両河岸段丘・並に松島灣岸諸島に於ける貝塚の分布とその編年」『宮城学院女子大学研究論文集』Ⅱ　Ｐ.213～236　宮城学院女子大学

加藤　　孝　（1956）：「陸前国大松澤貝殻塚の研究」(その一)『宮城学院女子大学研究論文集』９号　Ｐ.63～72　宮城学院女子大学

加藤　　孝　（1956）：「陸前国大松澤貝殻塚の研究」(その二)『宮城学院女子大学研究論文集』10号　Ｐ.139～156　宮城学院女子大学

加藤孝･後藤他（1975）：「登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」『南方町史資料編』第一部　Ｐ.68～107　南方町

加藤　　稔　（1968）：「縄文土器資料No.82解説」『日本原始美術』講談社

可児　通宏他(1969)：『多摩ニュータウン遺跡調査報告書』Ⅶ　Ｐ.27～32　多摩ニュータウン遺跡調査会

角田市教委（1976）：『梁瀬浦遺跡』　Ｐ.１～74　角田市教育委員会

草間・金子（1971）：『貝鳥貝塚』　Ｐ.１～285　花泉町教育委員会

楠本　政助（1973）：「仙台湾における先史狩猟文化」『矢本町史』第１巻　Ｐ.１～126　矢本町

経済企画庁総合開発局（1972）：『土地分類図』

小岩　末治　（1961）：「新石器時代文化の諸相」『岩手県史』第１巻　岩手県

小牛田町教委（1976）：「山前遺跡」　Ｐ．１～59　小牛田町教育委員会
小林　行雄　（1951）：『日本考古学概説』第13版　Ｐ．１～320　創元社
小林　行雄他（1959）：「石ヒ」「石鏃」「石鏃」「石器製作法」『図解考古学辞典』　Ｐ.41～42、Ｐ.543～544　Ｐ.552～553、Ｐ.562～564　創元新社
小林　達雄　（1965）：『米島貝塚』　Ｐ.12～13　埼玉県庄和町教育委員会
小林　達雄　（1974）：「縄文世界における土器の廃棄について」『国学史』93号　Ｐ．１～12
小林　康男　（1973）：「縄文時代の石器研究史」(1)『信濃』第25巻第７号　Ｐ.51～61　信濃史学会
小林　康男　（1973）：「縄文時代の石器研究史」(2)『信濃』第25巻第10号　Ｐ.69～78　信濃史学会
小林　康男　（1974）：「縄文時代生産活動の在り方」(1)『信濃』第26巻第12号　Ｐ.59～69　信濃史学会
小林　康男　（1975）：「縄文時代生活活動の在り方」(2)『信濃』第27巻第２号　Ｐ.66～81　信濃史学会
小林　康男　（1975）：「縄文時代生産活動の在り方」(3)『信濃』第27巻第４号　Ｐ.25～42　信濃史学会
小林　康男　（1975）：「縄文時代生産活動の在り方」(4)『信濃』第27巻第５号　Ｐ.73～85　信濃史学会
小山・竹原　（1967）：『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社
後藤　勝彦　（1962）：「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」「考古学雑誌」第48巻１号　Ｐ.37～48　日本考古学会
後藤　勝彦他（1967）：「新産都市指定地区埋蔵文化財緊急調査発掘調査報告書（西ノ浜貝塚）」『宮城県文化財調査報告書』第13集　Ｐ．１～34　宮城県教育委員会
後藤　勝彦他（1968）：「埋蔵文化財第三次緊急発掘調査概報（南境貝塚）」『宮城県文化財調査報告書』第15集　Ｐ．１～46　宮城県教育委員会
後藤　勝彦他（1973）：「宮城県柴田郡川崎町中沢遺跡発見の竪穴住居と複式炉について」『仙台湾』第２号　Ｐ．３～15　仙台湾刊行会
後藤　勝彦他（1975）：「宮城県柴田郡川崎町中沢遺跡発掘調査報告」『川崎町史通史偏』Ｐ.733～735　川崎町
越田　和夫　（1972）：「縄文時代中期における住居趾（炉跡）について」『福島大学考古学研究会研究紀要』第２冊　Ｐ.23～40　福島大学考古学研究会
サ　佐藤・片倉　（1958）：「白石荒井縄文住居遺跡」「仙台郷土研究」18－４　Ｐ.15～21　仙台郷土研究会
佐藤　傳蔵　（1996）：「陸奥亀ヶ岡発掘報告」『東京人類學會雑誌』第百拾八号Ｐ.125～149東恵人類學會
斎藤　良治　（1968）：『七夕遺跡調査報告書』丸森町教育委員会
佐々木七郎　（1972）：「馬てい形の複式炉跡－山形県東田川郡朝日村野新田適跡－」『庄内考古学』第11号　Ｐ．６～９　庄内考古学研究会
札幌市教育委員会（1973）：「白石神社遺跡」『札幌市文化財調査報告書』Ⅰ　Ｐ.63～89　札幌市教育委員会
志間　泰治　（1959）：「宮城県で最初に発見された縄文時代住居址－角田町荒町遺跡」『仙台郷土研究18－１　Ｐ.30～33　仙台郷土研究会
清野　謙次（1969）：「陸前国宮城郡七ヶ浜村大字要害字大木囲貝塚」『日本貝塚の硯究』　Ｐ.416～425　岩波書店
杉原　荘介（1943）：「型式論」『原史学序論』　Ｐ.33～46　小宮山書店
鈴木　　啓他（1975）：『堂平一敷石遺構発掘調査報告書』Ｐ.29～34　三春町教育委員会
芹沢長介他（1974）：『碁石遺跡』　Ｐ．１～80　大船渡市教育委員会
タ　大和町教委・大和町文化財保護委（1973）：「鳥屋八幡２号墳」『宮城県黒川郡大和町鳥屋遺跡調査報告』Ｐ．３～９
大和町教委・大和町文化財保護委（1977）：「鳥屋平窯跡」『宮城県黒川郡大和町鳥屋遺跡調査報告』Ｐ.10～16

高橋　富雄他（1975）：『大和町史』上巻　P.1～500　大和町
千葉　宗久　（1975）：「河北町の原始時代」『河北町史』上巻　P.128～181　河北町
東北学院大学考研部（1972）：「諏訪古墳発掘調査概報」『温故』第７号　P．４～22
東北学院大学考研部（1974）：『山中古墳発掘調査報告書』P．１～22
東北学院大学考研部（1975）：「真山古墳測量調査報告」『温故』９号　P．１～97
東北学院大学考研部（1975）：「鳥屋窯跡三角田南地区発掘調査報告」『温故』第９号　P．１～34
手塚　　孝　（1975）：「№26（堂森Ｂ）遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書』第１集　米沢市教育委員会・地域振興整備公団
ナ　中谷治宇二郎（1925）：「石匙に対する二三の考察」『人類学雑誌』40－４　日本考古学選集再録　P.233～243
中谷治宇二郎（1943）：『日本石器時代提要』P．１～417　養徳社
丹羽　　茂（1971）：「東北地方南部における中期縄文時代中・後葉土器群研究の現段階」『福島考古』第12号　P．１～21　福島県考古学会
丹羽　　茂（1971）：「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」『福島大学考古学研究会研究紀要』　第１冊　P．１～70　福島大学考古学研究会
丹羽　　茂（1974）：「福島県における縄文時代中期の住居集落跡研究の現状と問題点」『福島考古』第15号　P.26～34　福島県考古学会
西村　正衛（1969）：「縄文中期文化－東北・関東－」「新版考古学講座」第３巻　P.121～140　雄山閣
ハ　芳賀　良光（1968）：「宮城県宮戸島貝塚梨木囲遺跡の研究」『仙台湾周辺の考古学的研究』　P.45～53　宮城教育大学歴史学研究会
林　　謙作（1962）：「有柄石ヒ試論批判」『考古学研究』第９巻第３号　P．６～８　考古学研究会
林　　謙作（1965）：「縄文文化の発展と地域性－東北－」『日本の考古学』Ⅱ　P64～96　河出書房
林　　謙作（1966）：「第１地点縄文時代集落の調査」「星野遺跡－栃木市星野遺跡第１次発掘調査報書」P.51～74　ニューサイエンス社
林　　謙作（1969）：「第１地点・第４文化層の出土遺物『栃木市星野遺跡－第３次発掘調査報告』P.61～67　栃木市教育委員会
林　　謙作他（1971）：「二屋敷遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集　P.34～37　宮城県教育委員会　日本道路公団
原・馬目（1968）：「宮城県大木囲貝塚発見の遺跡について」『古代』第51号　P.31～42　早稲田大学考古学会
樋口　昇一（1972）：「土器廃棄に関する問題－とくに“吹上パターン”を中心として－」『信濃』第24巻第12号　P.72～81　信濃史学会
福島県教育庁文化課編（1975）：「東北自動道遺跡調査報告」本文編　P．１～58　図版編　P．１～559　福島県教育委員会
福島大学考古学研究会原始時代専門研究部会（1971）：『浦尻貝塚』　P．１～58　福島大学考古学研究会
藤沼　邦彦（1975）：「宮城県の経塚について」『東北歴史資料館研究紀要』第１巻　P．５～33　東北歴史資料館
藤沼　邦彦（1976）：「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）」『東北歴史資料館研究紀要』第２巻　P.35～50　東北歴史資料館
藤沼　邦彦（1977）：「宮城県出土の中世陶器について」『東北歴史資料館研究紀要』第３巻　P.21～50　東北歴史資料館
掘越　正行（1971）：『原始共同体社会研究の基礎理論』

マ　馬目　順一（1968）：「台の上貝塚における土器意匠文の研究」『小名浜』　P.25～52　いわき市教育委員会磐城出張所
三宅　米吉（1892）：「雑安数件一磨リ消シ模様ノ貝塚土器」『東京人類学雑誌』第74号　P.264～270　東京人類雑学会
三塚・阿部・佐藤（1976）：「沼津貝塚の考古学的調査」『沼津貝塚保存管理計画策定事業報告書』P．８～62　石巻市教育委員会
宮城県教委　（1968）：「菅生田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第17集　P.14～17　宮城県教育委員会
宮城県教委　（1972）：「菅生田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第25集　P.17～20　宮城県教育委員会　日本道路公団
宮城県教委　（1973）：「菅生田遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第29集　P.68～74　宮城県教育委員会　東北地方建設局仙台工事事務所
宮城県教委　（1973）：「菅生田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第31集　P．５　宮城県教育委員会　日本道路公団
宮城県教委　（1973）：「東北自動道関係遺跡発掘調査略報－勝負沢遺跡・原前南遺跡・八谷館遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第31集　P.18～19、23～24、22～24　宮城県教育委員会
宮城県教委　（1975）：「東北自動車道・一般関係遺跡発掘調査略報－御所館跡・駒場小屋館跡・鰻沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』P．５～12、17～22、131～132　宮城県教育委員会
宮城県教委　（1976）：「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46集　宮城県教育委員会
宮城県教委　（1976）：「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第47集　宮城県教育委員会
武藤　鐵城　（1933）：「石小刀の刃に就いて」『史前学雑誌』第５巻第３号　P.44～49　史前学会
目黒　吉明他（1969）：「上原遺跡概報」『二本松市文化財調査報告書』P．１～38　二本松市教育委員会
目黒・丹羽他（1970）：『本宮町上原遺跡概報』　P．１～50　本宮町教育委員会
目黒　吉明他（1973）：「岩渕遺跡・山田遺跡」『国見町史』第２巻　P.805～806　国見町
森　　貢喜　（1974）：「縄文時代における敷石遺構について」『福島考古』第15号　P.15～21　福島県考古学会
森　　貢喜　（1974）：「縄文時代中期から後期への移行期における社会の展開に関する一考察」『福島大学考古学研究会研究紀要』第4冊　P.25～48　福島大学考古学研究会
ヤ　八幡　一郎編（1959）：『世界考古学大系Ｉ』グラビア図版№73　平凡社
柳田　俊雄　（1974）：「截裁面ある石器」『ふたがみ』P.163～173　学生社
山内　清男　（1937）：「縄文土器型式の細別と大別」『先史考古学』第１巻第１号　P.29～32　先史考古学会『山内清男先史考古学論文集』第１冊に再録
山内　清男　（1940）：「加曽利Ｅ式」『日本先史土器図譜』P.25～27　先史考古学会　「山内清男、先史考古学論文集」第６～10冊に再録
山崎　直方　（1891）：「伊勢ノ石器」『東京人類學曾雑誌』第59号　P.183～184
山本　暉久　（1976）：「敷石住居出現のもつ意味（上）（下）」『古代文化』第28巻　第２・３号　P．１～37　古代学協会
吉田　義昭　（1956）：「甕棺と思われる縄文文化中期の土器群」『石器時代』第３号　P.37～44
吉田　義昭　（1957）：「門前貝塚」　P．１～31
ワ　渡辺　晴雄（1967）：『福島県相馬郡鹿島町上栃窪敷石住居跡発掘調査報告書』　P．１～21　鹿島町教育委員会
Ｓ S.A.SEMENOV（1957）：『Prehistoric Technology』P．１～211　TRANSLATED AND WITH A PREFACE BY M. W. THOMPSON（1964）
Ｔ TAIRA AND KATŌ（1959）：「NASHINOKIGAKOI IN MIYATO ISLAND」『Saito Ho-on Kai Museum Reserch Bulletin』№.28 P.49～57　斎藤報恩会